令和６年度

幼稚園・幼保連携型認定こども園

教職２年目研修

課題研究レポート

令和７年３月

沖 縄 県 立 総 合 教 育 セ ン タ ー

令和6年度幼稚園・幼保連携型認定こども園2年目研修　研究一覧

園　名	氏　名	研究テーマ
東村立有銘幼稚園	仲田　光児	幼児が互いに関わりを深め協同して遊ぶようになるための幼児理解と援助― ―心理学の知見を活用してー
伊是名村立伊是名幼稚園	高良　美咲	子どもが主体的に遊びながら協調性を育む為の援助の工夫 ―子どもたちの身近にある環境を通して―
読谷村立古堅幼稚園	上原　瑞生	友達との関係を深め伝え合う楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫 ―身近な環境との関わりを通してー
沖縄市立山内幼稚園	山川 灯	友達のよさに気付き共に活動する楽しさを味わうための援助の工夫 ～ 日々の生活や遊びを通して ～
北谷町立北谷第二幼稚園	天願　日奈子	思いを伝え合いながら一緒に活動する楽しさを味わう環境構成と援助の工夫 ―教師や友達との関わり園生活での体験通して―
宜野湾市立はごろも幼稚園	伊佐　真哉	集団生活の中で自己を発揮するための関わり ～発達に合った支援を考える～
西原町立西原東幼稚園	當山　恵李奈	友達の良さに気付き自己発揮ができる環境構成と援助の工夫 ―協同的な活動や遊びを通して―
座間味村立座間味幼稚園	中村　結花	互いの良さを認め合い思いを伝え合って遊ぶ楽しさを味わうための環境構成や援助の工夫 ―集団遊びを通して―
竹富町立おおはら幼稚園	山城のぞみ	自分や相手を大切にする心情を育むための援助の工夫 ―幼児期における性教育と関連した指導を通して―
多良間村立多良間幼稚園	森山　要	生命を大切にし思いやりの心が育つような環境設定と援助の工夫 ―身近な動植物との関わりを通して―
南風原町立南風原幼稚園	金城　穂乃花	人と関わる中で育まれる自己発揮できるための環境構成と援助の工夫 ～教師や友達異年齢交流を通して～
国頭村立くにがみこども園	比嘉　夏希	幼児が自己表現を楽しみ表現する意欲を育むための環境構成と援助の工夫 ―友達との関わりを深め表現する過程を大切にすることを目指して―
大宜味村立おおぎみこども園	新城　千明	言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う援助の工夫 ～絵本の読み聞かせや手遊びを通して～
大宜味村立おおぎみこども園	知花　百音	友達との関わりを深め一緒に活動する楽しさを味わう援助の工夫 ―友達と楽しく遊ぶ場を通して―
今帰仁村立認定こども園みらい	松田　みなみ	主体性や思いやりの心を育てる教育・保育 ～異年齢交流を通して～
名護市立緑風こども園	野村　亜紀	一緒に活動する楽しさを味わうための環境構成や援助の工夫 ―幼児理解を深め一人一人に応じた関わりを通した個の育ち―
名護市立緑風こども園	祖慶　勝美	子どもが夢中になって遊ぶ環境の構成と工夫 ―ワクワクドキドキを生み出す園庭の環境―
金武町立金武こども園	伊計　愛美	聴くを育む保育者の関わりと援助の工夫 ―朝の会でのひとときを通して―
うるま市立伊波こども園	名嘉真　紀和子	一人一人が自分の体を動かして遊ぶ意欲を育てる保育の工夫 ―様々な運動遊びを通して―
うるま市立赤道こども園	仲宗根　舞奈	言葉で表現する楽しさや相互に伝え合う喜びを味わう援助の工夫 ―保育者や友達と心を通わせる体験を通して―
うるま市立与那城こども園	平敷　美咲	自己肯定感を育て互いを認め合う援助の工夫 ―学級活動や遊びを通して―
浦添市立牧港こども園	島袋　由起乃	友達と一緒に遊ぶ喜びや楽しさを味わうための援助の工夫 ―友達との関わりが生まれる環境構成や援助を通して―
浦添市当山こども園	照喜納　優子	安心できる環境の中保育教諭や友達と共に様々な遊びを楽しむ子を育む ―様々な遊びを十分に楽しむ為の環境構成と援助について―
那覇市立与儀こども園	與那原　あずさ	互いの良さを認め合うための環境や援助の工夫 ―自分を好きになり認められる経験を通して―
那覇市立宇栄原みらいこども園	仲里　枝里子	園児の好奇心・探求心を育むための環境構成と援助の工夫 ～友達と心を動かす出来事を共有する体験を通して～
那覇市立真嘉比こども園	長嶺　里萌	思いを伝え合いながら遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫 ―保育教諭や友達との関りを通して―
那覇市立久場川みらいこども園	仲田　萌乃	友達との関わりを深め友達の良さに気付けるような環境構成と援助の工夫 ―友達と関わる楽しさを味わえる環境構成を通して―
那覇市立那覇こども園	田仲　芽依	園児が主体的に取り組むための環境の構成と援助の工夫 ―園児理解に基づいた活動を通して―

園　名	氏　名	研究テーマ
那覇市立天妃こども園	比嘉　奈理	互いのよさや思いに気付き一緒に活動する楽しさが味わえるような環境構成と援助の工夫 ―言葉による伝え合いを通して―
那覇市立城北こども園	宮平　奏子	自然に興味や関心をもち親しみながら関わるための環境の構成と援助の工夫 ―身近な生き物や植物との触れ合いを通して―
那覇市立天久みらいこども園	中村　美月	命を大切にしようとする心情や意欲を育む環境構成と援助の工夫 ―身近な動植物との関わりを通して―
那覇市立大名こども園	下地　智子	互いの良さを認め合い協力して活動する楽しさを味わうための援助の工夫 ―学級活動や遊びの場を通して―
豊見城市立上田こども園	平田　真子	友達との関わりを深めるための活動や援助の工夫 ―集団遊びや協同的な活動を通して―
宮古島市立伊良部こども園	狩俣　美里	子どもが主体的に遊べる環境構成と援助の工夫 ―子どもの実態を踏まえた日々の保育を通して―
宮古島市立上野こども園	兼城　美幸	身近な人と親しみ、関わりを深め一緒に活動する意欲を育む援助の工夫 ―みんなで話し合う活動（サークルタイム）を通して―
宮古島市立下地こども園	知念　のり子	好奇心・探究心を持ち豊かな創造力を育む工夫 ―自然物を使った遊びを通して―
石垣市立へいしんこども園	仲里　崇	好奇心や探求心を育むための環境構成と援助の工夫 ―身近な環境や生き物との関わりを通して―
石垣市立おおはまこども園	長間　麻衣	楽しく食べるための援助の工夫 ―栽培活動や友達との関わりを通して―
石垣市立あらかわこども園	島袋　千寿香	園児が安定した園生活を送るための援助の工夫 ―園内学習・園外学習を通して―
金武町　並里こども園	神山　円香	互いの気持ちに気付きよさを認め合う為の環境構成や援助の工夫 ―友だちや保育教諭と言葉による伝え合いを通して―
金武町　認定こども園きんのほし	吉田　美海	心を動かす体験活動を通し自己表現力を高める ―体験したことを様々な方法で表現する―
沖縄市　おきなわ地球こども園	照屋　結子	自分の気持ちや思いを言葉で伝え相手の思いに気付くための援助 ―友達や保育教諭と伝え合う経験を通して―
中城村　中城ひらやすこども園	渡嘉敷 美夢	自分の気持ちを相手に伝える力を育む －日々の保育や友だちとの関わりを通して－
中城村　平安幼稚園	知名　梨依菜	友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫 ―保育者や友達との関わりを通して―
浦添市　ほるのときこども園	比屋根　理沙	心の芽生えから育ちを支える保育環境つくり ―新しい発見・体験に出会う―
浦添市　ほるとのきこども園	大城　由希	互いの良さや存在を認め合い過ごせるような環境構成と援助の工夫 ―友達と関わる楽しさを知り一緒に遊ぶ事を通して―
浦添市　あおいこども園	ダービー　夢	1歳児の生活および遊びの充実 ―指先遊び・折り紙を通して―
那覇市　若狭こども園	崎山　愛	互いのよさを知り認め合い育ち合う学級作り ―保育教諭や友だちと関わり言葉による伝え合いを通して―
那覇市　神原こども園	謝花　ゆうき	自分の思いを伝え相手の思いに気付かせるような援助の工夫 ―絵本の読み聞かせ体験を通して―
南城市　あおぞら第2こども園	友利　有咲	幼児が主体的に遊び展開していける為の環境の構成や関わり援助の工夫
南城市　玉城こども園	大城　早苗	友達と関わりながら遊びこむための環境構成と援助の工夫 ―恵まれた園庭環境―
南城市　知念こども園	仲村　隼	園児が夢中になって遊び込める環境構成や援助の工夫 ―園児一人ひとりが安心と信頼をもって過ごせる環境を通して―
南城市　佐敷こども園	平安名　優織	園児の好奇心や探究心を育むための環境構成と援助の工夫 ―虫捕りや生き物のお世話をすることを通して―
八重瀬町しらかわこども園	神谷　久恵	“やってみたい”と心を動かす子ども達と保育教諭の援助 ―子どもも保育教諭も主体的に楽しむ園づくり―
八重瀬町あらしろこども園	照喜名　由香	心ゆくまで遊びこめる援助の工夫 ―子どもから創り出す保育を通して―
那覇市　小禄こども園	津波　雅之	友達のよさを知り協力して活動を進めていく力を育むための援助の工夫 ―集団生活の中で友達の考えや気持ちを知り関わりを通して―

様式３【課題研究レポート】

幼児が互いに関わりを深め、協同して遊ぶようになるための幼児理解と援助

―心理学の知見を活用して―

東村立有銘幼稚園　教諭　氏名　仲田　光児

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼児期は認知機能が大きく発達し、幼児期中期（４歳）には「他者の心」への理解が進み、幼児期後半（５歳後半）では第三者としての自分を持ち、それによって自己の直面する問題の解決に向けて自己を統制することができ始めるようになる（第二次認知革命）。そして「心の理論」（他者の心的状態を理解する枠組み）の遂行にはこれらの認知機能が必要と考えられている。

幼稚園教育要領の領域『人間関係』、内容の取扱い（3）において「幼児が互いに関わりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」とある。

本園は２年保育・単学級である。令和６年度においては、１学期は５歳児４名、２学期からは３名の在籍である。幼児達は、日々の遊びの中で友だちの作ったものや、していることに憧れ、模倣することを通して多様な関わり方等を自分の中に取り込み、自発性を獲得している。その一方で、幼児達は自分のイメージや思いをうまく伝えられずに、すれ違いや自己主張のぶつかり合い等もみられる。

そこで、幼児一人一人が、自らの主張を受け入れてもらったり、拒否されたりする経験を通して、自分や自分とは違う友だちの存在に気付き、互いに関わりを深めてよさを生かしながら、共通の目的に向かって協同して遊ぶ楽しさや喜びを味わってほしいと願いテーマを設定した。また本園は少人数という特色を踏まえ、心理学の知見を活用して幼児理解や援助について深めていく。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　幼児理解を深める。

幼児の遊び、友だちとの関わりを記録するとともに、幼稚園教育要領、心理学の知見を活用して様々な視点から幼児理解を深める。

２　幼児理解を基に保育実践を行う。

幼児理解を基に保育実践の計画を立案し、実践する。過程や結果を踏まえて反省、評価を行い次の保育実践へと繋げる。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

１　実践事例１「水を流して遊ぼう」（７月）

(1) 幼児の実態

・４月、５月は、砂場に穴を掘って水を入れるダム遊びが盛んに見られた。穴を掘る場所や水を入れるタイミング等で、それぞれの思いが先走り、不満やすれ違いが見られた。

・ダムから砂を掘り進めて水路を作り、水を流すことを楽しんでいる。掘る場所が特定の穴から水路へと拡張されたことで、幼児それぞれのイメージで試行錯誤を楽しんでいる。

・７月のプール遊びでは、排水時の水流に興味を持ち、皆でこぼして遊んでいる。

(2) 教諭の願い

・梅雨以前の遊びやプール遊びで、興味を示している水を流す遊びが盛り上がってほしい。

・これまでの幼児一人一人の経験や思い、考えを伝え合って協力してほしい。

・友だちのよさに気付いたり、認め合ったりしながら一緒に遊ぶ楽しさ、喜びを味わってほしい。

(3) 教諭の関わりと援助

・幼児の思いや活動を見守り、「試してみよう」「できて良かったね」「どうしたらいいんだろう」等の声かけをし、幼児が安心して挑戦したり、教諭や友だちと一緒に考えて工夫したり、うまくいったことを一緒に喜ぶ経験ができるようにする。

・「○○さんは～してるね」「○○さんは～と思ったんだね」と一人一人の活動や思い等を共感的に言語化し、友だちとの繋がりのきっかけ作りや幼児の思いや考えの言葉による表現を促す。

・友だちとのよい関わりが見られた時は価値づけをし、自信や次の行動へと繋げる。

(4) 幼児の変容

・遊びの序盤で「皆で力を合わせて作るぞ！」と張り切っている。

・うまくいかないことがあると、「ここどうする？」と友だちに聞き、友だちと協力している。

・友だちが水路を曲げようとした時に、行き止まりになりそうなことに気付いて、向きを変えるように提案する。友だちの提案を受け入れて、さらに水路を長くしている。

・パイプの隙間から水が漏れてきた時に、ユンボになりきっている友だちに加わり、ごっこ遊びを共有しながら、砂をかけて隙間をふさぐ工夫をしている。

(5) 結果と考察

・自分で試行錯誤をした経験を友だちと共有しながら、友だちと協力して試行錯誤をすることで、諦めず粘り強く取り組む姿が見られた。また、水漏れ等のうまくいかないことも、ごっこ遊びとしてイメージを共有することで、楽しい遊びとして続けることができた。

・試行錯誤の回数が多く、幼児一人一人の思いや考えを順番に挑戦できる体験を積み重ねることで、自己主張だけではなく、友だちの思いや考えを受け入れ、協力する心情や態度が培われていると考えられる。

・自分と友だちが違う存在であることを認識し、友だちに意見を提案する時に理由を伝えたり、ごっこ遊びの役になりきって伝えたりする等、友だちに受け入れてもらえるような関わりができるようになっている。

・帰りの会では、写真を見ながら活動の振り返りを行っている。教諭が幼児の思いや考えを受容的に聴き、肯定することで、同じ遊びの感想でも自分と友だちが違う思いや考えであることに幼児が気付き、互いのよさとして捉える経験を積み重ねた結果だと考えられる。

・日々の遊びの中でごっこ遊びが頻繁に行われ、その積み重ねで認知発達が促されたと考えられる。幼児達のごっこ遊びの記録を振り返ると、以下の理論で分析することができた。

・【理論】ごっこ遊びを維持するためには、参加者間のコミュニケーションが重要となる。ソウ

ヤー（Sawyer, 1997）は遊びの設定をフレーム（枠組み）という概念をもとに次のように論じている。

①フレーム設定の発話：遊びの始めに幼児が何ごっこをするのか、その中で誰が何の役をするのか等のフレーム（枠組み）を設定し、他者と共有するための発話

②フレーム内発話：遊びのテーマや役割に応じた発話

③フレーム外発話：幼児が遊びの途中で、新たな枠組みを提案し、設定調整し合う発話

フレーム外発話はよりよく遊ぶためのコミュニケーション（メタコミュニケーション）と言える（Bateson, 1971）。メタコミュニケーションがなされるのは、幼児が自他のイメージが必ずしも同じでないことを理解しているからであり、その背後には心の理論の発達があると考えられている。

2　実践事例２「魚釣りごっこ」（９月）　（※紙面の都合上、詳細は割愛する。）

(1) 子どもの変容

・作った魚を登場させて、「クラゲに襲われているタコを助けよう」と設定を作っている。互いのイメージを伝え合い楽しく遊んでいる。

(2) 結果と考察

・これまでの経験から、友だちを誘って、ごっこ遊びをより一層楽しむようになっている。

Ⅳ　実践の振り返り

1　成果

年度初めは、自分と考えが異なると、別々の遊びへと移動することが多かった。日々の様々なごっこ遊びを通して、自分や友だちの思いや考えを伝え合いながら遊ぶようになった。友だちと一緒に遊ぶよさを味わい、共通の目的を持ち、協力して遊ぶ粘り強さがついている。

2　課題

新しい遊び等で、自分なりに試行錯誤したい思いが強い時は、互いの主張がすれ違うことがある。一人一人の試行錯誤を十分に確保した上で、相手も認めながら友だちとの活動へと移行できるように援助する必要がある。

3　実践を通した自身の気づき、考え

保育の記録を振り返り、幼稚園教育要領や心理学の知見から捉え直すことで、幼児理解やごっこ遊びの意義について深めることができた。幼児理解を出発点とし、保育実践へと繋げることができた。また本研究を通して学んだことを園便り等で保護者に伝えることができた。

Ⅴ　今後の実践に向けて（課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと）

幼稚園教育要領や心理学の知見から多様な視点で幼児理解を深めていきたい。ごっこ遊びに関しても様々な先行研究が見つかったため、遊びの理解に役立てていきたい。メタコミュニケーション、心の理論等は、メタ認知等の認知機能の発達が必要とされているため、今後も幼児の姿との関連性を学び続けて、保護者にも園便り等で伝えていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省(2018).『幼稚園教育要領解説』.フレーベル館

荻野美佐子ほか.(2021).『改訂版　発達心理学特論』.放送大学教育振興会

子どもが主体的に遊びながら協調性を育む為の援助の工夫
―子どもたちの身近にある環境を通して―

伊是名村立伊是名幼稚園　教諭　氏名　高良　美咲

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼稚園教育要領解説」の第 1 節幼稚園教育の基本において、「幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。」「遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されるようにすること。」「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること」が求められている。またその際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。

本学級の幼児は５歳児(男子５名女子５名、計１０名)が在籍し、男女共に活発で明るく、好きな遊びを見つけると楽しんで遊んでいるが、同じ教材・教具を用いて繰り返し遊ぶことが多く、他の物へ興味や関心を示すことが少ない。また興味や関心を持っても遊びが広がらないことが多い。そのため、幼児が主体的に活動し、「あれやりたい！」「これやりたい！」という意欲が芽生え、興味や関心を持ちながら活動が展開され、遊びが広がっていけるような環境構成や援助が必要だと考えた。そして、離島という特殊な環境の中での少人数学級では、子どもたちがずっと同じクラスで過ごすため、協調性を身につけ、互いの良さに気づき、思いやる心を持ちながら助け合い育って欲しいと考え、テーマを設定し研究することとした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①幼児が主体的に遊びを発展していけるような環境の工夫や援助について

幼児が主体的に遊びを見つけ、展開させていけるよう個々の発達を理解し、興味や関心が生まれるような環境構成と援助を考え工夫する。

②協調性を育むための、活動や関わり方について

幼児が他児と遊ぶ中で、協調性を身につけていくための方法や関わり方の援助の工夫を行う。そして、お互いの考えや思いが共感・共有できるように、一人ひとりに応じ、繰り返し働きかけていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）【実践事例①　かたつむりのうんちは何色？】

〈子どもの姿〉

・月刊誌より、かたつむりは食べた物と同じ色のうんちをすることを知った。
・翌日、E くんが幼稚園のフェンスに、かたつむりのうんちを見つける。
・本当にかたつむりは、食べた物と同じ色のうんちをするのかな？と疑問が生まれた。

〈教師の願い〉

・子どもたちが主体となって活動し、驚きや発見、達成感を味わい、今後の活動や遊びに「あれやりたい！」「これやりたい！」という意欲を育て、興味や関心を広げていけるようになって欲しい。
・みんなで協力しながら取り組むことで、協調性が育って欲しい。

【環境構成と教師の援助】

・子どもたちが主体となって活動が展開されるよう、どのように？観察を進めていくのか話しを聞いて、決まったら一緒に必要な教材・教具を準備する。
・観察には、クリアケースを使用する。(透けていることで、どこから見ても様子がわかる。)
・かたつむりの図鑑や絵本を飼育している側に配置し、いつでも見れるようにする。
・観察した様子を、ドキュメンテーションを使って視覚化・見える化し掲示する。(クラスだよりや保育室に掲示し、活動の様子を紹介する。画用紙を用意し、絵を描いて記録できるようにする。)

【子どもたちの姿と変容】

・どんなうんちをするのかな？と楽しみに登園し、朝のうんちチェックをしていた。
・飼育の仕方や疑問を図鑑で調べながら観察し、気づいたことやわかったことをお友だちと共有しながら一緒に取り組む姿が見られた。
・虫を苦手とする子が、観察する中で驚きや発見を味わい、興味や関心が芽生えた。
・異年齢児にかたつむりの様子を優しく教える姿が見られ、思いやりの心が育ってきているのを感じた。
・遊びや活動が広がり、「あれやりたい！」「これをやってみたい！」と意欲的になった。
・みんなで協力して活動を行ったことで、協調性が育ってきた。

【実践事例②　みんなでジンベイザメを作ってみよう！　】

〈子どもの姿〉

・親子遠足で美ら海水族館へ行ったあと、振り返りの活動で、海の生き物を製作した。
・「ジンベイザメは、大きかったね！」「大きい生き物を作るのは、大変そう･･･。」と言う会話から、みんなで作ろう！と決まった。

〈教師の願い〉

・集団の中で一人一人が主体となり、みんなで意見を出し合いながら、協力して作ることの楽しさや達成感を味わい、協調性を育んでいって欲しい。

【環境構成と教師の援助】

・土台となる「浮き」を準備しておく。
・作り方は、製作を思い出して「紙粘土」と「折り紙」を使うことに決まり、一緒に準備をする。
・ジンベイザメの写真や人形を用意し、観察しながら製作できるようにする。
・話し合う姿を見ながら必要に応じて声をかけ、一人一人の考えが伝わり、話し合いが円滑に行うことができるよう働きかける。

【子どもたちの姿と変容】

・役割を決める際、R さんが「じゃんけんをしよう！」と提案するが、納得いかない表情をする子どもたちがいたので、教師が「それでいいの？」と助言した。すると「先にやっていいよ！」「交代しながらやろう！」と意見がでて決まった。工作が始まると、みんなで協力しながら楽しく作ることができ、完成したら達成感を味わい嬉しそうに保護者や異年齢児に報告する姿が見られた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

同じ遊びばかり繰り返していた子どもたちでしたが、事例を通して虫や植物など自然に関心が生まれ、興味をもつことができた。そして、疑問に思ったら図鑑で調べてみようとする力が身につき、気づきや発見をお友だちに伝え共有し、一緒に探求するようになりました。その中で、図鑑から化石の存在を知ると「化石探しをしたい！」と言って、化石に似た石を探したり、お友だちに伝える行動から「先生ごっこをしたい！」と言って遊びが次々に展開され、主体的に活動しようとする姿が多くなりました。また、共通の目的をもって活動することの楽しさや、達成感を味わい協調性が芽生えてくると、他児との関わりが増え個の遊びから集団で遊ぶようになってきました。なにかあった時は教師に助けを求めることが多かったが、困った時には「教えて！」「一緒にやろう！」などと声をかけ、お互いで助け合い学び合う姿も見られるようになりました。

②課題

最後まで自分の考えや思いを伝えながら、主体的に活動できる子も居ましたが、体験や経験が少なかったり表現力や思考力の芽生えが乏しいと、主体的に活動しようとしても、そのあとの展開がどうしたらいいのかわからず困ってしまう子がいた。また、他児との関わりが増えてくると、自分の思いや考えだけ一方的に押しつけたり、言葉のやり取りが上手くできずトラブルになる子が居たり、「〇〇も遊んだから！」と言って片付けを任せてやらないで逃げる子がでてきた。

③実践を通した自身の気づき、考え

主体的に活動が展開されようとしても、知識や表現力、体験や経験がないと遊びや活動は展開されず、深まっていかないのを感じました。そのため、主体的な活動ができるようになるためには「幼児期の終わりまでに育って欲しい１０の姿」が身についていないとできないことに気づきました。子どもたちが主体となって活動していると、必然と１０の姿がいろんな場面に見て感じることができ、その姿がまさに幼児期に求める子どもの姿なのだと思いました。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

「やりたい！」という思いだけで、どうしたらいいのかわからず困ってしまう子が居たので、主体的に活動ができるようになるために、たくさんの経験や体験ができるような環境を構成し「幼児期の終わりまでに育って欲しい１０の姿」をしっかり捉え、育んでいく活動をしていきたいと思います。また、自分の思いや考えを伝え、相手の思いや考えを聞くことのできる機会を設け、トラブルになった時は、どうしたら良かったのかな？と声かけをしながら解決方法を伝え、言葉でのやり取りを指導していきたいです。そして、片付けが習慣づいて身についていけるよう、ゲームのように片付けを行ったり、ゴミ箱に好きなキャラクターを貼り捨てに行く楽しみを作るなど、進んで片付けができて習慣づいていけるような工夫をしながら、整理整頓が身につけていけるようにしたいと思います。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省　平成３０年　幼稚園教育要領解説　株式会社フレーベル館
・遊びや生活のなかで“１０の姿”を育む保育　図書印刷株式会社

様式２ 【課題研究報告書】

友達との関係を深め，伝え合う楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫

―身近な環境との関わりを通して―

読谷村立古堅幼稚園　教諭　上原　瑞生

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年の幼児を取り巻く環境は，急速な少子化や核家族の進行等による人間関係の希薄化やコミュニケーション能力の低下，社会性の欠如を引き起こしている。

『幼稚園教育要領解説』第１章　第２節　幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（9） 言葉による伝え合い　には，「身近な親しい人との関わりや，絵本や物語に親しむ中で，様々な言葉や表現を身に付け，自分が経験したことや考えたことなどを言葉で表現し，相手の話に興味をもって聞くことなどを通して育まれていく。」と示されている。自分の思いを受け止めてくれる教師や友達との温かな人間関係の中で，心動かす体験を通して，言葉で表現したり，自分とは異なった考えに気付いたり，共感したりと言葉のやり取りを楽しみ，喜びを味わうことが必要であると考える。その為には、幼児との温かな信頼関係の中で，心動かす体験をしたり，自分の思いや考えを伝えたり，相手の思いや考えに触れたりする経験が必要だと感じる。

本学級は５歳児（２年保育６名，新入園児１７名），男児７名，女児１６名，計２３名が在籍している。好きな遊びを見つけて友達を誘って遊ぶ子や学級の集まりで進んで発表をする子がいる一方で，友達に遠慮して自分の思いを伝えられない子、困ったことがあっても言葉で伝えることが難しく黙り込む子の姿が見られる。

そこで，教師や友達との信頼関係を基盤に，身近な環境との関わりを通して，幼児同士の友達関係を深め，思いや考えを伝え合う楽しさを味わうためにはどのような環境構成や援助の工夫が必要か，研究を行いたいと考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　友達との関係を深めるための環境構成と援助の工夫

幼児の興味・関心に沿った活動を取り入れ，幼児同士が関わって遊ぶ中で一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようにしていく。

２　伝え合う楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫

生活や遊びの中で，したり，見たり，聞いたり，感じたり，考えたりしたことを自分なりの言葉で伝えられるよう集まりの場のもち方を工夫し，友達の思いや考えに触れる機会を設けていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例　『 季節の移り変わりによる，身近な生き物との関わり 』

≪幼児の姿≫
- 虫が好きな子が多く，夢中になって虫捕りをしている姿がみられる。
- 他の学級や年下の子と一緒に，虫を探したり，捕まえてあげたりする子の姿もみられる。

≪教師の願い≫
- 虫との関わりを通して，したり，見たり，聞いたり，感じたり，考えたりする体験を味わってほしい。
- 自分の思いや考えを言葉で表現しながら，友達とイメージを共有したり、膨らませたりすることで，思いや考えを伝え合う楽しさを味わってほしい。

≪活動の様子・幼児の変容≫　〇教師の援助　□環境と構成の工夫≫

「アゲハ蝶との関わり（４，５，６月)」

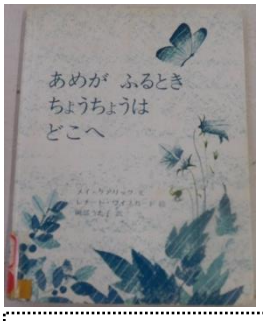
①アゲハ蝶の幼虫を教材として，観察コーナーを設けた。さなぎになり，何の蝶になるのか，調べたり，予想したりできるよう環境を整えた。

□幼児たちの考えを表現できる教材を用意し，環境の工夫を図る。(塗り絵)

〇個々の考えを認めながら，友達の考えにも触れ，羽化への期待感をもてるよう言葉かけを行う。

□幼虫やさなぎの成長の様子を追えるような写真を掲示する。

②さなぎから孵ることを日を数えながら楽しみにしている姿がみられた。さなぎから孵ったアゲハ蝶を外へ放つ経験をしたことから，「アゲハ蝶，元気かな？」と親しみを寄せる姿がみられた。絵本『あめがふるときちょうちょうはどこへ？』を教材として読み聞かせし，雨天時，蝶はどう過ごしているか，イメージしたり，考えを話し合ったりする場を設けた。



〇肯定的な言葉や気持ちで受け止め，考えを話したくなるような言葉かけをする。

〇思いを伝えることが難しい子へは，個別で問いかけ，考えを引き出し、絵に描いたり，友達へ共有できるような援助をする。

□イメージを持ちやすいよう絵で表す。また，絵を見て，考えを話したりできるよう掲示し，環境の工夫を図る。

③蝶や生き物に興味を示し，図鑑や関連する絵本を読む子の姿が増えてきた。雨の日の蝶の姿を見たいと期待の気持ちを寄せる姿がみられた。雨天時に蝶を探す“あめさんぽ”の活動を行った。

〇活動内で，水溜まりに入ったり，雨に打たれてみたりとカッパや雨靴を履いている時からこそできる体験を取り入れ，用具の必要性に気付かせるとともに，普段できないようなワクワク体験を味わえるようにする。

〇“あめさんぽ”後，発見したことや感想，気付いたこと等をみんなで共有できる場を設けた。

□梅雨の事象に興味関心がもてるような工夫を図る。(雨関連の絵本，歌，製作等)

≪結果と考察≫

・蝶を探しに行く共通の目的があり，蝶を見つけると，気付いた子が他の子へ「蝶々いたよ！」と知らせ，周りの子へ情報が広がっていく様子がみられた。共通の目的をもって活動に取り組むことで，幼児同士の会話が増えていくと考える。

・自分の思いや考えを言葉や文章にして伝えるということが難しい子もいたため，オノマトペを使って聞こえた音を表現できるよう『あめふり』を歌ったり，絵本『どしゃぶり』の読み聞かせをしたり工夫を図ったことで，自分なりの言葉で先生や友達に伝える姿がみられるようになった。

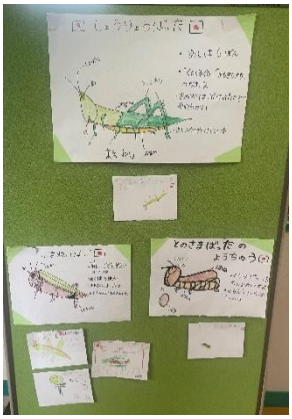
・“あめさんぽ”の活動から，幼児同士の会話がさらに増えた。クラスのみんなに共有したい気持ちが芽生え，友達のよさに気付き，一緒に活動することの楽しさを味わっていったと考える。

・“あめさんぽ”の活動から，カッパや雨靴の用途にも気付いたことで，活動をするにあたっての準備や物の必要性を感じ，自分で用意しようとする気持ちにつながり，主体性が育まれたと考える。

≪活動の様子・幼児の変容≫　〇教師の援助　□環境と構成の工夫≫

「バッタとの関わり（１０，１１月)」

①蝉の鳴き声が聞こえなくなり，バッタが増えたことをきっかけに，季節によって出てくる虫が変わることに気付く姿がみられる。そこで，バッタを観察しながら，幼児たちが気付いた特徴を絵に表した。



〇捕まえた虫の種類やバッタの特徴を捉えた疑問を問いかけながら，考えたり調べたり思考が深まるようにしていく。

〇友達と協力しながら，虫捕りを楽しめるように援助していく。

□捕まえた虫をすぐに調べたり，記録に残せられるようにする。(コーナーの設置，図鑑の用意)

□幼児たちが描いた絵を見て，振り返ったり，会話を楽しんだりできるよう掲示し，環境の工夫を図る。

≪結果と考察≫

・捕まえることに満足していた姿から，捕まえた虫を観察したり，記録に残せるようにしたりと環境を整えたことで，捕まえた虫に愛着が湧き，さらに図鑑で種類や特徴を調べる様子へと変容した。また，友達同士で自分の捕まえた虫を紹介したり，学んだ知識を他の幼児へ教えたりする姿も見られるようになった。

・虫の生育や寿命の短さを知ることで，小さな虫にも命があることに気付き，捕まえて観察したり，友達や教師へ見せた後は，家族の元へ帰れるよう捕まえた場所で逃がしたりと、虫の気持ちになって思いやる様子も見られるようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

本研究を通して，幼児同士が伝え合う楽しさを味わうためには、教師や友達が自分の思いを聞いてくれる安心した雰囲気や関係がある中で，興味関心が高まったり，心動かす体験を通して伝えたい思いが育まれていくのだと感じた。また，自分の思いを伝えたり，相手の思いを聞いたりする体験を通して，言葉のやり取りの楽しさを感じていったと考える。また，本研究は，後半は本学級だけでなく，園全体で取り組むことができ，他学級，異年齢の幼児も交えて行うことができた。関わる人や環境が変わることで，新たなことを発見する喜びや幼児の考えの広がりが見えた。同じ虫捕りにおいても，４歳児は捕まえたい虫１匹を夢中で追いかけることがほとんどだが，５歳児は道具を手分けして持ったり，協力して捕まえたりするといった発達の過程が見受けられた。また，教師自身においても，幼児や他教師の考えに触れる機会を設けることで，視野が広がったり考えを深めることができたりと，新たな気付きが生まれるのだと考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

本研究を通して，幼児が興味をもって取り組む活動では，夢中になり，継続して主体的に取り組む姿がみられたことから，幼児が遊びや活動に興味関心を抱き，主体的に関わることができる環境構成や援助が大切であることを学んだ。幼児の姿を見取り，生活経験や発達に応じて，一人一人の表現方法が様々な形で表現されていることを理解し，丁寧に関わっていくことが大切であると考える。本研究で得た学びを通して，今後は学級だけに囚われず、園全体へと広げた活動として取り組んでいき，他教師の幼児の見取りや考えを参考にしながら，引き続き環境構成や援助の工夫を努めていきたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　平成３０年『幼稚園教育要領解説』フレーベル館

・メイ・ゲアリック, レナード・ワイスガード, 岡部うた子 著, １９８９年『あめがふるときちょうちょうはどこへ』, 株式会社 金の星社

・おーなり由子, はたこうしろう 著, ２０１８年『どしゃぶり』, 講談社

友達のよさに気付き共に活動する楽しさを味わうための援助の工夫
～ 日々の生活や遊びを通して ～

沖縄市立山内幼稚園　教諭　山川　灯

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼稚園教育要領解説』の第２章第２節人との関わりに関する領域「人間関係」には「友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう」とある。幼稚園は集団での生活の場であり、様々な人々と出会う場である。そこで、幼児は友達と関わる中で様々な活動や出来事を通してその感情を共有し、活動を進めていくことで友達との関わりが広がり、充実した幼稚園生活を送れるのではないかと考える。

本学級の幼児は５歳児（１年保育）男児１２名、女児１１名（うち支援男児１名、女児１名)、計２３名在籍している。入園当初から伸び伸びと過ごし、遊びの中で教師や友達と関わりながら遊んだり、経験したことや感じたことを話したりする姿が見られる。その中で特別支援児に関しては、他児にあまり興味を示さず、一人で遊び行動をする子、他児と生活や遊びを共にするが、遊びの中で相手の話を聞かずに会話が一方的になったり、自分の思い通りにならず輪から抜け出したりする子がいる。

このような実態を踏まえ、日々の遊びや生活を通して友達のよさに気付き、共に活動する楽しさを味わうための援助の工夫を探っていきたいと考え、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　友達に興味や関心をもち、共に過ごすことの喜びが味わえるような援助の工夫

・友達と共に生活や遊びを楽しみ、関わりを広げていけるように幼児の内面理解に努め、安心できるような環境作りや他児を意識できるような言葉かけを工夫する。

２　友達と集団生活や遊びを楽しむための援助や工夫

・目的に向かって取り組む遊びの中で、幼児が十分に自己を発揮しながら互いの感じ方や考え方の違いやよさに気付けるように援助する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】

≪特別支援Ａ児の実態≫

・日々の生活の中でも自由に行動し、他児を意識する様子は殆ど見られない。

・他児が近くで同じ遊びをしていても気にする様子はなく、一人遊びをしている。

≪教師の願い≫

・普段の生活の中で、友達と過ごすことの楽しさを感じてほしい。

・好きな遊びを通して教師や友達と遊ぶ楽しさを感じてほしい。

≪教師の関わりと援助≫

・本児が安心感をもってやりたいことに取り組めるような居場所作りを行い、教師も一緒になって遊びながら楽しさを言葉にして共感する。

・本児が好きな遊びを通して友達と触れ合えるよう遊具の配置を工夫し、友達と共にいる楽しさが味わえるようにする。

・「次は○○の時間だよ。お友達と移動しようか。」「隣のお友達は○○をしているよ。楽しそうな顔をしているね。一緒にやってみよう。」など他児を意識して活動できるような言葉をかける。
・「○○さんもこの遊びしているね。」「○○さんと一緒にやってみる？」など同じ遊びをしている子や場を共有して遊んでいる子の楽しそうな様子を伝え、他児の遊びにも興味が出てくるような言葉をかける。

《特別支援A児の変容》
・好きな遊びが同じ友達や同じグループの子の行動を気にする様子が見られるようになった。
・少しずつ友達の遊びに興味をもち、遊びを真似しようとする姿や友達が遊んでいる場に入り笑顔を見せる姿が見られるようになった。

【結果と考察】
・本児が満足するまで好きな遊びをしたことで、少しずつ他児の遊びに興味を示すようになった。
・友達に興味が出てくるよう言葉をかけたり、状況を伝えたりしたことで少しずつ他児と関わろうとする気持ちが出てきた。
・好きな遊具を友達の近くに配置したり、本児が落ち着いて遊べそうな場所を選んだりしたことで、友達の刺激を受けながら一緒に遊ぶ楽しさを感じてきている。

【実践事例２】

≪特別支援B児の実態≫
・様々なルールのある遊びを楽しむが、負けることが嫌い。
・ルール決めや作戦を立てる際には相手の気持ちよりも自分の思いを優先し、自分の思いが通らないと輪から抜け出してしまうこともある。また、自分の気持ちを整えるのに時間がかかる。

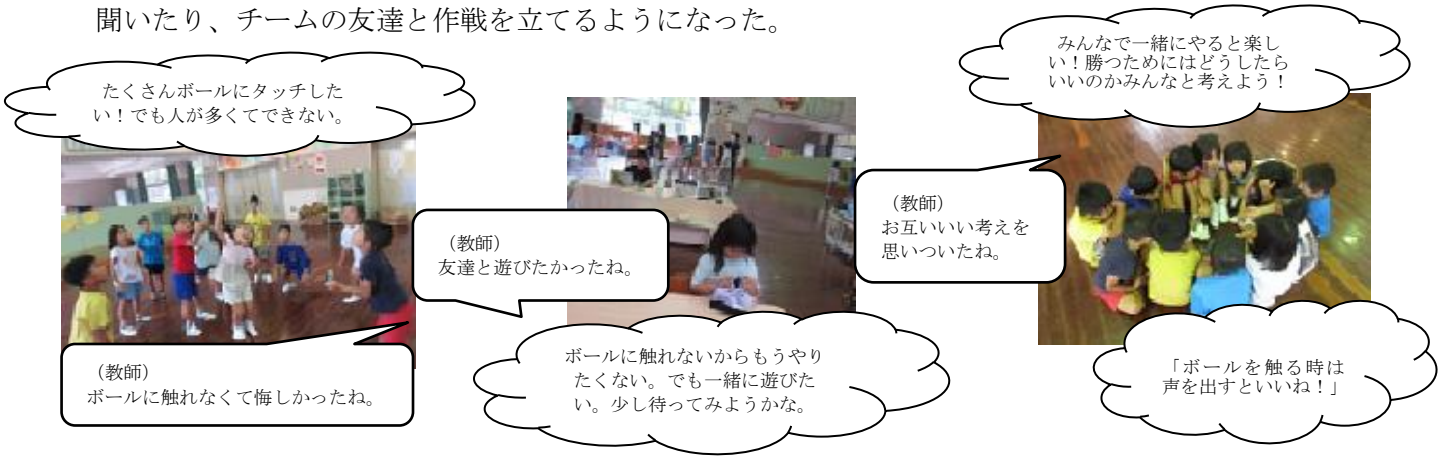
≪教師の願い≫
・遊びを繰り返す中で友達と一緒に活動する楽しさを感じてほしい。
・遊びを楽しむ中で勝った嬉しさや負けた悔しさを感じ、その思いを基に友達と力を合わせて頑張ろうという気持ちに繋げたい。
・自分の思いや気持ちを伝え、相手の思っていることに気付くようになってほしい。

《教師の関わりと援助》
・本児の思いを受け止め、気持ちに寄り添いつつ他児の気持ちを知らせることで、次第に他児の気持ちや考えに気付けるようにする。
・ルールのある遊びを積極的に取り入れ、本児が満足いくまで遊びを繰り返して、嬉しさや悔しさを友達と分かち合えるようにする。
・遊びの輪から抜けたり遊びが中断した際には、本児がどんな気持ちだったのかを聞いたり、悔しい気持ちを言葉にして代弁したりしながら気持ちを受け止め共感する。

・目的に向かってみんなで話し合う場面では互いの考えや感じ方の違いに気付けるよう見守り、必要に応じて援助していく。
・いざこざがあった場合にはそれぞれの主張や気持ちを受け止め、互いの思いが伝わるように仲介する。

《特別支援Ｂ児の変容》

・最初は教師を介して思いを伝えていたが、思いや考えが受け入れられる経験から自信を持って自分の気持ちを伝えたり、相手の話を受け入れようとする姿が見られる。
・勝った時は友達と喜び合い、負けた時には遊びを振り返りどうしたら勝てるか考えたり、相手の意見を聞いたり、チームの友達と作戦を立てるようになった。



【結果と考察】

・教師が本児の気持ちを受け止めていく中で、自分の気持ちを整理し、遊びに戻ってくるようになった。
・思い通りにいかず気持ちが崩れそうになるが、友達のよさに気付きはじめ関係が深まってきたため、一緒に遊びたい思いが強くなり、折り合いをつけて遊びが続くようになった。
・勝って嬉しい気持ち、負けて悔しい気持ちを教師や友達と共感することでみんなと力を合わせたから勝てた、負けたけど次はどうしたらいいのかを幼児同士で考えるようになった。
・友達やチームと何度も話し合いを重ねたことで、チームで勝つという目的に向かって考えたり協力したりする楽しさを味わっている様子が見られた。

Ⅳ　実践の振り返りや今後の実践に向けて

【実践事例１　特別支援Ａ児】

・一日の生活の流れや活動を具体的に伝えたり、相手の動きや思いを言葉にしていったことで、他児への興味が湧き、関わりにも広がりが見られ、同じ場を共有して遊ぶことも増えてきた。今後も本児の気持ちに寄り添いながら興味のある遊びを通して友達のよさに気付き、関わりを深められるような環境構成の工夫や声掛けの仕方を研究していきたい。

【実践事例２　特別支援Ｂ児】

・初めは自分の気持ちだけで行動していた幼児が遊びを繰り返し、様々な感情体験をしながら自分とは異なる思いがあることに気付いてきた。また、「チームで力を合わせたことで勝つことができた」「負けたけどみんなとなら次は勝てそうだ」など友達とだからこそできたという経験を重ねて、友達のよさに気付いてきている。引き続き幼児の発達段階を踏まえ、興味や関心、遊びの様子を捉えながら友達と活動する楽しさを味わい、より遊びを深めていけるような援助の手立てを探っていきたい。

〈主な参考文献〉

・幼稚園教育要領解説（文部科学省）
・多様な子どもたちの発達支援（学研）

様式３【課題研究レポート】

思いを伝え合いながら一緒に活動する楽しさを味わう環境構成と援助の工夫
―教師や友達との関わり、園生活での体験を通して―

北谷町立　北谷第二幼稚園　教諭　天願　日奈子

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼稚園教育要領解説』の第２章第２節「人間関係」の領域の内容には「関わりの中で様々な自己主張のぶつかり合いによる葛藤、教師や友達と共にいる楽しさや充実感を味わい、次第に皆と生活をつくり出していく喜びを見いだしていくのである」と記されている。幼稚園においては、教師や友達と十分に触れ合うことを通して親しみをもち、安心して幼稚園生活を過ごすことができるように援助することが重要であると考える。

本学級は、５歳児（２年保育）男児１１名、女児１６名、計２７名が在籍している。

幼児の実態として、戸外での活動を好む子が多く、虫探しや砂遊び、色水等の好きな遊びを見つけて友達と誘いあって遊ぶ姿が見られる。また、気づいたことを教師や友達に知らせて発見を楽しみ、学級内での発表に意欲的な子も多い。反面、友達よりも教師との関わりを求める子や自分の思いや考えが一方的になり、相手の思いに気付けなかったり、口調が強くなったりとトラブルになる姿も見られる。

そこで、教師との信頼関係を基盤に安心して園生活を過ごす中で、友達との関わりの中で思いを伝え合い、自己を発揮しながらも相手の気持ちに気付き、時には葛藤しながら様々な感情の交流を通して、友達や自分の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わってほしいと願い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　友達と関わり合いを楽しみながら、心を動かす体験・遊びに繋げていけるような環境構成と援助

遊びを通して友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わい、「やってみたい」と心を動かし、わくわくできるような用具や場を設定する等の環境構成の工夫を行う。

２　幼児が自分の思いを伝え合い、相手の気持ちや良さに気付けるような環境構成と援助

友達のしていることに興味をもち、良さに気付いたり、伝える（話す）ことの楽しさや共感してもらう喜びを味わえるように、共通の話題や興味を共有する場を設定する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例１：友達と「一緒に」遊ぶって楽しいな

【幼児の姿】

・入園当初は同じ保育園から入園した子同士で遊んだり、パズルやお絵描き等自分の好きな遊びを個々のペースで遊ぶことを楽しむ姿がある。また、教師との１対１の関わりを求める子もいる。
・音楽が流れると踊り出したり、描いたり、作ったりという遊びに関心を示す子も多くいる。

【教師の願い】

・友達とのふれあい遊び等を通して、もっとクラスの友達に親しみをもってほしいな。
・共通の好きな遊び（ダンスや製作遊び等）を通して、友達と関わることで一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしいな。

≪教師の援助と関わり≫

・遊びを通して友達に親しみを持てるように、学級でのひとときの時間に友達とふれあいながら楽しめるようなリズム遊び（♪カマキリマッサージ、じゃんけん電車等）や集団遊びを取り入れる。
・子供達と一緒に遊ぶ中で興味・関心を捉え、友達とイメージを共有したり、子供達同士の関わりを繋いでいけるようにし、友達と一緒に遊ぶ楽しさが感じられるような言葉がけや援助を行う。
・子供達との対話を通して「やりたい」と思った時に実現できるような場やものを一緒に整えていけるようにする。

【幼児の変容】

・「カマキリマッサージしよう」と並んで準備を始めたり、集団遊びで円になる際には「綺麗な丸にするには？」とみんなで声を掛け合う姿が見られてきた。
・ダンスが好きな子を中心に始まったコンサートごっこでは、「踊る時のステッキ作りたい」「どんなして作るの？」と互いに教え合ったり、友達のしていることに目をむけることが増え、今まで関わりの少なかった子達同士での会話が増えた。
・個々のペースで楽しむ姿が多かったが、お店で買ったものをコンサート会場で食べる等と遊びと遊びの繋がりが見られてきた。

「お客さんの椅子準備しよう」
「アイドルの洋服つくりたい」

♫ねずみのはみがきのペープサートをしていた子達が「ダンスをしよう」と踊り始め…

「どうやってつくったの？」

【結果と考察】

・教師が個々のイメージを伝える仲立ちとなることで、友達のしていることに興味をもち、真似て衣装や看板を作ったり、作り方を教え合ったりと友達の考えの良さに気付いたり、イメージを共有しながら遊ぶ姿が見られた。
・ご飯屋さんで買った食べ物を食べながらコンサートを見よう等、学級内でのひとつひとつの遊び、そして個々との関わりに繋がりができ、さらに遊びが発展していった。
・共通の遊びの中で関わることで普段遊ぶ子や教師以外へ目を向ける機会が増え、さらに自分の考えを認めて貰えた喜びやイメージを出し合うことで遊びが発展していく楽しさや充実感が感じることができたのではないかと考える。

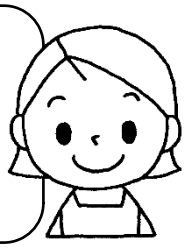
実践事例２：みんなの前で話してみよう！聞いてみよう！

【幼児の姿】

・遊びの中で気づいたことや発見等を友達や教師に話すことを楽しむ子やお話好きな子が多くいる。
・他の子が話していても気にせず割り入って話したり、さえぎるように話す子や話を聞くということが苦手な子がいる。

【教師の願い】

・気づきや思いを教師だけでなくみんなの前で話すことで、もっと「話す」・「伝える」楽しさを感じたり、友達に共感してもらう喜びを感じてほしいな。
・自分の思いを言葉で伝えることができるようになってほしいな。



≪教師の援助と関わり≫

・帰りの会で１日の出来事を振り返り、楽しかったことや頑張ったことをみんなの前で話す「お話タイム」を設ける。（発表する際には、話したい子が自分から手を挙げて前にでる）

・子供が発表した内容に対して、「～が楽しかったんだね」「先生も楽しかった」等とまずは教師が共感することで共感される喜びや話してよかったという気持ちを感じられるようにする。

【幼児の姿①】

・話すことが好きな子は、積極的に発表していて、発表することを楽しみにしている。

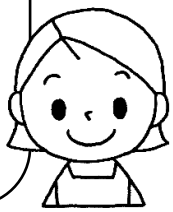
・自分から手を挙げて発表する子は同じ子が多い。

・自分が話し終えると友達の話を聞くことに興味を持てない子もいる。

【教師の願い】

・子供達一人ひとりに話す楽しさを感じてほしいな。

・相手の話を聞くことでいろいろな気持ちをイメージしたり、友達の良さや考えに気づいてほしいな。



≪教師の援助と関わり≫

・話したい子だけでなく、「みんなのお話をきいてみたいな」と子供達に相談し、一人ひとりが話す機会ができるように、「今日のお話グループ」の掲示を作って生活グループごとに交代ずつ発表する形に変更した。

・感情には様々な種類があることや相手の気持ちに気づいたり、話をイメージするヒント、そして話をする際の手立てになるように様々な表情のイラストの小さなパネルを用意し、発表する子に選んでもらい、子供達に見せながら発表する形式も取り入れてみた。

・友達の発表を聞いた後は「お話聞こえたよって拍手を送ると嬉しいな」と伝えながら、聞いている側の子供達にも相手の話を聞くという意識ができるようにした。

【幼児の姿②】

・交代で周ってくることで「次のお話グループは、〇〇グループだよね？」と楽しみにする様子や今まで話したことがなかった子も話してみようとする子が増えてきた。

・「楽しかったこと」だけではなく、「困った」「悲しかった」等の感情のカードも取り入れたことで、回数は少ないが「こんなことに困ったんだ」と学級内で相談する機会ができたこともあった。

・相手の話に興味を持ち、「〇〇の何が楽しかったの？」などと質問をする子も出てきた。

・自分達でクイズ遊びを始めたりと、みんなの前に出て話し、耳を傾けという遊びを楽しむ姿もある

・自分がやりたい・話したいという思いが強く、自分が話し終えると満足して友達の話に興味がもてない子もまだ見られる。

はっぴー（楽しい・嬉しい）、怒る、悲しい、困る、さんきゅー(ありがとう)、ないす（すてき・いいね）

活動の隙間時間等に「くーいず、くいず！友達くいず！」と学級内の友達の特徴をヒントにするクイズも人気です。

【結果と考察】

・１日の振り返りをグループで交代して発表することで、全員がみんなの前で話す経験を積むことができた。また、「今日はこんなこと話したい」などと期待感をもって取り組む姿や友達の発表に対して質問したりと、興味をもって話をきく姿が増えてきた。

・クイズ遊びを子供達同士で始めたりと、考えながら話したり、友達の話を注意してきたりという姿が遊びの中で楽しみながら広がっていった。
・みんなの前で発表することで自分の思いを伝えることや共感してもらう喜びに繋がり、「みんなの前で話す楽しさや相手の話に興味を持って聞くという姿に繋がったのではないかと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

入園当初の本学級は、思いや考えを伝え合うことが出来ずに戸惑う姿や友達と遊ぶことよりも教師と過ごすことを求める子もいたが、教師が個々の姿に寄り添い、一緒に遊び、時には一緒に思いを伝えてみたりと、遊びや生活の中で思いを伝えるという経験を繰り返し重ねていくことで、自分なりの言葉で思いを伝えようとする姿や伝えあうことで遊びが発展していく充実感、一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができたのではないかと感じる。思いを伝えることができるようになってきている反面、自分の思いだけが一方的になり、相手の話を聞くことができずにトラブルに繋がったり、学級の集まりの場等も含め自分の話を終えると興味をもって話を聞くということが苦手な子もいる。

実践を振り返る中で、『幼稚園教育要領解説』の第２章第２節「人間関係」の領域の部分をもう一度見返した。そこには幼児は園生活の中で他の幼児や教師と触れ合う中で自分の感情や意思を表現しながら、自己の存在や他の人と共に活動する楽しさを味わい、自己主張のぶつかり合いの葛藤を通して互いに理解し合う体験を重ねながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになるとあった。これまでの実践での子供達の姿を思い返すと友達や教師と触れ合い、「一緒に」活動する経験が楽しさや充実感に繋がり、その感情が「伝えたい、伝えてみたい」に繋がるんだろうなと感じた。また同時に、自分の思いが一方的になるという姿も、相手との関わりが増え、思いを伝えることができるようになったからこその姿で、その葛藤も成長に繋がっていくんだろうと感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

今後の実践にむけて、友達と関わり合い、自分の思いを伝えることができるようになってきた今、友達との様々な感情の交流を大切にしていきたいと思う。友達と活動する楽しさや充実感を味わうことができるような保育を心がけながらも、その中で起こる葛藤体験をトラブルとして捉えるのではなく、それについて考えたり、話し合ったりしながら自分の気持ちと他の人の気持ちや感じ方が異なる事に気付いたり、考えたりできるような援助を心がけたい。また、相手の話に興味をもって聞きたくなるような教材研究や個々の発達段階に応じた援助の工夫をしていきたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　平成３０年　『幼稚園教育要領解説』　フレーベル館
・武藤隆　監修　２０１７年　『幼稚園教育要領ハンドブック（２０１７年告示板）　Gakken
・沖縄県立総合教育センター　平成２６年度　「幼稚園新規採用教員研修課題研究報告書」

様式３【課題研究レポート】

集団生活の中で自己を発揮するための関わり
～発達に合った支援を考える～

宜野湾市立　はごろも幼稚園　教諭　氏名　伊佐　真哉

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、核家族化や都市化が進み、さらにはデジタル機器の普及に伴い、室内で過ごす時間が増え、同年齢との関わる時間や様々な体験の機会が減ってきているように感じる。『幼稚園教育要領』序章第２節の２「幼稚園の生活」（１）において、「幼児は他の幼児と支え合って生活する楽しさを味わいながら、主体性や社会的態度を身に付けていくのである」とあり、「幼稚園において同年齢や異年齢の幼児同士が相互に関わり合い、生活することの意義は大きい」と明記されている。よって、園生活において、幼児が他の幼児と関わりながら様々な体験を重ねていくことで、幼児の発達を促していくことは重要であると考える。

本園の実態を見てみると、気の合う友達と好きな遊びを見つけて楽しんでいたり、語彙力が豊富で自分の思いを伝えたりしながら遊びや生活を進めているが自己中心的な姿も見られる。５歳児クラスの中で担任を持っている支援が必要な子は３名おり、その中の一人を抽出し本テーマのもと、取り組んでいく。その子の実態は、集団経験が初めてだが、すべり台やままごとなど好きな遊びを見つけて楽しんだり、クラス活動や話しにも自分から進んで教師の近くに座って参加したり、手遊びやリズムなどもする姿が見られる。また、低体重児で産まれたため、発達がゆるやかで、発語がほとんどなく自分の思いを首振りやジェスチャーで伝えているが、遊びの中で友達や教師に自分の思いを伝えたいときに、最初は伝えようとしているが途中で諦めてしまうことがある。

したがって教師は、「本児の現時点で必要な経験や学びにつながるような豊かな体験を保障していくこと」や「本児の発達や経験を活かし、さらにつなげていくための支援や環境を考え実践していくこと」、また、その子の特性を捉えながら教師間で情報を交換しながら多面的に考察し、より適した手立てを考え、保護者と家庭や園での様子を伝えたりと連携を図りながら支援をしていくことが必要だと感じる。

そこで、発達を捉え、そこに適した援助や関わりをし、園生活や遊びを通して育ち、集団の中で友達の存在やよさを感じながら自己を発揮しながら、友達と関わることの喜びや一緒に遊びや生活を進めていく楽しさ味わってほしいと願い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　本児の実態や発達を捉え、適した援助や関わり

本児の興味関心や発達を把握し、信頼関係を築き、安心感のもと、自己を発揮しながら生活や遊びを楽しむことができるような援助、関わりを行う。

②　集団の中で自己を発揮しながら友達と関わることの喜びや一緒に遊びや生活を進めていく楽しさを味わうための工夫

クラス担任と連携し、クラスで頑張っていることやその子のよさなど子ども達と共有し認め合いながら、よさが生かされるように一緒に考えていく。

また、教師は一緒に好きな遊びを楽しむ中で、本児の興味関心や今必要な経験を探り、遊びを共有したり、友達と繋がる適時適切な言葉をかけたりし、遊びが広がっていけるような援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【 実践事例１ 】　１０月頃　H児について

《幼児の実態》
・好きな遊びの時間に、園庭にある固定遊具の滑り台を繰り返し楽しんでいる。
・好きな遊びを楽しむ中で友達と関わる姿もあったりするが、遊びが伝わっていなかったりして長くは続かず、一人で興味のある遊びを楽しむ姿が見られる。
・発語があまり見られないため、気持ちを言葉で伝えることは難しいが困ったことや助けてほしいことがあると合図を送って伝えているが、教師と関わる姿が多い。

エピソード　《滑り台に続くはしごを上れたよ！》

一学期に高い滑り台へと続くはしごに挑戦し、担任に手伝ってもらいながらだったが、手足を上手く使うことが難しかったり、高いところが怖くて「怖い」と言って諦めてしまう姿が見られた。

二学期の１０月頃、朝登園し、準備が終わると園庭に出て高い場所の滑り台へ行こうとはしごに挑戦している。最初の一、二段は自分の力で上っているが高いのが怖くて表情が曇り、次に進めないでいる。

教師A：「H児さん頑張ろうとしているね」

その言葉を聞き、近くで遊んでいた子たちが挑戦しているH児の姿を見て、周りの子が気づいて声をかけてくれている。

A児：「大丈夫？」「ここに足を置いて」「頑張れ！」

B児：「上からも手伝ったほうがいいんじゃない！」

とすべり台を上って上から声をかける子の姿も見られる。

教師A：「あともう少しだね」

A児：「もう少し」「頑張れ」

B児：「そうそう！そこに手をつかんで！」

子ども達の応援や手助けもあり、最後まではしごの上まで自分の力で上ることができた。上に上ると満足そうに笑顔で喜ぶ姿が見られた。

【 考察、学び 】

頑張っていることやみんなで共通する話題をクラス担任と相談しながらクラスで話し、子ども達とそんな時はどうするかを一緒に考えることをしてきた。その共有の時間をもつことは、友達を知ること、相手の思いに気づくことにつながったのではないか。また、本児にとっても園が安心した場所となっていることで、興味のあることに繰り返し挑戦するようになっていったのではないかと考える。教師の一言を聞き、動き出す子ども、友達に支えられながら挑戦していく本児の姿から共に育ち合う関係を学んだ。

また、教師の立ち位置や言葉のかけ方も大切で、本児が安心して挑戦することができる場所から見守り、多くの言葉がけをせずに子どもが気づいて関わっていくことができるような言葉かけが大切だと感じた。

【 実践事例２ 】　１１月頃　H 児について

《幼児の実態》
・実践事例①のできごとや運動会などの大きな行事もあり、より表情も明るくなっており活動や遊びに意欲的に参加する姿が見られる。
・発語があまり見られないが、友達や教師の言葉を聞き、口を見ながら口を動かして真似しようとしてみたり、単語の最後の言葉だけ声にでたりすることがある。

《 教師の関わりと援助 》

・好きな遊びから友達と関わることができるように、一緒に遊びながら、何の遊びをしているのか、何をしているのか共有しながら遊びを楽しむことができるように繋げていけるような言葉かけや関わりをしていく。

・遊びや生活がスムーズに進むよう必要な場面で気持ちを言葉にして代弁したり、一緒に同じ気持ちになったりしながら、友達と関わって遊ぶことができるようにする。

《 幼児の変容 》

・園全体として、三角のでんの上の部分は上って遊ぶことができなかったが、子ども達と相談し上るときの約束を決めて上ることができるようになった。高さがあるためどの子も上がれるように、子ども達が考え、ソフトブロックを使って階段を作って上ることができるようにした。本児はトイの上に興味を持って階段を使って上り下りを楽しんでいる。上り下りをする中でソフトブロックの階段が不安定だったりして上り下りが難しくて困っている姿が見られ、「下りるの難しいね、どうしよう」と声をかけると、周りの子が気づいて「手掴んで」と手を掴んで下りるのを手伝う姿が見られた。

・三角のでんの関わりから R 児との関わりが増え、一緒に遊ぶ姿が多くなっている。２人の関係性もよくて、お互いのことを気にかけながら遊ぶことを楽しんでいる。R 児の会話や遊びの誘いに「うん」と笑顔で返事し２人でままごとや園庭の遊具を楽しんだり、一緒にいろんな遊びに入ったりやってみようとする姿が見られるようになった。

《 考察、学び 》

実践事例①のこともあり、下りることができずにいたら手伝ってほしいと教師に合図を送っていたが、すぐに手助けすることはせずに見守り、周りにも気づくことができるように言葉をなげかけるようにすることで周りにいた子が気づき、手伝ったり、助けたりする姿が見られた。言葉から気づいて助けることもあったが、声をかけなくても子ども達で気づいて助ける姿が見られるようになっている。本児も手伝ってもらう中で、友達のよさに気づき、友達がいることで安心し、好きな遊びを繰り返し楽しむ中で困ったことがある時は友達に手伝ってもらうことで、繋がりを感じながら楽しむことができるようになったのではないか。

また、R 児との関わりも大切で、R 児も気の合う友達が見つけられず母子分離など難しかったりしたが、本児との関わりの中で安心して過ごすことができるようになっている。本児も毎日の園生活がより生き生きとしており、朝登園してくると R 児の登園を待っており、会うと笑顔で駆け寄ってぎゅっと抱

き合う姿が見られる。お互いが意識し安心を感じながら、自分を表出し、友達との関わりや経験を重ねる中で自信になり活動や遊びにも意欲的に参加することができるように繋がったのではないか。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

園全体の姿として頑張っていることやその子のよさなどをクラスで話し、子ども達とそんな時はどうするかを一緒に考えることで、子ども達の気持ちも変化し困っている子がいたら声を掛けたり、助けようとしたりする姿が見られるようになった。本児は安心できる環境や教師のもと、興味のある遊びを楽しむ中で困った時に友達が手伝ってくれたりすることで、友達のよさに気づき、関わる喜びや楽しさを味わうことができたのではないか。その中で気の合う友達を見つけ、友達との関わりやいろんな経験を重ねる中で自信がつき活動や遊びにも意欲的に参加することができるように繋がったのではないか。

②課題

課題としては、子どもと関わる中で教師自身の言葉かけが多く、子どもから自分で気づく前に伝えたりしてしまうことがあった。遊びや活動の中で、一緒に楽しみその子が今何を経験していて、何を学んでいるのかを捉え、その子に合わせた言葉かけを考えていきたいと思う。その中で、子どもをやる気にさせるような言葉を見つけ、保育で活かすことができるようにしていきたい。

本児もまだ思いを伝えようとして、途中で諦めてしまう姿もあったりするので、友達と一緒に様々な体験を重ねていき、その中で友達のよさに気づき、自己を発揮することができるように援助を探っていきたい。

③実践を通した自身の気づき、考え、学び

教師との信頼関係が大切で、『幼稚園教育要領』第２章「人間関係」（７）において「自分に愛情をもって温かい目で見守ってくれる安心して自分らしい動きができ、様々な物事への興味や関心が広がり、自分から何かをやろうとする意欲や活力も高まる。」とある。教師との信頼関係のもと、自分を出しながら繰り返し挑戦したり、友達との関わり合いで様々な体験を経験し、成長に繋がっていると感じた。

また、教師だけの関わりでは成長することができないことを改めて知ることができた。本児だけに援助や関わりをして育つだけではなく、周りの子も一緒に園生活の中で毎日同じ遊びや活動でも経験していることは違うので、その子の今の困り感に合わせた関わりや援助が大切だと感じた。また、互いの良さや頑張っていること、苦手なところなどを共有し、子ども達と考えることで思いやりもうまれ、友達が困っていたりすると声を掛けたり、助けてくれる姿が見られ子ども達全体への育ちに繋がったのではないかと感じる。

Ⅴ　今後の実践に向け

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

日々の保育の中で子どもたちの遊びに関わっていきながら、自分の保育観を深めていきたいと思う。関わりの中で難しかったことなど職員間で共有し、今子どもたちに何を経験してほしいのか、その時期の育ちは何なのかを捉え、そこへ向かっていくために教師が関わり環境や活動を展開していくのかを職員同士で共通理解を図りながら保育をしていきたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　平成３０年　幼稚園教育要領解説　株式会社フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

友達の良さに気付き、自己発揮ができる環境構成と援助の工夫

―協同的な活動や遊びを通して―

西原町立西原東幼稚園　教諭　當山　恵李奈

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼稚園教育要領解説「人間関係」の領域において、「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりする」とある。幼児は他の幼児と一緒に楽しく遊んだり活動したりすることを通して、互いのよさや特性に気付き、友達関係を形成しながら遊びや活動を展開する。その中で、幼児同士が共に工夫したり、協力したりするようになっていくとされている。また近年、少子化や核家族化、地域との関わりの希薄化などを踏まえると、幼稚園での同年代の幼児が相互に関わり合う意義は大きいと考えられる。

本学級の幼児は５歳児（２年保育）男児８名、女児１２名、計２０名が在籍し、うち特別な支援を要する子が２名いる。集団経験がなく家庭からの新入園児が１名いるが、全体的に園生活に慣れるのも早く、気の合う友だちと好きな遊びを楽しむ姿が見られる。一方で、女児の間で言い争いなどのトラブルが起きることも多く、自己主張が強く、相手の意見を素直に聞こうとしない子もいる。そこで、遊びや生活を通して友達と関わっていく中で、友達の良さに気づき、自己発揮することで相手の意見を聞いたり認めたりする気持ちが育ってほしいと願い、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１、幼児が友達の良さに気づき「一緒に遊びたい」「一緒にやりたい」と思えるような環境の工夫

（１）友達との遊びの中で、同じ目的を見出し、互いに試行錯誤していく中で、一緒に考える楽しさや充実感を味わえるような環境を準備する。

２、相手を思いやる気持ちが持てるような援助の工夫

（１）クラス全体での話し合いを通して、友達の良いところ、自分の良いところに気づけるようにする。

（２）朝のひとときや帰りのひとときに自分の気持ちを伝えたり、友達の意見を聞いたりする場を設け、気持ちを伝えることで自信に繋げられるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例①】　色水遊びから石鹸遊びへ「バスボール作りたい！」

＜幼児の姿＞

・（４月）去年の経験をもとに色水遊びをしたい子がいるが、個々でビニール袋に色水を作るだけで、遊びを終えることが多い。

＜教師の願い＞
・色水遊びを通して、友達との対話を楽しんでほしい。
・友達と一緒に様々な考えを出し合って工夫し、色水遊びや更なる遊びへと発展してほしい。

＜教師の援助〇と環境構成☆＞	＜幼児の変容＞
（4，5月） ☆様々な種類の容器を準備し「やってみたい」と思えるような環境を準備する。 〇去年の経験がある子と一緒に教師も色水遊びを楽しむ。 ☆「持ち帰りたい」「お母さんに見せたい」とA児からの声があり、更に容器を準備したり、「さくひんコーナー」という展示場所を設けたりした。	・「何してるの？」と友達や教師が遊ぶ姿に興味を持って集まってくる子がいた。 ・友達の作品を見たり、保護者に見せたりする姿を見て、他児も「やってみたい」という気持ちになる子が増えた。
（6，7月） 〇初めての経験の子には「やり方を知っている友達に聞くといいよ」と伝え、自然と対話が生まれるような言葉掛けをする。 〇いろいろな花で試してみることを提案する。 ☆子ども達の発言があったタイミングで石鹸遊びの道具も同じ場所に準備するが、夏休みに入ったことで一時中断する。	 ・自分達で色々な花や葉っぱの色水を試す姿が見られた。 ・色水同士を混ぜて色の変化に興味を持つ子がいた。「これどうやったの？」と聞いたり、教えてあげたりするなどして友達との関わりが増えてきた。
（9月） ☆夏休み明け「石鹸遊びしたい」との声があり、環境を再構成する。 〇石鹸遊びをしたことがない子へ楽しさを伝えたり、一緒に遊びに誘う。 〇園用タブレットを活用し、遊びの様子を撮影し、集まりの際にクラス全体で共有する。	・友達と石鹸や水の量を試行錯誤したり、理想の泡の固さになるよう工夫したりする姿が見られた。 ・「固めたらバスボールみたいになるかな？」とB児の発言に他児も、その姿に気付き卵パックやプリンカップの容器に入れて固める姿が見られた。 ・１０日後、泡が固まっていることに気付き、容器から取り出したり、確かめたりする喜びを友達と共感し合った。

【結果と考察】

・幼児の発言や気付きを大切にし、タイミングを見ながら環境構成をしたり、道具の準備をしたりしたことで、友達と同じ目的を見出し、探求心を深め、楽しさや充実感を味わうことに繋がったと考えられる。

・幼児と教師が一緒になって色水遊びを楽しんでいる様子を見て「やってみたい」という気持ちが芽生えた子が増えた。そこから友達同士で教え合ったり、試行錯誤したりすることでより遊びが発展したと考えられる。

【実践事例②】お祭りごっこやろう！

＜幼児の姿＞

・友達との遊びを進めていく中でトラブルもあるが、互いの意見を言い合いながら自分達で解決できることも増えてきた。

・ブロック遊びが好きな子が数名おり、その子達は他の子との関わりが少ない。

＜教師の願い＞
・周囲に目を向け、友達との関わりを増やしながら様々な遊びを経験してほしい。
・互いに気持ちを伝え合ったり、クラス全体で意見を伝えたりすることで、自信をつけてほしい。

＜教師の援助○と環境構成☆＞	＜幼児の変容＞
（１０月２５日） ○ふじ組からお祭りごっこの招待状が届き、クラス全員で参加してはどうかと提案する。	・お客さんとして、チケットのやり取りなどを楽しみながら各コーナーを回って楽しんだ。
☆帰りのひとときの場で振り返りを行い、自分の意見を言ったり、友達の気持ちを聞いたりする場を設ける。 ☆お祭りごっこに必要な道具を準備する。	・「次はさくら組がお祭りごっこやりたい」「ふじ組にお礼がしたい」などの意見が出た。 ・「おまつりやたい」の絵本を利用しながら室内遊びの時間に、お祭りごっこの商品作りが始まった。
（１０月２６日～２９日） ☆綿あめを置く台を準備したり、金魚釣りの箱を準備したりする。 ○各コーナーの机の設置場所を子ども達と相談して決める。	・絵本を見ながら友達同士で「このほうがいいんじゃない？」「これはこうしよう！」などと話し合いながら主体的に商品作りを進めることができてきた。
○商品作りに参加しなかった子も一緒にお店の人をやってみてはどうかと提案し、作った子にどのように進めるのかを聞き、関わりが増えるようにした。	・「これはあげてもいいものだよ」「こっちはだめだよ」など気を付けてほしいところを伝え合ったり、確認したりする姿が見られた。
（１１月１日）【お祭りごっこ当日】 ○開始のタイミングは子ども達に任せ、準備を一緒に行う。（事前にふじ組担任には伝えている） ○お店の人、お客さんのやり取りや、友達同士の関わりを見守る。 【振り返り】 ☆お祭りごっこを通してどうだったかの振り返りを行った。 ○ウェビングマップを活用して子ども達の気持ちや感想を書き出し、可視化することで友達がどのようなことを感じたのかわかるようにする。 ☆お祭りごっこの写真を印刷し、子ども達の気持ちを聞きながら一緒にドキュメンテーションを作成し、教室に掲示する。	・「いらっしゃいませ～」「ならんでください～」など自然と子ども達が言っていた。 ・それぞれの役割を果たし、お互い楽しむ姿が見られた。 ・「ありがとうっていわれてうれしかった」「しょうひんをわたしたときえがおだった」など様々な気持ちや感想があった。 ・「たのしかった！」「またやりたい！」などの声もあった。

【結果と考察】
・他のクラスとの交流を持てたことで、クラスがより団結した。互いの意見や気持ちを伝え合うことで自己発揮に繋がったと考えられる。
・振り返りの時間を充実させたことで、お祭りごっこの後でも子ども達同士で楽しかったことを話す機会が増えたと考えられる。

Ⅳ　実践の振り返り

１、成果

・教師のさりげない言葉かけや提案から、自分なりに試行錯誤したり友達と一緒に考えたりする経験をすることができた。また、探求心も芽生え、友達と一緒に「次はこうしてみたい」「明日はこうしよう」など、友達との関わりから互いの良さを感じることができた。
・友達と一緒に思いや意見を出し合いながら遊びを進めていくことで、主体性が育まれ、１０の姿の「協同性」との繋がりを見出すことができた。
・「自分もやってみたい」「何をすればいい？」などと友達とのやりとりを通して、初めは関心が低かった子も徐々に遊びの輪に入り、自己発揮をすることで友達との関わりが豊かになった。

２、課題

・遊びをやり遂げる、遊びこむ等の経験を更に積み重ねることの工夫、遊びや個に応じた環境構成をしていく。
・日頃から他のクラスとの交流を積極的に行っていきたい。職員間で検討し工夫をする。

３、実践を通した自身の気づき、考え

・４月からの幼児の関わりや遊びを通して、友達と互いの意見を伝え合ったり、聞いたりして折り合いをつける経験を積んできた。お祭りごっこではそれぞれの役割を果たし、達成感や満足感を味わうことができたと感じた。
・盛り上がった遊びをドキュメンテーションにして教室に掲示することで、幼児同士で振り返り、自然と会話が生まれた。振り返りの大切さを改めて感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・幼児のそれぞれの遊びの中で、教師は何を願い、幼児にとってどのような育ちがあるのかを明確に捉えた上で、環境を構成したり工夫したりするようにしていきたい。
・友達同士の関わりの中で、自分の意見や思いを伝え合うことで、折り合いをつけ友達の良さやに気き、一緒に遊びを楽しむ経験を引き続き行っていけるようにしたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　平成３０年　『幼稚園教育要領解説』　フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

互いの良さを認め合い、思いを伝え合って遊ぶ楽しさを味わうための環境構成や援助の工夫
―集団遊びを通して―

座間味村立座間味幼稚園　教諭　氏名　中村　結花

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年子どもの育ちについては、他者との関わりが苦手、自制心や規範意識が十分に育っていないなどの課題が指摘されている。幼児を取り巻く環境は、言葉がなくても楽しめる、ゲームや動画などの一人遊びが増え、心が通う豊かな言葉のやりとりがある生活が減少しているように思われる。『幼稚園教育要領解説』の第２章「言葉」の領域には「いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする」や「思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わう」とある。言葉は、人とのつながりの中に生まれ、心動かされる体験の上に生まれてくる。それは人間関係がベースにあり、友達と一緒に楽しく遊んだり会話を楽しんだりすることを通してさらに人間関係も広まり深まっていくと考える。

本学級の幼児は５歳児（３年保育）男児８名、女児２名、４歳児（３年保育）男児４名、女児３名、計１７名が在籍し、気の合う友達と好きな遊びを見つけて楽しむ姿が見られる。その中でも、自分の思いを言葉で伝えることが苦手な子、自我を通そうとして友達の思いを聞かずに遊びを進める子、気の合う友達との遊びを楽しむだけで、互いに工夫して遊ぶことができない子などの姿が見られる。

そこで、集団遊びやルールのある遊びなど様々な友達と関わる遊びを経験しながら、思いを伝え合いながら互いに関わりを深めていく中で、友達の気持ちに気付いて相手に思いやりの気持ちをもって関われるようになってほしいと願い、テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　様々な友達と関わり、一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができる環境の工夫について

日々の遊びや集団遊び、運動遊び、ルールのある遊びなど、友達と関わって遊べる時間を作ったり遊びを提供たり、友達同士誘い合えるような援助や環境構成の工夫を行う。

②　友達同士の思いや考えが伝え合えるような援助の工夫について

友達同士のやりとりを見守ったり、必要に応じて仲立ちを行い、聞いたり伝えたりする援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）　**【実践事例１】**

〈幼児の実態〉

・体を動かすことが好きで活発な子が多く、おにごっこやドッチボール、サッカー、リレーなどの運動遊びや集団遊びを楽しんでいる。しかし、教師発信だとすぐに子どもたちは集まり遊びが始まるが、子ども同士だと「ドッチボールがしたい！」「鬼ごっこがいい！」などとうまく話し合いができず、子ども同士の誘い合いもなかなかうまくいかず活動が続かない。

・オニ決めやチーム分けなどの話し合いの場では、自分の意見を通そうとする子どもが多く、友達の意見を聞き入れることができずにトラブルになる事がある。

〈教師の願い〉

・友達と活動のルールを共有しながら自分の意見を伝えたり、友達の意見を聞いたりなどして、一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。

・集団あそびやルールのある遊びを通して、自分たちで考えたり、友達の思いに気づいたりして活動が楽しめるようになってほしい。

〈教師の援助・環境構成〉　★援助　〇環境構成

〇様々な集団遊びを提案したり、体をしっかり動かせる広い場所を設定したりする。

〇ルールなどを確認する際は、視覚的にも分かりやすいように、ホワイトボードなどを活用する。

〇子供同士でチーム決めなど考えられるよう、時間にゆとりをもって取り組ませる。

★子供同士で進める様子を見守ったり、時には具体的な助言を伝えるなどの仲介をしたりする。

★友達の話に耳を傾けられるような声掛けなどの援助を行う。

リレー対決

何番に走る？
一番早い人アンカー
にしよう！

最後まで頑張れ！

ドッチボールやサッカーなどの遊びも盛んに！

パス！ゴールする
ぞー！！

〈幼児の変容〉

・教師発信から様々な集団遊びを経験することによって、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じ、これまでの経験をもとに、おにごっこやサッカー、ドッチボールなど様々な集団遊びを自分たちで意見を出し合いルールを決めながら遊びを進めていけるようになった。

・運動会の幼小中学校合同縦割り班リレーを体験した年長児は、リレーの余韻を楽しみ友達を誘い合ってリレーを繰り返し行っていた。最初は足の速い子ども同士がかたまって勝負をしていたが、圧倒的な差ができると、不満をもっている友達がいるということに気付いた子ども達は、年下の子を違うチームに分けたり、足の速い子はバラバラになるようにと、自分たちで提案しながらチーム決めをするようになってみんなで楽しめるようになった。

・自分の意見を通そうとして、なかなか決まらなかったオニ決めの話し合いでも、話し合いの機会を多く設けることによって、オニがしたい友達が多いときは「じゃあ増えオニをしよう」と提案したり、「最初のオニは〇〇くんでいいよ！次のオニは僕ね！」など友達の意見を受け入れられるようになり、スムーズに遊びに入れるようになってきた。

・自分たちなりに作戦をたてたり、トラブルを解決したりしながら遊びが長く続くようになってきた。

〈結果と考察〉

・友達と一緒に遊びを進めていく体験をすることによって、特定の仲の良い友達からさらに、友達の幅

が広がって友達同士の関わりが深まり、遊びをもっと共有したいという気持ちにつながったのではないか。

・友達と意見を出し合い、相談していく体験の積み重ねにより、友達の気持ちを受け入れる思いやりの気持ちやコミュニケーション力が高まってきたのではないか。

【実践事例２】

〈幼児の実態〉

・ブロック遊びを好み、それぞれがいろいろな場所で好きなものを作って遊ぶ姿がみられた。一人で黙々と遊ぶ子もいれば、友達とコマなどを作ってコマ勝負を楽しむ子もいる。

・部屋中のあちこちにブロックが散らかり、ブロックを踏みつけて壊したり、「自分は使っていない」などと言い合いが始まったりと、片づけに時間がかかっていた。また、片づけを忘れて次の遊びに移る子も多く見られる。

〈教師の願い〉

・友達とイメージを共有し、やりとりを楽しみながら、じっくり遊ぶ楽しさを味わってほしい。

・物の大切さに気付き、友達と一緒に遊ぶ場所や片づけを相談したりすることで、友達との思いを伝え合ってほしい。

〈教師の援助・環境構成〉　★援助　〇環境構成

〇牛乳パックのジャバラを用意し、遊ぶスペースの確保をして、幼児同士がまとまって遊べるブロック遊びの場所をつくる。

★友達と関わりが持てるように、互いの思いを共有する場を作っていく。

★幼児同士でどの場所で遊んで良いかなど考えることができるような言葉をかけたり、周りの様子にも気づけたりできるようにしていく。

〈幼児の変容〉

・牛乳パックのジャバラを用意し、幼児同士がまとまって遊べるようにしたことで自然と距離が縮まり、「大きい恐竜一緒に作ろう！」と誘い合い一緒に作ったり、年下の友達に「一緒に作る？」と誘ってあげたりと、イメージを出し合って一緒に遊ぶことが増えた。

・一人遊びの時はブロックを独り占めしてたくさん使いたがっていた子が、一緒に友達と遊ぶ中でブロックを譲ってもらったり、一つの作品を作り上げていく経験を通して、友達の遊びや思いに気付きブロックの貸し借りなどできるようになり、友達との関わりも増えてきた。

・ブロック遊びを始める際に、「どこで準備しようか？」「こっちの広いところがいいんじゃない？」など友達同士で相談して遊びを始められるようになった。

・遊びを抜ける際は、友達に「ブロック抜けるね！」と一言言えるようになり、遊びを続ける子は「いいよ。でも後で片付けは手伝ってね」と自分の気持ちを伝えられるようになった。片づけの約束をしたことで、友達に押しつけずに、片づけもスムーズにできるようになった。

〈結果と考察〉

・友達と一緒にイメージを共有し、一つの作品を作り上げることでさらにイメージが広がり、友達と一緒に遊びを進める楽しさや嬉しさを感じられたのではないか。

・遊ぶ場所を再構成することで、遊びやすくなり友達との関わりが増えたり、片づけの仕方をみんなで考え、伝え合えたりすることで、スムーズに片づけも行えるようになったのではないかと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・友達と一緒に様々な体験活動を楽しむことで、幼児同士の信頼関係が形成され話したくなる気持ち、友達を思いやる気持ちが出てきた。

・友達と話し合ったり、遊びが発展できるような環境構成をしたりすることで、幼児の心を動かし友達とのかかわりが広がって、自分の思いや考えを言葉で伝えることができた。

・幼児の言葉や表情を受け止め、教師が状況に応じた援助をすることで、幼児同士の言葉のやりとりがうまくできるようになった。

②課題

・幼児の活動の場面において教師がすぐに援助をするのではなく、友達と関わりながら遊びを工夫していけるように援助のタイミングや援助の仕方をさらに工夫していきたい。

・幼児理解をさらに深め、発達の見通しをもって、今後も互いの良さを認め合い、思いを伝え合って遊ぶ楽しさを味わうための環境構成や援助の在り方を探っていきたい。

③実践を通した自身の気付き、考え

子どもたちの普段のなにげない友達との会話や、話し合う姿を見ていると子どもたちなりの様々な発見や気付きや意見などを口にすることがたくさんあった。教師が見守っていると、ついすぐに援助をしてしまいたくなるようなこともあったが、子ども達が自分自身で考えた結果、うまくできなかったという体験から、「じゃあ次はどうしよう？」「どうしたらうまくいくかな？」などさらに考えや遊びが広がっていく様子が見られた。ただ、正しいことを教えるだけでなく、考えること、話し合いができるような環境構成の工夫や援助のタイミングなどとても大切ということを改めて実感することができた。友達との関わりの中で繰り返し、自分で思いを言葉で伝えたり、友達の話を聞いたりして楽しく遊べたという体験から、友達の気持ちにも気づき、折り合いをつけて遊べるようになってきたと感じる。今後も思いやりを持って友達と関わる援助の仕方、声かけなどを研究していきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

幼児同士遊びを進めている場面や、会話や相談をしている場面をたくさん持てるようにし、教師は見守りながらも友達とのつながりがもっと深まるような援助を行っていきたい。遊びの中で、一人ひとりの考えが発揮されるような声掛けや援助のタイミングの見直しの改善をしていきたい。

様式３【課題研究レポート】

自分や相手を大切にする心情を育むための援助の工夫

－幼児期における性教育と関連した指導を通して－

竹富町立おおはら幼稚園　教諭　山城　のぞみ

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、社会では多様性（ダイバーシティー教育）の重要性や LGBTQ、ジェンダーについての知識や関連のニュースが多く取り上げられてきていることにより、幼児期からの性教育を通して自分を大切にする（愛する）心を育てるとともに、他者を大切にする気持ち（人格の尊重、思いやり）を育むことが求められてきている。

『幼稚園教育要領解説』の第２章第２節「人間関係」の領域には「友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう」とあり、幼児は自分と異なる様々な個性をもった友達と接することで、それぞれの違いや多様性に気付いていくことが大切であると記されている。

本学級の幼児は５歳児（２年保育）男児６名、女児２名、計８名在籍し、男女ともに自分の思いや考えを積極的に伝えようとするが、それが他者と異なる時にその相手を攻撃する言葉や態度をとってしまうか、悲観的な発言をしてしまう姿が見られる。

そこで、保護者と連携して、性教育に関連した援助を行うことで自分を理解し大切にする気持ちを持ち、自分とは異なる個性や考え方をもった他者も大切にしようとする気持ちを育みたいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自分を理解し大切にする心情を育てる援助の工夫について

プライベートゾーンや自分の体の仕組みについて、幼児が保護者と一緒に考えられる時間を設ける。また、幼稚園においては、それらについて幼児が日常的に意識できる環境を構成する。

２　互いの気持ちや考え方の違いに気付き、他者理解の心情を育むための援助の工夫について

互いが認め合えるような話し合いや体験活動を通して、友達のよさや多様な心情や考え方があることに気付き、それを受け入れられるように援助していく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

《幼児の実態》

・友達と思いや意見が合わない時に、すぐに怒って自分の考えを押し通そうとする。それが通らなかったら、自虐的な言葉を発したり態度をとってしまうことが多い。特にA児は大声で叫んで近くの物を投げたり、近くのお友達に八つ当たりしたり、「死にたい」と発言することもあった。
・気に入った子に対して抱きついたり、キスをしようとしたりしてしまう男児が二人いる。（A児、B児）
・シャワーや着替えの際に４月から転園してきたB児が裸でふざけて遊んで時間がかかってしまうことが多い。それにつられて一緒にふざけて遊んでしまう子がいる。（特に発達の気になるC児）
・長い髪のB児が転園してきて「長い髪だから女の子みたい」という声やA児の「赤は女の色だからいや」という声が聞かれた。（その都度、「そんなことないよ。自分の好きな髪形や色が好きでいいんだよ」等、個別で話はしている）

≪保育教諭の願い≫
・自分や相手を大切にできるようになって欲しい。（保護者と連携して）
・互いの感じ方や考え方が違うことに気付き、その個性を大切にして欲しい。
・互いの個性を認め合えるような体験を重ねて、自分と異なる様々な個性をもった友達のよさに気付いて欲しい。

【実践事例１】「日常生活の中における取組」

・保健ニュースをクイズ形式にアレンジして幼児の目にとまる手洗い場に掲示し、楽しみながら自分の体の部

位の名前や役割について興味関心が持てるようにした。
・文部科学省の「生命（いのち）の安全教育」の動画を使いながら、自分の体の大切さに気づき、自分だけの大事なところは何か考えられるようにした。（全園児１６名で行う。）
・自分だけの大事なところを触られて嫌な気持ちになったらどうしたらよいかみんなで考えさせた。
・４，５歳児の２クラスに分かれてそれぞれの部屋で着替えをしていたが、４歳児クラスは女子、５歳児クラスは男子に分けて着替えができるようにした。

「命の安全教育の最後に〇×クイズ」

「体めくりクイズ」

《幼児の変容》
・保育室からシャワー室への移動の時にプライベートゾーンを一生懸命に隠すようになった。
・全体で考え話し合うことによって、安易にキスをしようとすることがなくなった。（A児、B児）
・分けても自分の着替えが終わった幼児がクラスに入ってしまうことがあり、「着替えているときはお着替え中の看板があった方がいいよ」と自主的にお着替え用の看板を作り（表：おきがえちゅう、裏：あいています）対策することができた。

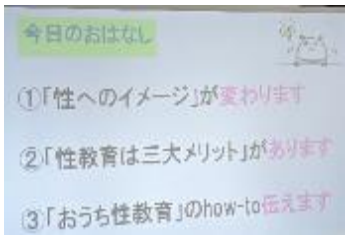
【結果と考察】
・プライベートゾーンを４歳児とB児は初めて知り、５歳児は４歳児の時に学んでいたので、今回よい復習となって改めて意識して過ごせるようになってきた。
・毎日意識できるような環境構成や考える場を設けなければ４歳児の時に学んでいても新しい友達や環境により意識が薄れてしまうと分かった。定着させるための環境づくりや定期的な声かけが大切だと感じた。
・自分や友達の体をむやみに見せたり、見たりしてはいけないという意識が高まってきた。そこからさらに、保護者と連携した性教育を行うことによって「自分は大切に思われている」「自分も相手も大切にする」という心情を育むことができると考える。

【実践事例２】「親子ワークショップを通しての取組」
・小浜敦子先生（ＮＰＯ法人せいしとらんし熊本認定性教育講師）を招いてともに幼児期に合わせた性教育を行った。
①親子ワークショップ。テーマ「われらからだ発見隊！からだのあなをみつけよう！」
②「おそとでぬがない、みせない」「きちんとあらう、きちんとはく」「イヤなときははっきりという」など、いのちに繋がるあなを守る為の約束を親子で考えパンツの紙に書いてみんなの前で発表し、掲示した。

男の子は９個　女の子は 10 個
男女のからだで穴の数が違うんだよ

「保護者と嬉しそうにワークショップに参加」

③子育て講話。「幼児期に伝えたいこころ育むおはなし」　～おうち性教育をはじめよう～



「講話の内容」

「小浜敦子先生による保護者対象の講話」

≪幼児の変容≫

・「いのちにつながるあな」について知り、親子でそれを守るための約束を考えた事によって、家庭でも意識して過ごせるようになった幼児が増えた。（保護者の連絡帳への記載あり）
・着替えの時にふざけている幼児（B児、C児）がいたら友達同士で「プライベートゾーンは隠そうよ」「いのちのあなを守らないと」という声かけが見られるようになった。
・親子ワークショップでハートの折り紙の小さな穴（受精卵の大きさ）を見て「こんなにはじめは小さかったんだ」「すごいね」「おおきくなったね」と自らの成長や生命の誕生について興味関心が高まった。

【結果と考察】

・親子ワークショップを通した保護者との連携により、命のあなを守るために決めた約束を園と家庭で一貫して守ろうという幼児の意識を高めることができた。
・それぞれのいのちに繋がるあなを守るための約束を発表したり、掲示したことによってそれぞれの考え方を知りそれをみんなで共有することができた。

・保護者に配布した感想用紙や講話の後の感想発表からやってよかったと思えるような好評を頂いた。特にA児の父親は講話の最後に自主的に感想発表を行い、「もっと子どもと向き合ったり、一緒の時間を過ごせたりすればよかったと後悔している。」と話していた。性教育を通して子どもとの向き合い方について振り返りをするよい機会となり、今後の子育ての参考になったと考える。

【実践事例３】「遊びの中や生活発表会に関連した取組」

・多様性について気づける絵本を定期的に掲示し、読み聞かせを行った。（生活発表会前には「とりかえっこはっぴょうかい」という絵本を読み聞かせした。
・子どもジェンダー会議を開いて「じぶんらしさ」についてみんなで考えられる場を設けた。
・手作り洋服屋さんコーナーを設置して自分の好きな服が作れるような道具や様々な材料を用意した。
・きらきら発表会（生活発表会）にちなんでお友達のきらきら輝いているなと思ったところを探す「きらきら探し」を帰りの会で毎日一人ずつ行った。
・職員でジェンダーにとらわれた環境構成をしていないか見直しを行った。

ぼくは　みずいろで
かわいい　きものが
すきだな♡

「手作り洋服屋さん」

≪子どもの変容≫

・生活発表会でのダンスの旗の色を決める時にA児が「赤がいい」と主張していた。子どもジェンダー会議で

も「ランドセルは自分の好きな色でいいよね」と意見を述べていた。どんなに怒っても「死にたい」とは言わなくなった。怒ってもめったに物を投げなくなり、関係ないお友達に八つ当たりもしなくなった。

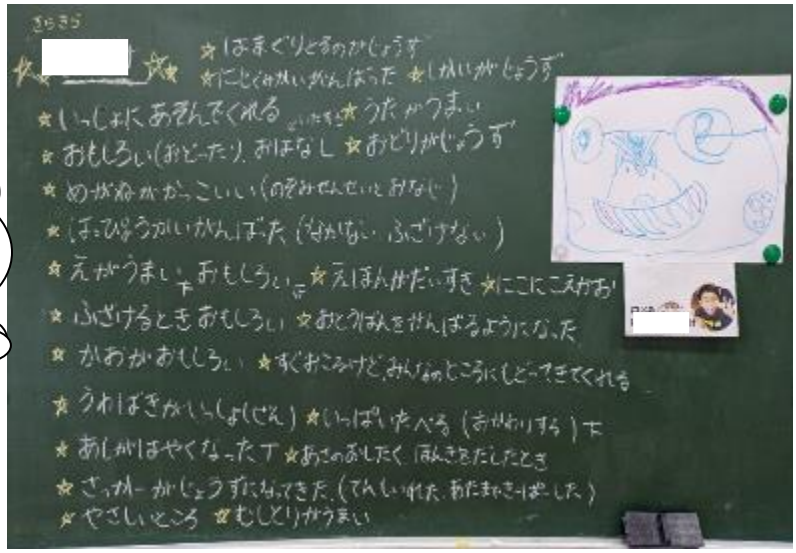
・発表会でそれぞれが自分のやりたい役を考え、「うらしま太郎にサメがいてもいいよね」「世界一泳ぐのが速いシャチになりたい」等の意見を出し、新たなキャラクターとアレンジした内容を一緒に考え披露した。
・洋服屋さんコーナーでは着てみたいと思ったら、男の子もスカートを履いてみたり、４歳児の男の子が「青い着物でハート柄の着物を着たい」とリクエストをしたら喜んで製作してくれる姿が見られた。
・友達からきらきらしているところをあげられて、それぞれ嬉しそうだった。特にC児は「どうせ俺にはあまりきらきらなんてないよ」と言っていたが、きらきら探しの後は「こんなにきらきらがたくさんあるんだ」と嬉しそうだった。「ぼくはこんなところもきらきらしているでしょ」と自ら主張してくる幼児もいた。日頃、交友関係が希薄に見える幼児同士もお互いを意識して友達の「きらきらを探し発表」をするようになった。
・ジェンダー会議後、「Bくんは髪が長かったけどあれも似合っていたよね」という声が聞こえた。

【結果と考察】

・個別の声かけから、さらに全体で考える場を設けたことによって「赤は女の色だからいやだ」と言っていたA児のジェンダーな考え方を柔軟にし、本当は赤が良いと思っていたかもしれないということに気づけた。
・発表会では自分のやりたい役を考えて取り組めたので、それぞれの個性をより発揮することができた。
・きらきら探しの場を設けたことによって保育教諭も知らなかった幼児達同士の関わりや新たな気づきがあった。それをみんなで共有することで自分や他者の新たな一面を知ることができ、自身については自己肯定感も高まったと感じる。特にB児やC児の苦手なことも前向きに捉え、成長している姿をきらきらしていると感じ発表してくれたのでやる気の向上に繋がった。そのようなとらえ方ができるのは、日頃の保育教諭の声かけなどの影響も大きいと感じる。

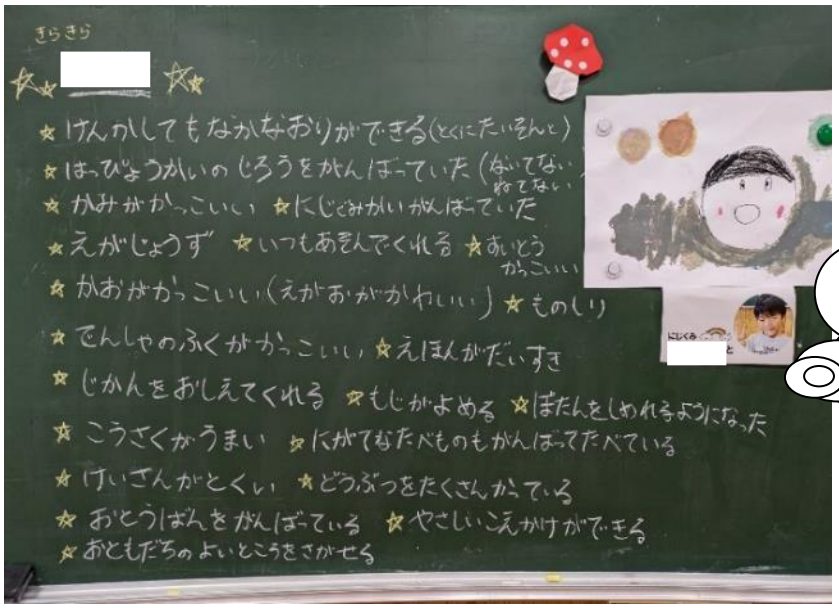
きらきら　★Cさん★

朝のお支度はのんびりしちゃうけど、本気をだして早くできた時はきらきらしているんだ。よし、頑張ろう！



きらきら★Bさん★

よくお友達とケンカしちゃうけど、仲直りできるところはきらきらしているんだ。嬉しいな。これからもケンカして怒っちゃっても仲直りできるように頑張ろう！



Ⅳ　実践の振り返り

性教育に関連した指導を行うことによって、まずは幼児がプライベートゾーンのことについて知り、それを守ろうという意識が芽生えてきたので、自分の心と体の大切さに気付くきっかけになったと感じる。自分を理解し大切にできるようになって他者にも優しくなれると思うので今回、保護者とともに「あなたは大切な唯一無二な存在なんだよ」という思いを伝える重要性、いかに伝えたらよいのか等、自らの子どもへの接し方を振り返りながら考えることができてよかった。また、日頃からの声かけ以外に、全体でジェンダーについて考える場を設けたことによって、それぞれの考え方や感じ方があることに気づくことができ、それでよいんだと思えるきっかけづくりができた。きらきら探しの体験では「自分にはこんなにたくさん、きらきらしているところがあるんだ」「みんな自分を見てくれているんだ」という自己肯定感がそれぞれ高まった。

今後は今回芽生え始めた「自分を守る、大切にする」という意識や気持ちをいかにして維持定着させていくのか、発達の特性があり、なかなか定着しない子への対応はどうしたらよいのか、声かけの仕方や更なる環境構成の研究が必要と考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

親子での性教育においては、定期的に行ってほしいと好評であり、家庭でもこれをきっかけに意識して声かけをするようになったり、行動したりと園と家庭で連携している実感が湧いた。３学期も引き続き行い保護者と連携して子ども達の「自分を理解し大切にしよう」という心情を育みたい。そして、今後も定期的に環境の見直しと場合によっては全体での話し合いができる場を設けたいと考える。他者理解の心情については、日々の様々な体験活動を通しながら、今回は間接的に友達のよさを考えたり、探したりする場を設けたが、表面的なことが多いと感じたので、互いの心情や考え方の特性に気づけるような豊かな体験とは何か研究を重ねていきたい。そして、徐々に気づき始めたその特性を互いに認められるようにまずは保育教諭がどんな時でも一人一人の心情や考え方を受け止め、尊重し幼児のよさや可能性を見いだせるように引き続き努めていきたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省「生命（いのち）の安全教育動画教材（幼児期）」https://www.youtube.com/watch?v=EHIygZz7WjE
・平成３０年　幼稚園教育要領解説　株式本社フレーベル館
・シオリーヌ（大貫詩織）２０２１年「こどもジェンダー」株式会社ワニブックス
・藤田由美子　２０２３年　「１５のケースで考えよう　保育のなかのジェンダー」チャイルド本社

様式３【課題研究レポート】

生命を大切にし思いやりの心が育つような環境設定と援助の工夫

―身近な動植物との関りを通して―

多良間村立多良間幼稚園　教諭　森山　要

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼稚園教育要領解説』の第２章「環境」の領域の中に「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で、様々な事象に興味や関心をもつ」とある。また内容の取扱い⑶においては「身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分から関わろうとする意欲を育てるとともに、様々な関わり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探求心などが養われるようにすること」と表記されている。身近な生き物や植物を飼育・観察を通し、様々な発見を発表し友達と共有することで上記のような心が育っていくと考える。

本学級の実態としては、５歳児(2 年保育)男児７名で戸外遊びが大好きで活発な子が多い。その中で、自分の気持ちを言葉にするのが苦手で友達との関わりが少ない子もいる。毎日のように、幼虫や昆虫などの虫捕りに夢中になる一方で、虫の扱いが雑になり興味・関心が薄れていく姿がある。

そこで、自然豊かな島の良さを生かし身近な動植物との関わりや触れ合い体験を通して、生命を大切にする気持ちや自然環境の大切さを感じ､友達や生き物に対して思いやる優しい心が育って欲しいという願いがある。そのためには身近な自然に興味が持てるような環境を整え、適切な援助をしていく必要があると考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　身近な生き物を飼育し、幼児が興味を持つような環境構成の工夫について

クラスに飼育コーナーを設置し、図鑑や絵本を置く。また、写真やイラストを掲示し幼児が自ら興味を持ち生き物に関われるよう援助する。

②　身近な動植物に触れ親しみ、自分と関わる全ての物を大切にし思いやる気持ちが持てるような援助の工夫について

生き物を観察している中での様々な発見を伝え合い共感できるような環境づくりを工夫し、身近な動物との触れ合い体験を設ける。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例 1】　幼虫から蝶へ

≪幼児の実態≫

・木登り・雲梯・鬼ごっこ等の戸外遊びを存分に楽しむ中、幼虫や虫捕りに夢中になる姿が見られる。

・捕まえた虫や蝶を自分の虫かごへ入れて観察を楽しむ姿も見られるが、途中で死んでしまったり弱ってしまうことが見られる。

≪保育教諭の願い≫

・小さな生き物にも命があること、その大切さに気付いてほしい。

・幼虫からサナギ、蝶になるまでの過程を自分の目で観察することで命の尊さや感動を味わって欲しい。

・飼育中に死んでしまった場合は何故死んだのかな？等と考えたり自ら埋めてあげる優しさを持って欲しい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

・クラスにも飼育・観察コーナーを入口そばの目立つ場所に設け、世話している写真を掲示して楽しみながら観察できるように環境を工夫する。

・幼虫に対して親しみを持って世話ができるように名前を決める提案をし、話し合いの場を設ける。

・脱皮をしたりサナギになったりと変化が見られた時は、そのことを全体で共有し絵本や図鑑を見ながら調べることで興味が湧くようにする。

・蝶になったら絵を描き、外に放つまでのワクワク感を感じられようにする。

観察コーナー

いつサナギになるかな？

≪幼児の変容≫

・名前を決めることになり、クラスで話し合いを設けた。その時、名前の候補が 6 つあがり最終的には「うんぴ」と「アサガオ」という 2 つの名前が残る。「絶対にうんぴ君がいい！」という幼児が多い中、「アサガオがいい」という幼児が一人となる。一人押され気味だったので保育者が「アサガオ」の意見を出した子が幼虫を見つけたこと、最初飼育ケースの掃除をしてくれていた事を話すと、二人の幼児が納得した表情で「アサガオでいいよ」と友達のために意見を変えてくれた優しさが見られる。そして「玄関の飼育ケースからもう一匹連れてこよう」という意見が出て最終的には「アサガオ」と「うんぴ」の両方つけることができた。

・脱皮をして黒から緑色に変化した幼虫を飼育ケースから取り出し「見て～アサガオちゃんどうなっている？」と声掛けすると「うわー！色が変わっている！！」と身を乗り出し興味を示す。保育者が幼虫の頭をツンツンして角(臭角)を出してみると一人の幼児が「納豆のにおいがする！」と言葉がでる。それから幼虫を優しくツンツンして「本当だ！！納豆のにおい！」と周りの幼児からも言葉が出てくる。直に幼虫に触れ匂いを嗅ぐという一つの体験を共有できた。

・幼虫からお友達と世話をすることで、触れなかった子が友達と一緒なら・・と触れるようになった。

・飼育ケースの掃除と餌となる葉の入れ替えをしている時、本で見たことを思い出し「葉を水につけるといいんだよ」と自ら適当な瓶を探しに行くなど積極的に世話している姿も見られるようになってきた。

・サナギから蝶になった時は観察コーナーの前に集中する子ども達で「アサガオちゃんがちょうちょうになったー！」と名前を言い喜びの言葉が出た。残り一匹の「うんぴ君がいつ蝶になるかな」という期待から登園後カバンを置く前に飼育ケースをのぞき込む姿が多く見られるようになった。

きれいにしてあげるからね～

おいしそうな葉っぱを選ぼう

元気でね～！！
また幼稚園に帰ってきてね！

シロオビアゲハ

≪結果と考察≫

・自分の虫かごの中では捕まえた喜びだけで、世話することもせずに途中で死んでしまうことも多かったが、クラスにも観察コーナーを設けることで「世話をする」という意識が芽生えてきた。また、名前を決める等話し合いの機会が出来たことや、幼児同士の会話にもつながっていった。自分たちが幼虫から育てた蝶を外に放つという体験を共有できたことで、自然とのつながり、命の大切にしようとする気持ちの育ちにつながってきているのではないかと考える。

【実践事例 2】　自然って楽しいな！

≪幼児の実態≫

・戸外遊びや体を動かすことが大好きであるが、身近な動植物との関わりや触れ合う体験が意外と少ない幼児が多い。

≪保育教諭の願い≫

・身近な自然の中で、目で見て肌で感じる体験を通して感性豊かに育って欲しい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

・幼児が好奇心や興味を持って見たり触れたりする姿を見守り、幼児の思いや発見自然への関わりに共感する。

・マツバボタン等の植物を花壇に植えたり用具(カップやペットボトル等)を準備して、身近にある草花や木の実で色水が出来るような環境構成をする。

・「秋探し」の園外保育を実施し、落ち葉や木の実を幼児と一緒に拾う中で「この葉っぱとてもきれいだね」「向こうにはヤギがいるよ」など自然に目が向くような声掛けを意識し、自然物を使って一緒に遊ぶ。

≪幼児の変容≫

・マツバボタンやあさがおの花で色水を楽しむ中、ある日一人の幼児が園舎内に植えてあるシマヤマヒハツの実を摘みつぶし始めた。それを見ていた他の幼児も加わりカップにたくさんの実を集めている。濃く出た色水を見て「絵が描けそう！」という言葉から筆で画用紙に絵を描いたり習字用紙を染めたりした。その時、思うように画用紙に色が出ない幼児が「なんで薄いの～？」と聞いてくる。「何でかな～お友達のも見てごらん」に周りを見て考えて「あ、まだ色が出てないからだ！」とまた実を摘んできてつぶし始めた。自分で考え行動出来ていた。

・「今日もヤマススゥ(シマヤマヒハツ)の実で遊びたい！」と多良間の方言で覚えた植物の名前を出すようになった。

今日もたくさんとるぞ！

友達同士で集めた実をつぶしお絵かきを楽しむ

さっきより濃くなった

・身近にある動植物と触れ合うことで、その植物や虫の名前を保育者に聞いたり自ら調べるようになってきた。

・虫が苦手だった幼児もトンボや蝶などの小動物を汗だくになり夢中になって追いかけ、とった時の喜びから少しずつ手に取り触れるようになってきた。

・園外保育では、落ち葉を手に取り「これ船みたい！」「これはお化けになるー」など一枚の落ち葉から想像する姿が見られた。また落ち葉のじゅうたんに寝ころび、皆で落ち葉の毛布をかけ「お化けだぞー！」と起き上がる→次々に「自分も！」と全員がお化けになる体験を共有できた。

身近な自然の中で開放感を味わい体全体で楽しむ姿

≪結果と考察≫

・身近な自然に触れて思い切り遊び、生き物に主体的に関わることで好奇心が生まれ「どのように成長していくのかな」「この虫の名前は何だろう」と自ら図鑑を活用して調べる姿から探求心の育ちにつながっていると考える。また、園外保育では保育者の声掛けや遊びの中で一人が寝ころんで葉っぱお化けをすると、初めは傍観していた幼児も「自分もやりたい」という気持ちになり、その場にいた幼児全員が葉っぱお化けを体験したことで一体感が生まれ自然の中で遊ぶありがたさを感じることが出来た。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・身近な幼虫を飼育する中で実際に触れ、見て、匂いを嗅いだりしながら、幼虫への接し方を身につけていったと感じる。またサナギから蝶になったという感動の体験と飼育途中で死んでしまった悲しい体験を共有出来たことで、小さな虫にも命があり、いたわること、生命を大切にする気持ちが育ってきている。また、虫かごの中で死んでしまった時にそっと埋めてあげる優しさが見えてきた。

・園外保育の中で拾った落ち葉を使い、制作につながった。制作中も体験したことを楽しそうに会話している姿が見られ、身近な自然の中での体験が幼児の記憶に残り「また行きたい」という気持ちにつながった。

②課題

・掲示物や道具を用意し、環境を構成しても幼児が興味を示すまでに時間がかかった。幼児の目線や導線を考え配置を工夫することを改めて実感した。

③実践を通した自身の気づき、考え

・身近な動植物と関わり遊ぶことで、幼児同士の会話が弾んだり好奇心や探求心が生まれたと感じる。

・園外保育での自然との関わりにおいては、体全体を使い楽しむ姿から自分たちの住む島の自然の良さを改めて感じることが出来た。身近な自然で遊ぶことで想像力や自ら考え行動する力が育っていくと考える。

・幼児が主体的に活動するためには、保育者が幼児の興味や関心に気づきそれに向けて環境を構成することの大切さを再確認した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・幼児が今何に興味があるのかをきちんと捉え、幼児理解を深めること、またそれにあった環境構成と保育者の適切な援助ができるように自身も積極的に学んでいくことが大切だと考える。

・今後も小動物の飼育は継続しながら、園外において身近な牛やヤギなどに触れ合える体験を設けていきたいと考える。このような体験から幼児の好奇心や探求心、思いやりの心が育まれ、物事に対して自ら関わろうとする意欲を育てていけるようにしていきたい。

〈主な参考文献〉

・汐見稔幸・無藤隆　2018 年〈平成 30 年施行〉保育所保育指針　幼稚園教育要領　幼保連携型認定こども園教育・保育要領　解説とポイント　ミネルヴァ書房

様式３【課題研究レポート】

人と関わる中で育まれる、自己発揮できるための環境構成と援助の工夫
～教師や友達、異年齢交流を通して～

南風原町立南風原幼稚園　教諭　氏名　金城　穂乃花

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、少子化や核家族化、情報化など社会環境の急激な変化を受けて、子どもを取り巻く家庭や地域社会の教育力低下が叫ばれている。また、コロナ渦にあって、家庭で過ごす時間が多く、家族以外の他者との関わりや自然環境などの直接的な体験が減ったことで、人間関係の希薄化による人と関わる力の低下が懸念される。

『幼稚園教育要領解説』第２章第２節「人間関係」の領域には「集団生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気付き、自信をもって行動できるようにすること」とある。

さらに近年、幼児期において「非認知能力」が重要視されている。幼児期は、信頼できる大人との関わりの中で、人格形成の基礎を培う大切な時期であると考える。コミュニケーション能力や自信、意欲などを育むためには、教師や友達、自然環境といった直接的な体験が必要である。その中で、喜怒哀楽を自己表現したり、時には、相手の考えを聞いて思いに気付いたりする体験を得られるようにすることが求められる。

本学級の幼児は、４歳児(２年保育)男児８名、女児９名、計17名在籍し、男女ともに明るく活発な子が多い。好きな遊びに積極的に関わり、自分の気持ちを相手に話したり、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じたりしている。一方で、自分の思いばかり伝える子や、気持ちが相手に伝わらずにすぐ泣いたり怒ったりしてしまう子がいる。

そこで、本園の２年保育の強みを生かした異年齢交流を通して、沢山の刺激を受けながら多様な感情体験を味わい、人と関わり自己発揮に向かう中で、好奇心や探究心を培うとともに、満足感や成功体験の積み重ねで成長して欲しいと願い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　幼児が安心して自己発揮できるようになる、環境構成の工夫と援助の在り方について

(1) 一人一人の幼児理解を基盤にし、幼児が教師や友達と心を通わせながら関われる学級集団づくりを工夫する。

(2) 人と関わる中で好奇心や探究心を育んだり、自分らしさを発揮できたりする援助を行う。

２　異年齢交流や友達とのつながりを深める中で、自信が高まる援助の工夫について

(1) 遊びや生活の中で、友達や異年齢児との関わりが増える。教師が個々に応じた関わりや言葉かけを工夫しながら、自分の思いを伝えたり、相手の考えに気付いたりしていけるよう援助していく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【 実践事例１ 】「運動遊びって楽しい♡～出来るようになるまで、粘り強く～」

≪ 幼児の実態 ≫

・園庭で、うんてい棒や竹馬に興味を示し、自分なりに繰り返し挑戦している。
・初めての運動遊びに消極的な子がいる。好奇心と自信の無さから諦めてしまう気持ちで、葛藤している。

≪ 教師の願い ≫

・様々な運動遊びに挑戦する中で、体を動かす楽しさを感じたり、自信を持ったりして欲しい。
・最後まで諦めずに取り組む中で、出来るようになった喜びや達成感を味わってほしい。

≪ 教師の関わりと援助 ≫
・一人一人が興味を持って、自分なりに取り組む姿を励ましたり、必要に応じて体を支えたりする。
・スモールステップを踏みながら、成功体験を積み重ねられるよう出来た喜びを共感する。
・教師が期待をもって、一人一人の姿を認める言葉かけをしていくことで、他の子が友達の良さを知り、「自分もやってみたい！」という気持ちが芽生えるようにする。
・出来ない子には、友達の姿から学んで共に成長できるよう、周りの子との関わりに繋げていく。
・教師が「△△名人だね！」と、さりげなく伝えることで意欲を高める。

≪ 幼児の変容 ≫
・一人一人のペースで取り組む姿を、見守りながら励ましたことで、粘り強く挑戦する姿が見られる。
・友達の姿に刺激を受けて「自分もやってみたい！」と、自分なりに体の動かし方を考えている。
・友達のやり方を真似してみたり聞いたりする中で、様々な友達との関わりが見られるようになった。
・出来るようになったことで、満足感や達成感を味わい、繰り返し取り組む面白さを感じている。また、信頼できる教師に見守られる中で「私ってすごい！」と感じながら、体を動かす楽しさを味わっている。
・自信がついてきたことで、「はえばるオリンピック(運動会)で、披露したい！」と、意欲的になった。
・保護者や友達、教師に認められたり褒められたりしたことで、違う運動遊びへの興味も高まっている。

【 実践事例２ 】「皆でドッヂボール！～友達や異年齢児との関わりを通して～」

≪ 幼児の実態 ≫
・はえばるオリンピック(運動会)後、様々な運動遊びが出来るようになったことで自信がついている。
・5～6人の小集団で、リレーや円周ドッヂボールなどのルールのある遊びに興味を持っている。
・思いを教師や友達に伝えながら、遊びのルールを自分達で話し合えるようになった。一方、「ぞう組だけがいい！」「年長は強いから嫌だ！」と、勝敗がつくことやハンデがあることで不満を伝える子もいる。

≪ 教師の願い ≫
・ルールのある遊びを通して、友達や年長児と関わりながら、思いを伝え合う体験を積み重ねて欲しい。
・様々な人と一緒に遊ぶ中で多様な感情体験を味わい、ルールのある遊びの面白さを味わってほしい。
・学級の一員として、仲間を応援したり助けたり寄り添ったり、互いを認め合える関係性になって欲しい。

≪ 教師の関わりと援助 ≫
・年長児のリレーを、一緒に見たり応援したりする中で、ルールのある遊びに興味がもてるようにする。
・ルールのある遊びの楽しさに気付けるように、教師も一緒に体を動かすことを楽しむ。
・子ども達が、自分たちなりに遊び方を考えたりやってみたりする姿を見守る。必要に応じて、様々な遊び方を提案したり、友達を誘って集団で遊ぶ面白さを味わえるきっかけ作りをしたりする。
・遊び方やルールの思い違いからいざこざが起きた場合には、自分たちなりに解決しようとする姿を見守る。必要に応じて仲立ちをする際は、それぞれの主張を受け止め、どのようにしたら楽しく遊べるのか考える時間を作る。
・小集団で遊んでいる姿を、学級の振り返りで周りの子にも知らせていく。

≪ 幼児の変容 ≫
・年長児が仲間に加わることに抵抗がある子がいる。すぐに「もうやらない～」という子でも、興味はあるのか、遠くからその様子を見つめている。年長児に優しく接してもらえたり、友達に考えを受け入れてもらえたりしたことで、仲間に加われるようになった。
・ドッヂボール通してルールを覚えたり、役割を決めて自分たちなりに楽しんだりしている。遊びに慣れてくると、ルールの思い違いでいざこざも見られる。自分なりの考えを伝えたり相手の思いを聞いたりしながら、優先順位を付けたりジャンケンで決めたりと、折り合いが付けられるようになってきた。
・年長児との関わりの中で、正規のコートやルールで遊ぶことを受け入れられるようになった。少しずつ投げ方や逃げる方法を相談しながら、友達や異年齢児と楽しく遊びを展開していく姿が増えていった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・様々な運動遊びを通して、教師や友達と一緒に、体を動かす楽しさや心地よさを味わっていった。
・初めは、中々思うようにいかずに悔しくて泣いたり、教師を頼ったりすることが多かった。だが、信頼できる教師や大好きな友達からの励ましを受けたことで、「自分で頑張ってみる！」と、自分なりのペースで少しずつ出来るようになっていった。
・出来るようになった運動遊びを、はえばるオリンピックで保護者に披露する場を作ったことで、更に自信がついた子ども達。そこから、他の運動遊びにも興味が高まっていき、リレーやドッヂボールなどのルールのある遊びにも取り組むようになっていった。
・ルールのある遊びを通して、様々な人との関わりが増えていった。初めは5～6人の小集団で遊んでいたが、他クラスの子や年長児が仲間に加わっても、一緒に楽しみながら遊べるようになっていった。
・遊びの中で、ルールの思い違いからいざこざが起きても、自分たちなりの解決方法で折り合いを付けたり、考えや思いを受け止めたり出来るようになってきた。

②課題

・ドッヂボールのルールが複雑化していくため、それぞれの思いを伝え合える話し合いの場の工夫。
・年長児との関わりで刺激を受けながら、ルールのある遊びの面白さを味わっていたが、学級内や学級対抗など、遊びの幅が広がるような援助の工夫。

③実践を通した自身の気づき、考え

・子ども達が興味のある運動遊びを通して、達成感や満足感を味わえるようになると、自信がついて更に難易度の高い技に挑戦したり、繰り返し遊ぶことを楽しんだりするようになると気付いた。
・教師が子どもを信じて、温かなまなざしや言葉かけを心掛けながら関わった。また、年長児が年下の子へ優しく接したり譲ったりする場面があった。その中で、子ども達も自分の気持ちに折り合いを付けられるようになったり、友達が困っている場面では手を貸したりアドバイスをしたりと、優しく関わったり思いやったりする姿が見られるようになると感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・一人一人が、自分の思いを伝えたり友達の考えを受け入れたりする経験を更に積み重ねていけるよう、その場で話し合いを設けたり、学級の振り返りで話題を作り学級集団で楽しめるような環境構成の工夫。
・子どもの発想や考えをルールの中に取り入れて、様々な遊び方で一緒に楽しんでみる。その中で、“どんなルールだと皆が楽しく遊べるのか”を、集団遊びの中で感じたり気付いたりしながら、皆で遊びを作っていく。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　平成30年　『幼稚園教育要領解説』　株式会社フレーベル館
・沖縄県 こども未来部 子育て支援課　令和6年　『黄金っ子応援プラン(第2期沖縄県子ども・子育て支援事業支援計画)の策定』　第2章 計画の基本方針

幼児が自己表現を楽しみ、表現する意欲を育むための環境構成と援助の工夫
―友達との関わりを深め、表現する過程を大切にすることを目指して―

国頭村立　くにがみこども園　教諭　氏名　比嘉　夏希

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第１章第１節「幼保連携型認定こども園における教育及び保育」のなかに、保育教諭の役割として「園児の主体的な活動が確保されるよう、園児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。」また「園児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。」と記されている。第２章「表現」において、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」内容の取扱いのひとつに「自己表現は素朴な形で行われることが多い。」とある。また、「人間関係」の領域、内容（８）「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりする。」としめされており、内容の取扱いのひとつに、「自己のよさや特徴に気が付き、自信を持って行動できるようにすること。」とある。これらのことから幼児期において、友達と一緒に様々な体験をして、それを自分なりに表現し充実感を味わうことは、自分を発揮して生活を豊かにすることにおいて大切なことであると考えた。

本学級は、４歳児（６年保育）男児７名、女児７名、計１４名在籍しうち１名が今年度転入児。幼児の実態としては保育教諭や友達と一緒に遊ぶ姿が見られるが遊びが転々としていたり、保育教諭の側で過ごす子も見られた。このような姿は園児の興味や関心に合った環境が十分ではなく、園児の遊びに対する充実感が得られていなかったと考える。

そこで、幼児の生活経験や発達に応じて幼児が自己表現を楽しみ、自信を持って表現する意欲を育てるためにはどのような環境環境や保育教諭の援助の工夫が必要か研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　表現遊びを楽しめるような環境構成と援助の工夫

(1) 園児の興味関心を読み取り、幼児理解に努め、一人一人に応じた表現のあり方を受容する。また、表現する楽しさを味わえる環境構成を行う。

(2) 様々な製作遊びを十分に楽しむことが出来るよう色々な素材の準備を行う等の環境構成に努める。

２　遊びが広がり持続していくように環境の工夫を行うについて

幼児が主体的に遊びを見つけられ、遊びが広がり持続していくように環境構成の工夫や援助の仕方を探る。(子どもの達の興味関心を探り、実態を把握し「やってみたい」「面白そう」とイメージが膨らむように援助し、遊びの展開を予測しながら環境構成をしていく。

３　他者との関わりの中で自己のよさに気付くことが出来るような援助と工夫

(1) 園児がお互いに関わりを深め、協同して遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫を行う。

(2) 朝の会や帰りの会で園児が頑張ったことや嬉しかった事、楽しかった事等を知らせたり、園児の前で発表する場を作ることで、自信につなげていけるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】　「エイサー」

【幼児の姿】

・個々の遊びや単発的な遊びが多く、活動が中々継続、展開できない様子が見られたが、段ボール遊びをした際に太鼓を作る子がいたのでそこからエイサーの曲を流すと太鼓を作る子が増え、個々の遊びから集団でエイサーをするようになり遊びが継続していく姿が見られた。

【保育教諭の願い】

・友達とイメージを共有し、一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。
・自己を発揮し表現する楽しさを味わってほしい。
・特定の友達ではなく様々な友達とのかかわり遊びの幅を広げてほしい。

○環境構成工夫　★教師の援助

○遊びが展開できるようにエイサーや獅子舞の画像を部屋に掲示したり、実物の太鼓や獅子舞を見せる。
○イメージが実現できるように予想される必要な物（段ボール、ガムテープ、画用紙等）を子ども達が自分で扱えるように準備する。
★子ども達の様子を見守りながら、イメージが実現できるように声掛けをしたり、一緒に作ったり、共感したりと必要な援助を行う。
★自分なりに表現している姿を認める言葉かけを行ない、表現する楽しさや受け入れられる喜びを味わうことが出来るようにする。

【活動の様子】

廃材などを使い実際に自分たちで太鼓作りを行う。どうやったら自分のイメージする物が出来るのか考えながら真剣に取り組む姿が見られた。誕生日会で披露することになりどのの曲にするか、誰が大太鼓をして誰が締め太鼓をするか等、子ども達同士で話し合いをし決めていく姿が見られた。

締め太鼓の穴小さくて通すの難しいな…

新聞氏だけじゃかっこよくないからテープ巻こう

【幼児の変容】

・最初は、エイサーに興味を示さなかった子も徐々に興味を示し専用の太鼓を作り始めていた。
・初めはただ段ボールをくっつけただけの獅子舞だったが、実物を見せたことでイメージが広がりカラーポリや段ボール、スズランテープなどを使い試行錯誤しながら自分のイメージに合ったものを創り上げてようとする姿が見られた。
・個人演技から集団での演技を行うようになり、お互いの思い等を伝え合い聞き合う事で、どのようにしていくのか考える姿が見られた。

【考察】

・共通の楽しかった体験を共有したことや興味関心を引き出す環境構成を行ったことでイメージがつながり、表現する楽しさを味わったと考える。
・遊びの中でイメージに合うものを選べるように色々な材料を用意したことで、試行錯誤する姿につながったと考える。
・誕生日会で皆の前で披露したことで、表現している姿を園の職員が褒めたことで自信にもつながっていったと考える。

【実践事例２】　「ＭＵＳＩＣ　ＳＨＯＷに向けて」

【幼児の姿】

・誕生日会や、地域の祭りで演技を披露したことで自信につながり表現遊びを楽しんでいる。
・エイサー以外の曲も踊りたい子が増えてきている。

【保育教諭の願い】

・様々な表現遊びを楽しんでほしい
・友達と一緒に共通の目的に向かっていく中で、工夫したり協力しながら楽しんでほしい。
・園生活で楽しんでいる事、頑張っていることを保護者に見てもらう事で、表現する喜び、楽しさ、達成感を味わってほしい。

○環境構成工夫　★教師の援助

○遊びが展開できるようにエイサーや獅子舞の画像を部屋に掲示したり、実物の太鼓や獅子舞を見せる。
○イメージが実現できるように予想される必要な物（段ボール、ガムテープ、画用紙等）を子ども達が自分で扱えるように準備する。
★子ども達の様子を見守りながら、イメージが実現できるように声掛けをしたり、一緒に作ったり、共感したりと必要な援助を行う。
★自分なりに表現している姿を認める言葉かけを行ない、表現する楽しさや受け入れられる喜びを味わうことが出来るようにする。

【活動の様子】

普段の遊びの中でエイサー以外の曲を踊る子も増えてきた。“衣装を着て可愛くしたい”と自分でイメージを膨らませている。発表会に向けてどの曲で踊るかを子どもたち同士で話し合い相談して決めていた。友達と一緒に活動を進める楽しさを味わう姿が見られる。保護者にも発表会を楽しんでもらうため応援グッズを作り発表会に向けての期待が高まっていった。

お父さん、お母さん楽しんでくれるといいな！

シールはこっちの方が可愛いかな

発表会、楽しむぞ～！！

【幼児の変容】

・家庭でも YouTube を見るだけではなく発表会で踊った曲を踊ったり他の子が踊っていた曲で踊ったり楽しむ姿が増えたと報告があった。

・引っ込み思案だった子も自分の言葉で「先生、〇〇踊りたい」と自分から伝えることが出来るようになり表現の幅が広がった。

【考察】

・日頃から楽しんでいる遊びや頑張っていること、やりたいことを取り入れた発表会を保護者に見てもらった事で、満足感、充実感、達成感を感じ自信につながったと考える。

・自分たちで遊びを進められるよう環境構成をしたことで、主体的な活動の中で協力して遊びを楽しむ姿が見られた。

Ⅳ　実践の振り返り

生活経験や発達に応じて幼児が自己表現を楽しみ、自信を持って表現する意欲を育てるためにはどのような環境環境や保育教諭の援助の工夫のもと研究を行った。自己を発揮できるような環境構成をすることで表現する楽しさ自信につながり、自分の思いを言葉で相手に伝え受け止めてもらったり、認めてもらう事で伸び伸びと表現する意欲につながったと考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・子ども達がイメージを実現していく際、教材への知識のなさを感じた。園児の興味関心、発達に応じて教材とかかわり遊びがより良いものになるように教材研究に努め、環境構成や援助の工夫に活かしていきたい。

・保護者に、子ども達の園での育ちを伝える工夫が足りなかったと感じる。掲示物や連絡アプリなどを上手く活用し、子ども達の様子を保護者と共有することで連携を深め、遊びや活動の発展、意欲へとつなげ生活がより豊かになるよう努めていきたい。また、私自身の保育の振り返りにも活用していきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社フレーベル館

様式３　【課題研究報告書】

言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う援助の工夫

～絵本の読み聞かせや手遊びを通して～

大宜味村 おおぎみこども園　教諭　新城　千明

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、動画視聴化が進み、家庭で絵本に触れる機会が減ってきているように思う。更に、コロナ感染を予防するあまり、人とのコミュニケーションが上手くとれない時期を過ごしてきた経験もあり、大人も子どもも言葉で表現する力、伝える力が萎えているようにも思う。人と人とが関わる社会では身振り手振りの他に言葉で相手に気持ち等を伝える力が大事だと考える。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第３節(4)「言葉」の領域には「絵本や紙芝居は、園児に新たな言葉との出会いをつくり、言葉の感覚や語彙を豊かにするとともに園児のイメージの世界を広げる」とある。そこで、絵本や紙芝居に親しむとともに言葉のやり取りを通して身近な人と気持ちを通わせるようにしていけたらと考える。

本学級の園児は１歳児 10 名のうち、進級園児３名、初めての集団生活となる新入園児７名が在籍している。日々、落ち着いて過ごしている中で、玩具や砂遊びに興味を示し、好奇心が旺盛である。個々によるが喃語や二語文程度を話す園児もいるが、発語が上手く出来ず、玩具の取り合いや押し合いする姿が見られる。

絵本の読み聞かせや手遊びに親しませることで表現する力を養い、語彙を豊かにする事ができれば、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせるようにすることができると考え、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　**絵本や紙芝居を毎日取り入れ、簡単な言葉を繰り返したり模倣をしたりして遊ぶ工夫**
子どもの気に入った絵本や紙芝居、手遊びを繰り返し行ない簡単な言葉を自分から口ずさむようになるよう援助していく。

②　**保育教諭とごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ工夫**
ごっこ遊びする場面で、保育教諭が挨拶を交わしたり、返事をしたり、擬音語や擬態語を口にしたりして、園児の言葉に対する感覚や語彙を豊かにしていけるよう援助していく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】絵本の読み聞かせを通して

≪子どもたちの姿≫
・ほとんどの子が絵本に興味を持って聞き入るが、集中が続かず席を離れたり、姿勢が崩れたり、隣の子にちょっかいを出してしまう等の姿もが見られる。

○保育教諭の願い○
・絵本を喜んで見ることができるようになってほしい。
・絵本を通して、豊かな言葉に触れてほしい。
・絵本を通して、保育教諭が発した言葉を真似して習得できるようになってほしい。

≪環境構成の工夫・保育教諭の援助≫
・繰り返しのある言葉を楽しめるような絵本を選択する。

・子どもたちが真似しやすいよう簡単な言葉の入った絵本を選択する。
・身近な生活をテーマにした絵本を選び、言葉に親近感をもってもらい、日常生活に繋げていく。
・子どもの成長に合わせた絵本を何度も繰り返し読み聞かせをする。参加型にし、「これはだぁれだ？」「何してると思う？」などと問いかけることで、答える楽しさや応答的なやりとりを楽しむ。

≪幼児の変容≫
・絵本の読み聞かせの時間を楽しみに待つ子が多くなった。
・絵本の中にある繰り返し言葉を楽しんで発語する子が増えてきた。
・知っている動物等が出てくると「○○！」と名前が飛び出すようになる。

〔結果と考察〕
・興味・関心に合わせた絵本選びを行うことで、絵本の読み聞かせを楽しむことができるようになった。
・絵本の読み聞かせを通して、話を聞くという事に集中できる時間が長くなってきた。

繰り返しのある
人気シリーズ！

※毎日の読み聞かせの様子

【実践事例2】手遊びを通して

<子どもたちの姿>
・初めは見ているだけが多いが、興味は示している。
・手遊び歌の語尾だけを一緒に口ずさむ子が数名見られる。

○保育教諭の願い○
・保育教諭の歌声に合わせて、真似して一緒に歌って楽しんでほしい。
・手遊びを友達と共感しながら楽しんでほしい。

≪環境構成の工夫・保育教諭の援助≫
・子どもたちが歌いやすいよう比較的簡単な歌詞（繰り返しのある）の手遊びを行う。
・歌詞を覚えられるよう繰り返し手遊びを取り入れる。

小さな先生❤　↑

≪幼児の変容≫
・歌を口ずさみながら手遊びをする子が増えてきた。
・子どもたちだけで知っている手遊びを楽しむ姿が見られるようになった。

〔結果と考察〕
・繰り返しのある、歌いやすいよう簡単な歌詞の手遊びをや身体を使った手遊びを行うことで覚えやすく、子ども同士で手遊びを楽しむ姿が見られた。
・動物等のジェスチャーを取ると、「ウサギさん！」と自信をもってニコニコと答える子の姿も見られた。

【実践事例 3】遊びを通して

<子どもたちの姿>
・自分が使いたいと思ったら、友達が使っていても奪い取ってしまう。
・思い等が相手に伝わらないことで噛みつきやひっかきもあった。

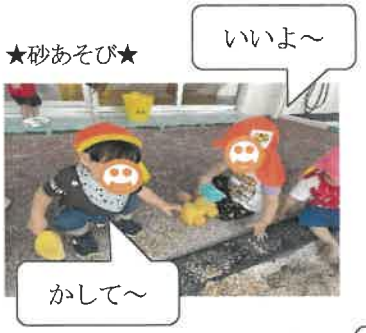
○保育教諭の願い○
・言葉で伝えることができるようになってほしい。
・遊びの中で言葉のやり取りを楽しんでほしい。

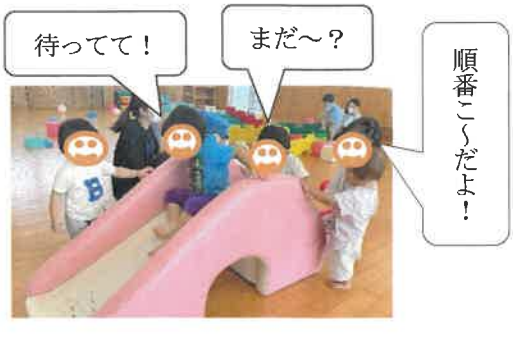
≪環境構成の工夫・保育教諭の援助≫
・子どもたち同士で関りが持てるよう、側について一緒に遊びを楽しむ。
・トラブルの際には、その都度保育教諭が仲立ちし、言葉で伝えるやり取りを行う。相手が嫌な気持ちになる事を伝える。言葉が上手く話せない子どもには質問することで、答える楽しさや応答的なやり取りを行う。

≪幼児の変容≫
・「貸して」「いいよ」等の関わりが出てきて、玩具の貸し借りが少しずつできるようになっている。
・友達と玩具あそびや砂遊び、ごっこあそびを一緒に楽しみ、言葉を交わす姿が増えてきた。

〔結果と考察〕

・言葉の発達の個人差に対し、保育教諭がどれだけ子ども理解に努めるかが重要であり、「言葉のシャワー」と言うようにその子ども一人ひとりにあわせた声かけや対応を行うことで、子どもがたくさんの言葉を発していく事がわかった。





Ⅳ　実践のまとめと考察

① 実践の振り返り
・毎日、繰り返し読み聞かせや手遊びを行っていくことで、確実に語彙力が身につき言える単語も日々増えてきている。その姿、成長を感じる事ができたことは良かった。

② 課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと
・読み聞かせ、手遊び、遊びと実践を行ったが、子どもたちによって言葉の獲得方法が様々だと感じた。一人ひとりの発達状況を把握し、その子に合った言葉の獲得方法を理解し、援助できるようにしていきたい。子どもにとって目に見える物、聞こえる言葉のすべてが刺激となり言葉の獲得に繋がることから、保育教諭の援助や環境構成の重要性を知った。
・自分の気持ちを話すだけではなく、相手の気持ちを知ることができるように、言葉の教育を行うとともに保育教諭の関わり方次第で子どもたちの成長に影響があるため、『言葉』を意識して話すことと、保育教諭自らも言葉について学んでいきたいと思う。
・発達を活かしたごっこ遊びに必要な環境づくり（コーナー等）も必要だと感じた。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』

様式３　【課題研究レポート】

友達との関わりを深め、一緒に活動する楽しさを味わう援助の工夫

―友達と楽しく遊ぶ場を通して―

大宜味村　おおぎみこども園　教諭　知花　百音

Ⅰ　テーマ設定の理由

乳幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期で人と関わる力を育むことが大切である。「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」の第２章第２節（８）「人間関係」の領域には、「園生活の中で、園児は他の園児と一緒に楽しく遊んだり活動したりすることを通して、互いのよさや特性に気付き、友達関係を形成しながら、次第に人間関係が広がり深まっていく」とある。友達と一緒に様々な活動をすることを通して、協同性や、道徳性・規範意識の芽生え等を育てることが必要であると考える。

本学級の園児は３歳児、男児７名女児５名、計 12 名在籍している。「いっしょにあそぼう」「なかまいれて」「〇〇したい」など自分の思いを言葉にして伝えたり、仲良く遊ぶために必要な言葉「かして」「まっててね」などを使ったりして遊ぶ姿がある。しかし、まだ自分の気持ちが強く友達の言葉をきちんと聞いて、待ったり貸したりできずトラブルになることも多く見られる。また、〇〇ちゃんとだけ遊ぶことを好み、他児が加わろうとすると嫌がる様子を見せる園児の姿も見られる。

そこで、好きな遊びを楽しむ中で、いろいろな感情を体験しながらクラスのどの子とも関わりを深め、協同性や道徳性・規範意識の芽生えを培うとともに、保育教諭や友達と一緒に工夫したり協力したりして、活動する楽しさを味わってほしいと願い、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く援助の工夫について

いざこざの状況や園児の様々な体験を捉えながら、それぞれの園児の主張や気持ちを十分に受け止め、保育教諭が仲立ちして互いの思いが伝わるようにしたり、納得して気持ちの立て直しができるようにしたりする援助の工夫をする。

２　友達と一緒に活動する楽しさを味わう環境構成と援助の工夫について

友達と様々な関わりを持てるように援助し、共通の願いや目的が生まれ、工夫したり、協力したりする楽しさを十分に味わうことができるように工夫する。

Ⅳ課題解決に向けた取り組み

【実践事例１】

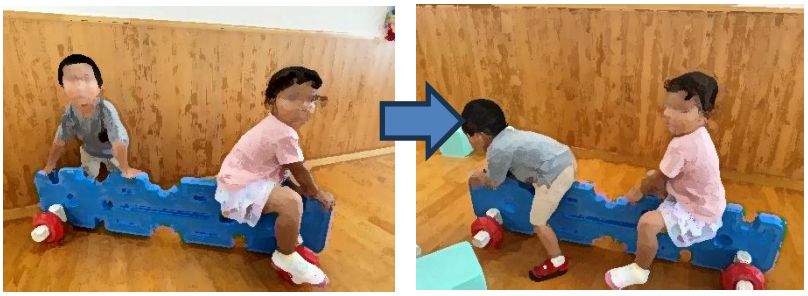
幼児の実態→「いっしょにあそぼう」「なかまいれて」「〇〇したい」など自分の思いを伝えたり、仲良く遊ぶ為に必要な言葉「かして」「まっててね」などを使い遊んだりする姿がある。しかし、まだ自分の気持ちが強く、友達の言葉をきちんと聞いて待ったり貸したりできずトラブルになることも多く見られる。

保育者の願い→自分の思いっていることを伝え、相手の思っていることに気付いてほしいな。好きな遊びを楽しむ中で、様々な感情を体験しながらクラスのどの子とも関わりを深めてほしいな。（協同性や道徳性・規範意識の芽生え）

＜☆マルチパネ＞

いざこざの状況

車にのって楽しく遊んでいたけど・・・ぼくはこっちにいきたいよ、私はあっちがいいよと意見の違いが生じた。



《保育者の援助》二人の主張を聞き、受け入れる。保育者が仲介し互いの思いを伝えたり「同じ方向に進まないと車が走らないね。どうする？」と一緒に考えたりする。答えがでない時は、「最初に〇〇の行きたいところにいって次に〇〇いってみる？」等、子ども達が納得できる方法を見つける手助けをしていった。

《子供の変容》一緒に遊びたいという気持ちを持ち、「あっちからでいいよ」と受け入れて引き続き、二人で楽しく遊ぶ様子があった。自分の思いを伝え、先生や友達の話もきちんと聞く姿が育ちつつある。

＜☆車遊び＞

いざこざの状況

「まっててね」と言われるが待てずに何度も「かして」という。
友達が貸さないので勝手に取ってしまった。

《保育者の援助》お互いの主張を聞き、どのようにしたら二人が遊べるかな？と考えたり「自分も使いたいけど相手も使いたいよ」とお互いの気持ちに気付いたりできるようにした。その上で、「時計の長い針が５になったら交代するというお約束はどんなかな？」と提案した。（見通しをもって待ったり貸したりできるように・お互いの使いたい気持ちが満たせるように）

《子ども変容》時計の針をみながら待ったり、時間になるまで違う遊びをしたりして気持ちを切り替えて遊ぶ姿が見られた。今では、保育者の仲介がなくても友達同士で貸し借りしながら遊べるようになっている。

【結果と考察】

・いざこざを丁寧に対応することで、子ども達がそれぞれの思いを出し合い、相手の思いを受け入れることができていた。
・３歳児はまだまだいざこざが多いが、遊びの中で起きる一つひとつのいざこざ場面で保育者が仲介役となり適切に援助していくことで少しずつ相手がいることに気付き、友達の思いを受け入れたり一緒に遊んだりと友達との関わりが深まっていくと感じた。

【実践事例２】

幼児の実態→〇〇ちゃんとだけ遊ぶことを好み、他児が加わろうとすると嫌がる様子を見せる園児の姿も見られる。

保育者の願い→保育教諭や友達と一緒に工夫したり協力したりして、活動する楽しさを味わってほしいな。（協同性）

＜☆ままごと遊び＞

いざこざの状況

「なかまいれてー」と声を掛けられるが「〇〇はダメだよ」「〇〇のおうち」と言い張り遊びに加ろうとする友達をいれようとしない。

《保育者の援助》「何で〇〇ちゃんはダメなのかな？」とその子なりの考えを聞き、その理由に合わせて、「もっと大きい家作ろうか。あと一つ家作ってみる？一緒に遊んだら楽しいし友達も嬉しいと思うよ」等と工夫したり協力したりして一緒に遊ぶ楽しさを味わえるように提案した。また、「ダメと言われたらどんな気持ちになるかな？」と相手の気持ちも一緒に考え、気持ちに気付けるよう声掛けをした。（さらに納得できるように丁寧に対応した。）

《子どもの変容》保育者の仲介により、納得して友達を受け入れ遊ぶことができる。同じようないざこざが起こる時もあるが、これまでの経験を活かし、「ダメといったけどやっぱりいいよ」と相手を受け入れたり友達同士で仲良く遊べる方法（お家を大きくする・・）を考えて遊んだりする姿が見られる。それぞれがいろいろな友達を受け入れて遊ぶ様子が見られるようになっている。

【結果と考察】

・数人の友達を受け入れたり子ども自身で折り合いをつけたりして複数の友達と仲良く遊べるようになった。
・保育教諭がいざこざに適切に関わり、子ども達が納得する方法を見つけると友達と一緒に活動することを楽しむことができていた。
・その場の対応だけでなく毎日行うクラス全体の振り返り活動（学級活動）を通して、今日の出来事を皆で考えることで相手の気持ちを考えることに繋がり、協同性や道徳性・規範意識の芽生えを培うきっかけになったと感じた。

Ⅴ実践のまとめと考察

一つ一つのいざこざ場面で、ただ単に子供の行動や言動を「ダメ」「ごめんねと言って」等と注意や仲介をするのではなく、保育者がきちんと子ども達の思いを聞き、気持ちを出し合えるようにしたり言葉にできなかった思いを伝えたりすることが大切だと考える。また、どうすれば良かったか一緒に考えたり提案したりする等、子どもが納得できるように援助することで少しずつ相手に気持ちがあることやしてよいこと・わるいこと等に気付くようになり、友達との関係が深まっていくと感じた。それらの対応だけでなく、好きな遊びができる環境を整えたり友達と関わる環境を意図的に作ったり、友達の良さに気付けるようにしたりする等の保育教諭の工夫も含めて、友達との関わりを深め、一緒に工夫したり協力したりして活動する力に繋がっていくと感じた。

今後も、子ども達に寄り添い丁寧に関わり、日々の保育の工夫に励み、さらに友達との関わりを深め、一緒に活動する楽しさを味わうことができる力を育んでいけるようにしていきたい。

友達との関わりを深め、一緒に活動する楽しさを味わうことができるように

☆集団遊び（椅子取りゲーム・・・）
・集団でリズム遊びやゲーム遊びをする時間を作り、友達と一緒に活動することの楽しさを感じられるようにした。

☆好きな遊び（ブロック・エイサー・ままごと・鬼ごっこ・製作・・・）
・同じ遊びをしたい子が同じ場で遊べるように意図的に関わりを作った。
・子ども達の思いや考えを積極的に聞き、友達に波及するよう伝えたり遊びが発展するよう一緒に考えたり援助したりして友達と関わって遊べるようにした。

☆学級活動
・皆で話を聞いたり考えたりすることができるようにした。

☆笑顔みーつけた！
・「うれしい」「たのしい」「できた」「ありがとう」が起きた場面に注目し、喜びや嬉しさ・自信・友達の良さ等に気付くことができるようにした。

＜主な参考文献＞
・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年　幼児連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社フレーベル館

主体性や思いやりの心を育てる教育・保育
～異年齢交流を通して～

今帰仁村立認定こども園みらい　教諭　松田　みなみ

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、核家族化や一人っ子世帯が増え、同年齢や異年齢での関わりが希薄になっている。近所の子ども同士で遊ぶケースも少なくなっている。そのため、こども園が集団生活の場となり、様々な能力を育む場となることを目指している。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章「人間関係」の領域には、「身近な人と親しみ、かかわりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」とある。

本園の幼稚部の園児は５歳児３０名、４歳児４０名、３歳児３８名、計１０８名在籍している。本園は令和２年に開園し、５年目を迎えたが、開園当初は新型コロナウイルスが流行し、園での活動・異年齢での交流が制限される生活を送ってきた。昨年から新型コロナウイルスも落ち着いてきたが、その生活スタイルが今も続いた状態であり、異年齢での子ども同士の関わりがなかなか見られないのが現状である。本園では、通常は同年齢でクラスを運営しているが、行事（クリスマス会や毎月のお誕生会など）では異年齢の交流を行っている。

異年齢（縦割り）での関わりを通して、年下の子は年上の子にあこがれを持ったり、刺激を受けたりして「やってみたい」と挑戦する姿を持つだろうし、年上の子は、年下の子に慕われることで、思いやりを持って接したり、手本を示したり、遊びや生活に自信を持つであろう。このように、年下・年上の子と生活したり遊んだりすることで、社会性やコミュニケーション能力・思いやりの心等を伸ばしていきたい。そのため、保育教諭が計画的に交流の場を作っていくことが必要と考え、このテーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①子どもが自ら関わろうとする気持ちが持てる環境設定の工夫について

遊びの中で教え合いや関わり方などの思いやりの心を育めるような環境構成を行う。また、その中で「やってみたい」と興味関心を育むような援助を行う。

②思いやりの心や、就学への期待が持てるような異年齢交流の工夫

集会や誕生会などの行事を通して、異年齢児への興味を持てるような交流の工夫を行う。また、小学生との交流活動を通して、就学に向けての期待を持てるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

月	研　究　計　画
４月～５月	幼児の実態把握・課題の検討
６月	研究テーマの検討（テーマ設定理由、研究内容、研究計画の検討含む）
７月～１１月	理論研究・保育実践
１２月	課題研究まとめ

（１）６年生との交流会　令和６年５月２１日㈫『楽しく遊ぼう』

①活動の様子

６年生による進行で、自己紹介とじゃんけん列車とフラフープくぐりゲームを行った。６年生が積極的に関わってくれ、リードすることで、こども園の子どもたちも安心して楽しむことができていた。

６年生がこども園の子ども達の目線に合わせてかがんでくれたり、会話の中からわざとじゃんけんを勝たせてあげたりしていた。自由あそびの時間では、なかなか遊びを見つけられない子に対して「何して遊ぶ？」「一緒に遊ぼう」などと声をかけたり、積極的な子に対しては好きな遊びを一緒に楽しむ姿があった。

②育まれる姿

年上の子と年下の子がお互い教え合ったり刺激し合いながら遊ぶことにより、他者への思いやりの心を育むことができた。

（２）幼稚部全体でのクリスマス会　令和６年１２月２４日㈫

①活動の様子

幼稚部でのクリスマス会を行った後、ホールで給食を食べることになった。３・４・５歳児が好きな友だちと好きな席に座る。３歳児のＡちゃんは普段からよく声をかけてくれる５歳児のＢちゃんＣちゃんを見つけ、嬉しそうに隣の席に座っていた。給食を楽しく食べていたＡちゃんだが、スープが苦手なようで、担任の先生が量を調節し声かけするが口を閉じたまま食べようとしなかった。そのため、Ｂちゃんがスプーンで口まで運んでくれるが顔をしかめて口を開こうとしなかった。その様子を隣で見ていたＣちゃんが優しく声かけをしたり、Ｂちゃんは自分のスープを口に運び食べる様子を見せたりしているうちにＡちゃんの気持ちも少しずつほぐれ、渋々ではあったがスープを一口飲むことができた。５歳児のＢちゃんＣちゃんが「すごいね！飲めたね！」と褒めると、Ａちゃんは自分でスプーンを持ち意欲的に食べ、完食することができた。

②育まれる姿

年長児への憧れの気持ちから同じことをしたいという気持ちが起り、結果的に苦手なスープを飲むことができた。

Ⅳ成果と課題

（１）成果

①優しく接してもらった経験から、年下の子へのかかわり方が自然と身に付いている。

②小学校のお兄ちゃん・お姉ちゃんに優しく接してもらうことで思いやりにつながっている。

③小学校への親しみを持ち、就学に向けての期待が持てたようである。

④異年齢に対応するため、保育教諭が様々な活動を想定して準備を行うため、スキルアップになる。

（２）課題

①スムーズな活動を行うため、こども園と小学校で事前に一緒に計画が立てられるとよいと感じた。

②充実した交流活動を行うために、園と小学校の職員間の交流も計画していきたい。

③体力に差異があるため、適切な活動の選定や安全性の確保に留意する必要がある。

④年上の子の負担が大きくなりすぎないよう注意する。

（３）実践を通した自身の気づき、考え

小学校との交流会はコロナ明けから少しずつ計画されていたが、本年度は年間計画に組み込まれたことで見通しを持って子ども達に伝えていくことができてよかったと感じた。また、交流を通して人との関わり方を自然と学ぶ姿が見られ、子どもが成長するにあたって異年齢での交流は大切だと改めて感じた。例えば、年下の子が年上の子から遊びのルールを学ぶ姿が見られた。これによって社会性や協調性が身に付くものと考えている。

本園ではクラスごとの活動が多く、異年齢での交流がなかなかできない現状である。子どもは自ら関わり合う力を持っていて、その中で自ら学び習得していく。そのため、保育教諭は子どもの発達を見通しを持って対応することと、子どもの姿から育ってほしい姿をイメージし、環境や保育・教育の内容を考えていくことの大切さを感じている。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・こども園と小学校で事前に一緒に計画を見直す時間及び職員同士の交流を年計に位置付ける。

・小学校との交流において、小学生も満足できる活動を選定する。

・幼稚部での異年齢交流は増えてきているが、幼稚部と保育部（０～２歳児）との交流及び保育部内の交流はほどんど出来ていないので計画をしていきたい。

本こども園は多様な活動の場であることを目指している。障害を持った子や医療的ケアが必要な子、外国につながる幼児なども含めて、多様な幼児の触れ合いを通して共に成長していく場になるよう努めている。その上で、保育・教育の方法の一つとして異年齢交流は人間関係を学ぶ大事な機会の１つとして捉えている。今後も異年齢交流が充実したものになるよう、工夫・改善して取り組んでいきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成３０年３月『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

・湯汲英史著　２０１５年　『子どもの社会性の発達と保育の本』Gakken

・汐見稔幸・中山昌樹著　２０１９年『１０の姿で保育の質を高める本』風鳴舎

一緒に活動する楽しさを味わうための環境構成や援助の工夫

―幼児理解を深め、一人一人に応じた関わりを通した個の育ち―

名護市（市立）　緑風こども園　教諭　氏名　野村　亜紀

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第一章第一節（４）④園児一人一人の発達の特性に応じた指導について、園児は一人一人の家庭環境や生活経験も異なっている。それゆえ園児一人一人の発達の特性（その園児らしい見方、考え方、感じ方、関わり方など）を理解し、その特性やその園児が抱えている発達の課題に応じた指導をすることが大切であると記載されている。また、集団生活の中で園児が互いに影響し合って発達が促されていく為、それぞれの発達の特性を生かした集団を作り出すことを考えていくことが大切とある。

本園は０～５歳児の６年保育で、本学級は４歳児男児８名、女児９名の計１７名が在籍し、特別な支援を要する園児が数名いる。学級の実態として、ほとんどの園児が持ち上がりということもあり、気の合う友達と一緒に同じ遊びを通して楽しむ姿がある。しかし、思いが通らない場面で、友達を叩いたり、噛み付いたり、部屋から飛び出したりと、感情のコントロールが難しい園児も数名おり、友達同士のトラブルが多く見られる。

そこで、幼児理解を深め、一人一人の発達の特性を踏まえて環境構成や援助の工夫を行うことで、安心して自分の気持ちを表現できるのではないかと考えた。自分の気持ちを言葉で伝えたり、相手の気持ちに気付いたりして伝え合う喜びを味わってほしい。また、自分の得意なことや好きな遊びを見つけたり、友達や保育教諭と一緒に活動する中で、楽しさを味わったり友達の良さに気付いて欲しいと願い本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　幼児理解を深め、一人一人が安心できる環境構成や援助の工夫
・園児の行動や遊びの様子などから思いを読み取り、必要な環境構成や援助の手立てを検討する。また幼児理解を深めるため、エピソードを用いて保育教諭間で話し合う。様々な視点から園児の姿を捉え、支援の仕方について検討し、共通理解を深めていく。

②　好きな遊びを見つけたり、友達と一緒に活動する楽しさを味わったりできる環境構成の工夫
・園児の姿から興味や関心を読み取り「やってみたい」「楽しい」と思える活動内容や環境構成を行う。一緒に活動する中で、友達や保育教諭と一緒に様々な感情を共感し合う場を作る。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】「安心して自分の気持ちを表現できるための援助と環境の工夫（A さん）」

（園児の姿）
・一日を通して常に苛立っている様子が見られ、すれ違いざまに保育教諭や特定の友達を叩いたり、蹴ったりする行動がある。物を投げたり、部屋から飛び出したりすることもある。
・遊び始めても「できない」「だいきらい」「いやだ」とうまくいかないことに怒っている。
・常に、保育教諭と一対一の関りを求めている様子が見られる。

（保育教諭の願い）
・安心して、気持ちよく一日を過ごしてほしい。
・自分の気持ちを言葉で相手に伝えられるようになってほしい。
・自分の好きなことや得意なことを見つけてほしい。友達にも本児の良さを知ってほしい。

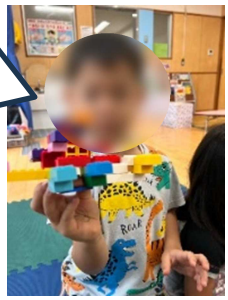
（保育教諭の関りと援助）
・苛立ちのきっかけになるような場面を減らす為、クラス活動前に保育教諭と一対一で関わる時間を設けた。
・本児が好きな遊びやできるようになったことを室内に掲示したり、発表したりする場を作った。
・本児が部屋を飛び出した時は、気持ちを切り替える時間を待ち、自分で部屋に戻って来られるようにした。戻ってきた際は「おかえり」と声を掛け、トラブルや怒りの振り返りをせず気持ちよく受け入れていった。

◎クラス活動前や本児が苛立っている時に、フリー保育教諭との一対一の時間を作った。
←クラスから離れて、絵本タイムで気持ちを落ち着けている。落ち着いたら自分でクラスに戻ってくる。

◎朝のお手伝いタイム
玄関前の掃除やゴミ出しを手伝ってくれた。保育教諭と一対一で過ごす時間となり、さらに周囲から「ありがとう」と声を掛けられることが増えた。

◎本児が好きな獅子舞ごっこ
自分でお客さん（友達）を誘い、獅子舞を披露している。友達も一緒にやりたいと、遊びの輪が広がっていった。

◎「できた」をみつけたい！
本児が作った作品を写真で掲示したり、発表する場を作ったりするとさらに遊びこむようになった。
←少しずつ自分でやってみるようになった。そして友達と一緒に楽しめるようになってきた。



（幼児の変容）
- 怒りの原因を保育教諭に言葉で伝えられるようになり、友達を叩いたり、怒らせようとしたりする行動が減った。また、怒って部屋を飛び出しても絵本コーナーで過ごしたり、お気に入りの場所で気持ちを落ち着けたり、自分で気持ちを切り替える方法を見つけ、気持ちが落ち着いたら部屋に戻ってこられるようになった。
- 本児がブロックで作った作品を朝の会で紹介したり、掲示したりすることで満足そうな表情が見られ、さらに自分で作ってみようとする姿が見られるようになった。
- 本児が得意なエイサーや獅子舞を披露する時間を作ると、友達が「A 君ってエイサー上手だよね！」「獅子舞かっこいい！」という声が聞こえ、本児の姿を認めるようになっていった。また一緒にやりたいという声もあり、友達と楽しさを共有することができるようになっていった。

（考察）
- 園での一日が気持ちよくスタートすることで、苛立ちのきっかけになる場面が減るのではないかと仮定し、登園後に保育教諭と一対一の時間を作った結果、気持ちが満たされ、行動や情緒が落ち着いてきたように感じられた。
- 「できた」という経験を積むことで、好きな遊びや得意なことを見つけることができ、「またやってみたい」という気持ちや自信に繋がったように感じられる。
- 本児の姿を認める場面を、クラス全体で共有していくことで、周囲の友達が本児の良さに気付くことができたのではないかと思う。

【実践事例２】「運動会でみんなと一緒に“楽しいね”を共有したい（B さん、C さん）」

（園児の姿）
- B さん、C さんはそれぞれ個別の関りや援助を要する場面が多く、特に集団活動や園の行事においては興味を示さないことが多い。別室にて個別で活動することが殆どである。
- 興味を示す活動や遊びには、とことん集中して取り組む姿がある。
- B さん、C さんどちらとも、追いかけっこを好み、友達や保育教諭と一緒に楽しむ姿がある。

（保育教諭の願い）
- 友達と一緒に活動する中で、多様な感情体験を味わってほしい。
- 楽しい気持ちを経験して、友達との関わりが広がっていってほしい。

「〇〇くんのしっぽとりたい！」

（保育教諭の関りと援助）
- B さん、C さんの「やってみたい」を引き出せるように、運動会種目の中にしっぽ取りを取り入れ、追いかけっこを楽しめるようにした。
- 玉入れや綱引きなども取り入れ、クラス全体で楽しめる競技内容にした。
- B さん…友達と同じ空間の中で、雰囲気を味わいながら、保育教諭と一緒に楽しめるようにした。また、保護者に相談し本児が好きなしっぽを持参してもらい、保育教諭が付けてしっぽ取りを楽しめるようにしていった。
- 遊びの中で、保育教諭と一対一で何度も、しっぽ取りを楽しんでいった。
- C さん…本児が好きな曲を BGM に使用する。気の合う友達と同じチーム編成をする。

「うんとこしょ！どっこいしょ！」

（幼児の変容）

・B さん…本児は当初、集団から離れお気に入りの場所からみんながしっぽ取りゲームを楽しんでいる様子を観察していたが、家庭から持参したしっぽを使用したことで一緒に楽しめるようになった。
・C さん…行事や集団活動にはなかなか興味を示さなかったが、しっぽ取り、玉入れ、綱引きなど、力を使ったり、勝敗がついたりする楽しさを感じ、自ら参加する姿が見られた。
・本番の雰囲気に戸惑う様子はあったが、友達と一緒に運動会に参加して楽しむ姿が見られた。
・運動会後クラスで振り返りをした際に、楽しかったことを聞いてみると「つなひき」と答えたり、その後も普段の遊びの中でしっぽ取りを楽しんだりと、余韻を楽しむ姿も見られた。

（考察）

・配慮を要する園児達も一緒に楽しめるような競技内容を検討していった。クラス全体の雰囲気に合った内容にしたことで、みんなで楽しむことができたのではないかと思う。行事のための内容ではなく、普段の遊びを取り入れていくことで「楽しいね」「もう一回やりたい！」と意欲的な姿に繋がるのではないかと感じた。
・参加の仕方は他児と違っていても、個々に合わせた配慮を行うことで、みんなで楽しむというねらいを達成することができるとわかった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・生活や遊びの中から園児の特性や発達を捉え幼児理解を深めていくことで、個々に必要な環境構成や援助の手立てを考えていくことができた。また園児が好きな遊びや得意なことを見つけることができ、自信や満足感に繋がっていったのではないかと考える。
・活動の中心に支援を要する園児の好きな遊びや得意なことを取り入れ、クラス全体で楽しめるような工夫をすることで、友達同士が互いの好きなことに気付くきっかけになると感じた。

②課題

・園児が好きな遊びを見つけることができ、遊びに夢中になる姿が見られるようになってきたので、さらに遊び込めるような環境構成の工夫を考え続けていきたい。
・安心して自分の気持ちを表現できる姿が見られるようになってきたので、一緒に活動する中で相手の気持ちに気付く場面や楽しさを共感し合う場面を増やしていきたい。

③実践を通した自身の気づき、考え

・幼児理解を深めることは、環境構成の工夫や必要な援助について考えることに繋がり個々の育ちへと繋がっていく重要なことであると感じた。そして個々が育っていくことは、友達との繋がりを通してクラス全体の育ちにも繋がっていくのだと感じた。
・環境構成や援助の工夫を実践していくことも大切だが、同様に実践を振り返り、再検討していく重要性を学んだ。
・周囲の職員への報告・連絡・相談ができる環境は、様々な視点から園児の姿を捉えることができ、個々の育ちを支えていく上で重要な環境であると感じる。
・個々にあった環境構成や配慮の手立てを考える際、保護者との関係性を構築していくことが重要である為、細かく園児の姿を捉え、保護者と共有していきたいと考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・園児が安心して遊びに夢中になれる環境構成の工夫や援助の手立てについて常に考え続けていきたい。
・園児一人一人が安心して過ごす中で個々の育ちを支えていくために、保護者との情報交換や相談が必要不可欠であるが、園での様子の伝え方に悩むことが多かった。引き続き保護者が安心して話せる関係づくりや、園での様子の伝え方を工夫していきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館
・幼保連携型認定こども園教育・保育要領ハンドブック　2017 年告示板　監修　無藤隆　Gakken

様式３【課題研究レポート】

子どもが夢中になって遊ぶ環境の構成と工夫

―ワクワク、ドキドキを生み出す園庭の環境―

名護市（市立）　緑風こども園　主幹保育教諭　氏名　祖慶　勝美

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の題２章４節「健康」の領域に「園児は一般的に意欲的に活動する存在であり、魅力的な環境に出会えば生き生きとそれに関わる」と記載されている。「第一に、園児の遊びのイメージ、興味や関心の広がりに応じて行動範囲が広がることを考慮すること。第二に戸外の活動に必要な環境としては、イメージを実現する面白さを味わおうとする園児には遊びの拠点となるような空間や遊具が、木の葉や虫に触れて遊ぼうとする園児にはその季節に応じた自然環境が必要である。第三に園庭は年齢の異なる園児など多くの園児が同じ場所で活動を展開したり、交流したりする場であり、園児一人一人が安定して活動を展開できるように園庭の使い方や遊具の配置の仕方を必要に見直すことである」と述べられている。

本園の実態として、園庭で砂、水遊び、虫探しなど個々に好きな遊びを見つけて遊びこむ姿がある。一方で子ども同士がじっくり関わりながら遊ぶ姿が少ないように感じる。そこで、遊びの拠点となる場所を作り子ども同士がじっくりと関わりながらイメージや楽しさを共有して遊びこめる魅力的な園庭作りに取り組んでいきたいと考え本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① その場所に自然に集まり友達と一緒に遊ぶ中で楽しさを感じ、様々な発見や好奇心が芽生えるような園庭環境の工夫をする。
② 園庭遊びの中で園児同士の関わりや会話から、どんなことに興味や関心をもっているか保育教諭間で情報を共有し、その遊びがさらに広がり深まるような園庭環境の構成を行う。
③ 各年齢の発達や興味や関心に沿った園庭遊びに必要な用具・道具の数や種類、配置の方法を工夫する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例①「バタフライピーのトンネルだよー」

【園児の姿】

・10月になりフェンス沿いに植えたバタフライピーの青紫の鮮やかな花色が目を引くようになった。2歳児～5歳児は園庭に出ると、花を摘んで色水遊びを楽しんだり、さやを摘んで指で開き中の種を取り出したりして遊びはじめた。その中で（手が届かないので）「先生、〇〇の花も取ってー」という声が聞かれ、保育教諭に摘んでもらう姿が多く見られた。

【保育教諭の願い】

・自分で花を摘んで、必要な用具や道具を使って繰り返し楽しむ中で、色水遊びの面白さや不思議さを感じて欲しい。
・異年齢の友達の遊ぶ姿にも興味をもち「やってみたい」と取り入れてみようとするなど遊びが広がるといいな。

【〇環境構成の工夫　◇保育教諭の援助】

〇園児がワクワクしながら通ることができるバタフライピーのトンネルを作る。
〇１～２歳児でも手が届くように低いベンチや椅子を設置し、登って花が摘めるようにする。
〇色水遊びが楽しめるような用具や道具を準備する。色水の変化に気付けるように、容器は透明や白色にする。
◇園児の気づきや発見に共感し、「ほんとだね」「おもしろいね」と保育教諭も心からおもしろがったりすることで、更に遊びの楽しさや関心を広げていけるようにする。

バタフライピーのトンネルって素敵だな～

自分でとれるよ

きれいな色でしょう

【園児の変容】

・バタフライピーの花に手が届くようになったので、「先生とってー」という声が少なくなり、自分達で花を摘んで、必要な用具や容器を選んで意欲的に色水遊びを楽しむ姿が見られた。
・年上の友達が色水作りをしている様子を見て興味をもち「〇〇もやりたい」という気持ちが芽生えていた。
・色水をペットボトルに入れてジュース屋さんごっこに発展した。「ジュース下さい」「いくらですか？」「百円です」など言葉のやりとりが増え、友達とイメージを共有し遊びこめるようになった。

【考察】

・保育教諭間で園児の興味や関心に合わせた園庭環境について意見を出し合い、バタフライピーのトンネルを中心に、テーブルや椅子、用具・道具の配置を変えてみた結果、更に色水遊びに関心を示し遊びが充実した。
・花をつぶすと色のついた汁が出る、花の種類によって色が違う事に気づいている。
・１歳後半～２歳の園児も、さやをむいて中の種を取り出すなど指先を使って遊ぶことで感覚の発達が促されている。

実践事例②「すいか組のミニライブだよー」

【園児の姿】

・12 月、４歳クラスでは、日頃から担任が三線の演奏をしていることに影響を受け、Y君も「三線作ってみたい」と段ボールや空き箱を使って三線を作った。そのことをきっかけに他の子もイメージを広げ、ギロや笛、マラカスなどの楽器作りが盛り上がっていった。次の日Y君の「外で歌ってみたい」という一言から園庭に出て、子どもたちと一緒にスノコの舞台を作り客席になるベンチを置いてみた。ステージに手作り楽器を持った数名が立って自分達で話し合いをし、「これからきらきら星を歌います」と紹介し、楽器を鳴らしながらきらきら星を歌いはじめると、近くにいた３歳・２歳クラスの子が自然に集まり、ベンチに座って楽しそうに見ていた。その場所は歌声や拍手、歓声が響き一瞬でパッと明るいライブ会場のような空間になった。

【保育教諭の願い】

・保育教諭や友達に自分のやりたいことを伝え、自分たちで話し合ったり試行錯誤しながら遊びを楽しんでほしい。

【〇環境構成の工夫　◇保育教諭の援助】

◇園児のつぶやきや会話に耳を傾け、園児が主体的に遊びを広げることができるようにそっと見守り、さり気なく必要な援助をすることを心掛ける。
〇スノコなど重たい物を安全に運べるようにサポートする。
〇ステージに簡易テントを張って、よりライブ会場の雰囲気が出るようにした。チケット作りがはじまると、テーブルを用意して受付コーナーを作った。

チケット作って配ろう‼

バタフライピートンネルからの入場です！

何の曲にする？ｷﾗｷﾗ星がいい！

せーの！これからｷﾗｷﾗ星をします

屋根付きのライブ会場になりました！

自分たちで作った楽器を弾きながらみんなで歌うのって最高に楽しいな～♪

・簡易テントを張ってライブ会場ができたことで、演じる役とお客さん役になってイメージがどんどん膨らんでいった。子ども達が考えてチケット作りを始めた。近くにいる異年齢の友達や保育教諭にもチケットを配りながら「もうすぐライブが始まるので見に来てください」と声をかけていた。
・その場で話し合い入場方法や曲の紹介、演奏会をはじめていた。みんなで一つのイメージに向かって取り組む様子が見られた。
・演じる側と客席の間で「リクエスト」や「アンコール」などその場にいないと使わない言葉のやりとりがあり、園児はその意味を理解し、楽しみながら使っていた。
・手作り楽器を使ったミニライブはさらに続き、数日後 12 月の誕生会で披露した。

【考察】

・この遊びが子ども達の中から自然に始まり盛り上がった背景にはおゆうぎ会の影響があったと考える。おゆうぎ会に保護者に見てもらう内容もみんなの大好きな「ベニーのみずたまぼうし」という絵本をもとにオペレッタをすることに決定した。クラスでどのように表現するかを話し合って決め、衣装作りから時間をかけて取り組んできた。それぞれが作った衣装を着てファッションショーをする場面では、客席から大きな声援が送られた。その経験が大きな自信になり、やりたいことをイメージし共有する力と、それに向かって必要な物を作り出す力、表現する力が育まれていった。
・チケット作りに発展したのは、一か月ほど前に５歳クラスの「おそばやさんごっこ」に招待された時の経験を再現したと思われる。
・室内の製作コーナーには、様々な廃材や道具等が設定されている。作りたい物を思いつくままに作り出せる環境があることと、室内から園庭まで遊びの流れを広げたことで、異年齢の友達と楽しさを共有することにもつながった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・夏場は炎天下の中園庭に出て遊ぶのを避けなくてはならないこともあったが、涼しくなり園庭に出る機会が多くなった為、改めて園庭の安全面や環境の見直しを行った。その際、保育教諭間でアイディアを出し合いながらテーブルやベンチなどの配置を変えてみる、用具・道具の選別をして設定するなどし、取り組んだことで子ども達が自ら必要な用具を選んで遊び始める姿が見られたことはよかった。また夏場の台風シーズンに折りたたんでいたバタフライピーのトンネルを復活させたことで、葉の緑と花の青紫の鮮やかさが園庭を彩り遊びたくなる環境ができ、その中で異年齢の関わりも増えた。変えてみた環境の中で子ども達にどのような姿が見られるか保育教諭も興味関心を寄せながら一緒に遊びを楽しむことができた。

②課題

・振り返りの時間を今まで以上に行うこと。

③実践を通した自身の気づき、考え

・子ども達の中から生まれてくる遊びや表現を待つこと、そして子ども達が心地よいと感じ更にその遊びや表現を追求していけるような環境作りが大切だと気付いた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・園児の遊びから得たエピソードやドキュメンテーションを用いて、全保育教諭間で保育の振り返りや園児の遊びから気づきや学びの芽について対話を重ねていきたい。園児一人一人の理解を深め、自分自身や園全体の保育の質の向上を目指していきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館
・幼保連携型認定こども園教育・保育要領ハンドブック　2017 告示板　監修　無藤 隆　Gakken

様式３【課題研究レポート】

聴くを育む保育者の関わりと援助の工夫

―朝の会でのひとときを通して―

金武町立金武子ども園　保育教諭　伊計　愛美

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級の実態として、４歳児計１６名在籍し全員が３歳児クラスからの進級であり、明るく元気で個性豊かな学級である。絵本や紙芝居が好きで興味を持ち喜んで見たり、聞いたりする姿が見られるが集まりの際に話す人に注意を向けて話を聞くことが難しい子がいる。また、自分の思いを伝えたい気持ちが強く他児や保育教諭の話を聞くことが苦手な子もいる。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説で示されている「第２章　第４節　２（４）言葉の獲得に関する領域」を踏まえ、本学級の目標である「良く聴き・良く話す子」を目指し安心できる生活の中で最後まで話に興味を持って聞くことができるようになって欲しいと考えている。

これらの実態を踏まえ「聴く力」を育むためには保育教諭の援助や環境構成の工夫が必要であると考え本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①「聴く力」を育てるために保育者間の共通理解を図る

・読み聞かせの際、子どもたちの側に座り一緒に聞く。
・子どもが理解しやすいようにゆったりと話し、子どもがもっと聞きたいと思えるような話をするように工夫する。（素話や絵カードなど）
・絵本の部屋や図書館の絵本の中から好きな絵本を選び読み聞かせを行う。
・読み聞かせを通して、園児と保育教諭との会話の交流が図られるようにする。

②遊びを通して聞く力を身につける（チャレンジを通して育てていく）

・「ハンカチあげゲーム」「命令ゲーム」・・・指示役が具体的な行動の指示を出し、行動役が指示のとおりに動くゲーム。
・「伝言ゲーム」・・・人から人へ出来るだけ正確に、言葉を順に伝えていく。
・「アニマシオン」を取り入れて絵本の内容を理解しているか確認してみる。
（読み聞かせの後に行うゲームで、物語をしっかり聞いた人が勝ち）

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）　【実践事例１】

《幼児の実態》

・絵本や紙芝居の読み聞かせの時間が好きで見ている。目は読み聞かせの方を見ているがジッとする事が出来ずに手や足を動かして姿勢が崩れてしまう姿が見られる。よい姿勢の持続が難しい。
・絵カードや絵本など、なんでも初めての物には集中して見る事が出来る。二度目からは興味を示さず見る・聴くことに集中する事が続かない。

《保育教諭の願い》

・読み聞かせの時間や、お集まりの会の時に聴く姿勢を維持して最後まで聴けるようになって欲しい。
絵表示がなくても最後まで集中して話を聞けるようになって欲しい。

《保育教諭の関わりと援助》

・クラス全体が話を聞いて理解したり集中力の持続が難しいため、子どもたちが視覚的に分かりやすいように話の聞き方や正しい姿勢で座れるような絵表示をその都度、掲示する。（黒板への貼り出し）

・保育教諭が話をしている時には話し手の顔を見て静かに聴くように、「静かに」のイラストを見せて注目できるように工夫する。

・話をする前に、子ども達の興味を引く為に音源を使用したペープサートや素話を取り入れて集中が持続できるように工夫する。

《幼児の変容》

・全体的に、集中力の持続が難しいクラスであるため子ども達の集中が続くように絵表示をしたところ、視覚的に分かりやすく姿勢を正すことが持続できるようになった。しかし、毎回話をする時に同じ絵表示の場合だと見慣れているため集中が維持出来ない。その為、保育教諭の声の大きさやトーン、絵表示などを変化させたことで最後まで話を聴けるようになった。

・保育教諭が手に持っている物を見ると「今から何するの？」「見たいな」などと興味を持って集まれるようになった。ペープサートや絵本も好きで初めて見る物に関して集中して見ることは出来るが、２回目となると集中力はなく姿勢も崩れる姿が見られる。音源を使用した絵本やペープサートは何度でも喜んで見ている。

・集まりの際、保育教諭が話をしようと子ども達の前へ座っても全く気にせずに子ども同士で話をしたり、じゃんけんや、あっち向いてホイなどをする姿が見られたが、子ども達が興味のある内容の素話をすると静かに聴く事が出来た。素話で子ども達が集中して聴く内容としては、身近で見たり聞いたり経験したことのある話だと興味を持って聴く姿が見られた。

・子どもたちが視覚的に分かりやすいように絵表示をした事で集中して見ることが出来るようになってきた。

・お友だちが前に出て発表をすることで興味を示して前を向いて話を聴く事が出来るようになってきた。

【実践事例２】

《幼児の実態》

・集団ゲームは好きで、イス取りゲームやフルーツバスケットなど楽しみながらしている。ゲーム開始時は集中して音を聴き、友だちが言う言葉も聴いて楽しむ事が出来るが、次第に集中力が途切れると大きな声を出して友だち同士お喋りをしたり、姿勢も悪くなりゲームが続かない事がある。

・伝言ゲームでは、ルールは理解しているが声の調節が出来ずに隣の子にも聞こえてしまう事がありゲームが止まってしまう。自分の番が終わると、終わった子同士で遊び出し動き始める姿がある。

《保育者の願い》

・集中力が持続し、最後までゲームを楽しめるようになって欲しい。

・みんなで楽しみながらゲームを出来るようになって欲しい。

・子ども達同士でアイディアを出し合って、ルールを教え合いながら最後まで楽しんで欲しい。

・個人ではなく、クラスみんなで仲間意識を持って関わって遊んで欲しい。

《保育教諭の関わりと援助》

・集中力や聴く力の持続が難しいクラスのため、子ども達が好きな集団ゲームを取り入れる。保育教諭も一緒に楽しみながら行うことでルールの再確認ができる。ルールの理解が難しい子でも保育教諭がいる事で安心して楽しむ事が出来る。

・声の調節が難しく大きな声を出してしまう時には、こえのものさしの表示を見せて知らせる。

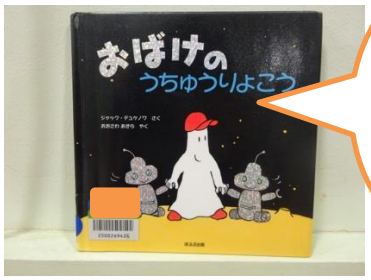
・クラス全体的に、仲間意識が薄く個々で遊ぶ子ども達。友だちと関わって遊ぶ姿が見られないため仲間意識が芽生えるように全体で楽しめるような活動を行う。

《幼児の変容》

・子ども達が好きな集団ゲームを行う事で説明を聞く、友だちが言う言葉に耳を傾ける姿が見られるようになってきた。

・お集まりの際や、伝言ゲームの際に声の調節が難しくて大きな声で話をしている子がいる為、全体に声のものさしの絵表示を見せ、実際に保育教諭が手を使って「声小さくしようね」と合図をする事で保育教諭の顔を見て声量の調節ができるようになってきた。

・進級時はクラスの友だちに興味関心がなく個人で遊んだり、友だちと一緒に関わって遊ぼうとする姿が見られなかった子ども達だが、仲間を意識できるように集団ゲームを取り入れた事で少しずつ仲間意識が芽生え始めてきた。それにより、友だちの声に耳を傾けて会話が弾んだり、困っている友だちがいたら助けてあげようとする優しさも見られるようになった。



・相手に言葉を伝える手段が、伝言ゲームに似ていて子どもたちお気に入りの絵本。

・伝言ゲームの様子。後ろの友だちが気になるけど自分の番になるまで集中。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・居心地の良いクラスづくりや誰でも分かりやすい絵表示、具体的な短い言葉を使う事で理解するようになってきている。言葉を理解し行動に結びつける事が出来る。（例）先生向いてね・手はおひざ・背中まっすぐ等。

・朝のひとときや、お集まりで話をする際に素話や保育教材を取り入れた事で保育教諭を見て話を聴くことが出来るようになってきている。

・座り方、話の聴き方が上手な子を学級の話題に取り上げ、褒める機会を増やした事で保育教諭や友だちの話が聞けるようになってきている。

・伝言ゲームを取り入れたことで、友だちに伝える時はひそひそと小さな声で伝えることを理解して友だちの声に耳を傾ける姿も見られるようになってきている。

・お集まりの際に保育教諭が教室の前方へ座ると、自然と集まることが出来るようになってきた。

・子どもたちと一緒になって遊び、会話もたくさんして信頼関係を築いてきたことで、保育教諭の話を聴こうとする子が増えてきている。

②課題

・子どもたちが視覚的に分かりやすく絵表示をしたことで、一学期よりも話を聴く姿勢や、保育教諭を見る力はついてきたが、中には姿勢が崩れてその都度声かけが必要な子もいる為、引き続き継続していく。
・遊びを通して聴く力を身につけるために、具体的な手立てとして集団ゲームを計画してみたがクラス全体が落ち着くまでに長期間かかったため全ての遊びを実践する事が難しかった。伝言ゲームに似た内容の絵本を見たことでイメージしやすかったのか伝言ゲームはスムーズに行える事が出来た。しかし、まだ声の大きさの調整が難しい子どもたちもいるため、今後も引き続き伝言ゲームを楽しみながら声の調整ができるようにしていきたい。

③実践を通した自身の気づき、考え

・進級時の子どもたちは、個性豊かで明るいクラスであり全員が集まるまでに時間を要したり、保育教諭の話を聴く時にすぐに姿勢が崩れたり集まりの場で思ったことをすぐに話し始める、友だち同士でお喋りをするなど集中力の続かない子が大半であったが、集中力を養うために保育教諭の近くに座らせて、アイコンタクトをとったり会話を交わすことで興味を持って話を聞く事が出来るようになってきた。
・保育教諭の伝えたいという気持ちを表現したり、真剣な表情をして聴く場面だと知らせることで落ち着いて聴けるようになってきた。保育教諭の気持ちが伝わり静かに聴く事が出来たら褒めることも大切である。
・子どもたちの、「聴く力・見る力」を育むために担任間の共通理解や毎日の振り返りを行い、翌日に繋げて教育・保育をしたことで少しずつ身に付くようになってきた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・課題の改善策としては、言葉で伝えるだけでなく子どもたちが見て理解できるようにイラストに文字を書き加えたり、お手本となる園児の様子などを掲示して視覚的にわかるように工夫していきたい。
・子ども一人一人が自身を持ってみんなの前で話をして、聞いてもらえることの喜びを味わい、また自己発揮できるような環境作りを行なっていく。
・園生活で、日々の子どもたちの様子を担任間で話をし共通理解をして同じ目標に向かって教育・保育をしていくことの必要性を感じているため、今後も引き続き担任間の共通理解と振り返りの時間を大切にして子どもたちの成長をサポートし、園生活を楽しめるように質の向上に努めていく。

〈主な参考文献〉

・内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成３０年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社フレーベル館
・多層的なかかわりで子どもたちが落ち着く・まとまる　保育者のための気になる子が複数いるクラスの整え方
令和５年　中央法規出版株式会社
・子どもの心を動かす　ことばかけ　平成２５年初版発行　令和２年第８刷発行　株式会社ナツメ社

様式３【課題研究レポート】

一人一人が自分の体を動かして遊ぶ意欲を育てる保育の工夫
―様々な運動遊びを通して―

うるま市立伊波こども園　保育教諭　名嘉真　紀和子

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」において示されている（１）心身の健康に関する領域「健康」では、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。」とあり、そのねらいとして次の３つが掲げられている（１）明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。（２）自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。（３）健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に着け、見通しを持って行動する。

これらのねらいに向かって子ども達の成長を促すためには、子どもの特性や発達に配慮するとともに、子どもの安心や安全を確保することが求められる。また、幼児期は、身体機能が著しく発達する時期であることから十分に体を動かして遊ぶことで、運動能力だけでなく、骨格や生理的な機能も発達させていくと考えられている。したがって、子どもの興味や能力などに応じた遊びの中で、自ら体を動かす心地良さを味わうことができるような遊びや活動を用意し、環境を整えることで、もっとやりたい、挑戦したいという気持ちが生まれ、意欲的、主体的に取り組む姿が見られるようになるであろうと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　子どもが進んで戸外で遊び、楽しさや気持ちよさが味わえるような援助の工夫

固定遊具や鬼ごっこや等を通して、立つ、座る、走る、跳ぶ、持つ、投げる等遊びや活動に必要となる基本的な動きを経験し身につけさせる。

②　いろいろな運動遊びに興味を持ち、全身を使って運動する楽しさが味わえるような環境の工夫

自分の目標に向かって繰り返し挑戦する姿を認めたり、友達と遊び方やルールを確認し合ったりすることで仲間意識を高めていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）【実践事例１】

《幼児の実態》

・運動遊びを通して、縄跳び・鉄棒・登り棒・うんてい・ブランコ・フラフープなどの運動遊具を使った遊びに興味を持って挑戦する園児が増えてきたが、苦手意識を持ちすぐにあきらめてしまったりと個人差がある。

《保育教諭の願い》

・運動遊具を使った遊びの楽しさや、くり返し挑戦し、楽しんで欲しい。

・力を発揮し、意欲的に取り組めるようになって欲しい。

《保育教諭の関わりと援助》

・チャレンジカードを用意し、取り組めたものにはシールを貼ることを繰り返すことで達成感や自信につなげていった

・縄跳び・フラフープ・竹馬などを用意し、進んで体を動かして楽しめる環境を整える。

・出来るようになったこと、頑張ったことをみんなの前で発表する場を持つ。
・個別で具体的な援助を行い、達成感を味わえるようにする。
《変容と考察》
・友達の姿を見る事で「自分もやってみよう」と刺激を受け、挑戦するようになった。
・縄跳びで跳んだ数を先生に教えてもらったり、竹馬を支えてもらったりすることで、自分が頑張っている姿を見守ってもらえているという安心感を持つことができた。

【実践事例２】
《幼児の実態》
・縄跳びが出来るようになり、長縄跳びが数十回跳べるようになってきた。
・一人だけで跳べることへの挑戦が増える。
・複数人で跳ぶ事へ挑戦することも増えはじめた。
《保育教諭の願い》
・友だちと協力し合い、回っている長縄跳びを交代で跳び続けて楽しんで欲しい。
・遊びの決まり、ルール、順番を友達同士で話し合い決めて欲しい。
《保育教諭の関わりと援助》
・「順番に中に跳んで入り、決められた数を跳んで出る」を教えていく。
・子ども達で、ルール、順番を決めていく様子を見守り、必要に応じて援助していく。
・友達同士で応援し、励まし合いながら全体での達成感を味わえるようにする。
《変容と考察》
・一人一人が数多く跳ぶことを楽しむ事から仲間へとつなげて跳んでいく姿を見る事で「仲間に入れて」「なにしてる？」「やってみたい」という声、気持ち、行動が増えていった。
・跳べること、数えることも子ども達で出来るようになり、個人で挑戦する姿から「仲間と一緒に挑戦する」事が出来た。そして喜びを共有していく事で友達同士を認め合いながら「ここでこう入ったら跳べるよ」と教え合ったり、入るタイミングを見計らって声をかけたりしながら「みんなで頑張れば出来るんだ！」と楽しさと仲間意識をより一層高めることが出来たのではないかと感じた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

運動遊具を使い始めたころは、興味を持ち、挑戦する一方、苦手意識がではじめ、取り組もうとしない姿も見られた。「出来ないからやらない」「後でやるから」とすぐにあきらめてしまう子もいた。個人差がある中でも保育者が声をかけ励まし、応援していく事で一緒に体を動かし楽しめるようになってきた。

②課題

今後の課題としては個人差のある遊び、活動への興味、関心に理解を示し、長い期間を通して継続的に行い、一人一人の心と体の育ちを支えられるよう、援助の仕方や環境の構成を生活の中で途切れることがないよう繋いでいきたい。

③実践を通した自身の気づき、考え

保育者に見守られ自信を持ったことから「友達と一緒に挑戦を楽しむ」「体を動かすことが楽しい」と繋がっていけたと感じることができた。遊びや活動の中で起きる気持ちの変化を乗り越えて、挑戦する意欲や出来た時の達成感や互いを認め合う心、教え合い助け合う心も育ったと感じた。友達同士で教えたりしながら会話が弾み、体験したこと、感じた気持ちを分かち合う事ができるよう豊かな心を育んでいけるよう丁寧に関わっていきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・１年目の初任者研修、２年目の教職２年目研修を通して理論的な学び、環境構成、実践など多くを学ぶことができた。「運動遊び」をテーマにし、体を動かす意欲を育てる保育の工夫を取り組み「健康」の領域から広くつなげていく事も出来た。運動遊びから友達との関わりの中で会話が増え、数を数えたり、気持ちを伝えあったり、楽しむ中で達成感や自信へとつなげていく事が出来た。運動が苦手な子に対しても配慮や声かけの仕方などを工夫していきながら運動能力だけでなく、日々の活動への興味、関心が深まりを増し、心と体の育ちを支えられるよう継続的に取り組んでいく。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　2018「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」　フレーベル館

・文部科学省　2013「幼児期運動指針ガイドブック」　株式会社サンライフ企画

・瀧川　光治　2021　「０～５歳児　春夏秋冬　環境づくり　すぐに使える 378 のアイデア」　ひかりのくに株式会社

＊2ページから３ページにまとめること

様式３【課題研究レポート】

言葉で表現する楽しさや相互に伝え合う喜びを味わう援助の工夫

―保育者や友達と心を通わせる体験を通して―

うるま市立赤道こども園　保育教諭　仲宗根　舞奈

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級の子ども達は４歳児（３年保育）２４名在籍中、うち１１名は進級児である。園生活に慣れている進級児を含め、子ども達は困ったことを伝える時に黙り込んだり、目で訴えたりする姿が見られる。自分の思いや気持ちの伝え方がわからず保育者の名前を呼ぶだけの子もいて語彙力の低さを感じた。

子ども達が生を受けたのはコロナ禍の真直中で、人との関わりを避け距離を置くことが必要とされていた。常にマスク着用のコロナ禍で育ってきた子ども達を取り巻く環境では、人と触れ合う機会が少なかったことが課題であることは明らかである。

したこと、見たこと、聞いたこと、感じたこと、考えたことなどを自分なりの言葉で伝えたい、身近な保育者や友達、表現できる機会を通して、言葉を伝える楽しさや相手に伝えたい、分かってもらいたいという気持ちの芽生えにつなげていきたいと考えテーマを設定研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　子どもが言葉で伝えたくなる活動や援助の工夫について

園生活の中で、心を動かされるような体験に繋がる環境構成の工夫をし、また周囲の友達や保育者に言葉で伝えたくなる活動や援助を行い、言葉で伝える楽しさを味わわせることが出来るよう取り組む。

②　言葉の意味や使い方が分かり語彙力に繋げていく援助の工夫について

一人ひとりの実態や発達に沿いながら、言葉の意味や使い方をその都度具体的に分かるように丁寧に伝えていく援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

事例①「またやりたいね」

戸外遊びの中で、これまで育ててきた夏野菜を全て収穫し終わった栽培園を見つめる子どもの姿が見られた。また「学級でまた何か育ててみたいね」と話すと「やりたい」「大根やってみたい」等、意欲的に話し合い、積極的に植えたい野菜を発表したり、友達の意見に頷いたりする姿が見られた。

その週の戸外遊びへ向かうある日、「先生、何するの？」「なんでそれ持ってるの？」とスコップを用意している保育者に気づき、興味関心を持ち尋ねてきた。「今日、先生は野菜のおうちづくりをして遊ぶの！」「え？やりたい！」とＡ児が反応した。Ａ児との会話から周りの子の興味関心を誘いながら広場へ向かう。「先生、さあ、やろう！」とＡ児の意欲的な声がする、籠からスコップを手に取り一緒に土を掘り起こす。しばらく二人で掘っていると「何してるの？」「やりたい」とその様子を見ていた子が近づいてきた。スコップを手に取り、一人また一人と子ども達が集まり楽しそうに土を掘り起こしたり、土の感触を味わったりと楽しんでいた。

「冬野菜のおうち、どこに何植えようかな」と話すと、「ここに大根植えよう」「うん、うん」「野菜と

おうちだけでは分からないから看板作ったら」等と子ども達は夏野菜栽培経験を思い出しながら、冬野菜の植え付けをイメージし会話を楽しむ姿があった。

戸外での遊び時間を考慮し、ある程度耕したところで他の遊びに誘ってみる。子ども達は「もっとやりたい」と引き続き栽培園で過ごしている。そのうち土を掘ることから盛り上げることに関心が変わり、「山づくり」に発展した。興味関心を持ち始めた子が更に増え栽培園に集まってくる。「スコップどこから？」「あっちのかご！」「先生スコップもう無い！」「スコップ貸して」「あとでね」等と会話が聞こえてくる。子ども達は手で土を盛り土の感触を味わったり会話したりしながら、山づくりを楽しんでいた。

気が付くと、３つのグループに分かれ、「山づくり」を友達と協力し合い行っている。「どっちが大きいかな」「やばい！あっち大きい」等と競い合いながら一番大きい山づくりを目指し遊んでいる。しばらく友達と山づくりを楽しむ姿が見られた。最後に他の遊びを楽しんでた子も栽培園に集め山づくりの遊びを紹介した。皆で３つの山を眺め、どの山が大きいか、どの山の形が広がっているか、どの山が少ない人数で協力し合ったか、話したり観察したりして過ごす。どの山もそれぞれ「１番」をもらい拍手で認められ笑顔が見られた。学級に戻る際、「また、やりたいね！」と聞こえた。

事例②「また会おうね」

広場で捕まえた黄色いカマキリに「すごい」「部屋で飼う！」と観察ケースに入れて学級で飼育していた。初めのうちは小さなバッタを捕まえカマキリの餌に持ち帰る姿や草花を交換してあげる姿が見られていたが、日が経つにつれて特定の子のみ世話をする姿が見られた。雨天続きで戸外に出られず餌の確保が難しい日も増え、カマキリのお世話も疎かになっている。タイミングを見計らって子ども達と話し合いカマキリをどうしていくか決めることにした。

「学級には友達がいるけれど、家族は側にいないし、お腹がすいても自分で餌は取れずになんだか可哀そうだね」と子ども達が分かりやすく理解できるようカマキリの状況を投げかける。「広場に行こう」とすぐに声が上がった。広場に行きカマキリの為にどうしたいのか尋ねると、「餌をとる」「逃がしてあげる」の意見が分かれた。何故その行動をしたいと思ったか聞くと「お腹すいて可哀そうだから」という子や「一人ぼっちで可哀そうだから」という言葉が出てきた。どちらの意見もカマキリを思っての言葉であることを確認しながら、飼育することの責任を伝えていく。

空腹にならないよう寂しくならないよう常に世話が必要であること、生きている命であること、その中で子ども達にどちらがカマキリにとって良いかと多数決をとると、ほとんどの子が逃がしてあげたいという意見に変わっていた。

その決定時に目が潤んでいる子がいることに気づき、その子に声をかけると「大丈夫」とだけ返ってきた。その子は複雑な感情を言葉で表現するのが難しいようである。一緒に過ごしてきた時間を振り返り、カマキリと離れる寂しさや思い出を代弁し、その気持ちに寄り添う。言葉にして良い感情であることも同時に伝えていく。すると保育者の言葉と一緒に「大丈夫だよ」「また会えるよ」と寂しがる子に優しく声をかける子が数名いた。

晴れ間を見て広場へ行き、どの場所に逃がしてあげるとカマキリが喜ぶのか、子ども達と考え「家族が見つけやすい様に」「ごはんがいっぱいあるところに」「高い所がみんなの事見えるんじゃない」等と、子ども達は思い思いの場所を話し、少し高い木の枝にカマキリを逃がした。枝から動こうとしないカマキリを見て「みんなにさよならって言ってるんじゃない」等と会話が生まれた。最後は「また会おうね、ありがとう」と皆でさよならをすることが出来た。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

《事例①》

・保育者は、子ども達と一緒に冬野菜を植えるための土づくり、耕すことを一緒にやりたいという目的を持っていたが、土と触れ合う遊びを展開しながら遊んでいる楽しそうな子どもの主体的な姿を見て、少し見守ることにした。耕すという目的ではなく、子ども主体の遊びの一つとして受け入れたこと、保育者の計画を切り替えたことで、子ども達の興味関心が広がり、友達と一緒に夢中になる姿が周りの友達にも影響を与えた。

・土と触れあう楽しい体験を共有することができたこと、またスコップの貸し借りや山づくりの競い合いから、会話が広がったこと、自分の思いや感じたことを互いに言葉にして伝え合う楽しさ、会話が広がる楽しい雰囲気を味わうことができた。

《事例②》

・飼育していたカマキリの為に、どうしたらいいのかカマキリの立場になって考える機会を設けたことで、意見を出し合い一人一人が自分の思いを挙手で表現する姿に繋がった。そこから言葉で引き出すように応答的な関わりや援助をすることで、自分だったらと立場を置き換えて想像したり相手の気持ちに気づけたりと保育者や友達と心を通わせる体験ができた。

☆どちらの事例も、子ども達の興味関心のある自然体験に関わるもので言葉の領域に繋がっている。また友達とその時間や空間を共有することで会話が弾み語彙の獲得にも繋がっていると思われる。５領域の相互関係の繋がりが強く感じられた。

②課題

・自分の思いを言葉にして表現し、様々な感情を言語化する力が必要に思える。語彙力の向上につなげていく必要性や、気持ちに折り合いをつけていく力、自分で解決していく力を改めて大切の思い、育てていきたい。

③実践を通した自身の気づき、考え

・自然との関わりから、子ども自ら関わり楽しさを味わう体験、命の大切さを知り、生き物にやさしく関わり持てるよう環境の工夫は大切である。

・子ども主体の活動を心がけ、互いの意見や思い、考えを知り、話し合うことは活動のきっかけとなる。

・自然体験を通して、友達や保育者など身近な人と言葉で伝え合う楽しさの共有をするよう心掛ける。

・自然体験の中で物や生き物、保育者や友達との関わりから、きっかけとなり言葉の獲得に繋がっている。人的・物的環境は言葉で伝え合う上で欠かせない相互作用があるということを実感した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・絵本の読み聞かせや絵本貸し出しを通して、豊かな感性や語彙力に繋げていきたい。また、家庭や保護者との連携も必要である。

・一人一人の気持ち、思い、考えを受け止め、その子なりの言葉の表現を見守り、相手に伝わる心地よさ、喜びが体験できることを環境設定の工夫等で支援していきたい。

〈主な参考文献〉幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説

自己肯定感を育て、互いを認め合う援助の工夫

～学級活動や遊びを通して～

うるま市立与那城こども園　保育教諭　平敷　美咲

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼児期は、家庭という限られた世界から一歩踏み出し、園生活を送る中でいろいろな人の存在に気付き、かかわりを求めるようになるというように、人とかかわる力の基礎を培う重要な時期である。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の人との関わりに関する領域「人間関係」では、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養うことを目的とし、「社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける」をねらいの一つにあげている。

本学級の幼児は５歳児（３年保育）男児 12 名、女児６名、計 18 名在籍し、行動力があり人前でも物怖じしない子が多い。朝や帰りのひとときには手遊びやクイズ出題を進んで行なうなど積極的に前へ出て友達へ呼びかける姿がある。一方で、自己主張が強いため友達とぶつかり合うことも多く、相手の意見や気持ちに気付けず、遊びが途中で終わってしまうこともある。感情のコントロールが苦手なため強い口調になり要求を通そうとする姿も見られる。

そこで、互いの感じ方や考え方、行動の仕方に関心を寄せ、友達の「よさ」に気付き、子ども同士で共通のイメージや目的をもって遊ぶことの楽しさや、充実感を味わってほしいという願いを込めて、テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自他の理解を深め友達の「よさ」に気付ける援助の工夫について

自分のよいところに気付き、他者からの受容や肯定的な評価を得て、自己肯定感を高められるようにする。また、友達と様々な感情の交流ができるような関わりの工夫を行ない、それぞれの違いを感じながら、相手の思いを受け止めて友達の「よさ」を受け入れることができるような援助を行なう。

２　仲間への信頼感をもって互いにかかわりを深め、協同して遊ぶ環境の工夫について

園児の能動的な遊びや友達とのかかわりのなかで自発性を獲得できるような遊びの工夫を行なう。また目的を共有したり役割を意識したりするなかで、協同して遊ぶことを楽しめる環境の工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】「エイサー遊び」

【子どもの実態】
- 友達と同じ遊びを楽しもうと誘い合う姿があり、自分のやりたいことは積極的に発案や準備をするが、相手が思い通りにしてくれない時にはに苛立ち、相手を責めたり「もうやめた」と遊びからすぐ離れる子がいる。
- 友達とのコミュニケーションが少なく、他児と少し距離をとって様子を眺めている子がいる。

【保育教諭の願い】
- 自分でやりたいことを選択し、自分が思ったことができたということを喜ぶ気持ちを持ってほしい。
- 友達と思いを伝え合い、試行錯誤しながら共に活動する楽しさを味わい、共通の目的が実現する喜びを感じて欲しい。

月	子どもの姿	保育教諭の関わりや環境構成
６月	・地域の児童館でエイサー教室があり、参加した子が園でも「やりたい」と要望し、始める。(Y 児) ・エイサーを好きでよく見に行っているという A 児が、Y 児のパーランクーを持って踊る姿を見て、真似るようになる。	・必要なものを子どもと相談し、必要最小限のものを準備する。。 ・地域のエイサーの音源を準備し、自由に CD デッキが使えるようにする。

７月	・七夕で使った笹で「はたを作って」と要望がある。(Y 児) ・旗づくりを手伝いたいと A 児も参加し、ひらがなを書く担当になっていた。 ・旗を作ったものの、Y 児と A 児はパーランクーをやりたいので仲の良い I 児に「旗もって」と声をかけている。 	・笹の枝切りや、やすりかけを一緒に行なう。 ・子どものイメージを聞き、必要なものを一緒に考え準備する。 ・一緒にやりたいが思い通りにいかない子のそばで一緒に参加しながら、Y 児、A 児の熱中して根気よく取り組む姿を伝えていく。
８月	・Y 児、A 児、I 児を中心にエイサーを楽しむ。 ・園庭でも踊れるスペースができると、異年齢の子ども達も興味をもって見に来るようになる。 ・手作りの三線や扇子を使って踊りを楽しみ、次第に「もっと大きくしたい」「頭にかぶるやつもつくりたい」とエイサーに必要な自分のわかるものを製作するようになる。 ・県内の祭りやお店などでエイサーを見てきた子が増えて、踊りに参加していなかった子も「やかん持っていたよ」と友達に伝えたり、エイサーに興味を示しはじめあそびに参加するようになる。 	・戸外でも出来るよう、場の確保を行なう。 ・興味を持った子がすぐ一緒に踊れるよう、パーランクーの数を増やす。また子どもからの要望で大太鼓やクバ傘も出す。 ・エイサーのイメージがより具体的になるよう、廃材で三線やチョンダラーのクバ扇子を作る。 ・エイサーの観覧席を設け、踊る以外の参加の仕方（水配りや屋台のひと）ができるようにする。
９月	・2 学期が始まって 1 号認定児も加わり、自分の役割を見つけ、仲の良い友達を誘い合い、エイサー遊びをする子が 20 名ほどに増える。戸外遊びで毎日エイサーをし、自分なりに表現を楽しむ様子が見られる。 ・お客さんを「もっとたくさん呼びたい」「みんなに見せたい」との声が上がり誕生会で披露する。 ・誕生会で披露したことで、異年齢児がエイサーメンバーへ憧れ、他クラスでも遊びが盛り上がる。 ・エイサーが好きな子は地域の伝統曲のみにしか興味を持たず、もともとエイサーに興味が薄い子には、伝統の曲は聞き取りが難しい様子がみられる。	・子ども達の声から、誕生会のお楽しみで披露できる機会をつくる。
12 月	・発表会でも各学級でエイサーをやりたい子が５～10 名でている。保護者にも披露できることが決まり、“待機している時はどのようにしたらよいか”“振りのタイミングを合わせるようにしよう”等細かい部分まで話し合うようになっていた。	・発表会でも演目として披露する。たくさんの保護者や観客に観てもらえる機会になる。

≪子どもの変容≫

・熱中している友達の姿に刺激を受け、同じ楽しみを共有するため、友達にやり方を聞いたり、自分のやりたいことを伝えて受け入れてもらえるかを伺うようになった。

・遊びの中で友達と交わることが少なかった子も、エイサー遊びの中でやりたいことを見つけ、自分なりの役割をやり通そうと意欲をもって取り組んでいた。

【実践事例２】　S 児（抽出児）について

本研究においては特に抽出児 1 名に視点を当て、園生活や遊びに取り組む際の行動や発言を観察しながら変容をみていく。

〈S 児の姿〉

・進級し仲の良い子とクラスが分かれ「園が楽しくない」と話し、登園時の行き渋りがあり、一人で過ごすことが多く、遊びも継続しない。

・これまで出来ていた布団畳みや、おにぎりを握るなどの身の回りの事を「できない！」と投げ出そうとする。失敗することに抵抗をもっており、保育教諭の援助により取り組むが、意欲をもって活動に参加することは難しい。
・友達の間違えや行動に敏感に反応して、すぐに怒りの感情がでて大声で指摘する。

〈保育教諭の願い〉
・自分を温かく受け入れてもらえていることを感じ、安心して過ごしてほしい。また、自分なりの目当てや期待をもって園で過ごすとを楽しみにしてほしい。
・ありのままの姿を認めることで、自己肯定感を高め「失敗しても大丈夫」と思える気持ちが持てるようになってほしい。
・頑張っている過程を見逃さず、具体的に褒めて認めることで、得意なことや好きなことに自信をつけて、他の物事にもチャレンジしようとする気持ちや態度を持てるようになってほしい。
・友達と様々なやり取りをする中で、自他の気持ちや欲求は異なることに気付き、理解しようとする気持ちや態度を持てるようになってほしい。

〈関わりと援助〉
・登園時は温かく迎え入れ、好きな遊びができる時間を確保したり、環境を構成し楽しく過ごせる場をつくったりする。
・保育教諭が子ども一人一人を大切にし、思いやりのある行動をするモデルになり、他者の感情や相手の視点に気付くような働きかけをする。(「ありがとう」「何か手伝うことはある？」の言葉かけ)
・生活の中で気付いて進んで行動している姿（ゴミを拾う・スリッパを揃える・雑巾の補充など）を認め、集まりなどでその姿を学級でも知らせる。
・1 日の振り返りなどで話をする際に、生活や遊びの中で楽しかったことだけでなく、様々な感情を抱いて過ごしていることを知るきっかけになるよう「感情の札」から自分の感情に近いものを選んで話ができるようにする。
・遊びの中で得意なことを発揮している友達の姿を知らせつつ、学級でも同じ遊びに挑戦しその難しさや面白さを共有する。(国旗カルタ・エイサー)

≪S 児の変容≫

【8 月】
・自分も周りに認められたいと、出来事を１日の振り返りで発表するようになる。

【9 月】
・気の合う友達と並行あそびをするようになる。
・エイサー遊びの中で自分なりの楽しみ方を見つける。

【10 月】
・園が「楽しい」と言い、朝は泣かずに登園できるようになる。

【11 月】
・「できない」と怒ることはなくなり、困った時には「おしえて」と保育教諭に伝えられるようになる。

【12 月】
・発表会で踊る曲のイメージを持って振付を提案したり、友達の意見を受け入れたりすることができるようになる。

・気の合う友達を見つけ本児のペースで友達との関係を築いている。目的や楽しみも見つけて期待をもって登園できるようになった。
・「自分でできる」と自分で言える物事が徐々に増えて、発表会ではあいさつや道具係を任されてやり通そうと頑張る姿があった。
・友達に対して、ささいなことに怒りの感情が先立っていたが、自分の気持ちに気付くことで「かなしかったんだよ」と感情を言葉にして話そうとするようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

1　成果

・好きな遊びを見つけ、友達と楽しむ中で自然と役割を考えることができるようになった。同じイメージが持て、具体化することで“自分のやりたいように”ではなく、そのイメージを実現するためにどうするかを冷静に話し合おうとするようになった。

・自他の気持ちや欲求が異なることに気付いたことで、理解しようとする気持ちや態度を持とうと歩み寄る姿がみられた。

２　課題

・協同して遊ぶ楽しみを感じている子がいる一方、子ども達でルール決めをしてトラブルになることもある。その都度、子どもたちの決めた約束事がみんなの納得のいくものであるかの話し合いの場をつくる必要が出てきた。

・子ども一人一人に目を向けて興味や関心を拾うようにしたが、多岐に渡る題材に環境構成や準備物の多さに手が回らなかったこともあった。

３　実践を通した自身の気づき、考え

・保育教諭が意図的に肯定的な声掛けをすることによって、友達へ向ける目が変化し良いところに気付くようになったと感じた。

・子どもが協同して遊ぶことに大きな課題意識があり、初めは一緒に遊べることを模索していたが、一人一人の興味や関心を遊びにつなげていくことで、自発性を獲得し、互いの関わりを深めていくのだと気付いた。

Ⅳ　実践のまとめと考察

自他の「よさ」を認め合うことで、友達との関わりを楽しめるようになり、相互理解や尊重し合える関係の中で自己肯定感を高めていける事が目標であるが、その一歩として今回は自分や相手を受け入れ、協同して遊ぶことをテーマとした。遊びの場面だけでなく、生活の中の良いところを見つけられるようになると、自然に遊びでも交わりが増え、言葉・表現・健康など様々な領域がつながっていることを感じた。

また環境には、文化的環境や地域・社会的な環境も重要であり、それらとの関わりが探求の始まりであることを知ることができた。自分なりに考えたり、試したりするだけでなく、友達の意見を聞いて共に探求することで遊びが深まった。遊びの継続が難しい子も、主体性をもって自分のやりたいことや役割を見出し、集団の中で共に楽しむために何が必要かを考える機会となった。

今後も一人一人の発達や内面の課題を深めていきながら、その子なりの友達との関わり方や遊びでの目的ややりがいを見つけていける援助を行なっていきたいと思う。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　2018 年『幼保連携型こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館
無藤 隆　2017 年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領ハンドブック～2017 年告版～』　学研

友達と一緒に遊ぶ喜びや楽しさを味わうための援助の工夫

― 友達との関わりが生まれる環境構成や援助を通して―

浦添市立牧港こども園　保育教諭　島袋　由起乃

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の第２章第４節「人間関係」の領域には「保育教諭や友達と共に過ごすことの喜びを味わう」と記されている。

本学級の実態としては、３歳児（３年保育）男児８名、女児 10 名計 18 名在籍しており、４名以外は集団保育の経験がある。入園当初は泣く子も多かったが園生活に慣れてくると、自ら好きな遊びを見つけたり、友達や保育教諭が遊んでいる姿に興味を示し、一緒に遊びを楽しむようになっている。活発に遊びを楽しむ子が多いが、遊びが続かず部屋の中を走り回ったり、次の遊びへと移り変わる姿も多く見られる。

その実態を踏まえ、安心できる環境の中で子ども達自ら興味関心を持ち、友達と共に過ごす楽しさや喜びを感じてほしいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　保育教諭の援助の工夫

子どもの遊びのイメージや見立てに寄り添いながら、友達と関わり合って遊べるように援助を行う。

２　主体的に活動できる環境構成の工夫

園児の主体的な活動を促すために、子どもの言葉やアイディアを生かしながら、遊びこめるような環境構成を工夫していく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

≪幼児の実態≫

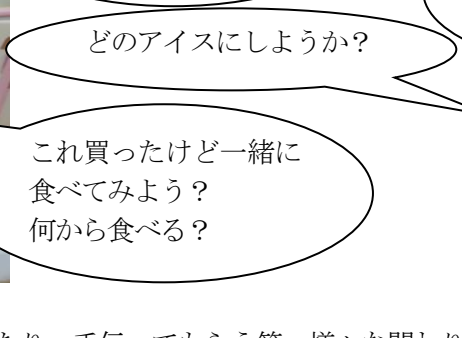
・大型ブロックでお店を作り、寿司屋さんやケーキ屋さん等、ごっこ遊びを楽しんでいる。
・友達や保育教諭が作っている物に興味を持ち、「〇〇みたいなの作りたい」と模倣して作る子が増えている。
・自分のイメージした物を形にすることが難しく、保育教諭に助けを求めている。
・自分の思いや生活に必要な言葉を相手に伝えることができず困っていたり、言葉のやり取りが難しい為、友達との遊びが続かない子がいる。

≪保育教諭の願い≫

・イメージした物を友達や保育教諭と一緒に作ったり、工夫したりする楽しさを味わって欲しい。
・自分の作品を見せたり友達の作品に興味を示す中で、こんな風に作ってみたいとイメージをふくらませたり、自分で作ることが難しい部分を友達や保育教諭から教わる中で様々な関わりを持って欲しい。
・それぞれの作る姿をお互いに見て、様々なことを感じ刺激を受けたり、同じ場で同じように手を動かして作業する同調性が居心地のよい空間となって欲しい。
・ごっこ遊びを通して、友達とコミュニケーションをとったり、言葉のやり取りを楽しんでほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

・子どもがイメージした物を作る姿を見守りながら、イメージに近付けていけるよう必要に応じて援助する。
・お店屋さんごっこを通して、友達とのコミュニケーションを楽しんだり、言葉を使ったやり取りを積極的に行えるように援助する。
・遊びを振り返る場を設け、友達の作品を紹介したり、次にどのような物を作りたいかクラスで話し合う中で、子ども達が遊びで楽しかったこと、工夫したことを保育教諭や他児に伝えたり、他児から聞いたことを翌日の遊びで試す等、先を見通しながら遊びを楽しめるようにする。
・保育教諭がごっこ遊びの中で役になりきって遊ぶことで、お店屋さんごっこに必要な言葉を子ども達に伝え、子ども達から言葉を引き出していけるようにする。



≪幼児の変容≫

・上手に作っている友達の模倣をしたり、手伝ってもらう等、様々な関わりが見られた。
・「前はお客さんやったから、今度はお店屋さんやろう」と役割を交代しながら遊ぶ姿が見られた。
・「これ買ったからここで一緒に食べよう」と友達と誘い合いながらごっこ遊びを楽しむ姿が見られた。
・「レジはどこにおこうかな？ここで買うから、ここに置いた方がいいんじゃない？」と置き場所を相談し合いながら決める姿が見られた。
・はじめのうちは商品を買う時お金がなかったので、「はいどうぞ」「ありがとう」と、やり取りを身ぶり手ぶりでやっていた。そうしているうちに、「お金がなーい。作ってみよう」と言う声が出た。「どんな形のお金にする？丸？四角？」「エディーも作ろう。シャリーンするのはどれにしよっか？」「お金払う時はカードでシュッてやるんだよ」とクレジットカードを使ってのお店屋さんごっこに発展していた。

【結果と考察】

・商品の作り方を子ども同士で教え合ったり、真似して作ってみることで、友達との関わりが広がった。
・自分の経験からイメージを広げて活動することができた。お店屋さんではお金が必要なことに気付き、どのように作ろうか友達と相談していた。
・「いらっしゃいませ」「何がいいですか？」「これください」「何円ですか？」等、言葉のやり取りが増えていた。今まで言葉が少なく遊びの中でのやり取りが続かなかった子も、友達と一緒に遊ぶ時間が長くなったことで楽しさを感じられるようになったと考えられる。
・友達と思いや考えを共有したり、友達との触れ合いを通して自分と異なる考えがある事を知り、友達の良さに気付くことが出来た。その中で、自分だけでは気付けなかったアイディアを知ったり、アイディアを取り入れることでさらに遊びが楽しくなったりする経験をすることができたと考えられる。
・帰りの会で遊びの振り返りを行うことで、次は何をお店屋さんで売ろうかみんなで考え、翌日に作りたい物を話し合ったり、明日への期待や楽しみを感じ、継続的な遊びができるようになったと考えられる。

Ⅳ実践の振り返り

・子ども達が興味を持っていることを捉え、主体的に遊べるようにするためには環境構成を意識して取り組むことが大切で、子ども達が「作ってみたい」「やってみたい」と思ったことを取り入れながら活動していると様々なアイディアが生まれてきた。またその姿に刺激を受け、それまで活動に興味を示さなかった子も自ら参加し始める姿も見られた。
・製作活動やごっこ遊びを通して、友達や保育教諭とのコミュニケーションや言葉のやり取りを楽しむことができた。
・好きな遊びが見つけられない子も、保育教諭が製作活動の場にいると側に来て見ていたり、真似して作り出す等、子どもの居場所作りにもなったと感じた。
・活動の振り返りをすることで、自分の気持ちだけでなく友達の思いにまで関心が広がり、活動への意欲もさらに深めることができた。

Ⅴ今後の実践に向けて

・自分のやりたいことが言えずにいる子、気持ちを言葉にできなかったりまだ上手に話せない子がいるので、子どもの声を聞きながら友達との関わりが多く持てるように仲立ちをしていく。
・一人一人にあった援助や関わり方について、保護者と連携を取りながら家庭での様子を聞き、子どもが興味を持っていることや、やりたい思いを引き出せるよう環境作りを工夫して、遊びの中で取り入れていけるようにする。

＜主な参考文献＞

・内閣府・文部科学賞・厚生労働省　平成 30 年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社フレーベル館
・高橋健介　2024 年　動画で学ぶ保育における子どもの遊び「遊びこむ」ための保育者の援助のポイント　中央法規出版株式会社

様式３【課題研究レポート】

安心できる環境の中、保育教諭や友達と共に様々な遊びを楽しむ子を育む

―様々な遊びを十分に楽しむ為の環境構成と援助について―

浦添市当山こども園　保育教諭　照喜名　優子

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う上で重要なものである。遊びを中心とした園生活を通して、より多くの人や物と出会い、心身共に豊かな関わりが体験できるよう、一人一人に応じた丁寧な援助や手立てが必要である。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の第２章第４節「健康」の領域・内容（４）には、「さまざまな活動に親しみ、楽しんで取り組む」と記されている。心と体の健康には、相互に密接な関連があることを踏まえなければならない。健康で安全な生活を営む基盤は、安全な環境の下で、心と体を十分に働かせて生活することにより培われるものである。

本学級の実態として、３歳児（３年保育）男児１３名、女児５名、計 18 名在籍し、大半は集団保育を経験しているが､入園当初は新しい環境に戸惑い､保護者と離れる際に不安そうに泣いている子の姿多く見られた。園生活の流れがわかり、少しずつ慣れてくると、好きな遊びを楽しむ子や、友達や保育教諭が遊んでいる姿に興味を示す姿が増えてきた。積極的に遊びに取り組む子の姿がある一方、どうしたらよいか不安そうな表情を見せ、保育教諭の傍から離れられない幼児の姿も見られる。

そこで、安心して過ごせる環境の下、情緒が安定し、一人一人が自分なりに伸び伸びとやりたいことに向かって好奇心や探索意欲をもって取り組めるよう環境､援助の在り方について研究したく､本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　幼児が安心して過ごせる環境及び、その為の援助方法について

幼児一人一人の個性や育ってきた環境、経験の有無について理解を深め、個人差があることに十分配慮した関わりや援助を行う。

２　幼児が自ら関わり様々な遊びを十分に楽しむ為の環境構成と援助について

生活や遊びを通していろいろなことに興味・関心をもち、自ら関わる意欲を持てるよう援助を行う。計画的に環境を構成し、幼児の『今』を受け止め、実態に即した環境の再構成を行っていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】

≪幼児の実態≫
- 友達の遊んでいる様子を傍観している子の姿も見られる。
- 砂の感触を感じながら、スコップや型抜きなどを使って、保育教諭や友達と同じ空間での遊びを楽しむ姿が見られる。
- 遊びにすぐに飽きてしまい、遊びが点々としている子の姿も見られる。
- 年長、年中児がトイなどの道具を使って遊ぶ様子に気づき、見ている子の姿が見られる。
- タライから水を汲んで、砂の上に流し込んだり、砂場に穴を掘り、水を溜めてみようとする姿が見られる。

≪保育教諭の願い≫
- 園生活に慣れ、安心して過ごし、遊びを楽しんでほしい。
- 砂や水に触れ、その感触を楽しんでほしい。
- 保育教諭や友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じてほしい。
- トイなどの道具を使って遊ぶことの楽しさや不思議さ、面白さに気づいてほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫
・砂場コーナーの道具を子どもたちが使いやすいようワゴンに種類ごとに分けておく。
・年長、年中児がトイに水を流して遊んでいる様子を一緒に見ながら、「水が流れてるね！すごいね」などと、興味が持てるような声かけをしていく。
・バケツやトイなど大きさや長さの違う物を準備しておくことで、使い方を工夫し、遊びが広がるようにする。
・長いトイを使用する際には、運び方を知らせたりするなど安全面にも配慮する。
・子どもたちが遊びの中で、「どうしたらいいのか？」と考えている姿を大切にし、疑問や気づきの声に一緒に共感していく。

友達と協力し合いながら、トイの組み合わせ方を工夫しています。
角度をつける為にケースや一輪車を利用していました。

≪幼児の変容≫
・一つのトイを壁に立てかけて水を流し、その流れる様子を一人で楽しんでいる姿があったが、長いトイを使う時に友達と協力して一緒に運んだりする中で自然と関わりが見られるようになった。
・壁を使わずに砂場の上でトイを斜めにするためにはどうしたらよいのかを考え、工夫する姿が見られた。初めは友達にトイを持ってもらい、角度をつけて水を流していたが、トイの下にバケツを入れることでトイが斜めになることを発見し、遊びが広がり始める。
・友達と協力して２・３本のトイを組み合わせて、水の流れを楽しむ姿が見られた。
・トイをアルファベットのＹの形のように組み合わせて水を流し、その流れ方をじっくりと観察する。両方のトイから一緒に水を流してみるとどうなるのかなど、遊び方にも変化が見られた。
・何本か繋ぎ合わせたトイの重なり合ったわずかな隙間から水が下へ流れ出ていくことに気がつき、気づいたことを言葉で伝え合う姿が見られ、共感し合っている様子が見られた。
・トイに葉を浮かべて水を流してみると、途中トイとトイの継ぎ目の所から葉が流れ落ちていることに気がつく。「どうして葉が落ちてしまったのか？」と考えていると継ぎ目から水が漏れているから葉も落ちてしまうことを発見。「水が漏れないようにするためにはどうしたら良いか？」、一人の子がトイの下にあったバケツをどかしてみる。「バケツを取ることで水が上手く流れるかも」と予測、しかしトイの角度がなくなり、水が流れなくなってしまった。それを見た子が「真っ直ぐにしたら流れなくなるよ！」と教えてくれた。遊びの中で教え合ったりする姿も見られ、友達と関わりながら遊ぶ楽しさを感じている姿があった。
・道具を使い工夫しながら、じっくりと遊びを楽しむ姿が増え、「明日もやりたい！」と次への意欲や期待感を持っている様子が見られた。

うーん・・・
どうやったら、お水が最後まで流れるかな？

トイをたくさんつなげてみたよ！今度は山を作ろう！穴も掘ってみよう！

≪結果と考察≫
・子どもたちの疑問に共感し、一緒に試したりすることで、更に遊びへの好奇心がかき立てられたようであった。友達と遊びの中で協力し合うことで、体験、経験を一緒に共有することができ、より楽しさや喜びを感じることができたのではないかと考える。
・繰り返し活動する中で、トイの角度をつけることで水の勢いが変わることや、流す水の量によっても変化することを遊びを通して学んでいった。
・遊びを通して、自ら気づき、疑問に思うことが遊びの発展に欠かせないことで、そこから考え、何度も試してみることに遊びの面白さを感じ取った姿があった。教えてもらうだけではなく、自ら気づくこと、知ること、学ぶことを大切にし、継続的な遊びへとつなげていきたいと考える。

【実践事例２】

≪幼児の実態≫
・年長児が色水遊びをしている様子を傍でのぞき込んだりし、様子を伺っている姿が見られる。
・色水遊びに興味を持っているが、どんな風に作ったら良いかわからず、なかなか踏み出せない様子が見られる。
・園庭にある草花に興味を持つ姿はあまり見られない。
・年長児が色水遊びをしている様子に気がつき、興味を持つ姿が見られる。

≪保育教諭の願い≫
・「やってみたい！」という意欲を持ち、「楽しい！」と感じる経験をしてほしい。
・色水遊びを通して、身近な草花に触れる経験をしてほしい。
・自分なりのイメージや思いを持って、色水作りを楽しんでほしい。
・色水遊びを繰り返し楽しむ中で、考えたり、試したり、工夫しながら遊びをつなげていってほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫
・子どもたちが手に取りやすいように、道具を準備しておく。色水を入れる容器（ペットボトル・ゼリーカップ・ビニール袋など）も十分に用意しておく。
・道具の片付けがしやすいよう、分類して片付けられるようにする。
・興味を示しているものの、どうやったら良いかわからず戸惑っている子の姿も見られる為、年長児が活動している様子を子どもたちと一緒に見ながら、「花をすり潰すと色がでてくるね」「お水はどのくらい入れているのかな？」など具体的な問いかけをしながら、道具の使い方や色水の作り方を知らせていきながら、子ども自身の気づきを大切にしていく。
・色水に使う花を一緒に探したりしながら、花の色や名前を知らせていき、身近な草花にも興味が持てるようにする。
・子どもの発見や気づきに共感し、一緒に驚き、喜び合いながら遊びを進めていけるようにする。

≪子どもの変容≫

・保育教諭と一緒に色水遊びを楽しむ中で、安心してやってみようとする姿が見られるようになってきた。
・ペットボトルに水を入れ、その中に好きな花を入れたオリジナルボトルを作っている子がおり、自分なりの思いやイメージを持って取り組み、その子なりの遊び方を楽しんでいる姿が見られた。
・なかなか自ら遊びに入っていけない様子が見られた子が、「先生、色水作りたい」と自ら思いを伝え、主体的に遊びに向かう姿が見られるようになった。
・「どの花を使ったら綺麗な色がでるかな？」「どんな風にしたらお花の色が出るのかな？」と使う花も考えながら選んでいる姿がある。
・「お水はどれくらい入れるのかな？」と考え、何度も試してみる姿が見られた。多く水を入れすぎると色水が薄くなってしまうことも遊びの中で学び取っている。また、すり潰した花に少しずつ水を足していき、濃さを調整したり、一度作った色水にすり潰した花を混ぜて、濃い色水に作り変えるなど遊びの工夫が見られた。
・繰り返し色水遊びを楽しんでいた子の中で「赤の色水が作りたい！」と張り切って作り始めるが、思っていた色を作り出すことができず、目に涙を浮かべ「赤の色ができない」と悔しそうに訴えていた。赤色をイメージして花を選んでいたが、色水は赤色にはならなかった。上手くできなかったことに対して「どうして？」と不思議さや悔しさを感じながらも「次は・・・」と意欲的な姿が見せ、遊びの継続へとつながっていった。その後、諦めずに何度も試す中、念願の赤色の色水を作ることに成功し、満面の笑みを見せてくれた。

みんなで一緒に作ると楽しいね！

遊びが発展して、色水を固めて氷作りをしたり、水に花を綺麗に並べて浮かべた氷を作っている。色水遊びから更に遊びが展開している様子が見られた。

【結果と考察】

・遊びを通して、疑問を持ち、どうしらた良いかを考えながら、何度も試したり、試行錯誤することで、更に遊びを楽しくさせ、子どもたちのどきどき・わくわくの気持ちを倍増させているようであった。
・身近な草花を遊びの中に取り入れることで、自然と触れ合う機会が増え、花の色や名前にも少しずつ興味ができてきようであった。
・何度やっても同じ物ができない唯一無二のオリジナルの物を作る楽しさを感じ、遊びの継続が見られた。

Ⅳ　実践の振り返り

クラス全員が新入園児ということもあり、慣れない環境の中、戸惑っている姿も多く見られたが、一人一人の思いを十分に受け止めることで、不安感が和らぎ、周りの様子にも目を向けることができるようになってきた姿があった。保育教諭と一緒に遊びを楽しむことから少しずつ色々な遊びを経験し、好きな遊びや自分のやりたい遊びを見つける一歩につながったと考える。

遊びの中で思い通りにいかない場面も多く見られ、子どもたちがそのたびに悩んだり、考えたりする姿が見られた。その様子から、様々なことに好奇心を持ち、「なぜ？」「どうして？」と考えることが学びへとつながっているのではないか。疑問に思ったことに対して、「こういうことなのかな？」と仮説を立てることから学びが始まり、遊びの中で仮説を実証していき、試行錯誤の連続となる。子どもはその時「知ることの面白さ」「探求することの楽しさ」を感じ取ることができるのではないかと考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

主体的な遊びの展開では、子どもの興味を増幅させる環境作りが大切であること、常に目の前の子どもと向き合い、子どもたちの興味、関心に保育教諭も目を向けなければならないことを改めて感じた。子どもたちが色々な経験ができる機会を意識し、環境を構成していくことが大切であり、子どもの実態に即した環境の再構成を日々保育の中で行っていきたい。やりたいことをとことん楽しめる環境、子どものやりたい思いを受け止め、叶えていけるような環境作りを今後も保育の中で意識し取り組んでいきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成３０年　幼保連携型認定こども園教育　保育要領解説　株式会社フレーベル館

互いの良さを認め合うための環境や援助の工夫

―自分を好きになり認められる経験を通して―

那覇市立与儀こども園　保育教諭　與那原　あずさ

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節の「人間関係」の領域において（7）「友達の良さに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。」と示されている。その中に、「それぞれの違いや多様性に気づいていくことが大切である。また、互いが認め合うことで、より生活が豊かになっていく体験を積み重ねることも必要である。」ともある。近年「多様性」という言葉をよく耳にするようになった。幼児期は、人格形成の基礎が培われる大切な時期である。この大切な時期に、個々の違いや良さを認め合い、コミュニケーションをとりながら生きていく力を培っていくことが重要だと考えられる。

本学級の幼児は、５歳児（２年保育）男児９名、女児１７名、計２６名が在籍しほとんどの子が集団保育経験のある学級である。戸外では虫探しや色水遊び、運動遊び等を楽しんでいる。室内では、製作遊びに集中して取り組む姿も見られる。自分たちで遊びを進めていこうとする一方で、相手の気持ちに気づかず、友達の行動に対して、強い口調で注意をしたり、自分の思いを通そうとしたりする姿がある。また、自分に自信がないことから、相手に上手く思いを伝えられない子もいる。

そこで、まずは自分自身の良さに気づき好きになり、認められ自信を持つことで、友達の良さにも気づき、一緒に活動する楽しさを味わいながら、協力し合える温かな雰囲気の学級になって欲しいと願い、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　安心して自分らしく遊びを展開できる環境の工夫

⑴ありのままを受け入れてくれる保育教諭との信頼関係を基盤に、安心して自己発揮や自分らしく遊びを展開できる環境を構成する。

⑵園児なりにイメージした遊びを形にしたり、遊びの広がりや継続を、友達と一緒に楽しんだりできるような教材や環境を工夫する。

２　自分の良さや友達の良さに気づき、互いを認め合うための援助の工夫

⑴自分らしく遊びを展開する中で、互いの感じ方や考え方、行動の仕方などに関心を寄せたり、それらが行き交うよう援助することで、友達の良さに気づいていけるようにする。

⑵保育教諭が園児の心に寄り添い、その子の良さや個性を認め、集団の場で個々の良い面を知らせる場や時間を意図的に設けることで、自信や意欲につなげ、互いを認め合えるよう援助していく。

Ⅲ　課題解決向けた取組（実践）

【実践事例１】（９月）お店屋さんごっこ～安心して自分らしく遊びを展開できる環境の工夫～

（園児の姿）

・廃材などを使い製作遊びを楽しんでいる。友達の製作物に興味をもち、教え合って製作する姿もみられるが、何をどうしてよいかわからず遊びに入れない子もいる。

・やりたいことはあるが、思いや考えを上手く伝えることができず、友達の遊びを傍観している子がいる。

（保育教諭の願い）

・ありのままの姿を認められ、安心して自分らしく遊びを展開して欲しい。

・お互いの思いや考えを伝え合いながら、同じ目的に向かって協力して遊びを進めていく楽しさを味わって欲しい。

・様々な素材に触れ、試したり工夫したりして、イメージした物を作り上げていく楽しさを味わって欲しい。

≪保育教諭の関わりと援助≫　☆環境構成　◎保育教諭の援助

☆子ども達と一緒に必要な物を考え、イメージに合う素材を用意する。いつでも製作活動ができるよう様々な素材の廃材や教材、道具等を十分に用意し、種類ごとに整理して使いやすいよう環境を整えた。

☆子ども達がイメージしやすいよう、スイーツの本やお店屋さんに関する本を用意した。また、いつでも読めるよう本立てに立てかける等の工夫をし、興味が深まるようにした。

◎うまく遊びに入れない子の内面理解に努め、心に寄り添いながら、思いや考える姿を認め、一緒に行動したり励ましたりし、安心して自分らしい遊びが展開できるようにした。

◎一人一人の意見やアイディアを認め、話しやすい雰囲気作りを行った。また、子ども達のアイディアをクラス全体で共有し、話し合える場を設けた。少数やクラス全体等、その内容と場に応じた参加人数を調整しながら、話し合いを何度も重ねる体験を通じて、友達と一緒に考えて取り組んでいけるようにした。

◎個々の取り組みを認め、上手く表現できない子に対しては、ヒントを与えたり、材料を提示したり、会話を通して頭の中のイメージをより具体的な言葉で引き出せるようにした。また、自分なりにイメージした物を完成できるよう、子どもなりの表現を認め、温かく見守りながら援助を行った。

≪Y児の活動エピソード≫～友達と関わることが少なく、一人で製作に取り組んでいる。～

保育教諭の読みとり・思い『お寿司を作っている子が多いが、Y児は興味のある物を自分らしい表現で楽しんでいるのかな。ありのままのY児を受け止め、認めた上で友達との関わりがもてるといいな。

Y　　児：「ぼくは魚を作りたい。でも上手く作れないよ。」
保育教諭：「いいね！お寿司屋さんじゃなくて、魚屋さんにしようか！魚の図鑑があるよ。」
Y　　児：「お魚は氷で冷やすんだよ。サバはこんな模様や色だよ。」
保育教諭：「よく知っているね！こんな材料もあるよ。」
A　　児：「Yさん、お魚のことよく知っているね！本物のお魚みたい！」

・保育教諭や他児にありのままの姿を認められたことで、自信へつながり、友達と関わるきっかけとなった。

種類ごとに整理をして使いやすいように環境を整えた廃材コーナー

言葉による伝え合い
～お互いの思いや考えを伝え合う～

協同性
～皆で協力しあう姿～

≪幼児の変容≫

・製作活動をしやすい環境を整えることで、「また明日も続きをやりたい！」と期待や楽しみをもって継続して遊べるようになっていった。

・これまでは製作活動に消極的だった子も、お店屋さんごっこに向けて遊びを進めていくうちに、自分で考え表現したり、友達と協力し意見を出し合ったり、どんどん遊びを広げていく姿が見られるようになっていった。

・始めは自信がなく自分の思いを伝えられなかった子も、ありのままを認められる体験を重ねたことで、友達や保育教諭との信頼関係を築いていく姿が見られた。また、自信をもち楽しそうに活動している友達に刺激を受け、楽しんで自分らしい遊びが展開できるようになっていった。当初は、友達との関わりがほとんどみられなかったが、思いを伝え合ったりするなど自ら関わりをもつようになっていく姿もみられた。

≪結果と考察≫

・ありのままを認めてくれる保育教諭との信頼関係が築けたことで、子どもが自分らしい遊びを展開できるようになったのではないかと考えられる。また、保育教諭の温かい集団を育てる姿勢がクラスの子どもたちにも伝わり、クラス全体が温かい雰囲気になり、皆で協力して楽しんで遊びを進めていくことに繋がったと考えられる。

【実践事例２】（１２月）生活発表会～自分の良さや友達の良さに気づき、互いを認め合う為の援助の工夫～

（園児の姿）
・運動遊びが好きな子が多く、園庭や遊戯室では大縄や短縄、フラフープなどを楽しむ姿が見られる。一方では運動遊びが苦手な子や、人前で表現することを恥ずかしがる子がいる。
・相手の思いに気づかず、友達に対して強い口調で注意をしたり、自分の思いを通そうとすることがある。

（保育教諭の願い）
・日頃楽しんでいる運動遊びを取り入れて、友達と一緒に生活発表会に取り組んで欲しい。
・生活発表会に取り組む中で、認められる経験を通し、自分の良さや、友達の良さに気づいたり、自信をもって伸び伸びと表現したりすることを楽しんで欲しい。

≪保育教諭の関わりと援助≫☆環境構成◎保育教諭の援助

☆はなさき山を作って貼りだし、優しいことをしてもらったり、友達の良い所を見つけたら花型の画用紙に書いて貼ったりなど視覚的にわかりやすい環境を整えた。

☆発表会で歌う曲「ともだちはいいもんだ」の歌詞を貼りだし、皆で声に出して読んだり、歌詞の内容を考えたり、友達の良さに気づけるような環境を整えた。

◎得意な運動遊びを発表する場を設け、友達や保育教諭に認められ褒められる経験を通して、自分の良さや友達の良さに気づき、自信をもち協力して活動できるよう援助していった。

◎一人一人が思いや考えを出し合い、受け入れながら取り組めるよう、活動を振り返る場を設け、グループでの取り組みをクラス全体で共有できるよう援助していった。

◎表現することが苦手な子に対しては、子どもの気持ちに寄り添い、その子の育ちを温かく見守りながら、頑張っている時はその姿を認め、自信につなげながら、活動の楽しさも伝えていくよう援助していった。

≪幼児の変容≫

・今まで運動遊びに自信がもてなかった子も、他児の取り組みに刺激を受け、頑張ろうとする姿が見られるようになった。また、友達や保育教諭に認められ、褒められることで自信がつき、やってみようという姿に繋がっていった。

・「今はブロックで遊びたいから練習やりたくない」「皆で力を合わせないとできないよ」等とチームの中で取り組みに対する温度差があり、始めは上手くまとまらなかったが、保育教諭も話合いに入り、お互いの思いを橋渡しする等の援助を通して、友達の考えに気づき、肯定的に受け入れたりすることができるようになった。

・これまで強い口調で相手に注意をする姿があったが、自分が認められる経験を通し、友達を認めようとする雰囲気ができ、友達を励ましたり、相手の良い所に気づいたりできるようになってきた。

≪結果と考察≫

・子どもの良い所や頑張っている姿をクラス全体で共有し、認められ褒められる経験を重ねたたことで、自分の良さや友達の良さに気づくことができ、自信をもち協力して活動できるようになったと考えられる。また、友達の良さを視覚的にわかりやすくする為の環境を整えたり、歌を通して友達の良さを考えたりしたことも、互いを認め合う良いきっかけとなったと考えられる。

Ⅳ　実践の振り返り

保育教諭が温かな姿勢で一人一人の心に寄り添ったことで、信頼関係を築くことができ、認められる経験を重ねた子ども達は、自分の良さに気づき自信をもち活動できるようになっていった。また、園生活の中で友達と色々な出来事を経験・共有し、葛藤を乗り越え、友達の良さや違いに気づくことで、一緒に活動する楽しさを感じ、子ども同士の関わりも深まっていったと感じられた。個人が育つと集団が育ち、集団が育つと個人が育つという関係にも気づくことができた。これからも、子どもが集団の中で、安心して自己発揮でき、互いに協力し育ち合えるような温かな学級を築いていきたい。その為には保育教諭と子どもとの心のつながりをもった温かな関係がとても大切になってくると改めて感じた。時折、強い口調で相手に注意をする姿がみられるので、保育教諭が子ども達のモデルとなれるよう努め、また幼児理解を深めながら今後の課題として引き続き改善できるよう取り組んでいきたい。

Ⅳ　今後の実践に向けて

子ども同士が認め合い、褒め合う温かな学級は、保育教諭の温かな関わりによって作られるものだと考える。温かな関わりとは、子どもの内面を理解することが重要だと思う。一方的に決めつけず、「この子はこんな気持ちなのかな」「この行動はどうしてだろう」などと、思いを巡らせ、子どもの心の声に耳を傾けられる保育教諭でありたい。子どもの成長を見守り、「何が育とうとしているのか」「何に興味があるのか」を感じ取り、今後は、子ども達一人一人が自分を好きになり、自信をもってより友達と親しみを深め、伸び伸びと主体的に活動できるような援助や環境の工夫を行っていきたい。

〈主な参考文献〉

・塚本　美知子　２０２０年３月　「子ども理解と保育実践」（株）萌文書林
・文部科学省　　２０１８年３月　「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」　フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

園児の好奇心・探求心を育むための環境構成と援助の工夫

～友達と心を動かす出来事を共有する体験を通して～

那覇市宇栄原みらいこども園　教諭　氏名　仲里　枝里子

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第２章第４節「環境」の領域には「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味関心をもつ。」とある。

本園は、０歳児～４歳児の５年保育で、本学級は男児７名、女児４名の計１１名が在籍している。園庭では野菜や花を育てたり、ちょうちょやセミ等をつかまえたりと自然に興味をもっている一方で、時間が経つと興味が薄れ、水やりを面倒がったり、世話を忘れて小動物が死んでしまったりすることがあった。園児が環境に好奇心や探求心をもって主体的に関わる為には、一番身近な環境としての保育教諭が小動物と遊んだり、餌を与えたり、草花を育てたりする体験を面白がりながら意図的、計画的に環境を構成することが大切であると考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　園児の自ら関わりたくなる環境の工夫について

園児の興味・関心に沿った環境構成を行い、「やってみたい」と園児自ら遊びや活動を選択し、取り組んでいく中で、思考錯誤を繰り返し、深めていけるような環境構成を行う。

２　体験する喜び、発見、驚きなどを友達と共有できる援助の工夫

幼児の思いや気づきを受けとめ、友だち同士で話し合ったり、相談したりする場をもち、興味関心が広がるような援助をする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

□ 幼児の姿　　○教師の読み取り　●教師の願い　★環境構成　◎教師の援助

【実践事例１】～興味関心～

５月、園庭で捕まえたバッタを虫かごに放置し、死んでしまう事があった。子ども達は、虫を捕まえる面白さを感じているが、生き物の飼育経験が少ない為、愛着がもてないのではないかと考え、子ども達が興味をもっているかぶと虫の飼育を始めた。「キャー気持ち悪い。」と触るのを初めは怖がっていたが、友達が幼虫を触っている様子をじっと観察していたＡさん。保育教諭が幼虫の土を替える様子に興味をもち、「私もやりたい」と土を替えたり、霧吹きで水をあげたりと意欲的に手伝うようになった。

触るのはちょっと怖いな･･･

これなら私にもできるかも！

○怖くて幼虫に触れられないが、お世話をすることで幼虫と関わりたいという気持ちが芽生えているな

●カブトムシ幼虫の飼育を通して、生き物への興味関心を深めて欲しいな

★幼虫に触れて遊んだり、子ども達自身でお世話ができるよう、霧吹きや大きめのタライ、新聞等を準備し、幼虫の様子が観察しやすいよう幅の狭い飼育ケースを準備した。

◎振り返りの中で気づきや発見を共有・共感できる場を作った。

【実践事例２】～観察したり、世話をする中での気づき、そして遊びへの発展～

８月、霧吹きで水やりをしていると飼育ケースの上部に丸い形の黒い物体があるのを発見した。「これなんだろう？」と触ってみたり臭いをかいでみたり･･･。近くにあった図鑑を調べ「うんちだ！」と気づく。「うんちなのに臭くないね」「土食べているからうんちも茶色なのかな？」「うんちがいっぱいで土が足りなくなってるよ」と気づいたことを保育教諭や友達と共有しながら世話を楽しんでいる。

タライに幼虫を入れて大きさを観察していると幼虫がすぐに土の中に潜っていくことにきづいたＢさん。「何で幼虫さん土に潜っちゃうんだろう？」「恥ずかしいのかな？」「かくれんぼしているんじゃない？」「じゃあ誰が一番かくれんぼが上手か競争してみようよ。」と幼虫のかくれんぼ競争が始まった。

かくれんぼ競争スタート

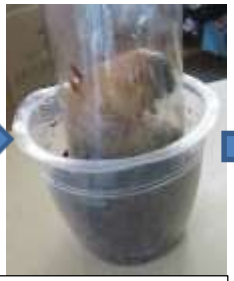
このカブト虫の幼虫かな？

この幼虫が一番もぐるのが早いよ。

【実践事例３】～感動体験を通して思いを伝える意欲へ繋げる～

カブトムシの幼虫から蛹に変体が始まると、飼育ケースを観察する意欲がぐっと高まった。変化を見逃すまいと、何度もカブトムシコーナーをのぞき込んでいる子ども達。「幼虫がオレンジ色にかわってる？」「ハナちゃん女の子だと思ったのに雄だったね。」「えー！！さっきまで蛹だったのに、遊んでいる間にカブトムシになってるよ！！」日々変化していく様子に、驚き、感じて気づいたことを友達と共有したり、絵本と照らし合わせたり・・・。一番の変化は、自分たちが気づき体験したことを誰かと共有したいと思う欲求が芽生えたことであった。

部屋の中央に虫コーナーを移動した



見やすいよう透明の容器に変更

蛹になったことで雄雌の違いに気づいた

脱皮の時間で色が違うことに気づいた

今はこれと一緒だよ。

○日々変化しているカブトムシの変化に感動して、思いを友達や親、保育教諭に伝えたいという気持ちが芽生えているな

●見たり、感じたことを自分なりの言葉で伝え合う楽しさを味わって欲しいな

★カブトムシの変化を見逃さないように、容器を工夫し、カブトムシコーナーの配置を園児が観察しやすい場所に設定した。

◎子ども達の気づきや驚きに共有、共感する場ををもつことで、思いが伝わった喜びが感じられるように援助した。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

- 子どものつぶやきや気づきから、興味をもっていることを実現できるよう環境を整えたり援助したことで主体的に観察したりお世話するようになった。
- 観察したことを図鑑で調べながら友達や保育教諭と気づきを共有する姿が多く見られた。
- 心動かされる体験をした際に、見たり聞いたり感じたり、考えたことを自分なりに言葉にして友達や周囲の大人に伝えたいという意欲に繋がった。

② 課題

- 前半は子ども達の気付きに沿ったドキュメンテーションを作成したが、後半まで継続してカブトムシの成長、変化に応じたドキュメンテーションを作り、掲示ができなかった。蛹から成虫に変化する成長の記録や子ども達の気付きを掲示していく事で更なる好奇心、探求心に繋がるのではないかと感じた。

③ 実践を通した自身の気づき、考え

- 一番身近な環境である保育教諭自身が面白がり、対象物に興味をもって意欲的に栽培・飼育していくことで、自然と子ども達の意欲に繋がると感じた。
- 子ども達の興味・関心を捉え環境構成することで、子ども達が主体的に環境に関わる姿が見られたことから、保育教諭が願いや意図をもって環境構成をする大切さを改めて感じた。活動の主体は子どもであることを忘れず、活動が生まれやすく展開しやすいよう環境構成し、再構成することや、保育教諭が先走らず、実態に沿った援助ができるよう幼児理解を深めていきたい。
- 栽培や飼育に関しては、家庭での経験の機会がないことが多く、園で初めて体験する子がほとんどであると感じた。その為、自然環境と初めて出会う大切な機会を奪わないよう、意図的、計画的に環境構成していく重要性を感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

- 思いや考えを伝え合ったり認め合ったりしながら遊びを進めていけるよう、振り返りの場の持ち方を工夫したり、遊びの様子を可視化したりする等、子ども達を繋げたり学びを深める為の援助や環境構成をさらに工夫していく。
- 自立心を育むため、引き続き子どもの興味、関心、遊びの様子を捉え、職員間で連携し、環境構成や援助の手立てを探っていく。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年 3 月「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」　フレーベル館

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　2020 年　「幼保連携型認定こども園における園児が心を寄せる環境の構成」　フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

思いを伝え合いながら遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫
―保育教諭や友達との関りを通して―

那覇市立真嘉比こども園 保育教諭　長嶺　里萌

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の領域「人間関係」のねらい(２)に「身近な人と親しみ、関りを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」とある。また、「言葉」のねらい(１)に「自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。」とある。安心して自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞こうとしたりするためには、保育教諭や友達に親しみをもち、言葉で伝える経験を重ねていくことが重要だと考える。

本学級は４歳児男児１６名、女児１４名、計３０名の新入園児で構成されており、ほとんどの園児が集団生活を経験してきている。好きな遊びを見つけて友達と伸び伸びと遊ぶ園児の姿が多くなってきたが、自分の思いを一方的に話す姿や、思いがうまく伝えられず口調が強くなってしまったり手が出てしまったりする姿もみられる。保育教諭がお互いの話を聞いたり、伝えたりできるように仲介するが、園児同士で思いを伝えられるようになるための、環境構成や援助の工夫が不十分な面があり、課題を感じている。

このような実態を踏まえ、友達と一緒に好きな遊びを楽しむ中で、安心して自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞こうとしたり出来るようになるにはどうしたら良いのか､環境構成や援助の工夫を研究したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　園児が保育教諭や友達に親しみを持って関われるような援助の工夫
　保育教諭が一人一人の発達や特性の理解に努める。また、園児の気持ちや内面理解に努め、安心して園生活が出来るように援助する。

２　自分の思いを伝えたり、相手の思いに気付けるような環境構成や援助の工夫
　遊びの場で感じたことや発見したことを発表する場を設け、クラスのみんなで共感したり、思いを聞いてもらう喜びを味わえるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】友達の良いところを知ろう！　～発表の場を通して～

〈園児の姿〉

・気の合う友達と一緒に遊ぶ姿があるが、思いが一方的だったり、口調が強かったりと、トラブルになる事が多い。
・友達の好ましくない行動や出来ていない所に目がいき、強い口調で指摘したり、保育教諭に伝えに来たりする。指摘された園児は、怒ったり、落ち込んだりする姿がある。
・遊びやクラスの活動の中で、「これは上手にできないからやらない…」と自信が持てない園児がいる。

〈保育教諭の願い〉

・自分の思いだけでなく、友達の思いも聞きながら、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。
・自分自身の良さを知り、自信を持ち肯定的に受け止めるようになると共に、友達の良さに気づき、親しみを持つようになってほしい。

＜★環境構成の工夫＞

★ふわふわの木と幸せハートの花を用意し、ふわふわの木が幸せハートの花でいっぱいになる様子を、視覚的に捉えられるようにする。
★「ふわふわとちくちく」の絵本をいつでも見られるように、ふわふわの木の所に置いておく。
★帰りの会等で、友達に言われて嬉しかった言葉や行動を発表し、全体で共有しながら認められる場を設け、自信を持てるようにする。

保育教諭の援助	子どもの変容
◎一人一人の頑張る姿や良いところ、優しい行動や言葉などを全体の場で紹介し、皆の良いところに気付けるようにする。 ◎「ふわふわとちくちく」の絵本を読み聞かせ、言われて嬉しいことや、されて嬉しいことを皆で考えていく。 ◎「ふわふわの木」を提示し、自分や友達が発表したことを貼りだすことで、花が増えていく様子を楽しみながら、友達の良いところに気づいていけるようにする。	・「今日は友達とこんなことを頑張ったよ！」と伝えてくれたり、「先生！ぼくは？」と自分や友達が紹介されることを楽しみにするようになった。 ・様々な活動に自信を持って取り組んだり、積極的に、保育教諭や困っている友達を手伝ったりする園児が増えた。 ・友達の好ましくない行動や、出来ていないことに対して、「一緒にやろう」などやわらかい口調で伝えられる園児が増えた。 ・友達に言葉で気持ちを伝えたり、友達の思いにも耳を傾けながら遊ぶようになった。

＜結果と考察＞

・目に見えない気持ちを、幸せハートに例え、視覚化したことで、自分だけでなく友達の気持ちにも気づき、それが友達との関り方を考えるきっかけになったと考える。
・自分の気持ちを表現し、それを受け入れてもらう経験を通すことで、自信を持って色んな活動に参加するようになってきたと考える。
・発表の場を通して、子ども達が自分の良さや友達の良さを知り、友達への親しみを持つようになったことで、困っている友達を手伝ったり、やわらかい口調で伝えるなど相手を思いやる気持ちが育ち始めたと考える。

【実践事例２】友達と一緒に遊ぶと楽しいね！　～映画館ごっこを通して～

〈園児の姿〉

・製作遊びが好きで、友達と一緒にジュースやポップコーンなど様々な食べ物を作ったり、塗り絵を使ってペープサートを作ったりすることを楽しんでいる。
・ペープサートと紙芝居舞台を使って、自分なりの表現を楽しんでいる。また、それを見ながら椅子を並べて映画館だよ！と言い、店員とお客さんに分かれてやりとりを楽しんでいる。

〈保育教諭の願い〉

・自分の考えを話したり、友達の考えを聞きながら、一緒に遊びを進めていく楽しさを味わってほしい。
・映画館ごっこがしたい！という思いが、遊びに繋がっていく面白さや充実感を、他の友達とも共有する経験を大切にしていきたい。

＜★環境構成の工夫＞

★様々な素材や廃材を準備し、作りたいものを作れる環境を整える。ごちそう作りの絵本やメニューを準備し、イメージしたものを形にする楽しさを感じたり、作った物を使って遊ぶことを楽しめるようにする。
★園児と相談しながら環境を整え、継続してごっこ遊びの続きを楽しめるよう、時間や場を保障する。

保育教諭の援助	子どもの変容
◎集まりの場面で製作遊びや、映画館ごっこを紹介し、友達の遊びに興味が持てるようにする。 ◎園児の思いやアイデアに共感しながら、互いの考えを引き出したり、伝え合ったり出来るように言葉かけをしていく。 ◎話し合う場やきっかけを作り、友達のアイデアに共感したり、刺激を受けながら友達の良さにも気づけるようにする。	・それぞれ、製作と映画館ごっこを楽しんでいたが、互いの遊びに興味を持ち、作った物を使って映画館ごっこを楽しむ姿が出てきた。 ・友達と一緒に遊ぶ中で、思いが通じずトラブルになる事もあった。様々な感情体験から友達の考えに共感したり、折り合いをつけ譲る姿など相手を思いながら遊ぶようになっていった。 ・「〇〇さんが作ったジュース可愛い！どうやって作ったの？」と友達の良さに気づき一緒に遊ぶ楽しさを味わう姿が見られるようになった。

＜結果と考察＞

・ごっこ遊びの中で、園児同士のやり取りを見守ったり、適宜仲介したりしたことで、もっと遊びたいという思いが膨らみ、自分たちで遊びを進める楽しさを味わうことができた。思いを伝え合う場面では、適宜仲介しながら思いを伝え合ったり出来るように言葉かけをすることで、友達の良さやアイデアに気づき、刺激し合いながら楽しむことが出来た。友達と心動かす出来事を共有し、互いに関心を寄せることが出来たことや、良さが活かされたことで友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことが出来たと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

・自分に自信が持てず、友達と比べたり、好ましくない行動に対して強い口調になる姿が見られた。研究を続ける中で、保育教諭が一人一人の内面理解に努め、園児の思いに丁寧にかかわる事の重要性を改めて感じた。援助の中で、互いが納得できるように話し合う場を積み重ねることで友だちとのかかわりが深まり、徐々に互いを認め合う姿や気持ちに折り合いをつけようとする姿へと変容した。これをきっかけとして、心の繋がりのある温かい集団になっていくと考える。
・全体の場での紹介や「ふわふわの木」を通して、他者から認められる経験を積み重ねたことで、自分自身の良さに気づき、自己肯定感が高まった。その経験から、友達の良さにも気付き、思いやりを持って友達に接することが出来るようになったのではないかと考える。
・遊びの中で友達と様々な体験をしたことで、喜びや悲しみなど多様な感情体験を味わうことが出来た。そこから友達の良さに気付き、一緒に遊ぶ楽しさを味わうことが出来たのではないかと考える。
・課題として、発達の個人差もある為、一人一人に合わせた援助、経験、環境構成の必要性を感じた。園児の育ちを長期的に捉え、思いを伝え合いながら遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫を引き続き実践していきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年度　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館

友達との関わりを深め、友達の良さに気付けるような環境構成と援助の工夫
―友達と関わる楽しさを味わえる環境構成を通して―

那覇市立久場川みらいこども園　保育教諭　仲田　萌乃

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「人間関係」の領域に「園児は、園生活において多くの他の園児や保育教諭等と触れ合う中で、自分の感情や意思を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、ときには園児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互いに理解し合う体験や、考えを出し合ってよりよいものになるよう工夫したり、一緒に活動する楽しさを味わう体験を重ねたりしながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになる。」と記されている。このことから、友達と関わり、一緒に過ごす楽しさを十分に味わうことで、自分の思いや友達の思いがある事に気づき、友達の良さに気づくことができるようになると考えた。

本学級は、男児 11 名、女児 9 名の計 20 名が在籍する 3 歳児クラスである。友達との関わりを喜ぶ子が多く、気の合う友達と誘い合い好きな遊びを楽しんだり、友達の遊ぶ姿を真似て遊んだりする姿が見られる。一方で、友達と上手に関われずに友達の遊びを眺める姿や自分の思いを上手に伝えられず口調が強くなったり、手が出てしまったりする姿も見られる。

そこで、友達と関わる楽しさを味わう中で、保育教諭等や友達に自分の思いを受け止めてもらうことや、相手の思いを知る経験を重ね、友達の良さに気付いたり、関わり方を身につけていってほしいと考え、遊びの環境を工夫することをテーマとして設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①友達と関わることの楽しさや嬉しさを味わう環境構成と援助の工夫

・ごっこ遊びや触れ合い遊びを通して、友達と十分に触れ合いながら親しみをもてるようにする。
・園児が興味をもっている遊びに着目し、友達との関わりがうまれるコーナーづくりをする。
・園児の遊びをドキュメンテーションで保育室に掲示し、友達との遊びや関わりに興味をもてるようにする。

②自分の思いや友達の思いに気づくような環境構成と援助の工夫

・園児の主張や気持ちを十分に受け止め、互いの思いが伝わるように気持ちを代弁したり、関わり方のモデルとなったりする。
・視覚的教材を用いて、相手の気持ちや友達の良さに気づけるようにしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】お祭りごっこ

≪幼児の実態≫
・気の合う友達と一緒に、砂や粘土で食べ物を作ったり、ままごとコーナーで料理をつくったりと、自分なりのイメージを表現しながら、ごっこ遊びを楽しんでいる。
・家庭で地域のお祭りを経験し、「わたあめ食べた！」「花火見たよ」などと経験したことを保育教諭等に話す姿が見られる。
・友達のごっこ遊びに興味をもつが、遊ぶ様子を眺めているだけの子もいる。

≪保育教諭の願い≫
・遊びの中で友達と一緒に過ごし、友達と関わる楽しさを味わってほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

◎友達と一緒にいることを楽しめる製作コーナーやままごとコーナーを作る。
◎友達とのやり取りを楽しめるよう、お祭りの看板やテーブルなどの環境を用意する。
◎園児の遊びをドキュメンテーションで保育室に掲示し、友達との遊びや関わりに興味をもてるようにする。

≪幼児の変容≫
・お祭りごっこでは、自分たちで作ったものを品物とし、お店屋さんやお客さんになりきり、友達や保育教諭等とやり取りを楽しんでいた。
・お祭りごっこ終了後も、気の合う友達と遊びのイメージを共有しながらアイス屋さんごっこを始め、やり取りを楽しむ姿が見られるようになった。
・遊びの様子をドキュメンテーションで保育室に掲示したことで、一緒に写っている友達に話しかけたり、「今日もこれやろう！」と誘ったりする姿が見られるようになった。

～お祭りごっこ終了後～
滑り台の下に集まり、アイスクリーム屋さんを楽しむ園児♪

お祭りごっこの時みたいに、ここでアイスクリーム屋さんしよう！

〇〇はアイス作る人ね！
〇〇はお客さん呼んでくる！

≪結果と考察≫
・お祭りごっこを友達と一緒に楽しんだことで、友達と一緒に過ごすことの嬉しさや喜びを味わい、普段の遊びの中でも友達と関わる機会が増えたと考える。
・園児の興味のあるものに着目し、「やってみたい」と思えるような環境を作る事で、意欲的に遊びに参加し、友達と一緒に楽しむことができたと考える。
・遊びの様子をドキュメンテーションで見ることで、友達と一緒に過ごしたことを改めて実感し、「〇〇さんと遊ぶの楽しかった！」「また一緒に遊びたい」という気持ちが生まれたと考える。

【実践事例 2】視覚教材を通して

≪幼児の実態≫
・気の合う友達を見つけて遊びを楽しむ一方で、自分の思いが上手に伝えられず、手が出ることがある。
・自分の思い通りにいかない場面で、相手が嫌な気持ちになるような言葉を発する姿が見られる。

≪保育教諭の願い≫
・友達との関わりの中で、自分の気持ちに気づき、相手に自分なりの表現で伝えてほしい。
・気の合う友達との関わりを深めながら、相手の気持ちや友達の良さに気付いてほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

◎園児の主張や気持ちを十分に受け止め、互いの思いが伝わるように気持ちを代弁したり、関わり方のモデルとなったりする。
◎『かお　かお　どんなかお』『ふわふわとちくちく』などの絵本を通して、相手の気持ちに気付けるようなきっかけを作っていく。
◎表情や言葉をイラストで保育室に掲示し、自分の気持ちや相手の気持ちに気付けるようにする。

今日見つけたふわふわ言葉ある？

ちくちく言葉に目を向けることが多かった

「〇〇が大嫌いって言った！」
「〇〇がパンチした！」

↓　ふわふわ言葉に着目するよう援助

「仲間に入れてって言ったら“いいよ”って言った！」
「〇〇がスリッパ並べていた！」

友達のふわふわ言葉や良い行動に目を向けることが多くなった！

≪幼児の変容≫

・友達との関わりの中で、「それ、ちくちく言葉だよ」と相手に伝えたりするような、言葉について考える姿が見られるようになった。

・集会時にふわふわ言葉を紹介したことで、友達の良い言葉や行動に気付くようになった。

・友達に「大好き！」「おもちゃどうぞ」などのふわふわ言葉を言うことが増え、ふわふわ言葉を使うことで、自分も友達も嬉しくなることに気付く姿も見られた。

≪結果と考察≫

・ふわふわ言葉を使った場面を写真で掲示したことにより、視覚的にわかりやすくなり、言葉について考える機会が増えたと考える。

・保育教諭等が園児の良い言葉や行動を積極的に紹介したことで、子ども達も良い言葉や行動に気付くようになり、友達の良さに気付くことにも繋がったと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

園児が興味を持っている遊びに着目し、環境を工夫したことで、園児が主体的に遊びに関わりながら、友達と触れ合う姿が見られるようになった。遊びを通して気の合う友達を見つけ、友達と一緒が楽しいと感じられる経験ができたと考える。

②課題

ちくちく言葉で嫌な気持ちになることは理解しつつも、上手く言葉にできず、トラブルになることがある。保育教諭等が見本となって伝えたり、一緒に伝え方を考えたりすることが必要だと考える。

③実践を通した自身の気づき、考え

3 歳児は自分の思いを強く主張することが増えるが、友達と楽しく遊ぶ経験を重ねることで、友達に対しての思いやりの心が育まれると感じた。また、友達が喜んでくれた経験や友達に褒められた経験から、優しい言葉を使う嬉しさや楽しさに繋がると考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

今後は、友達がいると楽しいという経験を大事にし、自分の思いを話したり、相手の思いを聞いたりしながら、相手の気持ちに気付けるよう援助していきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　2018　『幼保連携型認定こども園・保育要領解説』　フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

園児が主体的に取り組むための環境の構成と援助の工夫
―園児理解に基づいた活動を通して―

那覇市立　那覇こども園　保育教諭　田仲　芽依

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、少子化や核家族化、情報化など社会の急激な変化に伴い、家庭における子育て環境も変化し、人間関係が希薄化してきた。また、子ども同士が遊びに熱中し、互いに影響しあって活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第１章第１節幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本には、「園児との信頼関係を十分に築き、園児が自ら安心して身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、その活動が豊かに展開されるよう環境を整え、園児と共によりよい教育及び保育の環境を創造するように努めるものとする。」とある。園生活の中では、信頼関係を基に安心して自分のやりたいことに主体的に関わりながら様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わう体験をすることが大切だと考える。

本学級は、4 歳児（2 年保育）男児 13 名、女児 14 名、計 27 名在籍し、全員が集団生活の経験がある。園児の実態として活発な子が多く、気の合う友達と好きな遊びを楽しむ姿が見られる。しかし、遊びが続かず転々とする姿や、相手に思いが伝わらずに困っている姿も見られる。

そこで、「園児理解に基づいた活動を通して」を軸に、園児が主体的に取り組むための環境の構成と援助の工夫を目指し、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　主体性について考え、カンファレンスを行う

(1) 主体性とは何か、主体性を育む為の環境構成や援助はどのようにすべきかを話し合う。

２　園児理解を行い、主体的に取り組むことができるような環境の構成と援助の工夫を行う

(1) 園児との信頼関係を築き、寄り添いながら、安心して園生活を送れるようにする。一人一人の特性や発達の過程・興味や関心を理解し、個に応じた援助をする。

(2) 園児の興味や関心に応じた活動を取り入れ、様々な素材や道具を用意する。また、遊びの時間や空間を十分に確保し、「楽しい」「やってみたい」と思えるような環境の構成や援助の工夫をする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】

園児の主体性と保育教諭等の意図について、職員間でカンファレンスを行う。

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」に、園児の主体的な活動を促すとは、「園児一人一人が保育教諭等の援助の下でその主体性を発揮して活動を展開していくことができるような園児の立場に立った教育及び保育の展開である。活動の主体は園児であり、保育教諭等は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成していく」とある。そこで、主体的な活動に繋がる為の環境の構成や保育教諭の関わりについて職員間でカンファレンスを行い、表１のように捉えた。

〈園児の主体的な活動に繋がる為の環境の構成や保育教諭の関わりについての捉え〉　表１

1 保育教諭と子どもが信頼関係を確立し、自己肯定感を高める	
2 豊かな遊びの経験	(1) 遊び込める時間や空間の確保・子どもの思いを実現する教材の準備
3 保育環境の工夫	(1) 子どもそれぞれの興味を活かしながら、遊びが繋がって展開できるよう環境を準備し、やろうとすることができるようにする。 (2) 子どもの興味・関心を捉え、子どもに経験してほしい活動や保育者の願い（内容）を環境として、整える。 (3) 一人一人の得意なところを認め、友達の良いところを取り入れるなどして、遊びが展開できるよう、子ども同士の話し合いを大切にする場を持つ。
4 保育教諭の関わり	(1) 一人一人を認める。 (2) 認め合う機会を作る。 (3) 十分に楽しめるようにする。 (4) 保育教諭も一緒に考える。 (5) 子どもがしてほしいことに応え、信頼関係を築くとともに安心できるようにする。 (6) 困っている子どもに視線を注ぐ。

【実践事例２】

《園児の実態》

・自分の好きな遊びを楽しむ子、気の合う友達を誘って一緒に遊びを楽しむ子がいる。しかし、友達との関わりが少ない子、友達の遊ぶ様子を傍観している子もいる。
・戸外では、鬼ごっこや虫探しをする子が多い。また、遊びに継続性がなく転々とする姿が見られる。

《保育教諭の願い》

・様々な活動に主体的に関わり、充実感や満足感、達成感を味わってほしい。
・友達と一緒に活動する楽しさや心地よさを味わってほしい。
・様々な運動遊びに興味をもち、意欲的に取り組んでほしい。

〈折り紙でチューリップを作ろう〉　４月中旬～9 月

園児の姿	○保育教諭の援助　☆環境構成	園児の変容	表１の視点
折れるよ！ 製作物を自分達で自由に貼れる 	○簡単な折り紙（チューリップなど）を取り入れ、「できた」「楽しい」という成功体験を積むことができるようにする。 ☆製作物の貼る場所を大きく取り、友達同士見合ったり真似したり、一緒に活動する楽しさを味わえるようにする。 ☆遊びの様子を見守りながら、遊具・素材・道具の数や種類を調整し、好きな遊びを十分に楽しめるようにする。	・折り紙などの製作では、友達と一緒に同じものを作ることを楽しんだり、友達の真似をして折ってみたり、折り方を教えたりする姿も見られるようになってきた。 ・自分なりのイメージを折り紙や製作で表現し、飾ったり友達に見せたりして、満足感や充実感を味わうようになった。	2―(1) 3－(1) 3－(2) 4－(1) 4－(3) 4－(4) 4－(5)

〈チャレンジノートを活用した運動遊び〉　10 月下旬

	○得意な運動遊びやできるようになった姿を友達の前で披露する機会を設ける。友達からの刺激を受け、「やってみたい」「できるようになりたい」という気持ちを育めるようにする。 ☆自分だけのチャレンジノートを作り、やりたいことやできるようになりたいことを考えて記入し、自分の目標に向かって意欲的に取り組めるようにする。	・チャレンジノートを作成したことで、「やってみたい」と自ら運動遊びに取り組み、「○回できるようになりたい」と自分なりの目標を立て、繰り返し挑戦する姿が見られた。 ・できるようになった姿や頑張る姿を保育教諭や友達に披露し、認めてもらう経験を通して、達成感や満足感を味わう姿が見られた。	2－(1) 3－(1) 3－(2) 3－(3) 4－(1) 4－(2) 4－(3) 4－(5) 4－(6)

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・園児の主体的な活動に繋がる為の環境の構成や保育教諭の関わりについて、職員間でカンファレンスを行い、捉えを基に保育を行うことで、一人一人が自分なりの主体性を発揮しながら園生活を送るようになってきた。

・園児の発達、興味や関心を読み取り、環境を構成することで遊びが発展し、「やってみたい」と様々なことに主体的に取り組む姿が見られた。また、自分なりの目標を立て、何度も挑戦し、遊びが継続的に進んでいった。

② 課題

・友達との遊びが深まる中で、トラブルが出てきている。自分の思いを伝え、相手の思いを聴き、園児同士で解決できるよう援助していきたい。

③ 実践を通した自身の気づき、考え

・園児一人一人の気持ちに寄り添い、丁寧に関わることで信頼関係が構築され、安心して園生活を過ごすことができると改めて感じた。

・園児は安心した園生活の中で自己発揮し、目標をもって様々なことに取り組み、友達や保育教諭に認められる経験を通して主体性に繋がるのだと感じた。

・園児が主体的に取り組み、遊びが充実するためには、一人一人の興味や関心を捉え、「やってみたい」と思えるような環境の構成や援助の工夫が重要であると感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・園児の遊びの興味関心に応じて環境を再構成できるよう、園児理解に努めていく。

・自分や友達の良さに気付き、一緒に活動する充実感や満足感を味わうことができるよう、互いを認め合う機会を今後も設けていきたい。

・友達同士やクラスで共通の目的に向かい、その中で一人一人が主体性を発揮できるような環境の構成や援助の工夫を行っていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社フレーベル館

互いのよさや思いに気付き、一緒に活動する楽しさが味わえるような環境構成と援助の工夫

―言葉による伝え合いを通して―

那覇市立天妃こども園　教諭　比嘉　奈理

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、幼児を取り巻く環境は、少子化や核家族化、またゲームやインターネットの普及、温暖化による厳しい暑さから戸外へ出る機会の減少等、人と人とが関わる機会が減ったことによるコミュニケーション能力の低下や人間関係の希薄化がみられる。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第２章第４節「人間関係」の領域には、内容（６）「自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。」、内容（７）「友達のよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。」とある。また「言葉」の領域には、内容（１）「保育教諭等や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。」とある。これらのことから保育教諭は、園児の自己発揮と自己抑制の調和のとれた発達を援助し、園児は、友達との様々な心動かされる出来事を共有していく中でそれぞれの違いや多様性に気づき、自己をコントロールする力や友達と一緒に活動する楽しさを味わいながら、コミュニケーション能力を身に付けるようにすることが必要であると言える。

本学級は５歳児（３年保育）、男児１１名、女児１２名、計２３名が在籍している。活発で明るく、自分の思いを素直に表現する賑やかなクラスである。しかし、共に活動する楽しさを味わう中で、ときには自己主張のぶつかり合いによる葛藤がみられ、自分とは異なったイメージや考え方を受け入れるまでに時間を要している。また、思いを伝えることを躊躇してしまう子や保育教諭の援助が必要な子の姿がみられる。

そこで、一人一人の発達や幼児理解に努めることを基本に、園児が、様々な言葉や表現に興味や関心をもち、言葉による伝え合いを通して自分なりの表現が伝わる喜びの中から、互いのよさや思いに気づき、認め合い、思いやりを持って友達と関わり一緒に活動する楽しさを味わうには、どのような環境構成や援助の工夫が必要であるのか研究したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　互いのよさを知り、認め合いながら友達との関わりを楽しむための環境構成の工夫について

保育教諭等や友達と十分に触れ合うことを通して信頼関係を築き、一人一人のよさを認めたり互いのよさを伝え合う場や、一緒に活動する楽しさが感じられる環境構成、言葉について意識できるような視覚的な環境構成の工夫を行う。

２　言葉による伝え合いを通して、表現する楽しさや思いを共有する喜びを味わうことができるような援助の工夫について

園児一人一人の発達や幼児理解に努め、様々な心動かされる出来事を共有していく中から言葉による伝え合いを通して互いのよさに気づき、認め合い、表現する楽しさや面白さ、思いを共有する喜びを味わえるような援助の工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例１「大切にする気持ちを！！」

≪園児の姿≫

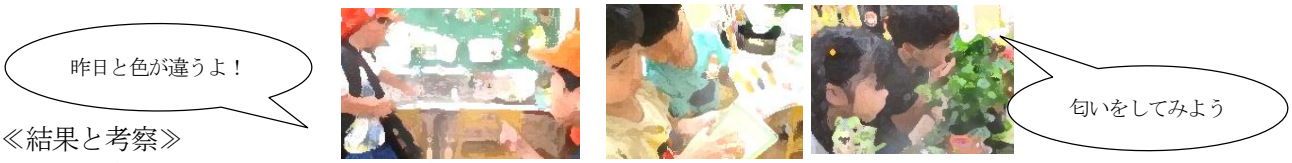
５月、友達との関わりが増えて一緒に遊ぶことを楽しむが、思いを強く主張し相手の思いやよさに気付きにくい姿がある。また、園庭へ出ると種探しや虫探しに夢中になる子が多く動植物への関心は高いが、暑さにより戸外に出られる機会が減ると自然物への関心が薄くなり、逆に虫への愛着が強くなりすぎて捕まえる

ことだけに喜びを感じ、その後の世話がおろそかになりいたわったり大切にする気持ちがうすれている。

≪保育教諭の願い≫

・友達と思いを伝え合う中で相手の良さに気付き、思いが伝わる楽しさや喜びを味わってほしい。
・触れたり世話をする等、飼育や栽培経験の中から自然物への関心を深め、いたわったり大切にしようとしたり、親しみや思いやりの気持ちをもっと育んで欲しい。

≪保育教諭の援助（〇）と環境構成の工夫（☆）≫
〇「生き物観察コーナー」や「植物コーナー」で発見したことを帰りの会の中で紹介してもらい、クラス全体で共有する時間を設ける。
〇一人一人の気づきやよさを認め、動植物への興味や関心を深められるような言葉掛けを工夫する。
〇動植物に関するクイズコーナーを設けて、友達と一緒に考えたり教え合ったりする等、一緒に活動する楽しさが感じられるような環境構成の工夫から、友達と思いを伝え合う楽しさが味わえるようにする。
☆暑さにより戸外に出られる機会が減ってしまった為、保育室に生き物コーナーや植物コーナーを設け、身近に動植物等の自然を感じ、楽しめる環境構成を行う。
☆動植物に関心が向かない子や生き物を苦手とする子も興味、関心を持つことができるよう、登園したらすぐに目にとまる場所に生き物観察コーナーを置き、皆で観察を楽しむ雰囲気を作る。
☆動植物の興味、関心が高められるよう表示の仕方をクイズ形式にしたり写真掲示や絵本、図鑑等を準備する。
≪園児の変容≫
・「根っこがあるからこれは本物だよ」「私もそう思う！」「これは固いから偽物かな？」「どう思う？」等、保育室の植物コーナー（本物とフェイク植物当てクイズ）を通して会話を楽しみ、相手の思いに共感したり、思いを伝え合う楽しさを感じている。意見が違っても否定する言葉は聞かれず、相手の思いを受け入れながら友達と一緒に観察をしたり調べようとする姿に変わり、「本物はお世話をしないと」と水スプレーをかける姿がみられる。
・「怖い」と生き物コーナーに近づきたがらなかった子が、生き物観察コーナー隣に設置した植物コーナーでのクイズ参加を通して自然物への関心を高め、「もう恐くなくなったよ」と得意そうに話し、積極的に生き物を観察する姿が見られるようになった。
・「これはね、ここに載っているよ」「教えようか？」と図鑑を手にする子が増え、図鑑に載っている飼育物の場所を友達同士で教え合ったり、写真と見比べて「今は蛹かな？」「色が違うよ」と、友達の思いや考えに共感したりしながら観察を進める姿が見られるようになった。
・身近な生き物を粘土で作る子が増え、その楽しさがクラス中に広がって、皆であおむしから長いヘビ作りへと発展する等、互いの良さに気付き表現する楽しさや面白さ、一緒に活動する楽しさに繋がった。



≪結果と考察≫
・園児が楽しみながら自分の思いや考えを伝え合える環境を設けたことで、互いに思いを伝え合い、共感したり受け入れたりする中で相手のよさに気付き、思いが伝わる喜びや一緒に表現する楽しさ、面白さに発展したと考える。
・目にとまりやすい場所に生き物観察コーナーや植物観察コーナーを設置したことで、動植物への興味を深め、生き物を苦手としていた子も無理なく自然物への興味、関心を高めることに繋げることができたと考える。
・園児一人一人のよさや興味を把握し、その子に合わせた声かけや友達との関わりを認めていくことで、自然物との関わりから友達との関わりへと繋がり、親しみや思いやりの気持ちを育むことができたと考える。

実践事例２「運動会に向けて（旗頭・エイサーの振りつけ）の話し合い」
≪園児の姿≫
１０月、思いを言葉で表現できる子が増えたが、一方的に話しを進めようとしたり相手を傷つけてしまう言葉を発する等、相手の思いを聞き認め合うことが難しい姿がみられる。運動会に向けての話し合いの場面では、思いがぶつかりあい話が進まずに中断してしまう姿がみられる。地域の旗頭を見たことで旗頭に興味を持ち、イメージして作ることを楽しむ子もいるが、関心を示さない子や運動会に向けての話し合いに消極的で思いを共有する喜びや、表現する楽しさ、面白さを感じることが難しく、自信のない様子が感じられる。

≪保育教諭の願い≫

・自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、友達と思いを伝え合う中で相手の気持ちに気付き、思いを共有しながら活動を進めていく楽しさを味わって欲しい。
・友達と一緒に過ごす楽しさや表現する楽しさ、面白さを味わい、思いやりを持って友達と関わって欲しい。

≪保育教諭の援助（〇）と環境構成の工夫（☆）≫

〇話し合う機会を大切にし、友達同士で思いや考えを伝え合う姿を認め、それぞれ話し合ったことを発表する場を持つなど、互いのよさや思いに気付くことができるような時間を設ける。
〇どのような旗頭を作りたいかを皆で考え意見を出し合う時間を持ち、皆のイメージした旗頭になるように分かりやすく図を描きながら話し合いを進める等、思いを伝え合いたくなるような雰囲気を作る。必要な材料も皆で相談しあいながら決めることができるようにする等、主体的に進めていけるように見守り、必要に応じて援助をする。
〇園児の考えを取り入れながらエイサーの振り付けを考えたり、旗頭作りを一緒に行うことで表現する楽しさや面白さが感じられるようにする。
☆エイサーや旗頭の興味、関心が高められるよう、写真や絵の掲示、絵本等を準備する。
☆パーランクーやバチ、ラジカセ、旗頭に必要な材料を準備し、園児が自由に触れて、表現を楽しむことができるような環境構成を行う。

≪園児の変容≫

・グループごとの話し合いがスムーズになり、意見の衝突がみられた時には困っている子に優しく声をかける等、どうしたら良いかを提案しながら園児同士で解決し、話し合いを進めていけるようになった。
・自分のイメージを言葉や紙に書いて伝えたり、絵や製作物で表現したり等、伝え合うことを楽しみ相手の思いにも耳を傾ける姿が見られるようになった。
・エイサーや旗頭への興味関心が高まり、「エイサーやりたい」「旗頭持っていい？」等、積極的に友達と一緒に表現を楽しむ姿が多く見られるようになった。
・人前に出ることに苦手意識が強かった子も、友達と一緒に表現を楽しみ、自信を持って発表する姿が増えた。

≪結果と考察≫

・話し合ったことを発表する時間を大切にしたことで相手の思いや考えを聞く意識が高まり、相手を認め合い相手の考えやよさに気付くことに繋がったと考える。
・主体的に話し合いや製作を進めている姿を見守る援助を心掛けたことで、友達同士で思いや考えを伝え合いイメージを広げたり、意見の衝突があっても互いを思いやり、話し合いを進めることができるようになった。
・状況に応じて言葉を付け加えたり、相互に伝え合う喜びが持てるような援助や言葉掛けを行い、園児と一緒に環境構成を行うなど工夫をしたことで表現意欲が高まり、表現する楽しさや面白さ、自信に繋がったのではないかと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

本研究を通して、互いのよさや思いに気付き一緒に活動する楽しさが味わえるようにするには、園児一人一人が遊びや活動に興味関心を抱き、主体的に関わることができるような環境構成や援助が大切であるということを改めて学ぶことが出来た。丁寧に話し合いを重ねることで意見の違いに気づき、繰り返しの経験の中で折り合いをつけ相手を受け入れ、人間関係の育ちに繋がっていくことも改めて学ぶことが出来た。園児一人一人のよさや可能性を見いだし理解しながら、思いや考えを表現するための道具や用具、素材を準備し、園児と共に環境を構成していくことが重要であると感じた。友達と様々な心を動かす出来事を共有する中から互いの良さや思い、考えに気づき、十分に自己発揮しながら一緒に活動する楽しさを味わうことができるよう、これからも丁寧に関わっていきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

今後の課題は、園児の生活経験や発達に応じた様々な形の表現があることを理解し、一人一人に合わせた丁寧な関わりから思いをしっかりと引き出し、表現する楽しさや自信へと引き続き繋げていくことだと考える。園児同士が関わりを深め、一緒に過ごす楽しさを味わいながら遊びや活動の発展へと繋げていけるように、環境構成や援助の工夫、声かけの仕方を研鑽していきたい。

〈主な参考文献〉内閣府 文部科学省 厚生労働省 平成３０年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

自然に興味や関心をもち、親しみながら関わるための環境の構成と援助の工夫

―身近な生き物や植物との触れ合いを通して―

那覇市立　城北こども園　保育教諭　宮平　奏子

Ⅰ　テーマ設定の理由

現代の子どもの育ちを巡る環境として、少子化や核家族化の進行、都市化や情報化の進展により、子どもの生活空間に自然や広場で遊ぶといった直接体験の機会が減る一方で、テレビゲームやインターネット等の室内遊びが増える間接体験が増えきている。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「環境」の領域には「親しみやすい動植物に触れる機会をもたせるとともに、保育教諭等周囲の人々が世話をする姿に接することを通して、次第に身近な動植物に親しみをもって接するようにし、実際に世話をすることによって、いたわったり、大切にしたりしようとする気持ちを育てることが大切である。」「園児は身近な環境に好奇心をもって関わる中で、新たな発見をしたり、どうすればもっと面白くなるかを考えたりする。そして、この中で体験したことをさらに違う形や場面で活用しようとし、遊びに用いて新たな使い方を見付けようとする。」とあり、園生活の中でも直接的な体験を積み重ねていくことの重要性が示されている。

本学級の園児は４歳児（２年保育）男児 10 名、女児７名、計 17 名が在籍し、好奇心旺盛で活発的な子が多く、ままごとや製作が大好きな学級である。戸外では、草花に集まるチョウや幼虫などの発見を喜び、追いかけたり捕まえたりして楽しんでいる。しかし、関わり方が分からず羽を強く持って破ってしまったり、飼育ケースに入れたことで満足しその後はそのままにしたりと、生き物を物のように扱ってしまう姿が見られる。一方で、滑り台や砂場などで遊ぶことを好み、動植物などの自然に興味を示さない子の姿も見られ、直接触れる体験の大切さを改めて感じる。また、私自身の虫や草花との触れ合う経験が少ないことや、興味を広げられるような環境の構成の仕方や草花を使った遊びの知識の少なさ等も、子ども達の興味・関心の薄さに影響していると考える。

そこで、園児が身近な動植物との触れ合いを通して「おもしろい！」「なんでだろう？」と、興味・関心をもち、自然の面白さや不思議さに気付いて親しみながら関わったり、命を大切にしようとする心を育んだりする環境の構成や、援助の工夫について研究したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　動植物に興味・関心をもって自ら関わろうとする環境の構成の工夫

身近な生き物や草花との触れ合いを通して、園児が自ら動植物に興味をもって関わることができるような環境の構成を工夫し、発見する面白さや好奇心、探求心が芽生えるような援助を行う。

２　生き物との触れ合いを通して、命を大切にしようとする心を育むための援助の工夫

生き物と関わる中で、保育教諭が園児の喜びや面白さに等に共感したり、クラスで気付いたことや思ったことを伝え合ったりしながら、命を大切にしようと思えるような援助の工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例①　　「小さな命」

園児の実態

・園庭では、チョウや幼虫などのさまざまな虫探しに夢中になり、追いかけたり捕まえたりして喜んでいる。しかし、チョウの羽を強く持って破ってしまう園児がいたり、捕まえた虫を飼育ケースに入れたことで満足し、その後は置いたままにして関心を向けなかったりと、生き物を物のように扱ってしまう姿が見られる。その一方で、虫を見つけても怖がったり何も興味を示さなかったりする園児もおり、虫に触れる機会が少ないように感じる。

【保育教諭の願い】

・身近な様々な虫に興味をもったり、生き物を世話することで、親しみや思いやりをもった関わりができたりするようになってほしいな。
・生き物が成長する喜びや感動を味わいながら、命を大切にしようとする心が育ってほしいな。

【◎保育教諭の援助　★環境の構成の工夫】

◎園児の発見や喜びに共感したり、一緒に虫を探したりして、身近な虫に興味がもてるようにする。
◎集まり時に、個々の発見や気付きを発表出来る場を設け、友達も虫に興味がもてるようにする。
◎保育教諭自身が生き物に優しく触れたり、話し掛けたりなど親しみをもって世話する姿を見せることで、小さな虫にも命があることに気付けるようにしていく。
★虫に関する絵本の読み聞かせや、飼育・観察コーナーを設け、興味・関心がもてるようにする。
★園庭マップを作成し、集まり時に発表して友達に知らせたり、友達の発見に気付き「自分も見つけたい！」と虫探しを楽しんだりと、身近な虫へ興味がもてるようにする。
★虫の「お世話セット」や世話の仕方の冊子を用意し、保育教諭と一緒に世話が出来るようにする。

「観察コーナー」

「園庭マップ」

「虫の世話をしている様子」

【園児の変容】

・虫に興味が薄かった子も、「先生、見て！」と自ら虫を探したり捕まえたりして、興味をもつようになった。
・チョウの生態に気付き、卵の孵化や羽化といった成長過程を楽しみにして、友達と発見や不思議さを共有しながら、さらに興味を深めて観察や飼育を楽しむ姿がみられるようになった。
・幼虫が苦手で世話している様子を眺めていた子も「可愛いね」「やってみたい！」と一緒に行うようになった。また、虫を物のように扱っていた子も、虫が死ぬとお墓を作る等、大切にしようとする姿が見られるようになった。
・虫が身近なものとなり、部屋では個々で様々な素材を使った虫作り遊びから、クラス全員でイメージを共有した「はな組森」作りへと遊びを発展して楽しむことができた。

【結果と考察】

・園児が虫を見つけた喜びや気付きを受け止めて共感したり、虫に関する絵本や図鑑、観察や飼育コーナー、園庭マップの活用など環境を整えたりしたことで、様々な虫の発見を楽しんだり、虫の生態を不思議がったりするようになったり、また、製作遊びへと広がったりと、身近な生き物に興味・関心をもって関わるようになったと考える。
・保育教諭が親しみをもって虫の世話を行うことで、園児も真似して話し掛けたり優しく触ろうとしたりと親しみをもって関わることが出来たと考える。また、幼虫を飼育し、感動や不思議さ、寂しさなどを体験することを通して、小さな生き物にも命があることに気付き、温かな感情が芽生え、大切に育てようとする心が育まれたのではないかと考える。

実践事例②　　「せんせい！これ、なに？」

園児の実態

・園庭に咲いている草花などの自然に興味を示さず、水やり後はすぐ滑り台や砂場などで遊ぶことを好む園児が多く見られる。
・園庭で見つけた草花を見て、名前を尋ねたり、「きれいだね」と花を摘んでビニールに集めたりと興味をもつ姿もみられるが、遊びの広がりが見られない。

【保育教諭の願い】

・園庭の様々な草花を発見する嬉しさや楽しさを味わい、さらに興味・関心をもって関わってほしいな。
・身近な自然物の面白さや不思議さに心を動かされ、遊びの中に取り入れて楽しんでほしいな。

【◎保育教諭の援助　★環境の構成の工夫】

◎季節の草花や、実、種など様々な自然物の発見を園児と一緒に喜んだり、図鑑で調べたりして、興味がもてるようにする。
◎保育教諭自身が、園児が見つけた草花や園庭にある植物に興味をもち、その名前や特徴、遊び方などを積極的に調べ、教えたり、遊びに取り入れたりして園児と一緒に楽しむ。

★園児が見つけた自然物や遊びを紹介できる場を設けたり、園庭マップに絵を貼ったりして、いつでも自分の発見を振り返ったり、友達の発見を知り興味をもったりすることができるようにする。
★見つけたものを「自然物コーナー」に飾ったり、自然物を使った遊びや製作が行えるよう、様々な素材を準備したりして、遊びが楽しめるようにする。

「自然物コーナー」

「落ち葉あそび」

「オシロイバナでマニキュア」

【園児の変容】

・草花に興味が薄かった子も、「先生、これ何？」と発見を楽しんだり、「今日はオシロイバナの種あるかな？」と植物あそびを楽しみにしたりする姿が多く見られるようになった。
・「実が黄色だからもうすぐで白色になるかな？」とじゅず玉の色の変化を楽しみにしたり、「小さくなるかな？」と見つけた松ぼっくりを水の中に浸してみたりと、好奇心や探求心をもって関わろうとする姿がみられるようになった。
・「一緒にお化粧ごっこしよう！」とオシロイバナの種で友達と顔に白い粉を付け合ったり、「お母さんにあげる！」とじゅず玉で指輪やネックレスを作ったりと、様々な植物を遊びに取り入れて楽しむ姿が見られるようになった。

【結果と考察】

・園児が植物を発見する嬉しさや不思議さなどを受け止め、共感し、その園児の姿から興味を捉えて、園庭マップやコーナーを設けたり、さまざまな素材を準備したりする等環境を整えたことで、自ら関わろうと興味をもったり、友達と遊びに取り入れて楽しんだりすることができたと考える。
・保育教諭自身が植物に興味をもって関わることで、園児も興味をもって喜んで関わり、「やってみたいな」「どうなるかな？」など、好奇心や探求心をもつことができたと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・園庭マップやコーナー等様々な環境を構成し、保育教諭が自ら好奇心や探求心をもち関わることで、園児が主体的に身近な自然に親しみながら関わる姿が見られるようになった。
・身近な生き物と関わる中で、嬉しさや楽しさ悲しさ等の感動体験を共有し、クラス全体で思いや考えを伝え合う体験を積み重ねたことで、小さな命を大切にしようとする姿へとつながった。

②課題

・園庭マップで園児の気付きを紹介したが、そこに関わる姿を写真等のドキュメンテーションで可視化すれば、いつでも遊びの振り返りができるようになり、さらに様々な遊びが広がっていくのではないだろうか。

③実践を通した自身の気づき、考え

・保育教諭自身が身近な自然に興味をもち、さまざまな知識を得て関わることが大事であることを強く実感した。知識を得ることで「もっと知りたい！」「もっとやりたい！」と園児と一緒に楽しみながら関わることが出来た。このような関わりが、園児の姿に寄り添った援助や環境を整えることが出来たり、園児自身も自然に興味をもち、親しんで関わったりすることができたのではないかと思われる。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・植物の発見や、遊んでいる様子を写真にまとめた「植物あそび図鑑」を作成し、園児がいつでも振り返りをしたり、友達の発見や遊びに気づいて興味を広げたり、また、友達とのコミュニケーションを促すものとなるようにしたい。また、ドキュメンテーションを作成する習慣を身に付け、子どもの興味があるものや遊びを保護者と共有できるようにし、家庭でも継続した遊びや会話ができるようにしていく。

〈主な参考文献〉

・内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成 30 年３月　『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』フレーベル館
・横山洋子監修　2019 年　『発達にあわせた　保育の環境づくり　アイデア BOOK』　ナツメ社
・大豆生田啓友　2020 年　『あそびから学びが生まれる　動的環境デザイン』　学研

様式３【課題研究レポート】

命を大切にしようとする心情や意欲を育む環境構成と援助の工夫
―身近な動植物との関わりを通して―

那覇市立　天久みらいこども園　教諭　中村　美月

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼稚園教育要領解説第２章４節「環境」の領域には「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」と示されている。また、解説には「実際に世話をすることによって、いたわったり、大切にしたりしようとする気持ちを育てることが大切である」と記載されている。

本学級は、９割が進級児の５歳児２１名のクラスである。遊びの様子としては、お絵描き、折り紙、廃材を使った製作遊びを好む様子がある。そして、虫が好きで戸外遊びでも虫を探したり、室内遊びでは、捕まえた虫や幼虫、飼育している生き物を観察したり、お世話したりする子もいる。しかし、虫を触りたい気持ちから、虫を雑に扱ってしまったり、強い力で掴んでしまったり、どうなるのかという興味から水をかけてしまったりと、生き物が死んでしまうことや命に対しての理解が難しい様子がある。また、苦手意識があり、生き物に触れることができない幼児がいたり、身近な自然にあまり興味を示さなかったりする子もいる。そこで、身近な生き物に自分から関わることを通して、それぞれの生き物に適した飼育方法が分かり、生命を大切にしようとする気持ちが育ってほしいと願い、本テーマを設定し、研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　適切な関わり方がわかる環境構成や援助の工夫について

生き物と関わるときの約束を決めたり、適切な関わり方ができるように促したりする。

２　生き物との関わりを通して命を大切にしようとする心情を育む工夫について

ザリガニに必要なものを調べて用意し、近隣園からザリガニをもらって育てる。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】

≪幼児の実態≫

・クワガタやバッタ等生き物に興味・関心は高いが、足を持つ等、間違った持ち方をして足が取れてしまったり、無理に持って落としてしまったり、ぞんざいに扱う姿がある。
・セミが好きで捕まえるが、虫かごに入れたままにして、セミが死んでしまうこともある。
・捕まえたセミを水に濡らして水場に置く等、適切でない関わり方をしている。

≪保育教諭の願い≫

・生き物に思いやりをもって関わってほしい。
・身近な自然に触れ、生命の不思議さや尊さに気付けるようになってほしい。

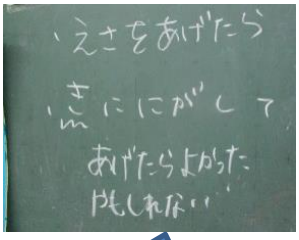
≪保育教諭の関わりと援助≫

・捕まえて虫かごに入れたままにしていたセミが死んでしまったときに、クラス全体で「なぜ死んでしまったのか」、「どうしたら死ななかったか」を話し合い、命について考えられるようにした。

・セミに水をかける等、生き物を粗末に扱ったときには個別に確認し、友達の関わり方を見て正しい関わり方がわかるまでセミ取りをお休みし、適切な関わりができるようにした。
・生き物の約束をクラス全体で考え、生き物コーナーに決めた約束を掲示し、意識して関われるようにした。
・バッタの簡易的な模型を画用紙で作り、全体で正しい持ち方を確認する。また、『その道のプロに聞く生き物の持ち方』からバッタの正しい持ち方の表示を作り、飼育コーナーに掲示した。

オオゴマダラさん
またね～

カブトムシを
そっと観察中



セミは逃がしたら死んで
しまわなかったかもしれない

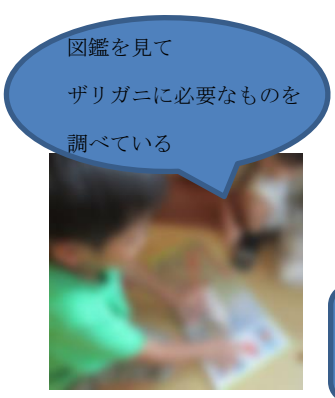
≪幼児の変容≫
・幼虫から育てたオオゴマダラがさなぎになり、蝶になったときに「逃がしてあげよう」と言う姿がある。
・「この持ち方は可哀想だよ」「逃がしてあげよう」「弱ってるよ」等、生き物の扱い方について声をかけ合う姿がみられるようになってきた。
・捕まえたバッタを数日虫かごの中に入れたままにしているのを見て「そろそろ逃がした方がいいよ」と友達に声を掛ける姿がみられるようになってきた。

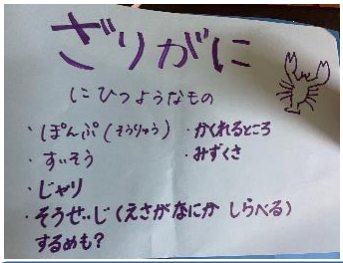
【実践事例２】
≪幼児の実態≫
・ザリガニを飼ったことがある子はおらず、ザリガニに興味はあるが知識がない子が多い。

≪保育教諭の願い≫
・ザリガニを育てることを通して、愛着を持って生き物に関わり、大切にする気持ちを持ってほしい。

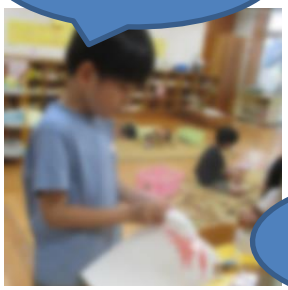
≪保育教諭の関わりと援助≫
・ザリガニを飼ってみたいか子どもたちに聞き、子どもたちから意欲的に関われるようにした。
・飼育に必要なものを子どもたちから聞き取ったり、子どもたちが調べるように促したり、ザリガニに興味が持てるようにした。子どもたちと一緒に水槽や砂利の掃除をして準備することで、ザリガニを育てることに期待が高まるようにした。
・近隣園にザリガニをみんなで貰いに行って、どのザリガニを貰うか選ばせてもらい、愛着が持てるように援助した。
・水槽を保育室の入口に置くことで、あまり生き物に興味・関心をもっていない子も興味がもてるように環境を構成した。
・貰ってきたザリガニを年少のクラスに分けるときに、どのザリガニをクラスで育てるか決める機会を持ち、愛着を持って育てられるようにした。
・みんなで名前を考えて付けることで、愛着を持って関われるようにした。

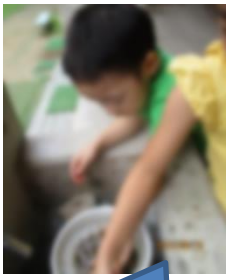
・ザリガニの成長を一緒に見守り、気付いたこと等を全体に知らせた。





図鑑で調べたり家で調べたり
したのをみんなで発表したよ





砂利を洗い、
水槽の準備をしているよ

≪幼児の変容≫

・生き物の飼育コーナーを入口に移動したことで、登園・降園時に興味を持つ姿がある。また、保護者にも生き物について話す姿がある。

・「エサをあげたい」等、毎日エサやりを楽しみにする姿があり、意欲的にお世話する様子が見られるようになってきた。

・観察する中で、「エサを持って食べててかわいい」等、ザリガニを可愛がり、愛情を持った言葉かけを行うようになってきた。

Ⅳ　実践の振り返り

１　成果

・４月よりも生き物をいたわる姿が増え、少しずつ命を大切にしようとする心情や意欲が育ってきた。

２　課題

・学級全体で生き物について話し合う機会を設けたり、気づいたことを全体に知らせたりして援助を行ったが、生き物への関心が薄い子もいた。

・学年全体での栽培物への関わり方や援助等は工夫したが、自分から具体的な手立てを考えた植物の取り組みができなかった。

３　実践を通した自身の気づき、考え

・保育教諭が生き物とどう関わるか、保育教諭の援助や環境構成によっても子どもの関わり方が変わってくる。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・まだ生き物の命を考え、大切に扱うことが難しい子もいるため、引き続き生き物を大切にできるように援助や環境構成を工夫していきたい。

・昆虫が苦手な子や生き物への関心が薄い子も生き物に興味を持てるように様々な配慮や環境構成等を研究していきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　『幼保連携認定こども園教育・保育要領解説』　株式会社フレーベル館

松橋利満　平成２７年　その道のプロに聞く生き物の持ち方　大和書房

様式３【課題研究レポート】

互いの良さを認め合い、協力して活動する楽しさを味わうための援助の工夫

―学級活動や遊びの場を通して―

那覇市立大名こども園　保育教諭　下地　智子

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』第２章「人間関係」の領域内容（７）に「友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。」と記されている。幼児は、友達と様々な心を動かす出来事を共有し、互いの感じ方、行動の仕方などに関心を寄せ、それらが交わることを通して、それぞれの違いや多様性に気が付いていくことが大切である。

本学級は、５歳児（２年保育）男児１４名、女児７名の計２１名のクラスである。進級児４名、新入園児１７名。新入園児のほとんどが同じ保育園から入園していることもあり、入園後すぐに自分から好きな遊びや、やりたいことを見つけて気の合う友達と誘い合って遊ぶ姿がみられた。しかし、友達との関わり方や距離感がつかめなかったり、感情のコントロールが上手くできなかったりしてトラブルになる姿も見られる。このような実態を踏まえ、遊びや生活の中で友達と思いを伝え合う場面や、自分の思いを受け入れてもらったり相手の思いを受け入れたりする経験を増やしながら、友達との関わりを深めていけるようにしたいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　友達との関わり方を知る為の環境構成と援助の工夫

遊びや生活の中で、子ども達が気持ち良く過ごす事ができるよう、身近な絵本や気持ちに関する掲示物等を準備する。また、どのような言葉や行動が嬉しいか、嫌な気持ちになる言葉や行動は何かなど子ども達と一緒に考える場を持つ。

２　友達と一緒に活動を進めるなかで自分のよさ、友達のよさに気付ける工夫

保育教諭が園児一人一人に肯定的な姿勢を向けることで園児同士も互いを肯定的に受け止め合うような援助の工夫をする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践１】

≪園児の実態≫
- 友達との関わりの中で、「あっちいけ」「一緒に遊ばない」等の否定的な言葉を多く使ってしまい、トラブルになってしまう事が多い。
- 「○○に嫌な事を言われた」等、友達から言われた不快な事を本人ではなく、保育教諭に訴えてくる姿がある。
- 名前を「さん」付けせずに呼んでいる（敬称なし）

教師の思い
・自分も相手も大切にしてほしい。気持ちのいい言葉と言われて嫌な言葉を知ってほしい。

【保育教諭の援助（〇）　環境の工夫（☆）】	【園児の変容】
〇帰りの会やにじ組会議の中で、自分も相手も大切にできるように「さん」付けで呼ぶ事を提案する。 〇友達の気になる面だけでなく、良いところをみんなで共有できるように「いいところ探し」をすることで視点を変える。 〇気持ちの良い言葉、言われて嫌な言葉をみんなで考える（ちくちく、ふわふわ言葉）	・友達を「さん」付けすることで、感情が高ぶった時も突発的に荒い言葉ではなく、少し冷静になる姿が見られるようになってきた。 ・帰りの会で友達の良いところを発表する姿が見られるようになってきた。 ・「この言葉はスパイキー」とちくちく言葉を意識する姿がみられるようになってきた。
☆園児が言葉について、いつでも意識できるように集まりの場で出たふわふわ、ちくちく言葉をロッカーの上の掲示スペースに貼り、園児が見やすいようにした。 ☆集まりの場で読み聞かせをした本を、いつでも手に取って読むことができるようにした。	

【考察】
・友達を「さん」付けで呼び合うことで、落ち着いて話しを聞こうとする姿や気持ちを整理して話しをしようとする姿がみられるようになってきたのではないかと考える。
・「ちくちく言葉」は絵本イラストのみを掲示し、「ふわふわ言葉」を多く使って欲しいとの思いから「ふわふわ言葉」の絵とセリフを掲示していたが、園児があまり興味を持って見ている姿がなかった為、園児から出た「ちくちく言葉」も一緒に掲示をしたところ、友達と一緒に見比べる姿があった。「ちくちく」「ふわふわ」両方のセリフを掲示したことで、友達への言葉遣いを意識して気を付けるようになる姿や友達の良さにも気づくきっかけになったと考える。

【実践２】

≪園児の実態≫
・同じ遊びをしていても、個々で遊ぶことが多い。
・うまく言葉で表現できず、相手に思いが伝わらないことで戸惑う姿や自分の思いを全体の場で伝えることが出来ない子がいる。

教師の思い
・友達とイメージを共有して遊びを進める中で、共通の目的をもって遊ぶ楽しさを経験してほしい。
・友達の思いを聞くことで、相手の気持ちに気付いたり共感することで、思いを伝え合う事の大切さを感じて欲しい。
・自分に自信をもって、思ったことや感じたことを話してほしい。

≪園児の姿≫

７月後半、以前からお化けや妖怪に興味を持ち、同じシリーズの本を借りる姿があった。友達同士で「ようかいしりとり」の歌を歌う姿が見られた為、曲を準備し、妖怪にあった塗り絵を準備すると「棒に貼り付けたい」とペープサート作りを楽しみ友達に披露して楽しむ様子が見られるようになった。また、牛乳パックで「ろくろっ首」を製作した子をきっかけに廃材でお化け作りを楽しむ子が増えてきた。

【保育教諭の援助（○）　環境の工夫（☆）】	【園児の変容】
○帰りの会やにじ組会議の中で、友達が頑張っている姿や、友達からの製作のヒントを聞いて工夫していた姿をみんなの前で紹介したり、個々のイメージや製作物への思いをクラス全体で共有し、友達同士でお互いのいい面に気付いたり、認め合えるような雰囲気作りをする。 ○自分の思いを言葉にする喜び、みんなでイメージの実現に向けて考えを出し合い、楽しさを味わえるような雰囲気づくりをしていく。 ○にじ組会議で、「お招き会」にお化け屋敷を披露する事が決まった事で、クラス全員が目的を持って取り組むことができるように援助していく。	・帰りの会で、みんなの前で発言する事に抵抗があった子も「今日は○○が楽しかったです。」「○○さんと一緒にお化けを作りました」「○○さんが手伝ってくれて嬉しかったです」など友達に対する思いが言葉で伝えられるようになってきた。 ・製作が苦手な子が、保育教諭と共に廃材を使い自分のイメージしたロボットおばけを作る姿や「好きな虫をお化けにしたい」と折り紙や廃材を使いお化けというイメージを友達と共有しようとする姿がみられるようになった。 ・自分自身が「おばけになって驚かせたい」と提案し、友達と一緒に衣装作りをしたり、どこに隠れて、どうやって驚かせようかと友達と楽しみながら相談する姿が見られた。
☆お化けに関する絵本等を準備したり、お化け屋敷に行った事のある子から、お化け屋敷のイメージを発表してもらい、掲示することでイメージの共有を図る。 ☆みんなでダンボールを黒く塗る、チケットを作る等の作業をすることで、共有のイメージを持ちやすくし「友達と一緒に目的に向かって取り組む」楽しさを味わえるようにする。	

【考察】

・クラス全員が同じ目的をもってお化け屋敷作りをしたことで、自分の考えを友達に伝える機会が増え、自分の思いを友達に受け止めてもらう経験から思いを伝え合う事の楽しさを味わうことができたと考える。

・にじ組会議の中で、自分が話す立ち場になり話しを聞いてもらう喜びや、きちんと聞いてもらえない寂しさ等を経験することが、相手の気持ちを想像し思いやることにつながったのではないかと考える。

・友達のイメージする物（ロボットお化け、虫のお化け）をお化け屋敷の中で飾ったことで、友達のイメージを否定せず、思いを汲み取って受け入れようとする雰囲気が出てきた。また、そのことをきっかけに自分の思いを話してみようという安心感をもって、心を開き、自分らしさが表現できるような雰囲気が広がってきたのではないかと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・相手を思いやる言葉を用いたり、優しく伝えようとする姿がみられるようになってきた。
・園児の発案から出た遊びをクラス活動の中に取り入れることで、学級の関わりが深まり、みんなで遊ぶ楽しさも味わえるようになってきた。その中で、楽しかったことや気付いたことを伝え合い、共有する場を設けたことで、友達の良さに気付き始め、園児同士の関わりが深まった。
・保育教諭の言葉だけで伝えるのではなく、相手の気持ちが分かりやすいような絵本を活用しイラストや子どもからの言葉を掲示することで自分の言葉を振り返るきっかけ作りとなった。
・帰りの会やにじ組会議を重ねることで、友達の話しや意見、アドバイスを素直に聞こうとする姿がみられるようになってきた。
・生活発表会の会議の中でも、自分の意見を発表する姿やクラスで取り組んだ「ふわふわ言葉」を創作劇の中に取り入れるなど、クラス全体でふわふわ言葉を意識している姿がみられた。

②課題

・友達へのアドバイスや危ない事を伝えようと大きな声や短い言葉で伝えたことで、友達が不快に感じトラブルになる場面があった。相手を思いやる言葉でも伝え方や声の大きさ、丁寧に伝えることの大切さをその都度、繰り返し個別や全体へも伝えていく必要があると感じた。
・繰り返し話し合いを重ねることで、ちくちく言葉について理解をしている様子が見られるが、無意識にちくちく言葉を使ってしまっている姿がみられる。

③実践を通した自身の気づき、考察

・保育教諭が意図的に肯定的な言葉を発する事により、園児同士でも良いことを言葉にして伝えることが増えてきていると感じた。また、日々の保育を通して自分自身を温かく受け入れてもらえる場や他者に認められる喜びを実感できたことで、自分に自信を持ち、友達の良さにも気づくことができたと思う。
・園児が友達との関わりを深めていくためには、一人一人のありのままの姿を受け止めながらも、園児の興味、関心を丁寧に読み取り、どのような環境や援助が必要なのかを常に振り返りをすることが大切だということを再認識することができた。
・クラス全体での話し合いを重ね、園児の言葉から絵表示を掲示したことで共通理解はしやすかったように感じるが、無意識にちくちく言葉を使ってしまう姿が見られる為、その都度、継続的に話し合いの場を設けることが必要だと感じた。また、声の大きさや言葉が足りないことでのトラブルがあったため、その場に合った声の大きさや相手に伝わりやすい話し方などを丁寧に伝えていく必要があると感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・その場に合った言葉の使い方ができるような教材研究や表示の仕方等、園児の実態にあった取り組み方を探っていきたい。
・互いの良さを伝え合う場を発表形式ではなく、ペアやグループなど少人数から伝えあう場を作ったり、グループでの言葉を掲示したりするなど、一人一人が意見を言いやすく、友達に認められることで自信を持ち、クラスの一員であるという園児同士も互いを肯定的に受け止め合うような援助の工夫をしていきたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　厚生労働省　平成３０年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館
・著者　なないろ　「ちくちくとふわふわ」　ちこらブックス

令和６年　１月９日

県立総合教育センター長　殿

豊見城市立上田こども園
園長　平良　智子
（公印省略）

令和６年度幼稚園・幼保連携型認定こども園教職２年目研修に係る提出物について（提出）

みだしのことについて、下記のとおり提出いたします。ご確認よろしくお願い致します。

教職２年目研修受講者・研修者番号　７０・保育教諭・平田　真子

『令和６年度幼稚園・幼保連携型認定こども園法定研修等の手引き』より
〇教職２年目研修：課題研究レポート（３ページ）

豊見城市立上田こども園
教職２年目研修受講者　保育教諭　平田　真子
TEL：098-850-7876　　FAX：098-850-7969

様式３【課題研究レポート】

友達との関わりを深めるための活動や援助の工夫

―集団遊びや協同的な活動を通して―

豊見城市上田こども園　保育教諭　平田　真子

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第３節「人間関係」のねらい（２）には「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を持つ。」と記されている。また、内容の取扱い（３）には「園児が互いに関わりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の園児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうようにすること」とある。様々な活動に興味を持ち、友達と一緒に遊びや活動を進める楽しさや充実感を味わいながら、友達との関わりを深めてほしいと感じる。そのため、子ども一人一人が保育教諭や他児と多様な関わりをもつことができるように援助することが大切だと考える。

本学級の実態としては、５歳児（３年保育）女児１１名、男児１４名、計２５名在籍しており、内１０名が新入園児である。全員が集団生活を経験しており、新しい環境に興味を持って積極的に関わる姿が見られた。一方で、一人で過ごす幼児や、遊びが続かず様々な遊びを転々とする幼児の姿が見られ、人間関係や遊びが広がっていかない様子が見られる。

このような実態を踏まえ、幼児が互いの良さや特性に気付き、共通の目的に向かって遊びや活動を展開するなかで、友達と一緒に工夫したり協力したりすることを通して友達との関わりを深めてほしいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　友達との関わりを深められるような援助の工夫

自分の思いを伝えたり、友達の話を聞いたりしながら友達の良さに気付き、一緒に遊びや活動が進められるように援助の工夫をする。

２　集団遊びや協同的な活動ができる援助や環境づくり

友達と工夫したり協力したりする楽しさや充実感が味わえるように、クラス全体で取り組む集団遊びなどの活動を取り入れたり、環境構成を工夫したりする。

３　自分や友達の良さに気付けるような援助の工夫

朝の会や帰りの会、サークルタイムなどを通して、嬉しかったこと、楽しかったこと、頑張ったこと、気付いたことなどを発表する機会を設け、自分や友達の良さに気付くきっかけとし、自信に繋げていく。

４　担任間での子どもの姿の共有を通して幼児理解を深める

２人担任であるため、担任間で幼児の姿を共有し幼児理解を深めるため、マップ型保育ドキュメンテーションを作成し、多様な視点から援助の手立て・方法を検討する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例１　～様々な集団遊びを通して～

≪幼児の姿≫

・４月、新しい環境に積極的に関わる幼児が見られる一方で、１ 人で絵本を読んだり周りの遊びの様子を傍観したりする幼児の姿も見られる。
・やりたいことや好きな遊びが見つけられず、隣のクラスを見に行ったり室内外を走り回ったりしている。

≪保育教諭の思い≫
・安心して園生活を過ごすなかで、クラスの一員としての繋がりを感じ、友達と触れあったり関わったりすることを通して、一緒に遊びを進める楽しさを味わってほしい。

≪◎保育教諭の援助　□環境構成≫
◎新しい環境への幼児の不安な思いを受け止めながら、安心して過ごせるように保育教諭も遊びに入ったり、クラスの友達に一緒に声をかけたりすることで、関わりが広がるようにする。
◎クラス全体で取り組む集団遊びや、チーム対抗で行う活動を取り入れ、楽しい時間や作戦を考える時間などを共有することで、クラスの一員としての繋がりや仲間意識を感じられるようにする。
◎保育教諭が仲立ちとなり、友達と関わりながら遊びを楽しめるように援助する。
□小集団で楽しむことができるカルタや絵合わせカードを自由に手に取れる場に用意し、気の合う友達同士が集まって遊びが進められるようにする。
□４～５名ほどのグループを構成し、集団遊びや朝の会、帰りの会、給食など一緒に過ごすことで、仲間意識や友達との繋がりを感じられるようにする。

リレー
作戦会議などを通してチームで工夫したり協力したりする

カルタ・絵合わせカード
年中児の頃から慣れ親しんだ遊びを引き続き準備し、安心して過ごせる環境構成

じゃんけん列車
友達と喜びを共感し合う

≪幼児の姿の変容≫
・クラス全体でゲームに取り組み、楽しい時間を共有し充実感を味わったことで、自由遊びの際に友達を誘い合って幼児自身で遊びを進める姿があり、進級児と入園児が一緒に遊びを楽しむ姿が見られるようになった。
・遊びに必要なものを幼児らで相談したり、ルールをアレンジしたり工夫して遊びを進めていた。
・ゲームに負けたことが悔しくて泣いている幼児を見ると、「つぎ頑張って勝とう！」と優しく声をかけたり励ましたりする姿が見られ、思いやりを持って友達と関わるようになった。

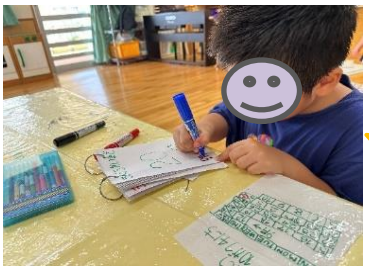
実践事例２　～A児の姿から～

≪幼児の姿≫
・A児は数字や文字への興味関心が高く、室内遊びの際は白紙に文字や数字を書くことを楽しんでいるが、１人で過ごすことが多く、遊びが続かず友達関係が広がっていかない姿が見られた。
・1 か月後に運動会を控えた９月中旬頃。夏休み明けから運動会に向けた取り組みが始まっていたが、体を動かすことに苦手意識があり、気持ちが向かない場面があった。

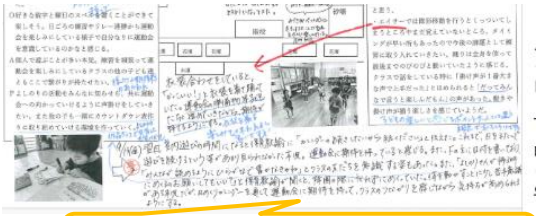
≪保育教諭の思い≫
・好きな遊びを通して、自己発揮したり友達や保育教諭に自分の思いを伝えたりしながら、友達と一緒に共通の目的を持って遊びを進める楽しさを味わってほしい。
・他の幼児も、友達に興味を持ったり良さに気付いたり、一緒に活動する楽しさを味わってほしい。
・運動会という行事に対して、本児なりに楽しみや目標を持って参加できる方法はないか。

≪◎保育教諭の援助　□環境構成≫
◎□A児が書いたものをクラスの集まりの場で紹介したり掲示したりすることで、本児の得意なことを他児に気付いてもらえるようきっかけ作りをする。

◎幼児理解の手立てとして、マップ型保育ドキュメンテーションを記録として活用し、担任間で幼児の思いや姿、育ちなどを共有し、援助や手立てを共通理解する。



運動会までの日めくりカレンダーを作成することを提案



マップ型保育ドキュメンテーション

≪幼児の姿の変容≫

・A児が作成した日めくりカレンダーを室内の幼児が手に取りやすい場に置き、日付を変える当番活動を取り入れA児に任せたことで、「運動会まであと〇日だね」と本番を心待ちにする姿があった。また、他児も「今日はAさん休みだから僕がやってあげる」とクラスの友達の役割を意識し、一緒に当番活動を進める姿が見られた。クラスの友達に受け入れられた経験から、期待を持って運動会に向けた取り組みに参加していた。

・集まりの場でA児の作品を紹介することで、他児がA児の文字や数字を書くことが得意であることに気付き、お店屋さんごっこにA児を誘い、チラシを書く役割分担をしながら遊びを進める姿が見られるようになった。翌日もお店屋さんごっこの続きに積極的に取り組み、友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わったことで、戸外でも砂場で友達と一緒に山や川づくりなど、友達と工夫したり協力したりしながら過ごす姿が見られた。

Ⅳ　実践の振り返り

1　成果

・集団遊びを取り入れたことでクラスの一員としての繋がりや、友達と楽しい時間の共有をすることができ、友達との関係や、遊びを広げられたのではないかと感じる。

・クラスでの集まりの場で幼児の作品を紹介したり、幼児が発表する機会を設けたりすることで、友達の良さや頑張っている姿などに気付き、それらを活かしながら友達と一緒に遊びを進める姿が見られた。

2　課題

実践を通して、友達との関わりを広げ深められるような援助を行ってきたが、小集団で集まれるようなコーナー設定や、じっくりと集中して遊びを進められる環境構成が不十分であったと感じる。

3　実践を通しての気付き

・実践事例より、友達との関わりを広げたり深めたりするためには、一人一人が安心して過ごすなかで自己発揮し、保育教諭や友達に受け入れられる経験が大切だと考える。

・受け入れられる経験を通して、他児と共通の目的や願いが生まれ、協力したり工夫したりしながら、一緒に遊びを進める充実感や満足感を味わうことができると感じる。そのために、保育教諭は幼児が多様な関わりをもつことができるように援助することが大切だと感じる。

Ⅴ　今後の実践に向けて

本研究の課題を踏まえ、今後の実践では幼児理解に基づいたコーナー設定や環境構成の工夫などを実践し、遊びを通して幼児が友達との関わりを深められるようにする。また、1 人で過ごしている幼児の姿も丁寧に見守り、心の中にある思いや考えを読み取ったり受け止めたりしながら、安心して自己発揮し友達と遊びや生活を進めていく充実感や満足感を味わえるように援助していく。今後も自己研鑽しながら保育の質向上を目指し、日々の保育を豊かにしていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　『幼保連携型認定型こども園教育・保育要領解説』　株式会社フレーベル館
文部科学省　『指導と評価に生かす記録』　株式会社　チャイルド本社

様式３【課題研究レポート】

子どもが主体的に遊べる環境構成と援助の工夫
―子どもの実態を踏まえた日々の保育を通して―

宮古島市立　伊良部こども園　教諭　氏名　狩俣　美里

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の第一章第一節幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本において、（２）環境を通して行う教育及び保育①「環境を通して行う教育及び保育の意義」②「園児の主体性と保育教諭等の意図」と記されている。また、自分から興味を持って環境に主体的に関わりながら様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねて行くことが重視され、園児が環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになることが大切と示されている。園児の知りたい！やってみたい！という思いだけではなく、園児の主体性と保育教諭等の意図がバランス良く絡み合って成り立っていけるようにすることが必要だと感じている。

本学級の実態として、５歳児クラス１７名、男児９名、女児８名のクラスとなっている。元気いっぱいでのびのびと遊び、クラス全体が賑わっている。男女に分かれて遊ぶ姿がよく見られ、男児は虫取りやダイナミックな遊びを好み、女児は、ぬりえや制作、桑の実集めを楽しんでいる。遊びの中で「こうしたらどうなるんだろう」「こうやってみよう」と考える姿はあるが、その後の展開が見られない。また、虫に興味があり虫取りを楽しんだり、飼育しようとするが時間が空くと放置してしまう。園児の興味・関心があることを通して、知りたい！やってみたい！等自ら環境に関わり遊びを広げたり、好きなことに好奇心や探究心をもってほしいと思い、そのためには、どういう環境構成や援助が必要か実践を通しながら考えたく、本テーマに設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　幼児が生き物を育ててみたいと思えるような環境構成と援助の工夫

幼児が生き物を育ててみたいと思えるような環境構成をし、子どもが中心となって動いていけるように保育教諭がやってみせたり、飼育者のモデルとなって自然と伝えていけるようにする。

２　幼児が環境に関わり、遊びを広げたり、展開していけるような環境構成

毎日、同じ遊びでも幼児が繰り返し遊んでいる遊びには意味があると思うので見守ることも大事にし、幼児自らが環境に関わりながら遊びを広げたり、展開したりして、遊びを楽しく進めていけるような環境を構成する。

３　共感し合うことなどを通して自ら物事に関わろうとする意欲を育てる

幼児のやってみたい！知りたい！これなあに？の思いを大切にして、一緒に試したり、考えたり、調べたりして、知ることって面白い！楽しい！と思えるようにしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例１

《幼児の実態》
○園庭で虫取りを楽しんでいる。
○つかまえた虫を袋や虫かごに入れて保育室へ持って行き、死ぬまでそのままにする。
○育ててみたいと始めるが、放置してしまう。

≪保育教諭の願い≫
☆生き物への接し方が雑なため親しみをもって接し、大切にしてほしい。
☆責任を持って育ててほしい。
☆小さな生き物にも命があること、生命の尊さに気付いてほしい。

☆環境構成の工夫☆
・虫を育ててみたいと思えるような環境構成。
1　身近にいる虫を調べることができる図鑑を準備する。
2　虫ガーデンを作って、虫がくる環境を作る。
3　保育室に飼育コーナーを設定する。
4　観察しやすいように、透明な虫かごを作る。

【幼児の変容】
・保育教諭が飼育者のモデルとなりながら飼育を進めていくと、やっていることを真似したり、お手伝いをしたりするようになり、徐々に活動が幼児中心になっていった。
・これまで関わりが少なかった幼児同士が餌探しの虫取りをきっかけに関わるようになった。その出来事から友達関係も広がり、深まり、今でも一緒に遊ぶ仲間になっている。
・小さな虫でも乱暴に扱ってしまう友達に対し、生き物を思いやった言葉で声かけをする姿がある。

実践事例２

《幼児の実態》
○ぬりえや桑の実集めなど遊びが一定で、同じような遊びを毎日繰り返している

《保育教諭の思い》
☆遊びを広げてほしい。
☆作ることを楽しみ、作った物を遊びの中に取り入れてほしい。

☆環境構成の工夫☆
・作ってみたくなるような環境構成
1　着せ替え塗り絵や工作キットを設定する。
2　季節の制作を掲示する。

【幼児の変容】
・制作した物を遊びの中に取り入れ、作った物で友達と一緒にごっこ遊びを楽しむようになった。
・こうやったらもっと楽しくなるだろうと自分たちのアイディアを取り入れたり、工夫して遊んだり、遊びの展開が見られるようになった。
・お互いに作った物を見せ合い、認め合う姿が見られるようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・飼育に関わっていくことで、生き物に対し思いやりが芽生えてきたようで、大切に育てようとするようになった。おたまじゃくしからカエルになっていく成長の過程を見て、成長を実感することでより積極的に思いやりを持ちながら飼育に関わるようになった。

・一つのことに一緒に取り組んだことで、他の活動においても「一緒にやろう」など協力しようとし、友達関係も広がった。

・かまきりの産卵、誕生の場面に出会う貴重な体験を自分が生まれたときのことに置き換えて考えることで、命の尊さを実感することができたと思う。

・主体的に環境に関わり、遊びを広げ、工夫して遊び、遊びをより楽しめるようになった。

・様々な友達と関わることで、互いの心情や考え方などの特性にも気づけるようになり、その特性に応じて関わるようになっている。

②課題

・かまきりの誕生の後、園児の思いを受け取り、小さなかまきりの赤ちゃんを保育室で飼育することになったが、誕生する前までに赤ちゃんの飼育の難しさ、大変さを伝えることができれば、良かった。幼児と保育教諭が納得できるまで話し合ったり、意見を交わしあったりする時間を設ける必要性を感じた。

・個人的な制作が多く、友達と共同の物を作ることが少ない。

③実践を通した自身の気づき、考え

・保育教諭がモデルになってみることの必要性・重要性を改めて実感した。

・実体験をすることで、より生命の尊さに気づけたと思う。

・一緒に遊ぶ中で共通の願いや目的が生まれ、協力する楽しさを十分に味わえたと思う。幼児が興味を持って環境に主体的に関わりながら活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を、友達と一緒に重ねていくことの大切さに気付くことができた。

・個人で制作を楽しむ姿は多いが、協同した制作が少ないように感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・友達と楽しく活動する中で共通の目的を見出し、友達の良さに気づき、相手を認め、協力することの楽しさを味わえるような経験をこれからも積み重ねていきたい。

・クラスの中で何か考えたい事柄がある際は、一回の会議で終わらせるのではなく、必要に応じて何度か繰り返し、じっくりと話し合い、結論が出せるようにしていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

身近な人と親しみ、関わりを深め一緒に活動する意欲を育む援助の工夫
―みんなで話し合う活動（サークルタイム）を通して―

宮古島市立　上野こども園　保育教諭　氏名　兼城　美幸

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の領域「人間関係」のねらい「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を持つ。」とあるように、園生活において他の園児や保育教諭と触れ合う中で、自分の感情や意思を表現しながら、ときには園児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通してお互いに理解し合う体験や、一緒に活動する体験を重ねたりしながら関わりを深め、共感や思いやりを持つようになるとされている。

本学級の実態としては、４歳児クラス（６年保育）男児５名、女児９名、計１４名在籍し、新入園児１名、その他の園児は進級児ということもあり、落ち着きがありのびのびと過ごしている姿がある。しかし自分の思いは積極的に伝えてはいるが、互いに一方的に話して、相手の話を聞いていない、聞いてはいるが聞き入れない様子が見られる。感受性豊かで、意思がはっきりしている園児が多く、些細なことでお友だちとトラブルになる姿が見られた。一方で、玩具の貸し借りや言い合いでのいざこざで泣いていたり、困っているお友だちに気づくと「どうしたの？大丈夫？」と、声をかけたり、園児なりに仲立ちしようとする優しい姿も見られる。

このような実態を踏まえ「自分の気持ちを調整し、お友だちと折り合いをつけたり、相手の話に耳を傾ける力」を育んでいくためにはどのような環境構成や援助の工夫が必要なのかを研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　みんなで話し合い、園児同士が多様な関わりが持てる環境作りについて

朝の会や帰りの会などで今日の活動を園児たち自ら話し合う環境作りを通して、自己を発揮するとともに、お互いに思いを主張し、折り合いをつける体験ができるよう援助をしていく。

２　ルールのある遊びを通した心の育ちを育む援助の工夫について

保育室、園庭にて「しっぽとり」「だるまさんがころんだ」「いす取りゲーム」などの遊びを通して、きまりの必要性に気づき、自分の気持ちを調整する力が育まれるように援助していく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】プランターで野菜の栽培

《幼児の実態》
・朝の会にて、年長児が自分たちで育てたスイカを使い、スイカ割りを楽しむ姿に刺激を受けた園児から、自分たちもクラスで何かを育てたい！と、声があがった。

《保育教諭の願い》

・栽培活動を通して、興味があることをお友だち同士で話し合い、協力する楽しさを味わってほしい。

《保育教諭の関わりと援助》

・何を植えるか、水やり当番をどうするかなど、ひとつひとつをクラス全体で相談するようにした。

・苗の購入、土に肥料を混ぜてプランターに入れる、運ぶなど栽培活動の準備から自分たちで行うことで、育てる意欲がもてるようにしていった。（ピーマン、唐辛子、キュウリ、スイカ、トウモロコシ、サニーレタス）

・収穫した野菜は給食に入れてもらったり、家庭に持ち帰り保護者の方にも味わってもらった。

《幼児の変容》

・進んで水やりをする姿やお友だちに声をかけ誘う姿、野菜の生長をお友だちに知らせ一緒に観察を楽しむ姿が見られるようになった。

・収穫時には、収穫物に合わせてやりたいことを話合い、実際に挑戦することができた。
（食べる、野菜スタンプ、スイカ割り）

《結果と考察》

・まだまだ一方的な意見の言い合いもあるが、スイカ割りを行う際に、道具は何が必要か？順番は誰からするのか？を自分たちで話し合い「誕生日終わった人からにする？」「男の子から先がいい！」「じゃんけんしよー」など、決めていこうとする意欲が見られるようになった。割ったスイカを皆で食べていると「この種植えたらまたスイカなるかな？」「持って帰って植えて良い？」と、新しい展開が見られた。

【実践事例２】パラバルーンに挑戦

《幼児の実態》

・しっぽ取りやイス取りゲームに誘うと「やりたい！」と積極的な園児、「いやだー」と消極的な園児がいて、取り組んでも人数的に少なく盛り上がりがあまり見られないでいた。ダンスが好きな園児は多く「この曲流して」と、毎日リクエストがある。音楽が流れると自然に集まりダンスを楽しんでいる。

《保育教諭の願い》

・活動を進めていく中で力を合わせ技を成功させる喜びや、みんなで協力しないとうまく出来ない事を学び、自分の気持ちだけでなく、相手の気持ちにも気づいて欲しい。

《保育教諭の関わりと援助》

・まずはパラバルーンに慣れるよう、保育室内でたくさん触れる機会を作り、実際に動かして一緒に楽しく遊ぶ。

・サークルタイムにて、園児一人ひとりの好きな曲を教えてもらい順番に流しながら積極的に取り組めるよう心がけた。

・動きを合わせないと技ができないことに気づけるような声かけ、出来たときは共に喜び達成感を味わえるよう心がけた。

《幼児の変容》

・やらないと言っていた園児も、好きな曲が流れると気の合うお友だちの声かけで自然と輪に入り取り組む姿が見られるようになった。

・互いに声をかけあい合わせようとする姿、技の完成度を高めるために話を聞こうとする姿勢が見られるようになった。

《結果と考察》

・生活発表会の演目にパラバルーンを取り入れたことで、園児一人ひとりに保護者や観客に披露したいという気持ちが芽生え、みんなで協力して技を成功させようとする姿につながったのではないか。

・成功させるためにどうしたらいいか話し合う機会を多く設けたことで、自分の気持ちや相手の考えに気づくことができた。

Ⅳ　実践の振り返り

１　成果

・日々のサークルタイムで、一日の流れや今後の取り組みについてみんなで考え話し合っていくことで、学級に連帯感が生まれてきた。意見をなかなか言えない子も、言える環境を作ることで、少しずつ相手に伝えることができるようになってきた。また、自分の意見を通そうとする子も、少しずつ相手の話が聞けるようになってきた。

２　課題

・まだまだ友だち同士のトラブルはあり、保育教諭が仲立ちしないと解決しないこともあるので、自分の意見を伝えるだけではなく、相手の気持ちを少しずつ考えられるような雰囲気作りや環境を、引き続きみんなで考えていきたい。

３　実践を通した自身の気づき、考え

・日々の何気ない保育のなかにたくさんの実践があり、少し意識をすることで言葉や表情の一つずつに丁寧さを心がけていきたい。園児達の声を聞き流さず、一つ一つ大切にしながら保育をしていきたいと改めて感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・今後も今回の取り組みの成果や課題をいかし、個の育ちや遊びを大切にしながら、集団としての育ちにつなげ、クラス全体でルールのある遊びや共同遊びにつながるような保育を行っていきたい。

・園児達が安心して過ごせるような保育環境を整え、コミュニケーションを大切にし、園児達が豊かに成長できるよう学び深めていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』

好奇心・探究心を持ち豊かな創造力を育む工夫
―自然物を使った遊びを通して―

宮古島市立下地こども園 保育教諭　知念 のり子

Ⅰ テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章４節の「表現」の領域には「生活の中で美しいものや心動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」とある。完成された特別なものだけではなく、生活の中で出会う園庭の草花や動いている虫等の生命との出会い、または、自然の事象等の様々な体験を通して、園児は具体的なイメージを心の中に蓄積していくとされている。

本学級の実態としては、３才児クラス（６年保育）男児１０名、女児１２名、計２２名が在籍し、新入園児が１１名ということもあり、まだ園庭にある自然物を使った遊びに気づけていない子が多く、異年齢児の真似をして色水や草花を使った遊びを楽しむ姿はみられるが、創意工夫して夢中になり遊び込む姿が少ないと感じる。

このような実態を踏まえ、園児が生き生きとイメージを広げ、いろいろなものを思い浮かべる想像力を培い新しいものを作り出す力が育ってほしいと願い、テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ 課題に対する具体的な手立て

① 戸外を探索しながら園庭の草花や生き物に興味を示し親しみが持てるように、園児が感じている心の動きを受け止め共感していく。

② 園児のイメージの豊かさに関心をもって関わり、自由に創意工夫のできる環境の工夫をし、「どうしたらできるかな」と道筋をたて発想が広がるような援助をしていく。

③ 気に入った自然物を収集できるカップやビニール袋・ペットボトル等を園児の手に届く位置に設置する。

Ⅲ 課題解決に向けた取組 （実践）実践事例（１）「草花を使って表現を楽しむ」

〈保育の展開〉、登園時のお迎えを園庭で行い、涼しい時間帯から戸外遊びを行い、より長く園庭で過ごす時間を設けることで探索活動や夢中になって遊ぶ時間を確保していった。

〈環境や援助の工夫〉・環境作りで工夫した事は、収集を楽しめるようにカップやビニール袋・ペットボトル等（廃材コーナー）を手に届く位置に設置できたことで、園児が思いついたらすぐに自分の好きな用具を見つけて活用するようになった。

・一緒に散策活動を楽しみ、園児自らの気づき・発見したり、不思議に感じた気持ちを丁寧に受け止め拾っていき、「すてきだね」「いいね」「なんでだろうね」と共感し言葉をかけたり、「なんでだと思う？」と問いかけながら一緒に考えていくような援助を行っていった。

〈幼児の変容〉

・園庭の草花に興味を持ち始め、草花を使って思いのままやってみようとする姿がみられるようになってきた。お友だちと「どうやったの」「どこにこのお花あるの」等対話や模倣もしながら楽しむようになる。

・小さな黄色い花を収集。遊具の台に小さい穴を発見。手に持っていたお花をはめこんでみる。おもしろさを感じたくさんはめこんでいく。「どんな形になるんだろう。」

・散策してハイビスカスのお花を発見。花びらをさいてみるとネバネバしている事に気付いた。耳にかけたりイヤリングにしておしゃれを楽しむ女児。

・どのお花だと色水作れるのかな。お友達に教えてもらって「色水できたよ。」「どんな色できた？」お互いに比べっこ。

・砂場でままごと遊び。お皿にいれた砂の上に好きなお花で飾り付け。砂遊びと草花遊びの組み合わせを楽しむ。

事例実践（２）「表現を共感してもらいたい！共有したい！」

〈保育展開〉

・豊かな感性を育み、自己を表現する事に意欲を持てるように、園児が自然や人々と身近な環境と関わる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わうことが出来るよう、一緒に遊びながら園児の呟きを拾い遊びを見守り共感・共有していった。

〈環境や援助の工夫〉

・園児の多様な声を拾ったり対話を通してイメージを表現する方法を一緒に考えたり、必要な道具等を見つけるために廃材コーナーに誘ったり、ブックカバーや手作りの冠なども用意していった。

〈幼児の変容〉

・自然物を使った遊びも自発性がみられだんだんと定着し繰り返し遊び込む姿がみられてきた９月頃、同時に、作りっぱなし遊びっぱなしになりマンネリ化してきたように感じた。そんな時、H さんが、園長先生が園庭の花をきれいに花瓶にいれて玄関先に飾っている姿をみて、「私も飾りたいなー」と呟きがあった。H さんは色々な種類の園庭にある花を摘んで遊んでいたようで、たくさん手に持っていたので、「H さんのも飾ってみようよ」と誘いかけた。一緒に、廃材のコーナーから容器を選び本児の好きなようにお花を生け、仕上がると玄関先に飾りみんなに見てもらえるようにした。本児も自分の作品を見てもらえることに喜びを感じているようであった。

<table>
<tr>
<td>・R さんからは、「きれいなお花をプレゼントにしたい」「ずっと残るようにしたい」との声が上がった。
押し花にできることを提案する。お花の形や色、大きさにこだわりながら配置していき押し花遊びを楽しんだ。「お母さんがお花好きだから、喜んでくれる」とプレゼントを渡せることにウキウキした表情をみせていた。</td>
<td> </td>
</tr>
<tr>
<td>・誰かに共感・共有してもらいたい気持ちが湧いてきた園児達のために、保育教諭が画用紙と輪ゴムを使って冠を作り、それに好きな草花を貼り付けて遊べるように用意する。園児達は、あちこち園庭を散策しながら好きな草花を探し夢中になる姿があった。小さな花を探す子、葉っぱの形にこだわる子もいて、どの作品も同じ物はなくオリジナルの作品となった。作品が仕上がると頭に被って、友だちと見せ合いしたり、お迎えにきた保護者にも見てもらい嬉しそうであった。
 </td>
<td>
 </td>
</tr>
</table>

Ⅳ 実践の振り返り

①成果：・園庭遊びの時間を増やし遊びの時間を保障できた事によって遊びの展開が広がった。
・表現した事に共感してもらえる事で「もっとやってみたい」と意欲に繋がった。
・作った感動や喜びを親しい相手に共感・共有してもらい、さらに喜びや感動が深まった。

②課題：・自分から自然物のおもしろさにいまいち興味が持てずにいる子への対応の方法を工夫していきたい。
・玄関先だけではなく作品を飾ったりできる場所を設けても良かったのかもしれない。

③実践を通した自身の気づき、考え
・保育教諭が園児一人一人のイメージの豊かさに関心を持ち柔軟な姿勢で関わる事で、想像力を引き出していけるのだと気付いた。
・園児達は自由な表現を楽しむ中で、保育教諭の見守りや呟きを拾っていく事、そして共感・共有していく事が遊びを深めていく事なのだと気付いた。

Ⅴ 今後の実践に向けて

・園児の多様な声や言葉を認識・理解することを大切に、興味・関心を持ってるように自発的に楽しめるように関っていきたい。
・園児自ら気付いてやってみようと行動を起こすまで待ちながら、柔軟な発想が生まれてくるような「子どもの視点」で捉えた園庭環境によってアプローチしていきたい。
・一緒に遊びながら園児の気持ちにたくさん寄り添っていき、園児一人一人が継続していくことや変化していくことを受け入れて楽しめるようにしていきたい。

〈主な参考文献〉内閣府・文部科学省・厚生労働省 平成３０年幼保連携型認定こども園教育・保育横領解説
秋田喜代美・石田佳織・辻谷真知子・宮田まり子・宮本雄太 平成３１年 園庭を豊かな育ちの場に ひかりのくに株式会社
汐見稔幸 令和２年 保育者と親のための学び＆交流エデュカーレ 主体的な保育って？ 臨床育児・保育研究所

好奇心や探究心を育むための環境構成と援助の工夫

－身近な環境や生き物との関わりを通して－

石垣市立へいしんこども園　保育教諭　仲里　崇

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第 22 条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。幼児期の特性は心身の発達が著しく、環境から大きな影響を受ける時期である。生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直感的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる豊かな心情、物事に自分から関わろうとする意欲や健全な生活を営むために必要な態度等が培われる。また青少年を対象とした調査では、自然体験を沢山行った子どもは、「わからないことをそのままにしないで調べることが多い」ことや、「相手の立場になって考えることができる」ことが明らかになっており、自然体験は課題解決や豊かな人間性等、「生きる力」を育むと結論付けている。自然と関わる事によって、人格形成において大切な部分が芽生えてくることだと考える。「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の第２章第４節「環境」の領域には、「自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ」とある。好奇心や探究心を育むためには、身の回りにある自然などの様々な事象に触れる機会を多くもつようにし、それらを取り入れて遊ぶ楽しさを十分に味わうことが必要である。

本学級の園児は 4 歳児（3 年保育）男児 7 名、女児 11 名、計 18 名在籍し、園生活の中で何か不思議に思う出来事があると「なんでこうなるの？」と疑問を抱き、「知りたい」という気持ちをもつ子が多い。蝶の幼虫をクラスで育て羽化させた経験、また蝶の幼虫に愛情をもち虫かごを毎日家に持ち帰り、羽化の瞬間を保護者と一緒に見ることができた園児もいた。大きな木の木登りに挑戦するが失敗し、どうしたら登ることが出来るのか試行錯誤し、登ることができるまで何度も挑戦する子もいた。自園は園庭が広く畑や蝶園もあり自然の環境は整っていると思う。

そこで、身近な環境を十分に取り入れて、生き物と関わり合いながら子ども達の好奇心や探究心を深め、様々なことに興味・関心をもってほしいと願い、本テーマを研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

1　園児が生き物に愛情をもって関わることができるような環境の工夫について

身近に溢れる自然の中で見つけた生き物等に親しみをもって接し、命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりするような援助を行う。

2　園児が自然体験や生き物との触れ合いを通して、その性質や仕組みに興味や関心がもてる環境構成と援助の工夫

様々な生き物との関わりの中で、「どうなっているのだろう」「触ってみたい」「面白い」というような感覚を育て、好奇心や探究心を深めるような援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例「T さん、カマくんとの出会いと別れ　～こんちゅうかんのせかいができるまで～　」

□　園児の姿　○保育教諭の読み取り　◎保育教諭の願い　◇環境構成　☆保育教諭の援助

【発見】

・10 月、部屋で過ごしていると、窓の外側に一段と大きなカマキリを発見した。大きなカマキリを見て子ども達は大興奮だった。今までに見たことがない程大きなカマキリに多少の恐怖はあるものの、T さんは「飼いたい！」と言い、クラスで観察することにした。始めは、全園児が見える場所に置こうかと思ったが、T さんはお部屋で観察したいと強く願ったので、クラスで飼育することになった。

【捕まえたはいいけど・・・】

・朝登園すると真っ先にカマキリの元へ行き様子を見ていた。元々クラスにはクワガタやテントウムシ、カタツムリに蝶の幼虫が昆虫コーナーにいた。そこへ新たにカマキリが加わった。子ども達は観察するが、エサをあげようとはしなかった。エサをあげることなく３日程経った頃、カマキリの食べ物について一緒に考えてみることにした。

保育教諭

○カマキリを飼うことになったのはいいけど、どのように飼育していいのかがわからないのかな…
○カマキリの存在は知っているけど、特徴等は知らないのかな…

◎カマキリとの関わり方が分かり、好奇心をもって接してほしい

◇朝の会、帰りの会を利用し、カマキリの飼育方法を話し合い、皆で考える場を設ける。
◇「こんちゅうかんをつくりたい！」という声があがった為、子ども達同士でアイディアを出して作れるように、段ボールやペン等を用意する。
◇図鑑でカマキリのページを見開きにして、調べたい時にすぐ手に取ることが出来るようにする。

【何を食べるのかな？】
・カマキリは何を食べるのか、図鑑等で調べるが探すことが出来ず、友達同士で「葉っぱかな？」「虫じゃない？」等と会話をしていると、年長児が話を聞いており「カマキリはバッタを食べるんだよ」と教えてくれた。「バッタだって！」と分かったことを嬉しそうに早速園庭にバッタを捕まえに行った。

【バッタ捕まえたよ ⇒ 食べるところを見てみよう！】
・バッタはこれまでにも捕まえた経験があり、すぐに捕まえることができた。早速虫かごの中に入れて食べる様子を観察することになった。

・バッタを食べることを知ったＴさんは、それからは虫かごの中を自分で確かめて、バッタがいなければ自らバッタを探しに行く姿が見られた。また、その姿を見た友達も、「私も探すよ」と一緒になって探し、気持ちを共有することができた。

・女の子も少しずつ興味をもつようになってきた。「名前を付けた方が良いんじゃない？」という話になり、「カマくん」という名前が付いた。

～ 昆 虫 館 の 完 成 ～

【昆虫館製作まで】
・市内の公園にある昆虫館に実際行ったことのあるＴさん。昆虫館を思い出しながら、段ボールで昆虫館を作ることにした。担任と一緒に何やら大きなものを作っている姿を見て、「何作っているの？」と友達が寄ってきた。
「こんちゅうかんだよ」とＴさんが答えると、「つくりたい！」と友達が何名か加わり一緒に製作することになった。イメージをすり合わせながら２日で完成した。
※「おきなし」大きな声なし等、自分たちで決まりを作っていた。

【カマくんが大きなウンチをした】

・朝登園すると、虫かごの天井にカマくんが大きなウンチをしていた。茶色と白が混ざったような色で、ウンチという考えになった。T さんが登園し大きなウンチを確認すると、「これはウンチじゃなくて卵だよ」と教えてくれた。「でも、お尻から出ていたからウンチじゃない？」と話は折り合いが付かなくなっていたが、T さんが図鑑に載っていたことを思い出し、みんなに図鑑を見せて、卵であることを知らせることができた。

保育教諭

○カマキリの特徴を捉えてきているな…
○昆虫を育てた経験から何か形にすることはできないかな…

◎今まで育ててきたことの発表を通して、見たり、感じたり、考えたりしたことを表現する楽しさを味わってほしい

◇12 月の生活発表会に向けて、話し合いの場を設ける。
◇衣装の材料を用意する。
◇昆虫太極拳や、昆虫に関わるダンスをしたり、絵本の読み聞かせをしたりする。
☆発表会でどんなことをしたいのか、４月からの園生活を１人ひとりに聞いてみる。
☆発表会で昆虫館を保護者に見せたらどうか、持ち掛けてみる。

生活発表会の様子　～こんちゅうかんのせかい～

【 T さんの変容 】

・人前に出て、発表をすることが苦手だった T さん。運動会では練習はしていたものの、いざ本番になると体が動かず、立ったままという場面が見受けられた。今回の生活発表会でも、前日まで「明日の発表会楽しみ」等の話をしていたが、当日の朝保護者から電話があり、「やっぱり行きたくない」と緊張している姿があった。

人が多く集まる生活発表会の舞台で演技が出来たら自信がつくと思うが無理強いはせずに気持ちを尊重しようと考えた。T さんの仲の良い友達に電話を替わり「T さん、待っているよ」とだけ伝えてもらい、電話を切った。

後、数十分で開始時刻になろうとしている時に、T さんが勇気を出して登園した。クラス全員が揃い発表会に臨むことができた。そこには、人前が苦手な T さんとは見違えるくらいに張り切った演技でカマキリ役をする表情が見てとれた。勇気を出して登園したことや、友達がいるという心強さを胸にまたひとつ T さんの成長を感じた。

【エピソード】「いやだ、逃がしたくない！」
2学期が終わり年末年始に入る為、カマくんを逃がそうかどうかの話を園児に持ち掛けてみた。すると、「休みの間お世話できないから、逃がそう」や「ずっと狭い虫かごの中に入れておくのはかわいそう」等の意見が出てきた。全員が逃がそうと言う話をしている中、Tさんだけは「嫌だ、逃がしたくない」と自分の意見を譲らなかった。
保護者にこの出来事を伝えると、自宅でも話をしてみるとのことだった。数日後、カマくんを逃がしてあげようという話をしてみると、「うん、逃がす」と畑に行き「元気でね」と笑顔で逃がしてあげた。

〈 保育教諭の対応 〉
・カマくんの気持ちになって、畑に返してあげたTさんに対して、カマくんは今頃どうしているのか一緒に考えてみた。「木の枝のところに帰ったはず」「もう捕まらないでほしい」等と、Tさんの思いを聞くことができた。

〈 結果と考察 〉
・はじめは大きなカマキリにビックリする姿があったが、飼育していく中で、バッタ（餌）を捕まえ、「たくさん食べてね」と声掛けしたり、図鑑で種類を調べたり、カマくんに愛情をもって育てていると感じた。また、“こんちゅうかん”の作成に発展し各々のイメージを共有しながら協力して作る姿が見られた。
・カマキリを逃がすかどうかのこども会議では、カマキリの気持ちになって考えることができた。Tさんの「せっかく捕まえたのに、逃がしたくない」という気持ちも尊重しつつ、話し合いが進む中でTさんも保育教諭や保護者、友達の言葉を聞きカマキリの気持ちになって考える事ができた。

V　実践の振り返り
・Tさんがカマくんと出会い、別れるまでたくさんの出来事の中で新しい発見や、不思議な事、嬉しかったこと、気持ちの葛藤等、様々な感情に触れることができた。
・園児は園庭に出ると、カマくんのことを考え、自分の遊びより先にバッタを捕まえることを優先した。また、園庭の中でもどの辺りにバッタが多く生息しているのか発見したり、帰りにはエサがあるかどうか確認して帰るようになったりして、自分を置いてカマくんの事を考えるようになったことに命の尊さに気付き、大切にしているように感じた。
・実際に卵を作る姿を見ることができた。カマくんは逃がしたが、今後卵の観察を続けることで、命の誕生を見ることができたらいいなと考える。

VI　今後の実践に向けて
・園児の好奇心や探究心を深めるには、園児の内面を知ることが必要だと感じた。一人ひとりの興味・関心をしっかりと把握して、友達同士で成長し合える環境を整えていきたい。
・園児が自ら身近な環境や生き物との関り、興味・関心をもつには、まず保育教諭が興味・関心をもつことが大切だと感じる。ただ調べるだけではなく、環境構成や援助の工夫をしていきたい。

〈主な参考文献〉
内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館
著：汐見稔幸 イラスト：おおえだけいこ 平成29年『さあ、子どもたちの「未来」を話しませんか？』　小学館
全国国公立幼稚園長会 平成25年　幼稚園じほう　『質の高い幼児期の学校教育を推進する～好奇心や探求心を育てる～』　全国国公立幼稚園長会事務局［時報部］
著：平野吉直他　平成11年『子どもの体験活動等に関するアンケート調査報告書』

様式３【課題研究レポート】

楽しく食べるための援助の工夫

～栽培活動や友達との関わりを通して～

石垣市立おおはまこども園　保育教諭　長間　麻衣

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の第２章第４節「健康」内容の取扱い(４)において「健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、園児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で保育教諭等や他の園児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。」と示されている。これらのことから、食は園生活において子どもが元気よく健康にすごすためだけではなく、全ての活動において必要不可欠であると考える。

本学級は、男児１６名、女児８名、計２４名の４歳児(３年保育)クラスである。本学級の実態として、食に対して関心がもてない子や、苦手な食材があると口にしない等、偏食の子がおり、給食の時間を楽しめていない園児の姿が見られる。これまでの自身の保育を振り返ると、食事前に、食べ物に関する絵本を読んだり、個々に合わせ量を調整したりする等、楽しく食べられるような声掛けや援助の工夫をしているが、食べる意欲につなげることができず、援助の難しさを感じている。このような実態を踏まえ、食に興味・関心をもち、苦手な食材でも食べてみようとする気持ちをもったり、食事の楽しさや食べる喜びを感じたりしてほしいと願い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　食べたいという気持ちがもてるような環境構成
- 献立紹介をし、使われている食材の確認をしたり、視覚教材を活用したりする。
- 楽しい雰囲気の中で食事ができるような環境構成の工夫

２　食べる喜びや楽しさを感じる援助の工夫
- 野菜の栽培、収穫、クッキングをする。
- 栄養士による親子食育講話の開催

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

〈園児の姿〉４月
- 給食に苦手な物(野菜)が出ると手をつけず、好きな物だけ食べ、食事の時間が終わるのを待つ姿が見られる。
- 食事をほとんど食べない子もいる。

〈保育教諭の願い〉
☆食材に興味・関心をもってほしい。
☆苦手なものでも、一口だけでも食べてみてほしい。

〈保育教諭の援助・環境構成〉
- 給食時間に献立の紹介や、使われている食材・役割などを知らせ、赤・黄・緑の３つのお皿(３大栄養素)に食材を色分けし、食材に興味がもてるような工夫をする。
- 給食に使われている食材を、子ども達が発見できるような声掛けをする。
- 栽培活動や近隣の畑での収穫体験を通して、様々な食材に興味・関心がもてるよう、野菜図鑑を準備する。

給食に使われている食材の確認や３つのお皿に色分け遊び

献立紹介

給食の食材確認中

友達と色分け遊び

〈園児の変容〉
・給食の食材に興味を示すようになってきた。
・遊びの中でも、給食に入っていた食材を３大栄養素に分け楽しんでいた。

栽培活動

ゴーヤーの苗植え

力を合わせてゴーヤー収穫

ゴーヤー豊作！豊作！

近隣の畑でバナナ発見!!

〈考察〉
・栽培活動や３つのお皿の色分け遊びを通して、様々な食材に興味・関心をもってきたと思われる。

〈園児の変容〉
・日々の世話を通して生長を喜び、収穫した野菜の数を数え収穫を楽しんでいた。
・園や地域で栽培されている野菜や果物をよく観察するようになった。

〈園児の姿〉８月
・声掛けは必要だが、苦手な食材に挑戦できるようになっている。
・給食に使われている食材に興味をもち、よく見る様子がある。

〈保育教諭の願い〉
☆友達と食べる事を楽しみ苦手な食材でも自ら意欲的に食べてほしい。

〈保育教諭の援助・環境構成〉
・楽しい雰囲気で食事ができるよう、グループや気の合う友達と座る等、環境構成を工夫する。
・園で(クラスで)育て収穫した野菜を使ってクッキングをし、意欲的に食べられるようにする。
・収穫した野菜を使った料理を、絵本などで紹介し、食への興味・関心を高める。

クッキング

ゴーヤーの匂い確認中。

ピザ作り開始！

ピザと和え物試食タイム

ゴーヤージュースで乾杯♪

〈園児の変容〉
・収穫した野菜を使ってクッキングすることで、苦手な食材でも「食べてみよう」とする意欲が見られるようになった。

食事時間

〈園児の変容〉
・座席を工夫したことで、楽しい雰囲気の中、食事ができるようになった。
・苦手な物があっても友達同士で声掛けをしながら完食を目指す姿が見られた。

〈考察〉
・友達と一緒に食べる事で、「友達も食べているから」と食べようとする気持ちをもち、友達との関わりが良い刺激になったと思われる。
・園で育てた野菜を使ってクッキングをすることで食べる意欲につながったと考える。

〈園児の姿〉１０月
・食べられるようになった食材が増え、喜んで食べるようになった。
・「お腹すいた」と給食時間を楽しみにする姿が見られるようになってきた。

〈保育教諭の願い〉
☆食事の楽しさや食べる喜びを感じてほしい。

〈保育教諭の関わり・環境構成〉
・栄養士による親子食育講話を開催し、食事や栄養バランスの大切さを伝える。
・野菜の手遊びや絵カードなどで、楽しみながら野菜の特徴を知らせる。

栄養士による親子食育講話

親子で栄養素について考える食育タイム

朝ごはん何食べましたか？

パン食べたから、赤かな？

生活発表会

ゴーヤー製作中～

ゴーヤーこんな感じだよね

育てたゴーヤー紹介中

じゃーん！みて！

栽培した野菜も入れて作ったカレー出来上がり♪

〈園児の変容〉
・朝ごはんを工夫する家庭が増えた。
・朝ごはんの食材の栄養素を色分けし、３色揃うとバランスよく摂れていることを喜んでいた。

〈園児の変容〉
・野菜の色や形、特徴をしっかり捉え製作していた。
・劇作りでは、自分の思いを伝え、友達の思いを聞きながら、友達と協力して取り組むことができた。

〈考察〉
・給食以外にも、家庭での食事にも興味・関心をもつようになったと考えられる。
・発表会で、これまでの食育活動をオリジナルの劇で発表し、充実感や達成感を味わい、自信につながったと思われる。

Ⅳ　実践の振り返り

１　成果
・友達や保育教諭と楽しみながら栄養に関する色分けをすることで、食材の栄養について興味・関心をもつようになった。
・野菜の栽培や、収穫、クッキングを通して、栽培活動の楽しさにつながり、食べることの喜びにつながった。
・クッキングを通して、苦手な食材が食べられるようになったことで「もっと食べたい」と食べる意欲につながった。
・収穫した野菜を様々な料理にすることで、さらに食材や食事に興味・関心をもつようになった。
・栄養士による、親子食育講話を開催したことで、家庭でも食事に対する意識が変わり、より食事が楽しめるようになった。

２　課題
・家庭との連携を図り、よりよい食育活動につなげていく必要がある。
・食事に興味・関心がもてるような環境構成の工夫を継続していく。

３　実践を通した自身の気づき、考え
・栽培活動やクッキング等の体験を通して、苦手な物でも食べてみようという意欲が芽生え、一口でも食べることができた経験が、自信につながり他の野菜にも挑戦するようになってきたと感じる。
・栽培活動を通して、植物の生長の小さな変化にも気付き観察力が高まった。その中で、気付いたことや感じたことを友達と共有することで会話も増え、友達関係が深まったと感じる。
・栽培活動において、知識や事前の計画が必要だと感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・ドキュメンテーションやクラスだより等を活用し、園で行っている食育の情報発信を継続していきたい。
・親子クッキングを開催し、親子で楽しみながら苦手な物も食べられるようにしていきたい。
・今回の取組だけで終わらず、今後も継続して食事の大切さを伝えていきたい。

〈主な参考文献〉
・内閣府 文部科学省 厚生労働省 平成30年 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　フレーベル館
・たよりになるね！食育ブック　３子どもが身に付けたい食育編　少年写真新聞社

園児が安定した園生活を送るための援助の工夫
—園内学習・園外学習を通して—

石垣市立あらかわこども園　副園長　氏名　島袋　千寿香

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、核家族化が進み幼児の育ちについては、他者とのかかわりが苦手、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていない、などの課題が指摘されている。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「人間関係」において、「園児にとって、園生活は、初めての集団生活の場である。園児は、そこで自分を温かく受け入れてくれる保育教諭との信頼関係を基盤に自分の居場所を確保し、安心感をもってやりたいことに取り組むようになる。」とある。園児にとって安心して過ごすことができる生活の場となるためには、園児の行動を温かく見守り、適切な援助を行う保育教諭の存在が不可欠である。保育教諭は園児一人一人に対する理解や指導についての考え方を深めることが大切であり、職員間で話し合うなど園内学習の充実を図ることが必要であると考える。

本園の実態として、３歳児２１名、４歳児２１名、５歳児２６名、計６８名の園児が在籍している。自分らしさを発揮しながら過ごしている子もいるが、中には、気持ちを言葉で伝えることができず手が出てしまう園児や、自分の思いが通らず癇癪を起こす園児など、感情のコントロールが難しく援助が必要な園児もいる。しかし、職員間で話し合い共通理解を図る場がなかなかとれず、対応や支援の仕方に悩む状況がある。

このような実態を踏まえ、園内学習などを通して職員で、園児の実態把握と園児理解を深めていき、安定した園生活を送るための援助の工夫を研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　園内学習や園外学習などを通して、園児の実態把握と園児理解を深める

２　園児が安定した園生活を送るための援助の工夫

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

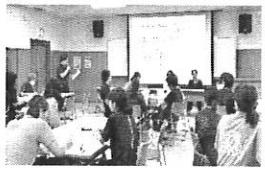
園内・園外学習計画

園内学習									園外学習		
回	月日	内　容	回	月日	内　容	回	月日	内　容	回	月日	内　容
1	4/30	テーマ検討	4	9/26	愛着障害について	7	1/22	遊びの読み取り	1	11/15	事例を通して支援を考える
2	6/18	内容検討	5	11/31	保育カンファレンス	8	2/21	環境について			
3	7/23	保育カンファレンス	6	12/17	読み合わせ	9	3/25	支援について			
4	9/25	愛着障害について		12/23	園児理解						

【実践事例１】「様々な立場で考えてみよう！」— 園外学習１ —

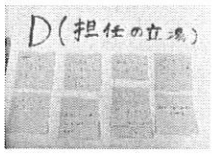
〈 園外学習に参加・事例発表 〉

・石垣市社協ひまわり学習会「事例を通して支援を考える」に参加、A児（４歳児）の事例発表をする。
・ワークでは、事例に出てくる登場人物になりきって考えや気持ちを可視化した。
・様々な立場で考えることで園児理解、他者理解の学びを深める。



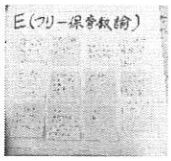
〈グループごとにそれぞれの立場で考え、気持ちを可視化した〉

（Aさんの立場）

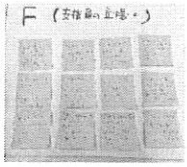


（担任の立場）

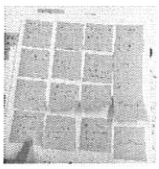
（親の立場）



（フリー保育教諭）



（支援員の立場）


（クラスの子の立場）

担任

・様々な立場で考える事が良かった。
・自身を振り返る機会となり視野が広がった。
・周りの人の考えに気づくのが大事で、様々な考えが混ざり合っていろいろな手立てが見えてくると気づいた。
・A児、クラスの園児、それぞれの気持ちを大切にしたいとあらためて感じた。

支援員

・担任、フリー保育教諭の思いや考えを知ることができた。
・A児が集団に入れずにいる姿を見て「苦しいんだね」と困り感に共感し、寄り添えたことで、A児が落ち着いたと感じた。

〈学習会後のエピソード〉

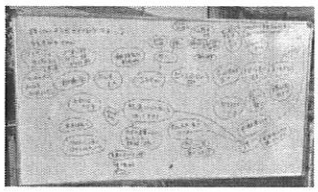
A児は日頃、着替えの時間に、静かな場所を探して保育室へ出て行ったが、その日は絵本の読み聞かせを遊戯室ですることにしてクラスの園児たちが移動することにした。いつもと違う場所での読み聞かせに嬉しそうな園児達だった。A児も着替えを済ませて、保育室に戻ってきた友達を機嫌良く迎え入れていた。

〈結果と考察〉

・園外の学習会で事例を検討してもらうことは貴重経験となり、学びの場となった。
・園児の立場で考えることで、一人一人の気持ちを大切にした支援の工夫をすることができ、園児にとって良い環境を構成することができたのではないかと考える。

【実践事例２】「B児ってどんな子？」― 園内学習３ ―

・クラスでの様子や担任の困り感の話を聞く。
・職員から見るB児（５歳児）の話をする。
・多面的にB児を知り理解を深める。



〈クラスでのB児の姿〉

・自己主張が強く思いを通そうとするところがある
・友達とのトラブルが多い
・進級してから癇癪が強くなった

〈担任の悩み〉

・日に日に癇癪が多くみられるようになり、B児にとって良い対応とは・・・

〈他の職員から見るB児の姿〉

・思い通りにならないと泣き叫ぶ
・シクシク泣いて目で訴える
・友達が作ったものをわざと崩す
・友達の気持ちに気づいていない。

B児ってどんな子？

〈良いところ・素敵なところ〉

・給食の時の当番活動を頑張っている
・言葉かけが優しい
・１歳下の弟のことを心配する
・ボール投げが得意
・ムードメーカー、みんなを引っ張っていけそう
・いざというときにクラスの子に頼られている

〈苦手・不得意なもの〉

・感情表現が苦手
・待つことが難しい
・甘えることが不器用

〈好きなもの・得意なもの〉

・ボール遊び　・ビー玉遊び　・エイサー
・友達が好きで積極的に関わろうとする

〈言葉〉

・保育者の言葉が伝わっていない
・楽しいことを話したいけど言葉が出てこない

〈支援の工夫として・・・〉

・クラスメイトと気持ちを伝え合う場面を持つ
・気持ちを代弁して仲立ちをする

担任

・職員との話し合いの中で、自分の視野が狭いなと感じた。
・園内学習の後、B児の優しい面などに目が向くようになった。
・B児の自己主張の強さやパワフルな面が友達に頼られる良い面でもあると気づいた。

〈対応の工夫と園児の変化〉
・癇癪を起した時、さみしいのかな？かまってほしいのかな？と思い「B児の見方だよ」「気持ちわかるよ」とスキンシップを取りながら感情のコントロールを促すと、気持ちが落ち着き集団に戻ることができた。
・やりたいことを言葉で表現するのが苦手で先に手が出ていると考え、「気持ちを言ってごらん」と気持ちを伝えるよう促したり、友達の気持ちに気づけるように援助することで、自分から友達に話しかけ再び一緒に遊べるようになってきている。

〈結果と考察〉
・クラスの困り感を知ることで担任の気持ちに共感し、職員間で意見を出し合いながら園児理解を深め、対応の仕方など一緒に考えることができた。
・B児を多面的に知ることで、あるがままの姿を肯定的に見ることが増えた。
・園児理解を深めることで、職員の意識が変化し、園児に対する関り方や対応の仕方が変わったことが、B児の気持ちの変化にも繋がったと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

1　成果

(1) 園児一人一人の良さや、好きなこと苦手なことを知ることで、保育教諭等の関わり方が変化し園児の姿にも変化が見られた。

(2) 園児の内面について、多面的・肯定的に捉えることができ、幼児理解に繋がった。

2　課題

(1) 全員参加の園内学習の工夫

(2) 幼児理解を通した環境構成の工夫と援助の工夫

3　実践を通して

(1) 園外学習を通して、様々な立場の気持ちや考えに気づけるワークを体験したり、園の職員以外の方々と交流したり、いろいな考えを知ることで視野が広がった。また、園の職員へも学習成果を伝えることができ、学びを生かせたと考える。

(2) 複数の保育教諭等が捉える園児の姿を話すことで、これまで気づかなかった姿や良さに気づき、園児への見方が変化した。肯定的に園児を捉えることで、癇癪や不機嫌になっている姿も「苦手なことも頑張っているんだな」と温かく見守ることができた。また、園児の良いところに気づいたことで肯定的な言葉かけも多くなり、園児の姿にも変化が見られた。

(3) 複数の保育教諭等が、園児の姿から気持ちを推測したり、関わったりしながら園児一人一人の内面の理解に努めることで、園児の気持ちに気づくことができた。また、 保育教諭等がそれぞれ捉えている園児の姿や気持ちなどを言葉で伝え合っていくことで、園児の内面を多面的・肯定的に捉え、園児一人一人に応じた援助に繋がったと考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

1　園内学習の持ち方については、職員と意見を交換しながら、園全体で今後の取り組みを一緒に考えていきたいと思う。

2　園児理解や関わりの工夫など多面的に捉えることや、担任の困り感に共感・共有していくことで成果として実感する事ができた。今回の学びを今後の実践に生かしていきたい。

〈主な参考文献〉
・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年度幼保連携型認定こども園・保育要領開設　株式会社フレーベル
・文部科学省文部科学省　令和元年幼児理解に基づいた評価　チャイルド社

様式３【課題研究レポート】

互いの気持ちに気付き、よさを認め合う為の環境構成や援助の工夫
―友だちや保育教諭と言葉による伝え合いを通して―

金武町並里こども園　保育教諭　氏名　神山　円香

Ⅰ テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「人間関係」の領域に「（６）自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く」とある。幼児は、自分の気持ちや考えを言葉にして伝え合いながら、感情的な行き違いや自他の欲求の対立があるというような事に気付き、友だちとの関わりを深め、相手の立場に立って考えられるようになる経験が必要であると考える。

本学級は、４歳児男児７名、女児９名、計１６名の活発で明るく友だちと関わって遊ぶことが好きな学級である。しかし、自分の思いを通そうと強い口調になったり、相手の思いを聞こうとしなかったり、困った事があると、すぐに保育教諭に訴える子も多い。また、集会では、話を最後まで聞けずに途中で話し出す姿も見られる。

そこで、言葉による伝え合いを通して、伝え合う楽しさを知り、園児が互いのよさに気付いて認め合って友だちと関わる為には、どのような環境構成と援助の工夫が必要か、研究を行いたいと考え本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１，どのような言葉が嬉しいか、傷つくかを考える場を設け、思いやりのある言葉について考えることができるように援助する。また、保育教諭が園児のよさや思いやりのある言葉、行動を見逃さずに学級全体に伝え、互いに認められるような環境構成と援助を工夫する。

２，自分の体験したことや考えを表現しようとする環境の構成と援助の工夫として、遊びの中や生活の中で体験したことや感じたことを発表する場を設け、みんなでその思いを共有、共感できるような援助の工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例①

《幼児の実態》

・ドッチボールをして、楽しむ姿がある。

・ルールを守って、友だちと一緒に遊ぼうとするが、ボールの取り合いで、自分の思いを通そうと強い口調になったり、相手の思いを聞こうとしなかったりする。また、困った事があると、すぐに保育教諭に訴える子もいる。

《保育教諭の願い》

・自分の思いを伝えたり相手の思いを聞いて、相手の気持ちを知り、相談し合ったりしながら、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを感じてほしい。

・遊びや生活の中で、言葉のやり取りを楽しみ、語彙力を高めて欲しい。

《保育教諭の関わりと援助》

・すぐに保育者に訴える子には、気持ちを受け入れながら、「お話して、教えてあげて。」等。友だちにも伝えるように促した。それでも、解決できない時には、仲立ちに入り、双方の意見や気持ちを聞き、

互いに話し合う機会を設けた。
・集いや個別で、どのような伝え方がいいか・ボールの奪い合いになったらどうするか、感じ方や解決方法を相談して考える機会をもった。また、話し合って解決できた様子や友だちを気遣う姿等を全体に伝えるようにした。
《幼児の変容》
・思い通りにいかないと、きつい言葉が出る時もあるが、「この言葉怖いよ。言い方怖いよ。優しく言った方がいいよ。」と、友だち同士で教え合ったりしながら、「じゃんけんしよう。」等と話し合い、子ども同士で解決できる事が増えた。また、友だちとやり取りをしながら、一緒に遊ぶ姿が多く見られるようになった。
・ボールをあまり取れない・触れない子に、「投げていいよ。」と、譲ってあげたり周りを気遣い関わりを深め、その後も別の遊びに誘い合ったりして一緒に遊ぶ姿が見られた。

実践事例②
《幼児の実態》
・集会の参加の仕方を確認すると、話を聞こうとするが、集中が切れたりして途中で話し出す姿も見られ、話を最後まで聞けずにいる。
・感想や思いを発表する時に、自信をもって発表できる子もいるが、上手く言葉にできなくて緊張し、手をあげられない子もいる。
・話を聞く事が難しく、やる事が分からずに困ったり、再度聞いたりする。
《保育教諭の願い》
・自分の思いを言葉で伝え、聞いてもらえる体験を通して、相手の話も聞き相手の気持ちに気づいて欲しい。
・やる事や生活の流れ等を理解し、自分で物事に取り組める自信に繋げたい。
《保育教諭の関わりと援助》
・簡潔に話をまとめ、質問をして、理解できているか確認をしてみた。
・話を聞くだけではなく、自分の思いや考え等を伝える機会をもち、話を伝える立場に立って、聞いてもらう嬉しさや表現する楽しさを味わえるようにした。
《幼児の変容》
・恥ずかしがっていた子も、自分で手をあげて発表し、気持ちを表現できるようになった。また、話を聞いて、「〇〇だよね。」等と相手の気持ちに共感したりする姿も見られるようになった。
・保育者が話をしたことを、再度確認していくことで、聞かないと分からないという事に気づき、子ども同士で「しー静かにして。」「話を聞く時間だよ。」等と声を教え合い、話を聞こうという意識が高まった。
・やる事や生活の流れ等が分かり、自分で次の事を考えて行動してみようとする姿が見られる。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・友だちと教え合い、考えを伝え合う様子を、保育教諭が「いいね」等と肯定的な言葉をかけていくことで、子ども同士でも認め合う言葉がでてくるようになった。

・保育教諭が話し合いの場を意図的に作っていたが、子ども達自身でも話し合いをするようになった。

②課題

・子どもたちが互いの良さに気付いたり認め合ったりすることができるよう、引き続き話し合いの場の工夫が必要。

・友だちと言葉のやりとりをしながら、遊びを楽しんでいるので、引き続き友だちとの関わりが広がるような援助や環境構成の工夫をしていきたい。

・園児の主体性が育ってきている中で、思いや考えのぶつかり合いが見られることもあるので、それぞれの思いや考えを十分に受け止めながら、園児同士で解決できるように援助の仕方を工夫していきたい。

③実践を通した自身の気づき、考え

・伝える機会や相手の気持ちに触れる機会を持つことの大切さを改めて感じた。考えたり試したりしながら、友だちからも認められる経験が自信に繋がり、次の活動への意欲にも繋がっていると思う。保育教諭として、すぐに援助するのではなく、見守ったり子ども同士で話し合う機会を大切にし、意図的に考える場面を作ることで、困っている時等にどうすればいいのかを自分で考える力が育ってきたと思う。その為、遊びの中で自分の気持ちを伝えたり友だち同士で遊んだりする姿も多く見られるようになったと考える。

このことから、子どもの興味関心を探しながら、ねらい・願いや意図をもって環境を構成する大切さを改めて感じた。活動の主体は幼児であることを忘れずに、発達を見通しながら、幼児の活動が生まれやすく展開しやすいよう環境構成をしていきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・思いや考えを伝え合ったり認め合ったりしながら遊びを進めていけるよう、振り返りの場の持ち方を工夫し、子ども同士を繋ぐための援助や環境構成をさらに工夫していく。

・職員同士で園児の姿を共有して、多面的な見方や意見交換を大切にし、園児理解を深めていきながら、園児の興味・関心をしっかり捉えていきたい。一人一人の発達にとって意味のあるものか考え、園児の好奇心や探求心が膨らむような、ねらい・願いを含めた、環境の構成と援助に努めていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府 文部科学省 厚生労働省 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

心を動かす体験活動を通し自己表現力を高める

―体験したことを様々な方法で表現する―

金武町　認定こども園きんのほし　保育教諭　吉田　美海

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」第２章「表現」において「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。」と示されており内容取り扱いには「生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の園児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるように工夫すること。」と書かれている。これらのことから幼児期において、保育教諭等のもつイメージを一方的に押し付けるのではなく、園児のイメージの豊かさに関心をもって関わりそれを引き出していくようにすることや園児なりの楽しみや願い、遊びのイメージを大切にして、表現意欲を満足させていくことが重要であると考えた。本学級の幼児の実態としては、５歳児（６年保育）男児２名、女児６名、計８名が在籍し、全員が持ち上がりクラスということもあり、活発で子ども同士での関わりが多くのびのびと過ごしている。言葉や体を使って自分の思いなどを保育者や他児に積極的に表現することが出来るが、全体的に絵画を苦手とし、画用紙などに想像したものを大きく描くことができず小さく細々と描く姿が見られる。そのようなことから自分自身の課題として、体を使っての表現遊びや描いて表現する楽しさを味わうための環境設定や援助の工夫が十分ではなかったと感じる。このような実態を踏まえ、伸び伸びと自己表現活動ができるようになるためには、どのような援助や環境の工夫が必要か、具体的な方法や教材研究をしたいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ課題に対する具体的な手立て

１．体験したことを表現できる場（方法）の工夫について

個々の興味、関心を読み取り、幼児理解に努める。

個々に応じた表現のあり方を受容していく。

表現することで自己が認められ自信に繋げられるような環境を設定していく。

２．一人ひとりが安心して自己発揮できる環境構成や援助の工夫について

お互いを認め合い友達と一緒に関わりを楽しめるような援助と言葉かけを行う。

一人ひとりの思いを受け止め、表現の自由、他者への思いやりを経験することで自己発揮力が高められるように援助の工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取り組み（実践）

【実践事例】　「描きたいものをイメージすることはできるが自ら描こうとはしない」

≪幼児の実態≫

・言葉や体を使っての表現は積極的に行うが、絵を描くことを拒む子が多く保育者に描いてとお願いをする姿が見られる。

・イメージしたことを描いてみようとするが、小さく描いたり、完璧を求め完成までいかず途中であきらめてしまう姿が見られる。

≪保育者の願い≫

・絵画で表現する楽しさを味わってほしい

・身の回りの人に認めてもらいながら自信をもって描く心地よさに気付いてほしい

≪保育教諭の関わりと援助≫

・園外活動に行った際には活動写真を撮り、教室に掲示し子ども自身が思い出として体験したことを絵で表現してみたくなるような環境を工夫する。

・画用紙に大きく描くことが出来るよう、見本を提示したり子どもがイメージしやすいよう工夫していく。また大きく表現したことを個々に認め自信へと繋げていけるよう援助していく。

・経験や体験したことだけではなく、絵で描かれている身の回りの看板に興味を示すような声掛けを行う。園に必要な看板を子ども主体となって絵で表現するよう保育者も一緒に関わり表活動を見守っていく。

・モノレール乗った日は雨が降っていたから雨を表現したよ！

・モノレールの下からみんなが手を振っているかな？

・青虫が踏まれないようにここに看板が必要だね！

・スズメが遊びに来るからみんなに知らせないとだね！

・青虫のお家がここにあるよ！

≪幼児の変容≫

・子ども自身が自ら考えたことを絵で表現したり、自分の言葉で他者に共有してみようとする姿が見られた。

・体験活動での実体験を増やすことで、自らが表現したいことを大きく描けるようになった。

・身近な人に褒められたり認められる経験の積み重ねで、自ら描こうとする意欲につながっている。

Ⅳ実践まとめと考察

・こども園で生活する中で、心を動かす出来事に触れ、喜び、驚き、悲しみ、怒り、恐れなどといった情動が生じ、心が揺さぶられ、何かを感じ取り、園児なりのイメージを持つと指針に書かれている。そのことから様々な実体験を通して子どもは表現する事への意欲や自信へと繋がっていくことが分かった。また身近な人に表現したことを認めてもらう経験を味わい、初めは描くことを拒んでいた子も自ら描き他者に言葉で説明したり等の変容が見られた。保育教諭のイメージを押し付けるのではなく、園児のイメージの豊かさに関心をもって関わりそれを引き出すことの大切さを学ぶことができた。また保育教諭が子どもたちと共に表現することを楽しみ、自然な表現を汲み取ることができるように日々関わる大切さも学んだ。

今後の課題として、出来上がった結果だけで評価するのではなく、その過程を丁寧に理解していく必要があり、またその過程を保護者等にとってはとても分かりにくい部分でもあるので、それらを伝えることにも着目し今後努めていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　幼保連携認定こども園教育・保育解説　株式会社フレーベル館

・保育内容　表現 ―基礎的事項の理解と指導法―　岡　健　金澤妙子　編著　建帛社

・保育・教育シリーズ　表現の指導法　田澤里喜　編著　玉川大学出版部

様式３【課題研究レポート】

自分の気持ちや思いを言葉で伝え、相手の思いに気付くための援助
―友達や保育教諭と伝え合う経験を通して―

社会福祉法人タピック
おきなわ地球こども園
保育教諭　照屋　結子

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級学級は３歳児、男児 12 名、女児 16 名、計 28 名のクラスである。16 名進級児でが持ち上がりで園に慣れ、活発でのびのびと過ごし、遊びを楽しむ姿が見られる。新入園児には関しては保育経験児が７名、未経験児５名で、静かにひとり遊びを楽しんだり、好きな玩具を見つけて遊びを楽しむ子の姿も見られる。徐々に集団生活にも慣れてくると、友達との関わりが増え、一緒に遊びを楽しむようになり、生活や日々の活動に意欲的な様子が見られるようになった。しかし、友達と一緒に遊びを楽しむ途中から、自分の気持ちや思いを上手く言葉で伝えられず、手が出てしまったり、玩具を投げてしまったり、トラブルも見られる。自分の思いを通そうと、相手の話を聞くことができず、互いに言い合いになる場面も見られる。このような実態から、自分の気持ちを言葉で伝えることや相手の話を聞くことに課題を感じた。相手の思いに気付き、互いに助け合い、友達関係が深まるよう、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①自分の気持ちや思いを言葉で伝えられるための経験をするための工夫

・朝の会や帰りの会で発表できる場を設け、相手に気持ちが伝わる楽しさを味わえるようにする。

②相手の思いに気付くための援助や関わり方の工夫

・相手の話が聞けるよう援助したり、相手の気持ちに気付けるような絵本などの教材を活用する。
(「なかなおり」や「くれよんのくろくん」、「おはなし 30・ねえ、よんで！」シリーズなどの絵本)

③遊びを通して、言葉で伝え合う楽しさを経験する。

・ままごとやごっこ遊びを通して、一人一人が役になりきり、言葉でのやり取りを楽しめる環境をつくる。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

「幼児の実態」

・好きな遊びを通して保育教諭や友達と一緒に遊ぶ事を楽しみ、積極的に関わろうとする姿が見られる。しかし、遊びの途中から、使いたい玩具が同じ物だったり、友達の持っている玩具が欲しくなると、自分の思いを言葉にして伝える事ができず、手が出てしまったりとトラブルが見られる。又、自分の思いを聞いてほしく、相手の話を聞かず、お互い言い合いになる場面も見られる。

保育教諭の願い

・自分の思いを言葉で伝えられる楽しさや喜びを味わってほしい。
・楽しかった事や嬉しかった事などを自分の言葉で伝えられるようになってほしい。
・相手の話を聞いたり、相手にも思いや気持ちがある事に気付いてほしい。

①自分の気持ちや思いを言葉で伝えられるための経験をするための工夫

実践事例１発表できる場を設け、自分の思いを伝える。

【保育教諭の関わりと援助】

・自分の思いを言葉で伝えられる楽しさを味わえるように、帰りの会で発表できる場を設ける。発表をする前に、今日一日をこども達と一緒に振り返り、発表しやすいようにする。

・自分の思いが相手に伝わる嬉しさや楽しさを経験できるようにする。

・園児の思いや気持ちを汲み取り、必要に応じて言葉を添え、自分で発表できるように寄り添いサポートする。

【幼児の変容】

・積極的に挙手をして、発表しようとする意欲的な姿が見られ、発表している友達の話を静かに聞こうとしたり、友達の発表が終わると拍手したりする姿も見られた。

・初めは自分が楽しかった遊びを発表する事が多かったが、「○○○さんと○○して遊ぶのが楽しかったです。」等と、友達の名前を挙げての発表も見られるようになった。又、友達の発表に自分の名前が出ると嬉しそうにする姿も見られた。

【結果と考察】

・発表する機会を設けて言葉で相手に伝えられる経験を通して、言葉で伝えられる楽しさを味わい、みんなに聞こえる声の大きさで発表できる自信にも繋がった。

・園児の姿を捉えて、声をかけていったことで、安心して保育教諭に伝えようとする姿が見られるようになったり、保育教諭が思いや気持ちを汲み取り応えていく事で、園児との信頼関係を築き、自ら伝えようとする姿にも繋がった。

・初めは保育教諭に自分の気持ちを伝え、代弁してもらったり、保育教諭と一緒に伝えたりと、何度も伝える経験を重ねたことで、自ら言葉で伝えようとする姿が見られるようになった。

②相手の思いに気付くための援助や関わり方の工夫

実践事例２相手の話を聞いたり、相手の気持ちに気付く。

【保育教諭の関わりと援助】

・好きな遊びを一緒に楽しむ途中、玩具の取り合いになったり、言い合いになったりしてしまう場面では、一人ずつ言葉で伝えられるようにし、聞いたり話したり、お互いの思いを聞いたり、自分にも相手にも、思いや気持ちがあることに気付けるよう話し合いの場を多くもった。

・こどもの気持ちを汲み取り、必要に応じて言葉を添え、相手に思いを伝えられるようにし、表情を見て、気持ちに気付けるように援助する。

・園児の姿を捉え、絆が深まる絵本や聞きたくなる絵本の読み聞かせを行う。

「くれよんのくろくん」

★絆が深まる絵本★

「おしゃべりさん」

★話を聞きたくなる絵本★

【幼児の変容】

・泣いている友達に気付き、「どうしたの」と声をかける子や、玩具でのトラブルでは「勝手にとったらいけないよ。」「貸してっていってみたら」等と、友達に教えようとする姿やお互いの友達の話を聞いて、仲立ちしようとする子の姿も見られた。

・一緒に遊びを楽しむ中で、「貸して」と伝えられるようになり、貸したり待ったり、「一緒に使おう」と話すこどもの姿が見られた。

【結果と考察】

・好きな遊びを一緒に楽しむ経験を通して、玩具の貸し借りや友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わい、関わりを楽しいと思えるようになり、気の合う友達ができたりと仲を深める事ができたように感じた。

・相手の表情や様子から、相手の気持ちに気付き考えようとする子、困っている友達の話を聞こうとしたり、思いやり心が育ち友達との仲が深まっているように感じた。

実践事例３③遊びを通して、言葉で伝え合う楽しさを経験する。

【保育教諭の関わりと援助】

・好きな遊びを一緒に遊ぶ楽しさを味わえるよう、気持ちに共感した言葉をかけたり、ブロックで作った作品を見せ合ったり、ままごとでは役になりきり、言葉でのやり取りも楽しめるようにする。又、こども同士でのやり取りを楽しめるように、楽しむ見本を見せたり、互いの話に共感したり、思いや気持ち伝わる嬉しさや楽しさを味わえるようにする。

・遊びを通して、「貸して」や「待っててね」等を言葉で伝え、貸したり待ったりできる。

「飛べ飛べトンボ」（製作遊び）

★クレヨンで色塗りし、自分で作ったトンボを実際に飛ばせて、楽しむ製作遊びを行なった。

【幼児の姿】

・保育教諭の話を聞き、トンボを完成させ、友達と見せ合ったり、実際に飛ばせてみたり、楽しむ姿が見られた。遊びの後に、みんなの前で一人ずつ作ったトンボを紹介し、発表を行なった。

【幼児の変容】

・おままごと遊びでは一人一人が役になりきり、言葉でのやり取りも楽しむ姿が見られるようになった。

・ブロック遊びでは、作った作品を見せ合い、喜び合ったり、友達との共通点を見つけたりして楽しみ、「できない」と困っている友達にはブロックを分けてあげたり、新しく作ってあげる子の姿も見られた。

・「飛べ飛べトンボ」では、トンボの色を見せ合ったり、共通の色を探し合ったり、飛ばせて楽しむ姿が見られた。

【結果と考察】

遊びを通して友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わい、自分の思いを言葉で伝えることで相手にも自分の気持ちが伝わる楽しさや嬉しさを繰り返し体験する事で、」友達との関わりが嬉しい、楽しいと思えるようになったと感じる。又、友達を思

いやり、作ってあげたり、手伝ってあげたりと積極的に関わろうとする姿も見られるようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・朝の会や帰りの会で、発表の経験を重ね言葉で表現する楽しさを味わい、少しずつ自信になり、自分の思いを言葉で伝えられるようになった。又、園児の姿を捉えて思いを代弁したり、一緒に伝えたりして一人一人と寄り添った関わりを意識した事で、園児も安心して自分の思いを友達や保育教諭に伝えられるようになったと感じる。

・園児と園生活を過ごす中で保育教諭は見本となり、園児と言葉を交わしたり、友達の思いを知らせたりしていったことで、困っている友達に気付くと積極的に優しく関わろうとする子の姿が見られるようになった。園児の気付きや優しさに嬉しく思い、思いやりの心を育むために保育教諭の関わり方が重要になることを改めて実感した。

・集団遊びでは簡単なルールを決めたりみんなで相談して決めたりし、みんなで一緒に楽しく遊べるようにしたことで、友達と楽しみながら相談しながら遊びを進めていく姿も多く見られるようになった。

・相手の話を聞いたり、自分の思いを伝えたり、少しずつ自分の言葉で伝え、話し合いができるこども達の姿も見られるようになった。

②課題

・自分の気持ちを言葉にして伝えられるようになっているが、自分の思いを伝えたい気持ちが強くなり、主張がぶつかり言い合いになってしまう事がある。

・保育教諭が話している時や友達の発表の時、静かに聞く事ができず、周りの友達とお喋りしたり、ふざけあってしまう子が数名見られる。話を聞くときの態度や姿勢が身につけられるようにしていきたい。

③実践を通した自身の気づき、考え

・自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞いたり、意見を受け入れたりできるように言葉をかけたりし関わりを見守っていった。相手の思いに気付き、聞いたりできるような援助について学びを深め、保育教諭として園児に必要な援助や関わり方を考え、実践していきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・朝の会や帰りの会だけでなく、遊びを通して言葉で表現する楽しさを味わえるように活動や教材の工夫を行い、取り入れていく。

・声かけだけでなく、イラストや文字で「発表者カード」や「表情カード」、園児の様子などを掲示して視覚化したり、絵本の読み聞かせを通して友達の思いに気付いたりできるような環境や教材の工夫を行なっていく。

・一人一人の発達や内面の理解を深めていく保育を行い、育ちを支援していけるように、園児の姿や活動、自身の援助を振り返り、保育を深めていく。

・共通の目的を持って活動に取り組む中で伝え合いが深まるような環境構成や援助の工夫について学びを深める。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　2018『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』　フレーベル館

＊2ページから3ページにまとめること

様式３【課題研究レポート】

自分の気持ちを相手に伝える力を育む
―日々の保育や友だちとの関りを通して―

中城ひらやすこども園　保育教諭　渡嘉敷　美夢

Ⅰ　テーマ設定の理由

新型コロナウイルスの流行による生活の変化が、幼い子どもの発達に影響を与えていることが先行研究で分かっている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領の「言葉」の領域には「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」とある。さらに近年「心の教育」という言葉がクローズアップされるようになり、幼児期はとくに人格の基礎となる心情や意欲、態度が養われる大切な時期である。心を育むために、友達との深い関りを通して自己をコントロールする力や他者と協同して遊ぶ楽しさを味わいながらコミュニケーション能力を身につけるようにすることが必要である。

本学級の幼児は４歳児（３年保育）男児 12 名、女児 12 名、計 24 名が在籍し、男女ともに個性豊かな子が多い。普段の活動や遊びの中でのトラブルが多く、自分達で解決できずに泣いて保育者に助けを求めることが増えているように感じる。そこで、すぐに保育者に助けを求めるのではなく解決するために「自分の感情をコントロールして言葉で自分の気持ちを相手に伝える力が育ってほしい」という願いからテーマを設定し研究することとした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①紙芝居や教材を使用していろいろな気持ちがあることを知る

紙芝居や教材を通して、登場人物を自分に置き換えどのような気持ちになるのかを考える。

②帰りの会に、「今日、楽しかったこと」など子どもに発表してもらうことを習慣化する

「楽しい」「悲しい」「怒った」などの気持ちカードを用意し、どの気持ちについて発表するのかを選択してもらい自分の気持ちを伝える。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践①　「道徳教材で子ども会議をしよう！」

＜幼児の実態＞

・何事も一番でないと気が済まない子が多く、順番を守らず割り込みをする子が多い。

＜教師の願い＞

教材を通して、「順番を守ること」の大切さを知り、自己をコントロールする力を育んで欲しい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

・１つのイラストを提示し、保育教諭が発問をしていく。

・イラストからそれぞれの感情を読み取り、子ども達から言葉を引き出し、話し合いをしていく。

・実際に自分がその立場になったらどういう相手に声掛けをするのかを考えてもらう。

【保育教諭の発問】
絵の中で泣いている女の子がいます。なぜ、泣いていると思いますか。　　など

【子ども達の発言】
・割り込みされたから
・お腹が急に痛くなったから
など

【子ども達へ伝えたいこと】
前に並びたい気持ちは皆な同じだよ。割り込みをしようとしている人を見ると皆いやな気持ちになるね。周りの人の気持ちを考えて、順番は守ろうね。

≪幼児の変容≫
・最初に比べると自分の気持ちだけを優先する子が少なくなった。
・周りのお友だちに配慮できる子が増えてきた。
・トラブルが起こった時に第三者の子がトラブルを解決する姿が見られるようになった。

実践②　「絵本『ふわふわとちくちく』や実験を通して言葉の大切さを知る！」

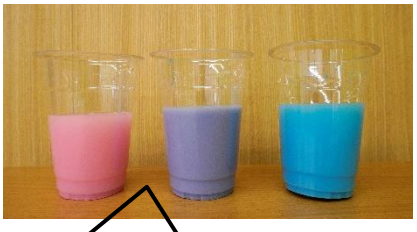
＜幼児の実態＞
・相手の気持ちを考えずに平気で、“ちくちく言葉”を使う子が多い。

＜教師の願い＞
ふわふわ言葉とちくちく言葉どちらの言葉を使った方が、お友だちも自分も気持ちが良いか気付いてほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫
・絵本を通して、ちくちく言葉とふわふわ言葉の違いを知る。
・ちくちく言葉とふわふわ言葉の色について話し合う。
・みんなで絵本に出てきたちくちく言葉をふわふわ言葉に言い換えるため話し合いを行う。
・ちくちく言葉を言われた相手の心は元に戻らないためこれからどのような言葉を使ったらよいか皆で話し合う。

【子ども達の発言】
・ちくちく言葉よりふわふわ言葉使った方が良い～！
など

【保育教諭の発問】
・水色のちくちく言葉を言った後に、ピンク色のふわふわ言葉を言っても心の中の色は元に戻るでしょうか。



【子ども達の発言】
・心の中の色は紫色から戻らないからピンク色のふわふわ言葉を使うようにする～！

≪幼児の変容≫
・ちくちく言葉とふわふわ言葉の違いを理解し、ちくちく言葉を使っている子に対して子ども達同士で注意できるようになった。
・ちくちく言葉に敏感に反応する子が増え、ふわふわ言葉に言い換えることができるようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・毎日の帰りの会で、その日のことをみんなの前で発表し合うことで、学級の連帯感が生まれてきた。意見をなかなか言えない子も、発言しやすい環境を作ることで、少しずつ相手に自分の気持ちを伝えられるようになってきた。また、自分の意見を通そうとする子が、少しずつ相手の話を聞けるようになったと感じる。

②課題

・今でもお友だち同士のトラブルは起きやすく、保育教諭が介入しないと解決しないこともある。自分の意見を伝えるだけでなく、相手の気持ちを少しずつ理解できるような雰囲気作りや環境を、引き続きみんなで考えていきたい。

③実践を通した自身の気づき、考え

・保育教諭が意図的に肯定的な言葉を積極的に使うことで、幼児同士でも良いところを褒め合い、認める言葉が増えた。また、消極的な子どもが人前で発表する機会が増え、幼児同士の関わりが活発化し、自信を持って自分の気持ちを相手に伝えることができるようになった。今回の実践では、子ども達に分かりやすく興味を持ってもらえるように色水実験を取り入れたり、ふわふわ言葉やちくちく言葉が記載された用紙を部屋の目立つ場所に掲示したりしたことが、効果に繋がったのではないかと感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・言ってはいけない言葉だと理解しているにもかかわらず、相手が傷つくような言葉をふざけて言う場面が時々見受けられる。このような行為は、言った側は遊びのつもりでも、言われた側は傷つくことを繰り返し伝える必要がある。

・　相手を思いやる言葉や内容だけでなく、口調についても“どのように伝えると良いか”等と考えられるような環境構成や援助の工夫に努めていきたい。　。

・お互いの良さを伝え合う場を、発表形式ではなく、ペアやグループで伝え合ったりするなどして、注目されるのが苦手な子でも参加しやすく、どの子も友達に良さを認めてもらう経験ができるようにしていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 平成 30 年 3 月』
日本図書センター 2023 年 7 月 25 日『ふわふわとちくちく ことばえらびえほん』
一般社団法人　日本育脳協会　生きる力を育む道徳教材「社会のルールブック」

友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫
―保育者や友達との関わりを通して―

中城村　学校法人平安学園　平安幼稚園　教諭　氏名　知名　梨依菜

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」の第二章「人間関係」の内容において「自分の思ったことを相手に伝え相手の思っていることに気づく」とあり「始めは、お互いに一方的に自分の思っていることを伝えることが多いが、相手に対する興味や親しみが増してくると自分中心の主張をしながらも少しずつ相手にもわかるように伝えようとする。親しみを持つという循環の過程を経て次第に相手の思っていることに気づくようになり、園児同士の関わりが深まる」と記されている。

本学級の幼児実態としては、3歳児　男児１０名　女児１０名の計２０名が在籍している。クラスの実態として、好奇心旺盛でカリキュラムなど活発に取り組んでいたり、初めての友達ができてごっこ遊びやブロック等の玩具で車や恐竜等を作り、表現を楽しんでいる姿が見られる。しかし、生活面では着脱の一つひとつの行動に声掛けや、援助が必要な子、一斉指示の通らない子、個々で声掛けをしても理解が乏しく伝わっていない子もいる。また、友達と一緒に遊ぶ楽しさが分かり気の合う友達を誘って遊ぶようになるが、玩具や順番の取り合い等で、大きな声で怒ったり、叩いたり、蹴ったりとトラブルが見られる事もある。

これらの実態を踏まえ、自分の思ったことを相手に伝え相手の思っていることに気づき、癇癪を起こさず友達や保育者に伝えられるようになって欲しいと思い、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 遊びを通して他児との関わり方を伝える援助の工夫

遊びの中で本児の行動を見守りながら、物の貸し借りや思い通りにいかない場面で保育者が仲介し、相手の気持ちを考えた行動ができるよう援助する。

② 自分の気持ちを言葉にして伝え合う環境の工夫

本児の思いを汲み取り保育者と共に、自分の思いを言葉にする経験を重ねていく

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】　自分の気持ちを友達に伝え、友達の思っていることに気づく経験を通して

★A児の姿★

自由遊びの場面で、自分の使いたいものがあると無理に取ろうとしてトラブルになったり、思い通りにいかないことがあると怒って叩いたり、蹴ったりと手を出してしまうことがある。

★保育者の願い★

・友達との関わりの中で自分の気持ちを言葉にして伝え、伝わった時の達成感を感じて欲しい。

・自分だけではなく、友達にも思いがあることに気づき、友達の気持ちも考えて、行動できるようになって欲しい。

・トラブルが起きても、手を出すのではなく言葉で伝えられるようになって欲しい。

保育者の援助	A 児の変容
○トラブルの際は、本児のとってしまった行動や気持ちを受け止めながら、言葉で伝えられるように援助をする。必要に応じて、繰り返し気持ちを代弁し、困っている場面では「友達が使っているものが使いたかったら、次に貸してと伝えたらいいんだよ」など具体的に声を掛ける。	・自分の思いに反することがあっても、「○○っていわないで」など、自分なりの言葉で相手に伝えようとし、困っているときは、保育者に伝えに来る姿が見られる。 ・使いたい玩具があったら「次貸して」や「長い針が５になったら貸して」など友達と話し合う姿が見られる。
○友達の気持ちを一緒に聞きに行き、友達にも気持ちがあることに気づかせる。また、友達の表情を見て、「笑ってる？泣いている？嬉しい気持ちかな？悲しい気持ちかな？」など目で見て感じられるように声を掛ける。	・トラブルが起こった際「○○がいやだった」と自分の気持ちを伝えたうえで「○○を貸して欲しいんだねと」友達の気持ちに気づける姿が見られる。 ・手を出してしまった際に、友達の表情を見て、「悲しいお顔している。ごめんね」と気づく姿が見られる。

★結果と考察★

・本児の内面に寄り添い、友達との仲立ちになることを繰り返すことで、安心して自分の思いや考えを態度や言葉で伝えようとしたり、友達にも自分の思いを話そうとしたりする姿に繋がったと考える。

・友達の表情を伝えることで、友達にも気持ちがあることに気づき、自分だけではなく友達の気持ちを考える姿に繋がったと思う。

【実践事例２】　友達のいいところを認め、認められる経験を通して

★クラスの様子と A 児の姿★

普段から友達の物をとったり、隠したりのいたずらを楽しんだり、「きらい」や「仲間に入れない」など乱暴な言葉を使う A 児に対し、周囲の友達からは「いじわるな子」という印象がついてしまっている。その為、A 児の行動に目を光らせて「A 君が○○してる！」「A 君がまた悪いことしようとしてる」と教師に報告することが多い。また、友達が離れていき、「仲間に入れない！」や「あっちいって」など否定的な言葉を言われてしまう。A 児は否定されたことで「何でそんなこと言うの？」「僕は意地悪だからやってしまう」と自己肯定感が低い発言も増えてきている。

★保育者の願い★

・悪い所だけではなく、良い所を見つけて喜び合えるクラスの雰囲気をつくりたい。

・A 児のいいところを友達だけでなく、A 児自身にも知って欲しい。

・いいところを認めてもらえる経験から、どんなことを相手が喜ぶのか、どんな言葉が嬉しいかを知り、相手が喜ぶ行動を自らすすんで出来るようになって欲しい。

保育者の援助	クラスと A 児の変容
○悪いことをしても、何がダメだったのかを一緒に見つけ、気づけたことに対して、謝れたことに対して沢山褒め、良いところもあることを気づかせる。	・トラブルが起こった際、相手が何に対して怒っているのかを考える姿が見られる。
○帰りの会で、友達の良いところを見つけ、皆なで伝え合う。	・友達のいいところを見つけると、真似をして一緒に協力する姿が見られる。 ・友達に褒められ、表情が柔らかくなり、優しい言葉が出てくることが多くなった。

★結果と考察★

・本児の内面に寄り添い、クラス全体で良いところに目を向けたことで認められる喜びを感じ、優しい言葉や、行動ができるようになったと考える。

・自分のことだけではなく周りの人にも意識を向けたことでクラス全体が明るい雰囲気になり、譲り合う場面や、手伝ったり声を掛け合う場面に繋がったと思う。

Ⅳ　実践の振り返り

本研究では友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わいながら、自分の気持ちを友達に伝え、友達の思っていることに気づく為にはどうしたらいいのかを考えて実践した。自由遊びの場面で、自分の使いたいものがあると無理に取ろうとしてトラブルになったり、思い通りにいかないことがあると怒って叩いたり、蹴ったりと手を出してしまうことがあったが、実施を通して自分の思いを少しずつ伝えられるようになり、友達の表情を見て、相手の気持ちを考えられる姿がみられた。普段の生活のなかでも相手に思いを伝えたり、相手の思いを聞いたりする姿が見られ、実践をした結果が見られたと実感した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

今後の課題としては、相手の気持ちが考えられるようになり、少しずつトラブルは減ってきたが、まだ自分の気持ちと行動が追いつかず、手を出すことがある為、様々な配慮や環境構成の工夫、声掛けや対応の仕方を研究していきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成 30 年「幼稚園教育要領解説書」　フレーベル館

幼保連携型　認定こども園教育・保育要領ハンドブック

様式３【課題研究レポート】

心の芽生えから育ちを支える保育環境つくり

―新しい発見、体験に出会う―

社会福祉法人へいあん福祉会　ほるとのきこども園　保育教諭　氏名　比屋根　理沙

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼児連携型認定こども園教育・保育要領解説により「乳幼児期の発達について」領域の中に乳幼児期は、視覚聴覚などの感覚や運動機能が著しく発達し、特定の大人との応答的な関わりを通じて情緒的な絆が形成されるとある。

本学級の０歳児クラスの実態としては、男児８名、女児４名、名計 12 名。４月に１２名入園し、新しい環境に人見知りや不安から泣いてしまう子が見られるが、安心できる身近な大人と出会い、思いや欲求をありのまま受け止めてもらうことで安心感が生まれ、信頼関係を築くことが出来る。

このような実態から一人ひとりの成長発達に合わせた丁寧な関わりと普段何気ない日常生活の中で繰り広げられている子ども達の姿をしっかり汲み取り、興味関心を引き出すような体験を通して新たな発見に満足感が味わえるような環境つくりを本テーマに設定し、研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　日常の中で友達や保育者である人と触れ合いながら興味関心を引き出す環境つくりについて

・保育者や友達との触れ合いながら遊び込める遊び（玩具、布等）の空間つくりをする為には、「今、何に興味を示しているのか」等を把握し、子ども達が手に取りやすい環境を整える。また、生活の中で生理的欲求を満たし、“周りの人やものに触れてみたい”という気持ちを受容しながら丁寧な関わりを見守り、体験できるような環境つくりの援助を行う。

②　色々な物に体験できる環境つくりについて

・様々な物や素材に対して、見た瞬間に子ども達が興味を持ち、夢中になって遊ぶことができる環境の構成を工夫する。

③　絵本の読み聞かせを通して、様々な物や食への興味関心を育む環境つくりについて

・絵本を通して、身近にある色や形、食べ物、動物等に興味を持ち、食に対する意欲を引き出す為に実際に食材に触れられる機会を設け、体験が広がるような環境つくりの援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例（１）～新しい環境や人や物に触れ合おう～

【乳児の実態】

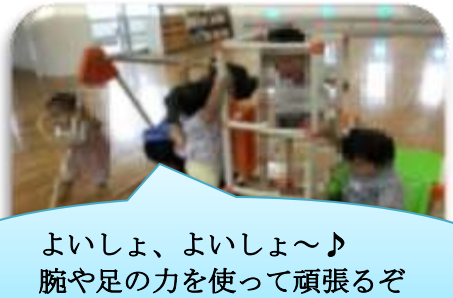
・初めての集団生活に不安で泣いてしまう子が見られる中、少しずつ安心できる身近な人に対して愛着関係が生まれスキンシップを図るようになる。

・保育者や友達がしていることに興味関心が芽生え始め、「触れてみようかな？」「○○さん、何しているかな？」等と言った思いが見られる。

【保育教諭の願い】

・初めて出会う生活や遊びに対して、自分の目に見えたことに興味関心を覚え、触れたり探したりと周りの環境に好奇心が芽生え確かめながら行動範囲が広がってほしい。

【保育展開・保育者の援助】



【★環境構成の工夫、♪保育者の援助】
★子ども達の発達段階に合わせた遊びをコーナーに分けて、好きな遊具やものに触れるきっかけをつくる。
♪保育者とのスキンシップを取り入れた遊びを月齢に合わせて取り入れることで、保育者や友達がしていることに興味を持ち、自ら体を動かしたりしながらアスレチックや様々な素材の布、玩具をコーナーに分かれて関わりが持てるようにする。

【乳児の変容】
・4、5月当初は、目の前にいる友達や保育者の動きを目で追いながら観察し、その行動を真似ながらずり這いや自分のペースで歩いたりと玩具や遊具に触れて関わる姿が見られた。少しずつ環境にも慣れていき、気になるものを手に取り握ったり、振ってみたり等、身の回りの物に興味を持って手を伸ばし触ってみようとするようになる。出来ることが日に日に増えてきたことで、子ども達の行動範囲が広がり動きが活発となり、安全面に配慮しながら遊びの環境を見直すことで興味関心を示す姿が見られた。
【結果と考察】
・遊びの内容に新たにコーナーを増やして展開することで、広い環境で歩いたり這い這いしたりと様々な環境の中でもじっくり友達や保育者と遊び込む姿が見られた。

実践事例（2）～色々な感触体験をしてみよう～

【乳児の実態】
・乳児期に必要な五感を刺激していく遊びとして春雨と園庭遊びを行い、初めてのものに不思議そうな表情を浮かべながら自ら触ってみようと手を伸ばす姿が見られる。

【保育教諭の願い】
・様々な感触に触れて素材を知って保しい。
・保育者と触れ合いを通して、遊びの楽しさを知ってほしい。

【保育展開・保育者の援助】

≪春雨遊び≫

8月

11月

≪園庭遊び≫

6月

11月

【★環境構成の工夫、♪保育者の援助】
《春雨遊び》
★色々な素材に触れて感触を楽しむような、春雨や寒天などを用意し雰囲気をつくる。
♪春雨が透明なので、子ども達が好きな色に染めて興味が持てるようにする。伸びたりちぎったりと様々な遊び方を保育者が見本として知らせていく。
《園庭遊び》
★戸外の雰囲気を味わいながら、玩具や自然物の葉っぱや砂等に触れて保育者や友達とのやり取りを楽しめるようにする。
♪砂の感触に慣れず嫌がる子がいる中、子ども達が好む玩具を用意することで一緒に組み合わせて触れて遊び込めるような環境をつくり、保育者も一緒に寄り添いながら楽しめるようにする。

【乳児の変容】
・春雨を使った遊びを５月から取り入れ、初めて春雨を目にしたＳさんは不思議そうな表情を見せ、泣いて椅子に座って触れることが出来なかった。しかし、保育者の膝の上に座り、「見て～見て～、びよ～ん」等の興味が持てるような声掛けに、手を伸ばして触ることが出来た。色のついた春雨を混ぜて手でちぎったり伸ばしたり、カップに入れたりしながら触れる回数を重ねたことで日に日に慣れていき椅子に座って楽しんで遊べるようになるまで成長する姿が見られた。
・戸外遊びを取り入れた当初は、戸外に咲いている草花や色々な形の玩具に不思議そうに触ったり、口に加えようとする姿が見られた。また、初めて砂のザラザラとした感触に足をあげたり、なかなか触れられずゴザの方で葉っぱや玩具を使って遊んでいた。園庭に出る機会を設けることで、歩行が安定している子、這い這いをして砂の上を歩く子それぞれが外の雰囲気を味わい、友達や保育者がしている事に興味を示しながら真似をして玩具を使って砂を掘ってみたり、砂の上を裸足で歩いたりと戸外遊びを楽しめるようになった。
【結果・考察】
・遊びの中で感触遊びを取り入れてみて、４，５，６月頃は、「これなんだろう」と不思議そうな表情やなかなか触れず友達の様子を見ている子がいたが、月に一度春雨以外に寒天や砂、水、氷等の物に触れることで、冷たさや柔らかさ等の新しい発見を感じ取ることが出来ていた。引き続き、物だけではなく様々な場所（お散歩、園庭等）で楽しめる環境つくりを工夫しながら取り入れていく。

実践事例（３）　～遊びや生活の中で様々な物の面白さを味わう～

【乳児の実態】
・保育者が話している口元を見つめ、読み聞かせに興味を示し、見ている様子がある。
・自分の欲求を伝えられるきっかけでもあり、絵本の読み聞かせに集中して見ている。
・絵本に登場する野菜や果物が実際に登場し、不思議そうに見つめる。

【保育教諭の願い】
・自分の欲求を伝えられるきっかけつくりである、保育者の読み聞かせに興味をもってほしい。
・色や形、動物、食べ物等の身近な存在に興味が持てるようになってほしい。
・苦手な食材に自ら食べようとする意欲が育ってほしい。

【保育展開・保育者の援助】

５月

11 月

何のお野菜が
あるかな～？？

鳥さん、
どこかなぁ？

11 月

８月

11 月

【★環境構成の工夫、♪保育者の援助】
★子ども達が好む絵本を見つけて、活動の合間や食事、おやつ前に絵本の読み聞かせを繰り返し取り入れる。
♪動物や食べ物、色、形等の絵本に親しみが持てるように毎日繰り返し読み聞かせを行う。その際に、子ども達が落ち着いて聞ける環境や口調等に気を付けて行う。
★CD の曲に合わせた絵本と保育者は強弱をつけた絵本の読み聞かせではどのように感じ取るのか、心が落ち着ける環境をつくる。
♪様々な絵本を用意し、子ども達の気持ちに寄り添いながら１対１での読み聞かせを取り入れるようにする。
★野菜や果物等の身近な食材に触れられるように、大好きな絵本の読み聞かせを通して興味が持てる環境をつくる。
♪野菜や果物が苦手な子が見られる為、実際に触れて食に興味が持てるように種類を増やし用意する。また、口に加えないように見守りながら声掛けをしていく。

【乳児の変容】
・入園時から絵本の読み聞かせが始まる際に、「何が始まるのかな？」と目を輝かせながら保育者の周りに集まり、保育者の口調や仕草等を見ている姿がある。子ども達から絵本棚に指をさして、気になる絵本を手に取って一人でじっくり見ている子や保育者の膝の上に座り嬉しそうに読み聞かせをしてもらう子とそれぞれが安心して絵本の物語を楽しみ、日に日に身振り手振りや喃語を発しながら言葉の面白さを感じ取れるようになってきた。
・食べ物の絵本の読み聞かせを取り入れることで、実際にバナナやきゅうり、人参等の素材に触れ、お食事時間では、友達が食べている姿を見たり、保育者の応援によって少しずつ自分で食べてみようとする意欲が芽生え、スプーンを持って食べ進めることが出来た。
【結果・考察】
・遊びや活動の中で絵本の読み聞かせを繰り返し取り入れることで、保育者や友達との関わりの中で喃語や仕草で自分の思いを伝えようとする姿が見られるようになる。子ども達が大好きな繰り返しのある絵本（「ぽん」、「おつきさまこんばんは」「いないいないばあ」「はらぺこあおむし」）を用意することで、破裂音や擬音「ブーブー」「ぽん！」「ワンワン」等といった言葉に興味を示し、保育者が言っていることに耳をすまして真似をして発する子が増え、日に日にストーリー性のある絵本にも集中して見ていることが分かった。
・子ども達が好きな絵本を通して苦手な食材にも興味を持つことができ、自分から食べようとする子が増えているので、引き続き様々な視聴覚教材やままごと遊びを取り入れて工夫していく。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果
・入園してから個々に合わせた安心できる環境つくりを心掛け、遊びや生活の中で身近な人との触れ合いを通して関わりを持ち、少しずつ子ども達の表情や動きの変化が見られるようになった。
・寒天や春雨、水、氷、砂、もち粉等の様々な素材に触れる機会を繰り返し取り組むことで、最初は触れられなかった子が今では笑顔で意欲的に握ったり、伸ばしたり、友達がしていることを真似てカップに砂を入れて遊ぶようになるまで成長が見られた。
・4 月から絵本の読み聞かせの時間になると全員が集まり、保育者の口元や声に耳を澄ませて集中して見ている。「この絵本面白そう」等と言った興味関心が芽生えながら一人で絵本をじっくり見る子が増えた。食べ物や色、形、動物等の絵本が人気で、大好きな手遊びや歌を交えて取り入れることで、夢中になって取り組む姿が見られた。また、実際に素材に触れる機会を設けたことで食事に対する興味関心が芽生えた始めた様子だった。

②課題
・遊びの環境の変化（別の環境に触れる等）を取り入れながらお散歩や人との交流を交えて様々な場所に触れ合えるような設定保育の計画を立てていく。
・素材を使った感触遊びだけではなく、指先遊び（チャック開閉、摘まむ、入れる、引っ張る等）戸外遊び（玩具や砂を裸足で触れる、散歩に出かけ草場や景色の雰囲気を味わう）等と言った遊び込める経験を取り入れることの重要性を広めていく。
・安全面を考慮して子ども達の手の届かない場所に置くようにしている為、絵本の大きさ（口に加えたり手に取っても大丈夫なもの）や場所の確保を見直し、いつでも読める環境つくりを考慮していく。

③実践を通した自身の気づき、考え

・今回の実践を 3 つに分けて取り組んだことで、乳児期に大切な発達段階を把握しながら一人ひとりの気持ちに寄り添い受容することで、保育者との愛着関係が生まれることが見られそこから感性が育ち、友達との関わりへ繋がることが分かった。また、絵本を通じて様々な物や環境の雰囲気を感じ取り、その素材に触れることで新たな発見が生まれることを感じ取ることが出来た。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・今現在の 0 歳児の発達過程を把握しながら「今の子ども達には何が必要なのか」を見捉えて、生活や遊びの中で必要な運動要素、食事の形態、遊びや生活の中での環境構成をもう一度見直し、保育者や家庭との連携を大切に引き続き日々の保育が楽しめるような環境つくりを心かけていきたい。
・子ども達の動きが活発になってきているので、行動範囲を広げながら様々な遊びの種類を増やしつつ、伸び伸びと身体を動かせられる環境つくりを引き続き取り組んでいきたい。
・絵本の読み聞かせを通じて、①言葉を覚える②心が落ち着く③コミュニケーションが身に付く④表現力が育つ⑤集中力が高まると言われている。遊びや生活の中でのコミュニケーションの大切さを感じ、気持ちを尊重しながら絵本の読み聞かせを中で言葉のやりとりの楽しさを感じられる環境構成や援助を行っていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・分部化学省・厚生労働省　平成 30 年「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」
フレーベル社

様式３【課題研究レポート】

互いの良さや存在を認め合い、過ごせるような環境構成と援助の工夫
―友達と関わる楽しさを知り、一緒に遊ぶ事を通して―

浦添市　ほるとのきこども園　保育教諭　氏名　大城　由希

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の第２章「人間関係」の領域の中に、「⑴保育教諭や周囲の園児等との安定した関係の中で、共に過ごす心地よさを感じる。」「⑵保育教諭等の受容的・応答的な関りの中で、欲求を適切に満たし、安定感をもって過ごす。」「⑶身の回りに様々な人がいる事に気付き、徐々に園児と関わりをもって遊ぶ。」「⑷保育教諭等の仲立ちにより、他の園児との関わり方を少しずつ身に付ける。」「⑸幼保連携型認定こども園の生活の仕方に慣れ、きまりがあることや、その大切さに気付く。」とある。

学級の実態としては、２歳児、男児７名、女児１１名、計１８名が在籍している。進級当初は、環境が変わったことから情緒が安定しておらず、泣いて登園する子が数名程いた。その一方で、保育士の話しを聞く事が出来る子がいたり、活動を楽しみながら参加している子の姿も見られた。その中でも、進級できた喜びがあり、保育室を走り回っている子や、友達との関わりの中で、自分の思いを伝えられず、上手くやり取りができずに、泣いてしまう子がいる。また、思い通りに行かないことがあると叩いてしまったり、上手く言葉で伝えられず、噛みついてしまう子もいた。

そこで、本学級の園児は、言葉数も多く、会話も成り立ち、伝え合う姿も見られることから、園児が友達との関わりを深め、安心して楽しく遊び込めるよう、環境構成や援助の工夫が重要だと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①遊びや活動を通し、子ども達が自ら関わり、一緒に遊び込める事が出来る環境構成について

・遊びのコーナーを２～３種類程準備を行う。

②幼児が自己発揮しながら友達と一緒に遊びが展開できる環境構成や援助の工夫

・幼児が思わずやってみたいと思える遊びや活動の環境構成の工夫を行う。また保育教諭や友達と様々な関わりの中で、遊びが展開していく充実感や満足感を味わう事ができるような援助を行う。

③絵本の読み聞かせの中で、気持ちや感情を表現できるような援助の工夫

・絵本を通して、友達同士の関わり方や、気持ちや感情の表現が伝わりやすいものを選び、一人ひとりの成長に合わせた援助を図る。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】コーナー遊び

例）玩具、粘土、塗り絵、パズル、絵本、２～３種類のコーナーで分ける。

≪幼児の実態≫

・友達の持っている玩具が欲しくて言葉や仕草で伝えられずに、噛みついてしまう子がいる。（４月～７月）

・友達と関わりたくて叩いてしまう子、洋服を引っ張ってしまう子がいる。（４月～現在）

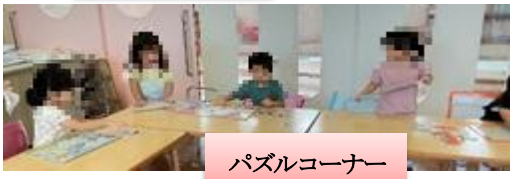
≪保育教諭の願い≫

・自分の好きな遊びを見つけて欲しい。

・その中で、同じ遊びをしている子ども同士で、会話をしながら関わりを楽しんで欲しい。

・相手が嫌がらないような言葉や仕草で、一緒に遊んだり、玩具等を共有して欲しい。

～幼児の変容～
塗り絵をしている子ども同士で、友達の塗り絵に興味を示して話しかけたり、クーピーの貸し借りをする姿が見られた。



【実践事例２】春雨遊び、園庭遊び、新聞紙遊び

≪幼児の実態≫

・「やりたい！」「遊びたい！」という好奇心がある。（４月～現在）
・友達の物を勝手に取ってしまう子がいる。（４月～１０月）
・「貸して」「一緒に遊ぼう」「仲間に入れて」と言う友達に対して「ダメ」と言ってしまう子がいる。（４月～現在）

≪保育教諭の願い≫

・色々な遊びに挑戦し、楽しんで欲しい。
・友達と遊びを共有して欲しい。

～幼児の変容～
水遊びの際に、Aさんが「お花にお水あげたい！」と言っていたので、「いいね！お花も喜ぶと思うから優しく、少しずつあげてね」と伝えると、他の子も後に続いて水やりを行っていた。

～幼児の変容～
Bさんと Cさんが Dさんに声を掛けていたが、Dさんは初め、一人で遊びたかったのか考え込んでいた。自分で考え「いいよ！」と返答し、遊び始めている。

～幼児の変容～
新聞紙遊びをしている際、新聞紙をお布団に見立てている子がいた。「お布団どうぞ！」と言って毛布のように掛けている子がいた。

～幼児の変容～
春雨遊びでは、子ども達同士で、春雨を分けてあげる姿がみられた。「ご飯作ろー！」と言ってごっこ遊びをしている姿も見られた。「これは〇〇さんのね」と話している場面も見られた。

【実践事例３】読み聞かせ

≪幼児の実態≫

・読んでもらいたい絵本が子ども一人ひとりで違う。（４月～現在）

・絵本を見ながら、気持ちを共感しているのか表情が変わる子がいる。（４月～現在）

≪保育教諭の願い≫

・読み聞かせを行う事で、相手の感情を知れるようにして欲しい。

・子ども達同士で「楽しかったね」「怖くないよ」「一緒に見よう」と言う会話をして欲しい。

～幼児の変容～

読み聞かせを通して、子ども同士の会話が生まれたりしている。「３匹のヤギのガラガラどん」という絵本の読み聞かせでは怖がっている子がいたが、「怖くないよ！」「〇〇が守ってあげる！」等、子ども同士の関わりが見られた。「わにわにのおおけが」という絵本の読み聞かせでは、ワニがハサミで指を切ってしまう場面では、痛そうな表情をしている子がいたり、「痛そうだね」「大丈夫かな？」と心配するような言葉が聞こえてくるようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

【実践事例１】

・４月の進級したての時には、玩具の取り合いが多く見られたが、子ども達に何をして遊びたいのか、どの玩具で遊びたいのかを聞くことによって、取り合いをする事が減りつつあった。遊びの選択肢が増える事で、その子の好きな事、得意な事を知れるようになり、好きな遊びをしている子ども同士での会話も多くなっている。

【実践事例２】

・水遊びや感触遊びを取り入れ、子ども達が進んで「これやりたい！」と言っている姿が多く見られるようになった。遊びたい気持ちがあるので、自ら進んで支度をしたり、友達に「一緒に遊ぼ！」「仲間に入れて！」と進んで言えるようになっている。「一緒に」と言う事を理解できてきているので、玩具を共有したり、同じ空間で同じ遊びを楽しんでいる姿が見られるようになった。

【実践事例３】

・読み聞かせの中で、「〇〇泣いてるね」や、「嬉しそうだね」等と、絵本の登場人物の気持ちが分かるようになっている。実際に友達が泣いていたり、困っていると「大丈夫？」と声を掛けている姿が多く見られるようになった。

②課題

【実践事例１】

・子ども達自身、言葉でやり取りをするようになっているが、玩具の取り合いはまだ見られるので、気持ちを代弁しながら遊び込めるように声掛けしていく。

【実践事例２】

・子ども達同士、相手を気遣いながら遊べるよう、感触遊びの場所を広く設けたり、量を増やしていき、子ども達に分かりやすく説明していく。

【実践事例３】

・子ども達と関わっていく中で、大人や友達の表情を見て、「今は嬉しそうにしてるね」や「悲しそうなお顔になってるね」等、知らせていく。

③実践を通した自身の気づき、考え

・コロナ禍マスクを付けていた事で、子ども達が大人の目だけを見て生活していたので、口元を見る機会があまりなかったことから、感情を読み取ったり、思いを口に出す事が難しかったのかと感じた。４月から本テーマを意識して子ども達と関わってきたので、子ども達同士、丁寧な関りが出来てきていると感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・幼児がお互いの存在や良さに気付き、関わりを深め、共同して遊ぶようになる為に、自ら行動する力を育てるようにすると共に、他児と試行錯誤しながら活動を展開していけるように環境構成や援助の工夫に努めていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省／平成３０年／『幼保連携認定こども園教育・保育要領解説』／フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

１歳児の生活および遊びの充実
―指先遊び・折り紙を通して―

浦添市　あおいこども園　保育教諭　ダービー　夢

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説、第２章「環境」の領域内容（2)「玩具、絵本、遊具など興味をもち、それらを使った遊びを楽しむ。」とある。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、子ども達がそのような姿のため、乳幼児の手指の発達は成長に欠かせないものだと思った。

本学級の実態として男児 10 名、女児 21 名、計 31 名の１歳児クラスである。そのうち 13 名が新入園時である。環境の変化から慣れるまでに時間がかかったが、現在は探索活動も増え、周囲への関心も見られるようになっている。生活の場面では、保育教諭の援助なしでは上手くいかないこと（食事・排泄・着脱）が多く、遊びの面でも集中力が続かず満足感を味わわせるには保育教諭の配慮が多いことに気付かされた。そこで１歳児の発達を理解するとともに、子どもたちの発達の特徴を十分に理解し、一人ひとりの発達に見通しを持って関わっていきたいと感じた。１歳児を保育するうえで手指の発達は、さまざまな成長につながる大切な発達の１つと捉え、その指先遊びの一つとして、折り紙あそびを通して、手先の器用さ、集中力、想像力が育ち、１歳児の生活および遊びの充実につながると考え本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 子どもの興味関心に寄り添いながら指先の発達を促すための遊びと工夫
- 遊びの設定（ポットン落とし、折り紙、チラシ遊び、洗濯バサミ遊び）
  を通して指先の発達を促す。

② 保育教諭の援助
- 一緒に手を添え遊び方を知らせ、難しそうにしている子には個別で対応する。
- 指を細かく動かして遊ぶ折り紙あそびで、集中力も高め、折り紙だけでなく新聞紙や画用紙など、五感を使って様々な遊びを楽しむ。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）【実践事例１】指先遊び

〈幼児の姿〉
◎指先遊びに興味を持ち遊ぶ姿が見られるが、集中力が短くすぐ次の遊びに移る姿がある。
◎上手く遊ぶことができず、玩具を投げたり、床に落として遊びを楽しむ姿がある。

≪保育教諭の願い≫
◎指先遊びを通して、指先の機能の発達を促し遊びの充実につなげたい

〈環境構成と援助の工夫〉
・ポットン落とし（ストロー・木材の素材）や洗濯バサミ遊び等指先を使った遊びを多く設け、好きな遊びを選んで楽しめるようにした。その中で、遊びに慣れてくると飽きてしまう姿も見られたので、より集中して遊べるように、数人のグループで分けたり段階的に難易度をあげていった。（ペットボトルキャップ→ストロー→クリップなど）

≪幼児の変容≫
・指先が上手く使えるようになったことで、遊びの幅が広がり１つの遊びを集中して遊ぶ姿ができるようになった。
・遊び方を理解することで、友だちと関わる姿が見られるようになった。

【実践事例２】感触遊び（新聞紙）

〈幼児の姿〉
◎新聞紙遊びを喜び、破ったり、丸めて遊ぶ子もいるが、破ることができず保育教諭に助けを求める子の姿も見られる。

≪保育教諭の願い≫
◎新聞紙を破る、丸める、ちぎる等しながら様々な指先の発達を促し、感触を楽しんでほしい
〈環境構成と援助の工夫〉
・保育教諭が破った新聞紙で紙吹雪をしたり、新聞紙を使って帽子やほうきを作る等、新聞紙の素材でできた形を見て喜び「やりたい！」と子ども達が興味を持てるよう工夫した。
・ちぎるのが難しい子には新聞紙に切れ目を入れてちぎりやすくする。

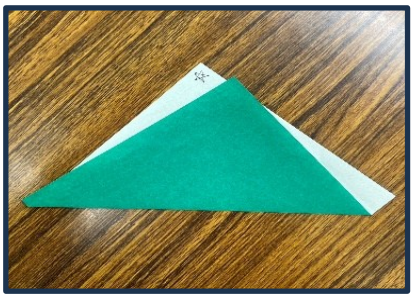
≪幼児の変容≫
・破る、丸めるという指先の使い方を知ることで、ボールを作って遊んだり、細かくちぎることを集中して楽しむ姿が見られるようになった。
・「○○作りたい」「○○作って」と保育教諭に知らせ、遊びを展開する姿が見られるようになった。

【実践事例３】折り紙

〈幼児の姿〉
◎折り紙を渡すと説明を聞く前に自由に折り曲げる姿がある。
◎折り曲げるができず、くしゃくしゃ丸める姿がある。

≪保育教諭の願い≫
◎折り紙を通して、形が変化する楽しさや完成した時の達成感を味わってほしい
〈保育構成と援助の工夫〉
・始めは角のない丸い画用紙からスタートして、自由に折る⇒四角⇒三角⇒二回折り⇒三回折りと段階を踏まえ折り紙に触れることを楽しみながら子どもの発達に合わせて難易度を変えるよう工夫した。
・合わせ折りを知らせる為に、角に☆や○を描き同じ印を合わせることで、折り合わせることができた。
・個々で対応し、保育教諭が折り方を見せながら進めていき、難しい子には手を添え一緒に折り最後まで折り進

められるようにした。



≪幼児の変容≫

・折るという指先の使い方を知ることで折り紙製作を楽しんで取り組む姿や完成した時に「できた」と喜ぶ姿が見られるようになった。
・月齢によって差はあるが、保育教諭の説明を見たり聞いたりすると一人で折り進められる子の姿も見られるようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

・子どもの月齢差に配慮した手作り玩具等を用意する大切さを改めて感じることができた。指先をうまく使えずに難しそうにしていた子どもには、さりげなく手を添え「自分で出来た」という達成感を味わうことで、遊びでの意欲や興味を引き出していけるのではないかと感じた。
・指先遊び・折り紙は手指が器用になっていくだけではなく、着脱、食事等の生活面の成長に繋がったことから、1 歳児での手指を使った様々な遊びは子ども達が発達していく上で大切な遊びの 1 つであることに気付き、これからも多く取り入れていきたいと思った。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・指先の使い方が上手になってきたので、折り紙を使った共同制作を行い友だち同士の関りやみんなで一つの作品を作り、完成した作品を見て喜ぶ経験できるよう取り組んでいきたいです。
・実践をする中で、子ども月齢によって手指の発達には個人差があるため、高月齢・低月齢に分けた活動内容を設定し
子どもたちが「やりたい！」と意欲的に遊ぶ環境を作れるよう工夫しながら実践していきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　2018　「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館
長瀬 美子　単行本　2014　の発達と生活・あそび」　ちいさなかま社

様式３【課題研究レポート】

互いのよさを知り、認め合い育ち合う学級作り
―保育教諭や友だちと関わり、言葉による伝え合いを通して―

学校法人大庭学園立那覇市認定こども園　若狭こども園　保育教諭　崎山　愛

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級は、4 歳児（3 年保育）男児 6 名、女児 8 名の計 14 名クラスである。明るく活発で、積極的に友達と関わって遊び、好奇心旺盛で賑やかなクラスであるが、その中で「○○さんがダメなことしている」や「○○さんに嫌なことを言われた」等、トラブルを友達同士で話し合わず、保育教諭に訴える姿が多く見られる。また、言葉で上手く伝えられず友だちが傷つく言葉を言ったり、乱暴な言葉を使う子もいる。さらに、帰りの会の中で 1 日の振り返りを発表する場面では、自ら手を挙げる積極性はあるが、自分の話したいことを話し終えると満足してしまい、友達の話しを聞こうとしない姿も見られる。

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」の第 2 章第 4 節「人間関係」の領域には、「(6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。」「(10) 友達との関りを深め、思いやりをもつ。」とある。これは、本学級の課題と大きく繋がると考える。そこで、「自分の良さ、友達の良さを知り、思いやりの心を育む」「自分の言葉で伝えることの大切さを知る」について、どのように環境構成や援助を工夫すればよいか研究するべく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

1　自分の良さ、友だちの良さを知り、思いやりの心を育むための環境構成と援助の工夫

(1) 絵本等を通して、自分の気持ちや友だちとの関わり方について考える機会を作り、互いの良さを感じられるように援助していく。

(2) 保育教諭が園児一人一人の良さを見つけ共有し、友だちの良さを知ることが出来るようにする

(3) 帰りの会等で、自分の良い所を認められたり、友だちからされて嬉しかったこと等を発表し、友だちの良い所に気付いて伝えたりできるような場面を設けていく。

2　言葉で伝え合う関わり方を知るための環境構成と援助の工夫

(1)「ちくちく言葉」と「ふわふわ言葉」にはどんな言葉があるか考える機会を設け、視覚的教材として子どもたちの目の届く場所に掲示する。その言葉を使うとどのような気持ちになるか考えられるようにしていく。

(2)「○×ゲーム」を通して、遊びの中で理解できるようにしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例①「絵本の読み聞かせを通して」

＜幼児の実態＞
・友だちと関わる中で、友だちの良くない行動や言葉ばかりが目につき、強い口調で注意したり保育教諭に告げに来る姿が見られる。

＜保育教諭の願い＞
・一人一人、素敵な良さを持っているので互いに認め合い、良い所に気付けるクラスになってほしいな・・・
・相手にも気持ちがあることを知り、思いが伝わる楽しさや喜びを味わってほしい。

＜環境構成と援助の工夫＞

〇絵本「カラーモンスター」の読み聞かせを行い、心（気持ち）には色があることを知り、言葉で気持ちを表現したり、相手にも気持ちがあることに気付けるように援助する。

〇絵本を読む時は、朝や帰りの会を活用し集中した環境で読み聞かせを行う。

オリジナルのカラーモンスターを製作したよ♪

＜幼児の変容＞

・「〇〇、黄色の気持ち！」等、自ら気持ちを伝え合う姿が見られてきた。

・友だち同士、今の心の色を聞き合い自分だけでなく他者の思いにも興味を持つようになってきた。

【結果と考察】

・心（気持ち）には様々な色があることを理解し、自分の今の気持ちと向き合い考えてみたり、相手にも気持ちがあることに気付くことが出来た。

実践事例②「〇×ゲームを通して」

＜幼児の実態＞

・友だちとの関わりの中で、「ばか」や「きらい」等の否定的な言葉を使ってしまいトラブルになることが多く見られる。

・「〇〇さんに嫌なこと言われた」等、友だちの言葉で感じた不快感を、言った友だちにではなく保育教諭に訴えに来る姿がある。

＜保育教諭の願い＞

・「言われて嬉しい言葉」「言われると嫌な言葉」について知り、場面に応じたふさわしい言葉での関わりをもてるようになってほしい・・・

＜環境構成と援助の工夫＞

〇クラス全体で「言われて嬉しい言葉」と「言われると嫌な言葉」について話し合い、その中で子ども達から具体的に挙げて貰った言葉の数々を「ふわふわ言葉」と「ちくちく言葉」と分かりやすく分類し、書き出して室内に掲示する。

〇実際に体を動かしゲーム感覚で楽しみながら理解できるようにしていく。

＜ゲーム内容＞

・教室中央から線を引き〇チーム、×チームに分ける。

・保育教諭が使った言葉が嬉しいなと思ったら〇
嫌だなと思ったら×に移動する。

＜幼児の変容＞

・ゲーム遊びを通して、園生活の中で友だちとのトラブルが起き、嫌な言葉を言われると友だち同士で「それ、ちくちく言葉だよ！！」と教え合う姿が見られた。

・友だちとの関わりの中で、「いやだ」「だめ」という言葉ではなく、「待っててね」や「あとでね」等の言葉を多く使えるようになってきた。

・「ふわふわ言葉」「ちくちく言葉」を意識する子も出てきて、園生活において、子どもたち同士で「それ、ちくちく言葉だよ」と伝え合う姿や、自分の発した言葉について考えたりする姿が見られるようになってきた。

【結果と考察】

・言葉の意味は同じでも、発する言葉や伝え方によって友だちが嫌な気持ちになったり、ならなかったりすることを経験し、友だちと関わりの中で使う相応しい言葉を経験して身につけつつある。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・友だちの良さや頑張りを認め合い、遊びや生活の中で一緒に頑張ったり喜び合ったりする姿が見られるようになってきた。

・トラブルが起きた際もすぐに保育教諭に訴えるのではなく、自分たちでお互いに思いや考えを伝え合う姿が見られる。

②課題

・帰りの会等で、友だちの良さを伝え合う場を発表形式で行ってみたが、手が挙がらない子や注目されることが苦手な子もいたので、より子どもたちの主体性を生かせるよう集まりの内容や、もち方について検討していく必要がある。

③実践を通した自身の気づき、考え

・「言葉の伝え合う関わり方を知る」ためには、自分の気持ちを言葉にする方法や関わりに必要な具体的な言葉を知ること、また、相手の表情や反応から実体験を通して学ぶことが必要であると感じた。そして「自分や相手の良さを知り、思いやりの心を育む」ためには、保育教諭との信頼関係が必要不可欠であり、子どもが安心して自己発揮できる環境を作っていくことが大切だと考える。子どもたちは自分の気持ちを受け入れてもらうことで、相手の話に耳を傾けていく。それは園生活での実体験、保育教諭の適切な援助・環境が子ども同士の温かな心のやりとりを育んでいくと気付くことができた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・日々の保育を振り返り、子どもの興味関心・変化に注目し、心を動かせる経験が出来るよう幼児理解、教材研究を深めながら、園児同士の心の結びつきに適切な援助ができるような保育を目指していく。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　フレーベル館

・服部　直人　新保育内容シリーズ　2008 年　＜新訂＞「子どもと言葉」株式会社　萌文書林

自分の思いを伝え、相手の思いに気付かせるような援助の工夫
―絵本の読み聞かせ体験を通して―

社会福祉法人さくら会立　神原こども園　保育教諭　謝花　ゆうき

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、ゲームやスマートフォンなどデジタル機器の発達･普及や夫婦共働き世帯による生活のスピード化により、親子間のコミュニケーションが減少している。「幼保連携型認定こども園教育･保育要領解説」の第２章第４節「人間関係」の領域には「園児は生活の様々な出来事の中で、その時々の思いが相手に伝わらずに困ったり、うまく伝わったことで遊びがより楽しくなったりするなどの体験を通して、相手の思いを感じられるようになっていく」とある。また絵本や紙芝居に親しむ環境を通して、言葉や情緒を養うことが推奨されている。

本学級の幼児は４歳児(３年保育)男児１３名、女児７名、計２０名在籍している。友だちと玩具の貸し借りや、遊びの中で意思を通そうとしてトラブルになり、相手に対して強い口調で話す姿が見られる。保育者が仲立ちしたりするが、まだ相手の思いや気持ちに気付けず、友だちとの関わりがなかなか深まらない子もいる。このような実態を踏まえ、自分の思いを伝え、相手の思いに耳を傾けられるようになり、伝え合う喜びを味わうためには、絵本等の環境を整え、どのような援助が必要かを研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　言葉を使って表現する意欲や、相手の話を聞こうとする態度を育てるための保育者の援助

⑴ 絵本の世界に親しみ、様々な気持ちに触れ、豊かな心を育む援助の工夫

⑵ 言葉の発達段階と幼児の実態を把握し、保育者間の連携をとりながら相互理解へ繋げる

２　読み聞かせの実践

⑴ 抱えるテーマについて、教職員の共通理解と交流を図る

⑵ 幼児の実態に応じた絵本や指遊び、手遊び、などの工夫

３　思いを伝え合う楽しさを味わい、関わりが深まる環境構成の工夫

⑴ 幼児が聞くことや話すことの楽しさ、共感し合う心地良さを味わえる環境構成

⑵ 読み聞かせを通して幼児の反応やつぶやきから、興味・関心を捉える

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

１　実践事例（１）　「読み聞かせを通して、思いを言葉にする習慣や聞く態度を育てる」

【幼児の姿】　６月

・読み聞かせの際に静かに話を聞けない子や、おしゃべりをする子がいる。また座る姿勢が崩れて、落ち着きにかける状況が見られた。

【保育教諭の願い】

・読み聞かせに興味・関心を持つことや、落ち着いて話を聞く態度を身に付けてほしい

【環境構成の工夫】

・集まりの開始前に手遊び・指遊びなどを取り入れ、子ども達が興味のある本などを用意する。

・集まりの中で、子ども達が作った物を紹介する場を設ける。

・他クラスの先生や年長児と、一緒に読み聞かせや紙芝居を楽しむ。また、感想を話したり聞いたりする。

【保育教諭の援助】

・表情や声のトーンに気を付け、保育者自身が見本となって明るい雰囲気づくりを心がけるなど、言葉かけを行ってやりとりが楽しめるようにする。

・異年齢児の交流や担任以外の保育者とも関わりを持つ事で幼児の実態把握や共通理解を図る。

【幼児の変容】

・友達の話や、読み聞かせを体験する事によって、期待をもって話を聞く姿が見られた。

・子ども同士で読み聞かせが始まる合図の声を掛け合う姿が見られるようになり、興味関心を持ち落ち着いて話を聞くようになった。

【結果と考察】

・読み聞かせを通して、聞く態度が身につき、落ち着いて園生活を過ごせるようになってきた。

・先生や友達に興味をもつようになり、幼児自ら挨拶や笑顔で声をかけたりできるようになってきた。

・手遊びや指遊び等みんなで動きや声を合わせふれあう活動を通して、子ども同士で喜び合い面白がるなど関わりが広がっていった。

2　**実践事例（2）　「絵本を通して様々なことばに親しみ、場に応じた言葉を使う」**

【幼児の姿】　８月

・友達と誘い合って遊び関わりが増えるが、玩具の貸し借りで「かして」「やめて」の言葉が言えず手が出てしまう子がいる。また、困った時に自分の気持ちをなかなか伝えられない子がいる。

【保育教諭の願い】

・場に応じた言葉遣いや言葉で伝える大切さを知り、使えるようになってほしい。

【環境構成の工夫】

・一日の出来事や、園生活に関連する絵本や紙芝居を選ぶ。

・読んだあと絵本コーナーに置き、いつでも手に取れるようにする。

【保育教諭の援助】

・絵や言葉の理解が難しいときは分かりやすい言葉を添えるようにする

・「このお顔は嬉しそうだね」「こんな時、皆だったら何て言う？」と表情から読み取り、投げ掛け言葉を引き出していく。またその言葉を園生活の中で活かせるように見守ったり言葉をかけたりする。

【幼児の変容】

・謝れない子が「ごめんね」と言えるようになり、少しずつ相手の思いに気付けるようになってきた。

・飾った本に興味を持ち手に取る姿が見られた。また、「これ ケンカのほんだよ」と自分で見つけてきて知らせ、自分なりに考えて本を探す姿が見られる。同時に文字への興味・関心も高まってきた。

【結果と考察】

・自分の気持ちを伝えようとする子が多くなってきたが、困った時に気持ちを伝えられずにいる子がいる。声をかけたり仲立ちしたりなど、必要に応じて個別の援助をおこなっていきたい。

・語彙数が増えてきているので、遊びを介して文字に親しむ機会を設けていきたい。

Ⅳ　実践の振り返り

１　成果

⑴ 読み聞かせを通して人と人とのコミュニケーションが増え、自分の言葉で相手に気持ちを伝え、相手の思いなどを知るやりとりが増えた。

⑵ 幼児の実態に沿った本の読み聞かせを行うことにより、自然に話を聞いたり覚えたりする態度が育まれた。また、遊びの中でルールを伝え合い、生活の中で必要な言葉を使う姿も見られた。

⑶ 友達同士競い合う中で互いを認め合い、刺激を受け語彙や文字への知的好奇心を高めることができた。

２　課題

⑴ 保育者や友達と一緒に経験したことを認め励まし自信に繋げていくためには、今後も主体的に気づけるようなねらいを持った活動ができるよう配慮していく。

⑵ 絵本への関心や理解に個人差があるため、一斉活動以外の好きな遊び時間を通して個別で取り組む等、無理なく文字へと関われるような援助を心掛けていきたい。

３　気づき

⑴ 思いを言葉で表現する中で、時には思いを通そうとして意見がぶつかり、また思いがうまく伝わらずトラブルが増えたように感じたが、これも関わりが広がっていく過程と捉え手立てを考えるきっかけとなった。

⑵ 伝えたい気持ちの芽生えを大事にし、相手の気持ちにふれる経験が得られるように、保育者自身の保育を振り返るなど、環境から援助を考えるスキルを身に着けていく必要があると感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

１　読み聞かせを通して生活に必要な言葉が分かり、いろいろな体験を通じてイメージを楽しむ活動ができたので、今後は文字などで伝える楽しさを味わえるようなペープサート作りや手紙ごっこなどの活動を取り入れていきたい。

２　伝え合いが深まるような環境構成や、援助の工夫について学びを深めていく。自園の３年保育・こ小連携の特性を生かし、具体的指導の見通しをもつことや職員間で話し合いの時間を作り、自己研鑽を積み資質向上に努めていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成 30 年　『幼保連型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館

・久保田　競 2011 年『就学前にやるべき「久保田式学習法」天才脳を鍛える３・４・５歳教育』 大和書房

様式３【課題研究レポート】

幼児が主体的に遊び、展開していける為の環境の構成や関わり、援助の工夫

あおぞら第２こども園　教諭　氏名　友利　有咲

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育要領解説」に、「保育教諭などは、園児が必要な経験を積み重ねていくことができるように、発達の道筋を見通して、教育及び保育的に価値のある環境を計画的に構成していかなければならない。園児一人一人が関わっている活動の各々の展開を見通すとともに、学期、年間、さらに、入園から修了までの園生活、修了後の生活という長期的な視点に立って園児一人一人の発達の道筋を見通して現在の活動の位置付け、園児の経験の深まりを見通すことが大切である。」と記載されてある。

私のクラスは、男児 14 名女児 7 名の 21 名で、3 歳児クラスから同じ仲間で明るい活発な 5 歳児クラスである。進級した事を喜び、担任も持ち上がりだったので、安心した人的環境の中スタートした。そこで、なかなか遊びの展開が上手くいかない事が現状である。こども達が主体的に楽しく遊びが展開していけるためには、どのような関わりが良いのか、一人一人の発達を見ながら、環境の構成や関わりを工夫していきたい為、今回このテーマ設定にした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①こども達一人ひとりの発達を見ての関わりや援助の工夫

・日頃の遊びや集団の中での様子、行事や園外保育での姿など、その時のこどもの姿は違うと思うので、一人ひとりよくみて理解する。

②主体的に遊びが展開していけるような環境の構成

・こどもの興味や関心を見逃さないで、こども達が楽しんで遊びが展開していけるような環境の構成を変えて、提供していく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

〔幼児の実態〕

・園の行事（浜下り、伊江島親子キャンプ、夕涼み会、山登り等）を通して、自然豊かな経験から描画では、豊かな表現で絵を描く事を楽しんでいて、遊びの中では、経験をしたことを再現して遊んでいる姿が見られる。
でも、その遊びが一時的で展開がなかったり、その時で終わってしまって遊びが繋がらなかった。

〈保育教諭の願い〉

・こども達が興味を持った、経験をした再現遊びが繋がっていって自ら展開して、
楽しんで遊んで欲しい。

〈保育教諭の関わりと援助〉

・夕涼み会で飾る提灯作りに取り組んでいて、絵を描くことが好きになっている姿が見られ、色んな種類の紙（画用紙、厚紙、和紙、包装紙）に描いておしまいになっていた。その姿から、絵本作りができたらいいなと思い、A3 普通紙の紙で作れる絵本の作り方を伝えた。

・環境の構成としては、紙と色んな種類のペン（マッキー、ポスカ、太いペン、細長いペン）を用意し、いつでも手に取って描けるようにした。

・好きな絵を描き込んでいて、楽しんでいた頃に、保育教諭が手ひらで、作ったお話を読み聞かせて「こうやってお話を作って絵を描いてみて」と伝えた。

・こども達に「できたら文字を書いてあげるから持ってきてね」と伝えた。

・完成したこどもからその都度、お友達に読み聞かせをしてあげた。
延長保育の時間にも年少のお友達にも読み聞かせをした。

・絵本をみんなが読めるように、手に取りやすい場所を設置した。

〈幼児の容態〉

・絵本の作り方もすぐに覚えて、覚えたこどもはお友達に教えていた。作れるこどもが増えていった。

・初めは、1 ページごとに好きな絵を描き込んでいた。

・色んな種類のペンを用意したことから、ペンの性質の違いに気づいて、使い分けて使うようになっていた。

・自分の好きな物を描いて図鑑のようになっていた。

・1 人のこどもが完成すると、イメージもついたのか、他のお友達もどんどん描き込んでオリジナルの絵本が沢山になった。

・読み聞かせをしてもらえて嬉しそうにしていて、自分で作ったお話なので文字は読めなくても自分でお友達に読み聞かせをして楽しんでいた。8 ページ分で短いので、お友達も内容を覚えて、自分で手に取って読んでいる姿もあった。

〈結果と考察〉

・絵を描いて表現しなかったこども達が、行事や製作をきっかけに、描画で表現することが好きになっていたので、そこから絵本作りをしてもっと楽しんでいたので良かった。一人ひとり、自由に描いて表現ができているなと感じた。

また、こども達が経験したこと、日頃使われている言葉、読み聞かせをしてもらった絵本の内容が、アレンジされているストーリーが多かった。園の行事や自然豊かな環境や経験がこども達の感性を豊かにすることを実感した。

他のクラスの保育教諭やこども達からも、「すごいね、素敵だね」と言ってもらえる事で、嬉しそうな表情をし、自信にも繋がっているなと感じた。

文字を書いてあげる時に、1 対 1 で関わることもできたので、こどもにとっても、保育教諭にとってもいい時間になった。

〈実践事例２〉

・１人で作る絵本作りがしばらくブームになった。１人何冊も作って楽しんでいたので、お友達と一緒に作ってみることを促してみた。

〈保育教諭の願い〉

・お友達に自分の意見が言え、相手の気持ちも受け止めて、一緒に１つの絵本作り楽しんで欲しい。発達段階としても、話し合いや意見の認め合いが出来るようになるので、そのきっかけにもなって欲しい。

〈保育教諭の関わりと援助〉

・日頃の遊びの中で集団遊びやグループ活動の時間をつくった。
・やりたい遊びやルール作りをこども達で話し合って決めて遊ぶ機会を増やした。
・一人ひとりの思いを保育教諭が聞いて、受けとめる事や認める事を大切にした。
・クラフトパンチや色画用紙、折り紙も用意した。
・絵本作りをしたそうだが、１人で絵本作りに取り組めなかったこどもがいたので、よく作っているこどもとペアにして取り組んでみた。

〈幼児の実態〉

・よく作っているこども達は、意見を言い合って楽しんで作っていた。
・日頃の遊びからも、「○○してみたい。」「こうやったら○○ができそうだから○○が欲しい。」など意見を言い、他の遊びでも次の展開を考えて遊べるようになった。
・１人では絵本作りをしなかったこどもも、２人で作った絵本が完成した後は、イメージが持て、一人でも何冊も作るようになった。
・２人で作った絵本を見て、他のお友達も「○○と一緒に作りたい」と言って自らお友達を誘って一緒に作って楽しんでいた。
・自分達で工夫してクラフトパンチを使って絵本を作ったり、折り紙を貼って作っていた。

〈結果と考察〉

・お友達の意見を聞く、自分の意見も言う、お互いで認め合って１つの事が楽しくできる、というきっかけになったので、取り組んでよかった。また、少しの援助で自分達で遊びの展開を考えていき、「こうしたら良さそう」と工夫して遊び込んでいた。他の遊びでも「もっとこうしたい」と遊びの展開に繋がっていったことがよかった。
・１ 人では絵本作りができなかったこどもも自分の意見も受け入れてもらえたという経験から自信にもなって、１人で作れるようになったと感じた。

Ⅳ 実践の振り返り

・こどもの好きなこと、興味があるものから保育を考えて、展開させていくことが、こども達の遊び込める環境になっていくんだなと感じた。それには、一人ひとりのこども達の発達や姿を理解していないと、その子に合った関わりや援助ができない。保育教諭が遊びの動線やこう遊んで欲しい、という願いが考えられた環境の構成をこども達の姿から変えていく事、担任や園、家庭での連携の大切さにも気づいた。クラスの全員が絵本作りをしたわけではないが、お友達が楽しく取り組んでいるのを見ているので、興味を持ったタイミングを見逃さないで、そのこどもに合った関わりで展開してあげたい。また、興味を持った遊びから展開していけるようにしてあげたい。

・他の遊びの中でも、工夫して遊んでいる姿があったり、自信をもって自分の意見が言え、お友達の意見にも合わせてみたり、認め合う姿が見られた。遊びの積み重ねから、こども達の成長も見られたので良かった。

・12月のクリスマス製作では、サンタさんへのお手紙と靴下作りをした。クリスマスへの期待感とわくわくが伝わる絵を描いていた。ここにも絵本作りの経験からも絵を描いて表現する事に繋がっているなと感じた。

Ⅴ 今後の実践にむけて

・次への展開をどうして欲しいか、どこを伸ばしていきたいか、こどもの姿を捉え、環境の構成を考えていくのが難しかったので、もっと勉強をしていきたい。先輩からもアドバイスをもらいながらの、実践だったので、これからも担任で相談して、より良い保育環境、関わりをしていきたい。

・最近は、折り紙の本を見て自分で折れるこどもが増えてきていて、今も絵本作りも続いている。これからは、折り紙や画用紙などを使って、飛び出す絵本作りをしてみたいと思う。そして、卒園までにクラスで１つの、皆で考えたお話の絵本が作れたらいいなと思っている。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　厚生労働省　内閣部　「幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説」

様式３【課題研究レポート】

友達と関わりながら遊びこむための環境構成と援助の工夫
―恵まれた園庭環境―

南城市玉城こども園　　教諭　大城　早苗

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携認定こども園要領解説書第２章第４節領域「環境」に「身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを取り入れようとする」とある。本学級の幼児の実態としては男児１６名、女児１２名、計２８名の明るく元気いっぱいの学級である。また、素直で優しい、自分のしたいことを伸び伸びと楽しめる、いろいろなことに興味をもって関わろうとする、友だちや生き物(自然)に対して思いやりをもって接することができる。などの姿が見られる反面、きっかけがないと遊べない、目的がもちにくい、遊びに対して受け身、遊びが継続しにくいなどの姿も見られた。このような実態を踏まえ、園児が『もっとやりたい！』『またやりたい！』と自然に囲まれた園庭に興味・関心をもって関わり、発見したり、試行錯誤したり充実感・満足感を味わい、園児がおもしろさを感じながら心から楽しみ遊びこんで欲しいと願い、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 自然に囲まれた園庭に関わりたくなる環境構成の工夫について

・日々活動や遊びの中で、友だちといろいろな出来事を共有し、友達の良さに気づいたり楽しい経験が園庭で繰り返し味わえるような環境構成の工夫を行う。

② 園児の興味・関心に寄り添った保育教諭の援助について

・園児一人ひとり良さや発達に合わせた言葉かけの仕方や工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

《幼児の実態》

・園庭では思い思いに単発的な遊びが多く、活動がなかなか継続、展開できない様子がみられる。

・恵まれた園庭で思いっきり体を動かし走り回ったり、大型遊具でおにごっこをする楽しさで時間が過ぎてしまうことがある。

《保育教諭の願い》

・友達と遊びを進める中で、もっと自然に触れ合いながら互いに思いを伝え合ったり、工夫したり協力したり、楽しさを共有しながら展開を楽しんで欲しい。

・「もっと遊びたい」「明日もまた遊ぼう」の気持ちが育ち、友達と関わりながら継続して夢中になる遊びを見つけて欲しい。

《保育教諭の関わりと援助》

・園庭には担任間で連携し安全に遊べるよう配置し、子ども達が好きな遊びに取り組めるようにする。

・遊びを見守りながら子どもたち一人ひとりの興味や技能を把握することで子どもたち一人ひとりが十分に遊び込めるよう必要な声掛けや道具の援助を行う。

《園庭遊び》　　《環境構成の工夫》

順番でバナナさわりに行こう　食べれるかな～

・バナナや草花の生長の変化に気が付けたり発見できるように、木の台や脚立を配置する。

昨日の続きやろうぜ～　今日はどんな化石がみつかるかな

・小さめのタイヤを選び園児が取りやすい場所に置く。
・遊びが展開できるようタイヤ以外の平均台などの道具を準備しておく。
・継続して遊べるように、遊びの時間を十分に確保し夢中になって遊べるようにする。

昨日は負けたから今日は勝つぞ　明日もまっててね　いっぱい食べて

・竹馬や一輪車などの粗大遊びを取りやすい場所に準備しておく。
・小動物との触れ合いの時間を十分にとる
・動物図鑑や動物絵本を手に取りやすい場所に配置し、いつでも興味を持った時に調べたりして関われるようにする。

泥パック気持ちいい～　温泉みたい

・自分のイメージを膨らませ自然と触れあい泥の感覚を全身で楽しめるよう、必要な道具を準備し充実感を味わって遊ぶことができるようにする。

じゃんけんぽん　やった！上までのぼれた

・台風で倒れたガジュマルの木をアスレチック風に。
安全面を考慮し登る高さにテープをはる。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・園児の興味・関心を捉え、夢中になって遊び込める環境構成を行うことで表現する楽しさを味わい、充実感、達成感を味わうことにつながった。

・一人ひとりの幼児理解に努め環境構成を工夫することで子ども達の遊びが充実し友達との関りが増え、思いを伝えられるようになってきた。

・大型遊具だけで遊ぶことなく自然に触れ合う機会が増えた。

② 課題

・集団遊びの中で子どもたち一人ひとりの意欲を把握しながら、必要に応じて保育者が仲立ちすることで、子どもたちが考えたルールを取り入れながら遊びを楽しめるよう援助していきたい。

・園児が遊ぶ姿を見守るだけでなく「次はこうしたいな」「こんなことできたらいいな」と思う気持ちに寄り添い興味・関心にあった環境を今後も準備していく。

③ 実践を通した自身の気づき、考え

・恵まれた園庭で、子ども達が主体的に遊び、自由に遊びを選択できる環境であることが、「やってみたい」「またやりたい」と明日への期待に繋がり「こども園って楽しい」と思えるのではないか。また園生活の中で安心感や満足感を味わうことが、これからの友達と関わる育ちに繋がっていくのではないかと思う。無造作に置かれたタイヤ、角材や丸太、さまざまな形の廃材は、子どもたちにとって魅力的な「遊具」です。座ったり重ねたり平均台のように上を歩いたり、子どもたちは創造豊かに遊び込みます。保育教諭は、どこにどのような自然物を配置するか、道具を準備するか、アンテナをはり子どもたちの様子を見て考えていきたいと思った。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○ 課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

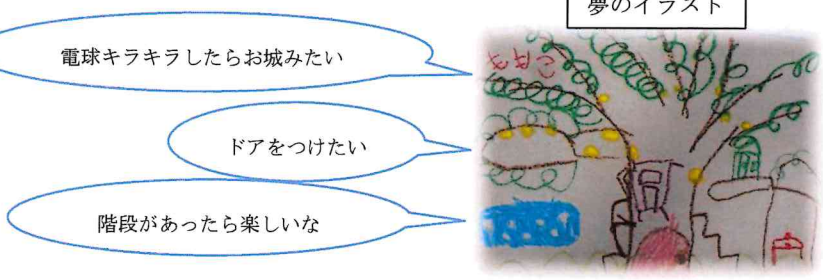
・遊びの中で友達と協調することや、意見を調整する力を育めるよう必要な援助を行い、一人ひとりの思いに共感しながら援助をしてきたい。

・園児の姿が伝わるドキュメンテーションを作成し親子、教師間、友達と楽しさや発見を共有できるよう更に力を入れていきたい。

・好奇心や探求心が膨らむような環境構成が大切だと改めて思った。幼児理解を深めながら今後も「こども園って楽しい」「もっと遊びたい」と思える環境構成の工夫を引き続き行っていきたい。

○ 今後の環境計画『ツリーハウス』

・子どもたちに親しみのあるガジュマルを「夢の木」に見立て、子どもたちがイラストを描きました。自らやってみたい「わくわく・どきどき」のごっこ遊びの拠点となるように、また夢中になって遊ぶ場所がふえてくれたらと願っている。



様式３「課題研究レポート」

園児が夢中になって遊び込める環境構成や援助の工夫
―園児一人ひとりが安心と信頼をもって過ごせる環境を通して―

南城市　知念こども園　教諭　氏名　仲村　隼

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第１章第１節の◆１幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本において、「保育教諭等は園児との信頼関係を十分に築き、園児が自ら安心して身近な環境に主体的に関われるよう、園児と共によりよい教育及び保育の環境を創造するよう努めるものとする」とある。

本学級は３歳児(３年保育)男児５名、女児７名、計12名在籍している。色々なことに興味を持ち、明るく元気な子が多いが、登園の際に不安そうな表情をしている子が居たり、保育教諭のそばで過ごしている子、遊びが続かず様々な遊びを転々として最終的には走り回る子が居たりする。

そこで、園児が安心して過ごせるような関わり・言葉かけを意識し、一人ひとりが「今日はこども園で○○をするんだ！」と期待感をもってこども園に通えるようになってほしいと願い、テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　園児が安心して過ごせる環境の工夫について

こどもの話を聞いたり、表情・しぐさにも注意しながら気持ちを汲み取ろうとする姿勢を心掛ける。

②　園児の興味・関心のある物を知り、遊びに夢中になるような環境の工夫について

保育教諭が幼児理解に努め、遊びが広がったり、やってみたいと思えるような環境を設定したり、援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）【実践事例１　お店屋さんごっこをして遊ぼう】

≪幼児の実態≫

・保育教諭とばかり遊んでいる子がいる。

・遊びが続かず、走り回る子がいる。

・折り紙や廃材を使い、セロハンテープで止めたりしてものづくりを楽しんでいる。

・ままごとコーナーで遊ぶことが好きで、時々「いらっしゃいませ！」と言ってお店屋さんのマネをする子が居る。

≪保育教諭の願い≫

・お店屋さんごっこを通して遊びこみ、園に来ることが楽しみになってほしい。

・アイデアいっぱいで、お店屋さんごっこが楽しくなるような方法を友達や保育教諭と考えたり、やってみようとする。

≪保育教諭の関わりと援助≫

・お店屋さんコーナーを設ける。お店屋さんコーナーの隣にはテーブルと椅子を用意する。

・保育教諭も一緒にお店屋さんごっこに参加することで、遊びの幅が広がるように関わる。

・お店屋さんで使うものをこども達と一緒に作っていく。

≪幼児の変容≫

・お店屋さんコーナーができていることに気付いて、テーブルに売り物を並べて、店員さん役とお客さん役に分かれやりとりを楽しんでいる。

・今まであまり関わりのなかった友達とお店屋さんごっこを通じて一緒の遊びをするようになった。そして「一緒に遊ぼう」「仲間に入れて」などの言葉が増えてきた。

・遊びが見つからず、走り回っていた子もお店屋さんごっこに夢中になって遊んでいる。店員の役が好きで、よく「いらっしゃいませ！」と言っていた。

・保育教諭と一緒に遊び、友達とのやりとりが少なかった子が、お店屋さんごっこを通して友達との関わりが増えて、友達と遊ぶ機会が増えた。

【結果と考察】

・こども達が興味のある物を見つけ、遊びに取り入れることができると、自然とこども達が集まって遊びこんでいったので、保育教諭の幼児理解と環境設定がとても必要なスキルだと感じた。

【実践事例２　ダンボールで家を作って遊んでみよう】

≪幼児の実態≫

・おもちゃを片付けるかごや段ボールの中に入ったり、「ブーン」と言って押して走らせている。

・ブロックで家を作り人形を使って友達と一緒に遊んだり、車を作って友達と見せ合ったり、走らせている。

≪保育教諭の願い≫

・お家づくりをして友達と楽しくお家ごっこをして遊んでほしい。

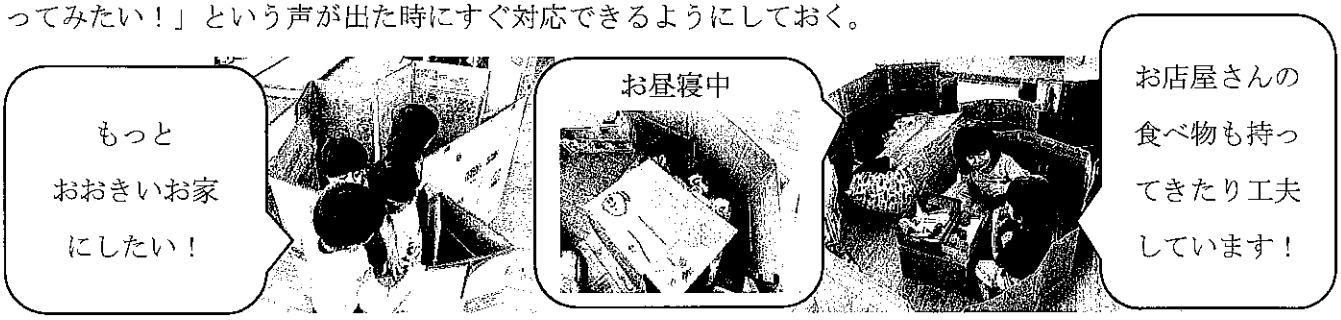
・お家づくり、遊びを通じてアイデアをだして遊びを発展させ、満喫してほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

・ダイナミックに遊び込めるように大きめのダンボールを多めに用意する。

・お家づくりをしても他の遊びの邪魔にならないようにスペースの確保。コーナーの配置。

・こども達と一緒にお家づくりに参加し、こども達だけでは作るのが難しそうな場合や、こども達の「やってみたい！」という声が出た時にすぐ対応できるようにしておく。



・ダンボールを取り、ダンボールを繋げこども達が入ることができる大きい囲みを作って「お母さん役」「こども役」「猫役」に分かれて遊んでいる。

・遊んでいくうちに「もっとかっこいい家を作りたい！」という声がでてきて保育教諭と調べ作ってみようとする。

・普段あまり関わりのない友達と一緒に家を作り、遊んでいる。

・ダンボールや布を被りベッドのようにしていたり、お店屋さんごっこの食べ物を使ったりしてお家の中で遊んでいる。

【結果と考察】

・ダンボールを多く用意したことで家づくりも自由にできたことで、こども達から「もっと大きくしてみたい」という声がでて、保育教諭と調べてから作ってみたり、お家ごっこがもっと楽しくなるように身近にあるものを使ってこども達なりにアイデアをもって遊んでいた。

・普段はあまり関わらない友達と一緒にお家の中で役になりきって遊んでいる姿が見られた。なので、保育教諭が意図をもってこども達と関わり、意図をもって環境を設定していく事が大切なのだと感じた。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

園児が安心して過ごせる環境については日々、子ども一人ひとりと丁寧に接していくことで、少しずつ安心して過ごしていたのでこどもたちとの信頼関係が大切なのだと実感した。

いつもはやりとりが少ない友達と関わる姿も見られたり、こども達なりにアイデアを広げて遊びを発展させていたので、保育教諭が幼児理解を深め環境を用意する力が必要なスキルだと感じた。

②　課題

・あそびの続きを保障するためには片付けを必ずするべきなのか。

・片付けやすいようにマークをつける。

③　反省

実践を行っての反省点は片付けの工夫で、保育教諭の願いとしては自分たちが過ごす部屋を綺麗にすることで気持ちよく過ごせることに気付いてほしい。という願いがあったため食事の前や午睡前など片付けをしていた。しかし、「今遊びこんでいるな」と感じていても片づけをしてもらうことになる場面も多々あり、こども達もいつの間にか遊びから離れていくことがあった。なので、保育教諭同士で片付けをどうしていくか話し合うことが大切だと感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・今後も引き続き幼児理解に努め、一人ひとりが安心して園生活を送れるように関わり、こども達の遊びが発展・展開していくように環境構成や援助を工夫していく。

・ドキュメンテーションを活用しこども達の様子を保護者や園全体に発信していく。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年度幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

株式会社フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

園児の好奇心や探究心を育むための環境構成と援助の工夫

―虫捕りや生き物のお世話をすることを通して―

南城市公私連携型認定こども園佐敷こども園　教諭　氏名　平安名　優織

Ⅰ　テーマ設定の理由

５年前、コロナ禍の中で外出が制限され、公園などへ行く機会が少なく、自然や生き物と関わる経験をあまりすることができなかったと考えられる。第２章第４節「環境」の領域には、「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」とある。幼児期は、直接的・具体的な体験を通して、好奇心や探求心を育む時期である。このような育ちを保障するために、こども園での遊びを通して様々な自然や生き物と関わり、友達や保育教諭と不思議さや素晴らしさ、発見したことを共有していくことが求められていると考える。

本学級の幼児は５歳児（３年保育）男児 16 名、女児 11 名、計 27 名が在籍し、男女ともに身近な動植物に興味や関心がある子が多い。園庭へは、すぐに虫捕り網をもって走りだし、種類問わず虫かごいっぱいに生き物をいれて、観察して育てたいと思う姿が見られる。しかし、捕ることに満足し生き物を育てることに繋がらず、そのまま虫かごに放置した時もある。

そこで、虫捕りや生き物の世話を通して、幼児が身近な生き物や育てることに興味を持ち、生き物にも命があることを知って関わりながら、好奇心や探究心を育むことを願い、どのような環境構成や援助の工夫が必要か、研究したい。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①園児が身近な生き物についてもっと知りたいと思えるような環境構成の工夫について

（１）　自分たちで捕まえてきた虫の特徴や飼育の方法を調べて、友達と伝え合う事が出来るような環境構成の工夫を行う。

（２）　分かったことや不思議に思ったこと、発見したことをクラス全体で共有し、保育ウェブを活用し、目で見て思い出せるような援助を行い、探究心を育む。

②生命の尊さに気づいて、飼育することや生き物の生長を楽しむことができる援助の工夫について

（１）実際に生き物の気持ちになって考え、生き物にも命があることを知ることができる援助や言葉かけを行う。

（２）保育教諭が個々の興味関心を理解し、友達と楽しくお世話ができるような援助をしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実態事例１】「オオゴマダラとの出会い」

《園児の実態》
・羽の切れた蝶を見つけ、助けてあげたいが、どうしたらいいのか分からず、友達と一緒に保育者に相談に来る。
・しかし蝶の名前や、どこで育ったかなど、どう調べたらいいのか困っている。

《保育教諭の願い》
・見つけた生き物を見たり触れたりする中で、興味や関心をもって生き物と関わり、発見や不思議に思ったことを友達と共有してほしい。

《保育者の関わりや援助》

・子どもの発見や不思議、疑問に思ったことに共感し、クラス全体で共有して思いや考えを伝え合い、その内容を振り返りながら、目で見て確認できるように「保育ウェブ」にまとめる。

・子どもの目線に合わせて、生き物とじっくり関われるような観察コーナーを設け、図鑑や虫メガネを準備しておいたり、「生き物クイズ」を作って掲示するなど、楽しく調べることが出来るような環境を整える。

保育ウェブ

観察コーナー

生き物クイズ

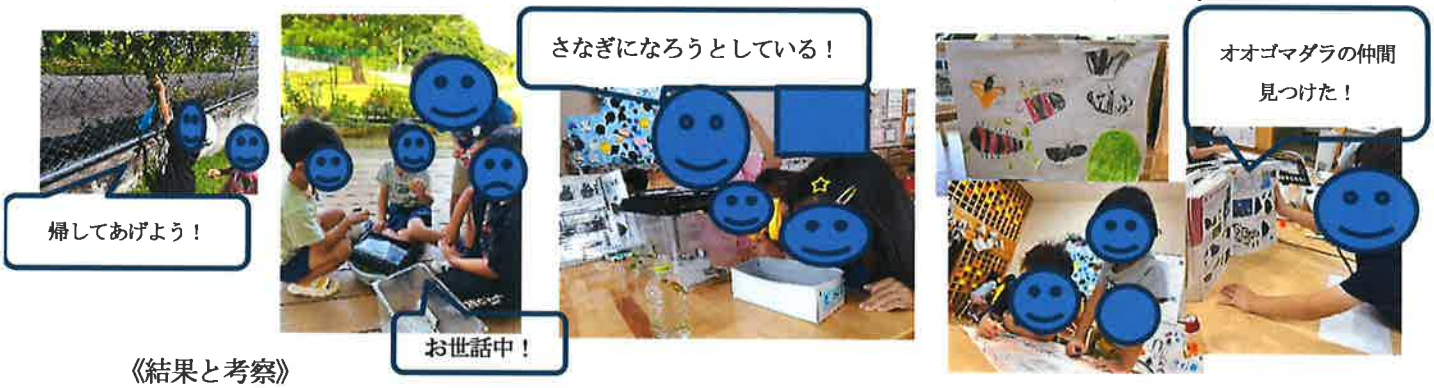
飼育ケース

《園児の変容》

・蝶を助けたい思いから、友達と積極的に生き物について図鑑で調べるようになり、蝶の名前や生息場所を知る事ができ、助けられた喜びから、育ててみたい！という子が出てきた。

・友達や保育者も一緒に飼育方法を考えながら本格的に幼虫のお家を完成させていった。毎日、登園すると幼虫の様子が気になり、「葉っぱ食べている！だからうんちいっぱいしているんだ！」「昨日より大きくなっている！」「さなぎになっいてる！」と、発見したことを友達と伝え合うことを楽しむようになった。

・飼育していく中で、オオゴマダラの特徴やその仲間に興味をもち、いろいろなオオゴマダラを図鑑で調べて、主体的にオオゴマダラの仲間たちを絵に描いて自分が見て感じた事を表現する子が出てきた。



《結果と考察》

・「保育ウェブ」に子どもたちの発見や考えをまとめたことで、自分たちが分かったことをクラス全体で共有でき、新しい生き物を見つけて育てるときに探究しやすくなった。また、生き物に興味がなかった子も一緒に、みんなで育てていこう！という意識になった。

・飼育ケースをどこからでも観察できるようにコーナーを設定したことで、子どもたち同士で感じた事を共有することが多くなった。また、幼虫の様子が気になり、友達と協力して毎日飼育ケースの掃除や餌を集めたりするようになった。

・図鑑をおくことで、オオゴマダラの仲間の種類や模様、色を視覚化でき、関心が高まった。

【実践事例２】「オタマジャクシって面白い！」

《園児の実態》

・梅雨に入り、オタマジャクシやアジサイなどの製作するのが盛んな中、保育者がオタマジャクシを見せると、「みんなで育ててみたい！」という思いが出てきて、飼育することになる。しかし、飼育ケースの掃除の仕方や餌は何を食べるのか分からず、調べている。

《保育者の願い》

・オタマジャクシの飼育を通して、生命の不思議さに気づき、命あるものとしていたわり、愛情をもって育てられるようになって欲しい。

・飼育する中で発見や喜びを保育者や友達と伝え合う楽しさを味わってほしい。

《保育者の関わりと援助》
・オタマジャクシやカエルの育て方の資料を掲示し、関連する絵本を手に取りやすい環境をつくる。
・クラスで飼育リーダーを決めて育てる中、みんなで気付いたことを友達に伝える機会をつくる。オタマジャクシ死に接し、生命の尊さについて考える場面では、一人一人の思いに共感し、受け止める。
《園児の変容》
・毎日飼育ケースの掃除に自分たちで決めた役割があり、次の時の為に事前に水をペットボトルにためておく人、オタマジャクシをすくって見守る人、餌をあげる人など、友達と世話をしている。毎朝登園すると、「足がはえてるけど、顔はまだオタマジャクシだ！」「かつお節も食べるんだ！」と毎日様子を観察してはオタマジャクシの成長を友達と一緒に喜び合っている。
・大きなオタマジャクシが共食いをしてしまった時、どうしたらオタマジャクシみんなが悲しい思いをすることなく過ごせるかを考え、飼育ケースを２つに分けて共食いを防ぐようにした。しかし、大きなオタマジャクシが独りぼっちになっていることに気付き、「折り紙でオタマジャクシを作って隣においてたら寂しくないんじゃない？」という一人の子の考えから、大きなオタマジャクシも寂しくならないような工夫をみんなで考えて試してみる。
・オタマジャクシの１匹が死んでしまうと、みんなで相談後、土に埋めてお花を添え、命の尊さを感じている場面も見られた。

《結果と考察》
・オタマジャクシの育て方や成長する過程の記載がある資料や絵本を用意したことで、自分たちで調べて、「オタマジャクシの為に飼育ケースを整えて育ててあげたい」「こんなふうに大きくなってほしいな」という気持ちが芽生え、毎日気にかけて観察したり、お世話をするようになったと考えられる。
・オタマジャクシの飼育をする中で感じたことや発見したこと、見つかった課題をクラス全体で共有することで、「オタマジャクシもクラスの仲間」という思いが芽生え、オタマジャクシについてみんなで考え、愛情をもって育てるようになった。オタマジャクシの死に直面した時、クラス全体でみんなで話し合いをもち、命あるものをいたわり大切にすることを考える時間をつくったことで、子どもたち同士でオタマジャクシのために何かできることを考えるようになったと思う。

Ⅴ　今後の実践に向けて

最初は生き物を捕ることだけで満足してしまっていたが、子どもの姿や興味にあった観察コーナーを整えたり、子どもが感じたことや発見したことをクラス全体で共有できる場をたくさん設け、それを保育ウェブで可視化したことによって、興味が無かった子も一緒に親しみ、関心をもつようになった。身近な生き物との出会いを通して、日々成長していく過程を友達と楽しみ、「何かできることはないか」と考え、関心が育くまれていった。生き物の死を体験し、生き物は命が１つしかないということに気付いた。

今後の取り組みとしては、日々の生き物の成長や様子を子どもたちが文字や絵で表現したり、長期で生き物の変化や成長に気付いていけるような工夫をしたい。また、栽培物のお世話にも挑戦し、新しい目線で子どもたちの発見や不思議を保育者も一緒に楽しみながら、動植物への親しみや愛着といった園児の心の動きを大切にしていき、更に好奇心や探究心を育んでいきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領　株式会社フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

“やってみたい”と心を動かす子ども達と保育教諭の援助
―子どもも保育教諭も主体的に楽しむ園づくり―

しらかわこども園　教諭　氏名　神谷　久恵

Ⅰ　テーマ設定の理由

開園２年目の自園では、自然豊かな広々とした園庭環境で虫とりや色水遊び、ままごとを楽しみ、室内では様々な素材を使った製作や積み木、ごっこ遊び等を楽しむ姿などが見られている。しかし、子どもの遊びを観察してみると遊びに単調さも見られ、日々変わる子どもの姿に応じて保育教諭から保育環境（室内・園庭）をどのように構成したら継続的に遊ぶことができ、遊びが深まっていくのか…悩む声もあり保育環境（人的・物的）や子どもの思いに寄り添う援助を考えていく必要性を感じている。

自身も今年度から主幹保育教諭として、見えた子どもの姿を担任と共有し、担任の困り感や願いを聞き取り、子どもも保育教諭どちらも充実した園生活が送れる園づくりが求められていると感じる。

３歳児保育２年目の園として、３歳児クラス（子ども２０名、担任２名）に焦点をあて３歳児担任とともに子どもが“やってみたい”と心動く姿に対し、保育教諭に必要な援助と環境構成について対話する場を設け、子どもも保育教諭も主体的に楽しむ園づくりをしたいと願い研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①子どもの“やってみたい”と心を動かす環境の工夫について

３歳児は一人ひとり興味や関心を向けるものが異なったり協同したりする。子どもの興味や関心に即しながらも、どのような育ちを期待したいか、その為に必要な援助や環境構成を考える。

②子どもも保育教諭も楽しめる園づくりの工夫について

保育の展開や子どもの育ちについての情報共有を担任と行い、３歳児一人ひとりの様子や育ちを多様な視点で捉え援助をしていく必要性がある。子どもも保育教諭も持ち味を生かしながら保育できるよう援助をしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

８月下旬頃、２学期開始に向けて３歳児クラスの遊びのブームや生活の流れ等を話し合う中で子どもが“やってみたい”と心動かす援助や環境構成を考えてみた。室内では『継続的にあそびを楽しむための保育環境づくり』園庭では『遊び込める手作りの園庭環境』をテーマに環境を構成してみる事にした。

≪ 子どもの姿 ≫

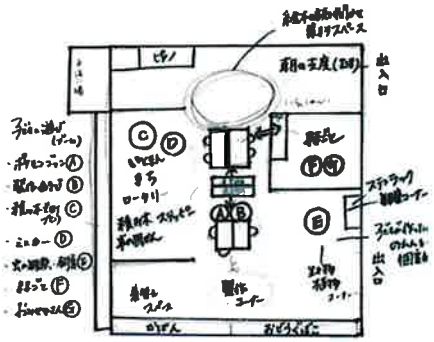
・様々な素材を使用し、イメージを膨らませながら製作活動を主体的に楽しむ。
・積み木を楽しむ中で、「飾っておきたい…」と継続できる環境を求めるようになってきた。
・園庭で虫を捕まえては、室内での観察を楽しんでいる。
・広い園庭、自然を生かし虫捕りや花びらでの色水、ままごとを楽しんでいる。
・高低差のある遊具を楽しむ子もいるが、怖がる子もいるので安全面への配慮が必要となる。
・栽培活動にも興味を示し、水かけや野菜の生長を楽しんでいる。

≪ 保育教諭の悩みと願い ≫

・遊びと生活がスムーズにできる動線を考えた環境づくりって難しい…。
・虫の飼育って３歳児には難しくないかな？虫が死んでしまわないか不安…。
・継続的に遊びを楽しむことができるためには、どんな環境構成が必要なのか悩む…。
・室内、園庭両方の遊びにおいて、継続的に楽しめる環境にしたい。
・生き物を観察したり、調べることができる場づくりを行い、命の大切さを知ってほしい。
・主体的に遊びを楽しみ、様々な経験を通して豊かな心を育んでほしい。

≪ 実践①　継続的に遊びを楽しむための保育環境づくり　≫

・担任と一緒に環境図を作成しながら話し合うと、子どもの興味ある遊びと保育教諭の願いや意図が見えやすくなった。
・あえて子どもの前で環境を変えることで、「何しているの？」「ここに○○がほしい」と子ども自らも環境を考えるようになり、一緒に環境を構成することができた。
・飼育する場所は、個室的空間にすることで居心地がよく集中して観察ができる環境の工夫を行った。子どもの作品を使用しユーモアさもプラスしたことで、子ども同士が集うことができる空間になった。
・コーナーを作ったことで、継続的（片づけずそのまま）に遊びを楽しむことができるようになり、「明日は○○しよう」と友だちとの関係性も広がっていくことができた。



そのままにして
また明日も遊びたいな…

積み木でミニカーの駐車場作ろう♫
明日は、一緒に町つくろうね～‼

≪ 実践②　遊び込める手作りの園庭環境 ≫

・園庭遊びも継続的に遊びが繰り広げられるように、木材を購入しDIY経験者（外部講師）に教えてもらいながら、パーゴラや屋台、ブランコを作った。職員自らが作ることで園のニーズに合わせた環境を実現することができた。
・屋台では自然物（砂・水・草花・枝）等を使用し、３歳児同士でままごと遊びお店屋さんごっこなど、一緒に楽しむ姿が増えた。
・子ども自ら試したり、工夫したり、遊びの続きを心待ちにするなど意欲的に園庭遊びを楽しみ継続的に遊ぶ姿が増えていった。

○作って片づける遊びから「明日またやろう」「明日にはだんご固まっているかな？」などのやりとりや異年齢での関わりも増えてきた。

子ども達の声に応じた物作りが増えていく。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・３歳児の遊びを観察し、何に興味を寄せ楽しんでいるのか、子どもが今何を必要としているのか考え、保育教諭の願いと意図を交じり合わせながら子どもと一緒に環境を考えることで、“やってみたい”と心動く遊びを継続的に楽しむことができるようになった。

・クラス担任だけでなく、主幹教諭や他のクラス担任など多角的な視点で環境を考えることで保育がより豊かに楽しくなった。

②　課題

・常に変化する子どもの興味関心に、どこまで寄り添えばよいのか、どの時期（タイミング）で環境構成を行えばよいのか、迷う場面も多い。

③　実践を通した自身の気づき、考え

・話し合える関係性を築き、可視化を通し子どもの姿や遊びを捉えると多角的な視点で考えることができることを実感した。また、子どもと一緒に考え環境を作ることで子どもの新たな思いに触れることができ、成長を感じる機会ともなれた。

・子どもの遊びを観察し、その後の展開や育ちを想像しながら環境を作ることで、遊びがより豊かになり、保育の可能性が広がることを知ることができた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説』の中に、「園児が主体的に活動を行うことができるか否かは環境がどのように構成されているかによって大きく左右される。園児が興味や関心をもち、思わず、関わりたくなるような人やもの事柄があり、さらに、興味や関心が深まり、意欲が引き出され意味のある体験をすることができるように適切に構成された環境の下で、園児の主体的な活動が生じる」とある。子ども一人一人に寄り添うこと、子どもの興味関心に応じた環境を常に構成することは難しさもあるが、担任だけで抱え込まず、園全体で語り合える関係性の構築と共有の場を設け、共に考え、時に失敗から新たな学びを得ながら保育を楽しんでいきたいと思う。

今後も事例検討を通し、子どもも保育教諭も主体的に園環境を作っていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府 文部科学省 厚生労働省 平成３０年　『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説』フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

心ゆくまで遊びこめる援助の工夫
―子どもから創り出す保育を通して―

八重瀬町　あらしろこども園　保育教諭　照喜名　由香

Ⅰ　テーマ設定の理由

『５歳児　（３年保育）計２５名』

「身近な環境に主体的に関わる」とは、園児が興味・関心、思いや願いなどをもち、進んで遊びに取り組む姿勢であると考える。また、園児が“おもしろそう”“やってみたい”と感じ遊びに自ら関わりたくなるような幼児の主体性と保育教諭の意図がバランスよく組み合わせることが大切である。

保育教諭は、園児が何に興味や関心を持っているのかを捉え、活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境構成していくことが重要であると考える。

本園では、各クラスを中心に子どもたちが園庭や遊戯室を自由に行き来し、好きな遊びを見つけたり、異年齢で刺激を受けたりしながら遊びが変化している姿が多くみられる。昨年度の園内研修では、子どもの“やってみたい”という心の動きを、保育者が丁寧に捉え、子どもの思いや考えを実現できる環境や援助の工夫をテーマに研究を進めてきた。これまでの保育を振り返ると、園児の遊ぶ姿を受け入れて見守ることが多くなり援助のタイミングを逃してしまったり、遊びや発達の見通しをもって援助することが不十分だったり、保育教諭の思いが先行してしまうということがあった。

そこで、昨年に引き続き、園児の心の動きを深く観察して幼児理解を深め、園児の遊びに見通しをもち、活動に応じて柔軟で多様な関わりができるように本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　園児の遊びの状況や過程の変容を読み取り、遊びこめる保育・環境の見直し改善を行う。

幼児のつぶやきや様子から「今何に心を動かしているのか」「何を学んでいるのか」幼児の思いを読み取り、次への計画を立てて環境の再構成と援助を図る。

２　日々の保育を通して、幼児理解を深めるための計画や記録を工夫する。

子どもの姿や活動を線でつなぎ、身の回りの事物や現象に心を動かし試行錯誤する姿や、何を学んでいるのか等を視覚化した週案を作成する。

３　保育実践、記録、カンファレンスを通して保育教諭間で共通理解に努める。

幼児が自分の思いや考えを表現し、考えを創り出す楽しさを味わえるよう、日々の振り返りや対話の場、園内研修等で子どもの姿から出発する指導計画を保育教諭間で共有する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）　【実践事例】『アリのくらしが知りたい』

１１月、園庭で見つけたアリを仕切られた容器に入れて観察しているＫ児とＳ児。「アリの巣ってたくさんの部屋があるんだよ」とＳ児がつぶやいたことから、「アリのくらしが知りたい」と興味が生まれ、育てることになった。早速図鑑を見ながらアリの観察ケース作りが始まると、アリについて調べたり、毎日観察する姿が見られた。後日、隣接する小学校フェンスで、ひときわ大きなアリを発見すると、ますます興味関心を示した。クロオオアリの特徴をパソコンで調

べたり、飼育ケースのカバーを丸く切り抜き、ラップの芯を差し込んでアリを入れやすいように工夫たりして夢中になって観察していた。

【保育教諭の援助（◎）と環境の構成（□）】

◎「やってみたい」と試したりすることを見守ったり、保育教諭も新鮮な気持ちで子どもとともに心を動かし、不思議や驚き、気づき、発見などに共感していく。
◎気づいたことを認めたり、疑問を投げかけたりして、自分たちなりに考えることができるようにする。
□思ったことや試したいことにじっくり取り組めるような時間を確保する。
□掲示する場を確保し、日々の写真を撮って変化に気づけるようにしたり、周りの友達にも知らせ、遊びの共有ができるようにする。

１２月。何日経ってもなかなか巣づくりをしないので、アリへの関心か薄れていく様子が見られた。学級の集まりでアリの視点で描かれた『アリのけっこんひこう』の絵本を読むと、再びアリについて興味を持ち始めた。K 児達が今悩んでいることや困っていることなどを学級のみんなに相談すると、様々なアイディアが飛び出した。実際にアリの巣を見つけたことや何度も絵本を読み返すうちに「こうしたらいいんじゃない？」と会話も盛り上がっていく。絵本をじっくり見ている中でも体のつくりにも興味が出てきて、アリの目について友達と互いの考えがぶつかり、言い合うこともあったが、図鑑や絵本、インターネットで調べると、目が５つあることが分かり、新たな発見を喜ぶ姿が見られた。

【保育教諭の援助（◎）と環境の構成（□）】

◎一人一人の意見に耳を傾け共感しながら、友達の新たな考えを取り入れて工夫したり協力する楽しさを味わえるようにする。
□気になったことや不思議に思ったことがすぐ調べられるように、新たな絵本や図鑑を手に取れる場所に用意する。
□友達と考えを出し合い、試行錯誤したことに喜びを感じられるように、学級で伝える場を設ける。

【園庭にて偶然見つけたアリの巣をじっくり観察する】

１月。図鑑を見ながら何度も飼育ケースを作り変えたが、アリは巣を作らないし、アリ同士がケンカをする様子に落ち込む子ども達。“アリのくらしが知りたい”という『願い』を実現するために、「小学

校には詳しい先生がいるかな？」と訪問を提案する。「まずはお手紙を書こう！」と自分たちが疑問に思っていることを手紙に書き届けた。後日、小学校の理科室に招かれた子どもたちは、小学校の先生が調べてくれたアリの育て方や巣を作る動画を見せてもらい、ワクワク感や驚きで目を輝かせた。図鑑で調べるだけではなく、小学校の先生を尋ね教わった喜びと感動がさらに次の意欲につながり、園に戻って教わったことを早速試していた。また、体験したことや心動かされた場面を遊びの中に取り入れ、表現する姿も見られるようになった。

【アリの巣を再現】

【発表会に向けてのアリの巣作り】

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・最初は数人で観察していた遊びをドキュメンテーションとして掲示し、みんなが見られる“アリの飼育コーナー”を設置したことで、友達の発見や気づきに興味を示し、「これってなんでだろう」「もっと知りたい」と好奇心とともに疑問や推測が生まれた。子どもたち同士が思いや考えを伝え合いながら答えを導きだしていく姿も見られ、思考力や観察力の高まりや仲間の深まりを感じることができた。

・発見から始まり、興味・関心から疑問へと次々に変化していく中で、好奇心や探求心を膨らませ、生き生きとしながら友達と心ゆくまでじっくり遊びを進めていく姿が見られるようになった。また、それを解決しようと試行錯誤し、思考を巡らせ想像力をかきたてられる体験が心に残る経験となり、発言力や表現力の育ちにもつながった。心ゆくまで遊びを楽しんでいる充実感は、さらに新しい発見や学びへとつながり遊びを創り出している。

②課題

・探求心が深まっていく過程においては、子ども達の興味の方向、関心の度合いが違うため、一人一人に応じた援助が必要だと感じた。さらに，幼児の心の動きを探る方法を考えていきたい。

③実践を通した自身の気づき、考え

・視覚化した週案を作成することで、幼児の良さや興味関心の理解、子どもたちの心情の変化を読み取ることができ、一人一人の内面理解が深まり、担任だけではなく、副担任や支援員も実践に生かすことができた。また、“子どもを肯定的に捉える”“子どもを信じ寄り添う”ことを全職員で共通理解し、一人一人の幼児が興味をもって始めた遊びを肯定的な眼差しで見守り、内面理解に基づいたタイムリーな環境構成の工夫や援助が大切だと改めて感じた。

・子どもの興味を捉え、その子なりの思いや考えを大事に受け止め、温かく見守ってきたことで興味ある対象を関わり、必要な手立てを考えることができた。また、保育の中で、幼児のつぶやきや行動から瞬時に心の動きを読み取ることが必要ということが再確認できた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・探求心を高めるための教材研究

・幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図る指導計画の作成

〈主な参考文献〉

高山　静子　2021 年　『環境構成の理論と実践』　郁洋舎

山本　理絵　加藤繁美監修　2016 年　『子どもと作る５歳児保育』　（株）ひとなる書房

仲本　美央　2024 年　『ずかん・かがく絵本から広がる遊びの世界』　風鳴舎

様式３【課題研究レポート】

友達のよさを知り、協力して活動を進めていく力を育むための援助の工夫

―集団生活の中で友達の考えや気持ちを知り、関わりを通して―

那覇市認定こども園小禄こども園　保育教諭　津波　雅之

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」の第２章第４節「人間関係」の領域内容の取扱い（３）において、「園児が互いに関わりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の園児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」と示されている。このように友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見い出し、工夫したり、協力したりする喜びを味わいながら、自ら行動、考える力を育つようにすることが大切だと考える。

本学級の幼児は４歳児（2 年保育）９名が在籍しており、ブロックやカプラ等、友達との遊びを楽しんでいる姿が見られるが、上手く言葉で伝える事ができなかったり、口調が強くなってしまい、トラブルに発展することが増えている。このような実態から、友達の思いを考え言葉で伝えたり、自分達で協力しながら活動を進めることが出来るようになるためには、どのような援助や環境の工夫が必要か考え、このテーマを設定し研究する事にした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１．友達との関わりを深め、友達の思いを受け入れられるような援助の工夫について

・友達との関わりを深めていけるような環境を工夫し、相手の気持ちに寄り添い、考えることができるような援助をしていく。

２．友達と協力し考えて活動を進めるための環境構成と援助の工夫について

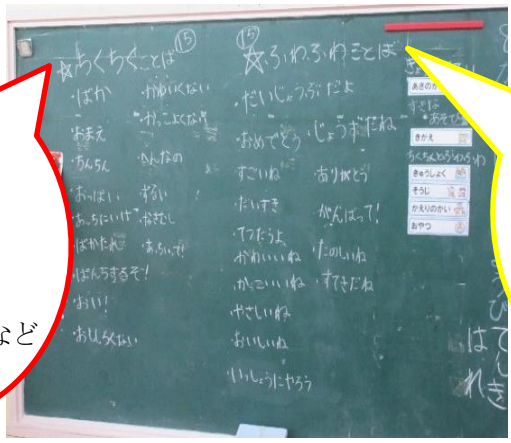
・友達と一緒に活動することの楽しさ、協力して進めていく楽しさを味わえるような環境を用意し、友達に自分の考えや意見を言葉で伝え、自分達で活動や遊びを楽しく進めていく援助の工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取り組み（実践）

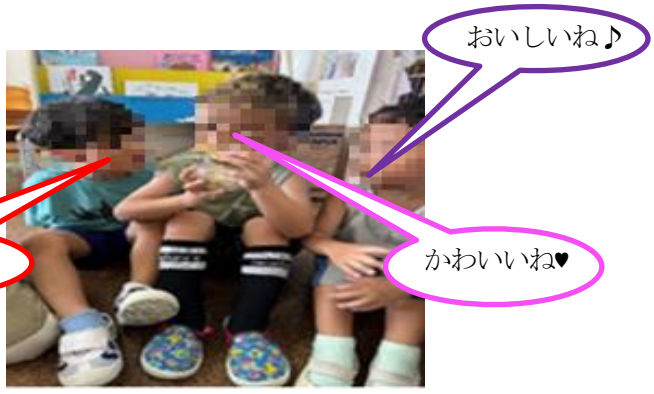
（実践事例１）「お米が入った２つの瓶にふわふわ、ちくちく言葉をかけて変化を観察してみよう」

≪園児の実態≫
・遊びの中や活動の中で友達にちくちく言葉（乱暴な言葉）を使うことが多い。
・友達に間違っている事を伝える際に、強い口調、言葉で伝えてしまうことが多い。
≪保育教諭の願い≫
・日ごろ使っている言葉、友達に伝えている言葉を考え、ちくちく言葉を使うと友達がどのような気持ちになるのかを理解して欲しい。
・ちくちく言葉ではなく、ふわふわ言葉を使って伝えられるようになってほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫
・絵本「ふわふわとちくちく」を通して、子ども達と一緒にふわふわ言葉、ちくちく言葉について考え話し合う時間を作った。
・子ども達と考えたふわふわ言葉、ちくちく言葉の表を作り、いつでも意識できるようにした。
・帰りの会が終わった後に、瓶にみんなでふわふわ言葉、ちくちく言葉を声掛けする時間を設けた。



お米を使った実験



≪園児の変容≫
・絵本「ふわふわとちくちく」を読んだ後から、「今のはちくちく言葉だよ」と気にする子が増えてきた。
・友達を呼ぶ際に、「おい！」等と言わなくなり、ちくちく言葉を使った際も、進んで「ごめんね！」と謝る姿が見られるようになった。
・友達が落ち込んでいると、すぐに自分から声を掛け慰める優しい姿が見られた。
・お米の色が変化していく事に気付き、積極的に声を掛ける子や観察する子が増えてきた。

【結果と考察】
・お米を使った実験の変化が見えた事で、言葉に興味を示す子が増え、ふわふわ言葉を意識する姿が見られた。
・友達との関わりの中で今まで使っていた言葉がちくちく言葉だったことを知り、使っていたちくちく言葉を使うことが少なくなった。
・ちくちく言葉が多く聞かれた時には、保育教諭も一緒に話し合う時間を作る事でどんな気持ちになるのかを考える姿が見られた。
・いつも使っている言葉が、ちくちく言葉、ふわふわ言葉かを考える事で子ども達なりに気にかける子や自分なりに優しく伝えようと心掛ける様子が見られ、保育教諭も一緒に考えていくこと、子ども達が自分で考える、興味を持つ環境を作ることがとても大切であり重要と感じた。

（実践事例２）　「グループ、ペア活動を通して」

≪園児の実態≫
・友達と楽しく遊ぶ姿が見られるが、考えや意見の違いで友達とトラブルになったり、話し合いをせずに保育教諭に伝えに来る。
・自分の気持ちが上手く言葉にできなかったり、友達と上手く話し合いができないと手が出てしまったり、謝らず「もう遊ばない」などとそのままにしておくことが多い。
≪保育教諭の願い≫
・自分の意見、考えだけでなく友達の意見や考えにも耳を傾けてほしい。
・自分の気持ちを言葉にして伝えられるようになってほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫
・決まった友達だけでなく、グループ活動やペアでの行動などを活動に入れ、クラスみんなと協力して進める機会を作っていく。（月ごとにペアの交換、当番活動など）
・友達同士でトラブルが見られた際には、お互いの話しを聞き、お互いの意見や考えを伝えられるように仲介したり、みんなで話し合う場を設けた。
・帰りの会では当番が前に出て１日で楽しかった事を発表したり、製作をした際には頑張った所や何を描いたのか発表する機会を作り、自分の気持ちや考えを伝える場を設けた。

≪園児の変容≫
・グループやペアでの活動を増やしたことで、思うように自分の意見を言えずにいる子も少しずつ意見や考えを友達に伝えるようになり、遊ぶ際には、自分からペアの子を呼んで遊んだり、手伝ってもらう様子が見られた。
・グループで当番活動や遊びなど、活動の中で関わる事が増えたことで、自分の気持ちや考えを友達に伝えられるようになっている。
・運動会や生活発表会などの練習をする際にも、休んでいる子がいればその子の場所や動き等を覚え、登園して来た時に「〇〇さんはここだよ！」と優しく教える様子が見られる。
・友達が困っている時には、「どうしたの？」「手伝う？」と気にかけ、声をかけたり進んで手伝う様子が見られた。

【結果と考察】
・ペアやグループでの活動をする事で、以前よりも友達の事を気にかけたり、友達と協力して活動を進めるようになった。
・子ども自身から「手伝うよ」や「大丈夫」など、優しい関わり方や声掛けができる子が増え、少しずつ友達に寄り添えるようになったと実感した。
・発表をすることや自分の気持ちや意見を伝えるのが苦手な子も、進んで発表する子も増え、友達との関係が近くなったことで気持ちや意見を言葉で伝えられるようになってきている様子が見られる。

Ⅴ　実践のまとめと考察

・ちくちく言葉、ふわふわ言葉の実験をしたことで、以前よりちくちく言葉を使うことが少なくなりトラブルが減った。日頃使っている言葉がどっちの言葉に当てはまるのかを子ども達と一緒に考える事ができ、友達に対しての言葉かけなど変容していると感じる。
・グループやペア活動では、自分から進んで手伝う子が増えたり、困っている時には自分から声を掛ける子など自分で考えて行動する姿に変容していった。友達と協力して活動をしたり、達成感を味わうことで達成した時の嬉しさや自信に繋がり、友達と関わる時間が増えた事で自分の気持ちや意見を言葉にして少しずつ伝えられるようになったと感じた。
・今後の課題として、ちくちく言葉を使った友達に対して「ちくちく言葉使った！」「〇〇先生に言おう！」と指摘する子が多かったり、自分の意見や考えを伝えることができても友達の話しを聞かずに進める事があるので、子ども達と振り返りながら一緒に考え話し合っていきたいと思う。また、環境や活動を上手く使って伝えられるようにしていきたい。

〈主な参考文献〉
・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』